東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－1－

福岡県京都郡苅田町雨窪遺跡群の調査

2004

福岡県教育委員会

東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－1－

福岡県京都郡苅田町雨窪遺跡群の調査

2004

福岡県教育委員会

雨窪遺跡群遺景（西上空から）

第一次調査区全景（上空から）

第二次調査Ⅱ区石組（北から）

第一次調査区出土旧石器

緑釉陶器

銅製品

序

東九州自動車道は、本県も含めた九州東半部において、地域振興の期待を担う積年の願望であり、本県内でも漸く工事が開始されたことはまことに大きな意義があると考えます。

ここに報告する遺跡は、東九州自動車道苅田インターチェンジ建設に伴って調査を行ったもので、県教育委員会として東九州自動車道に関わる記念すべき最初の調査となりました。調査地付近には古代の須恵器窯跡が多く知られており、また、近くに「苅田」の地名が残ることから『延喜式』に記載された「刈田駅」の存在に迫れるのではないかと期待されました。

結果的には、遺構の存在が予想された低丘陵上は削平が著しく、「刈田駅」に関わるような遺構を検出できませんでしたが、谷部では予想を超える大量の土器・自然遺物が出土し、報告にあるように注目すべき内容を含んでいました。

なお、発掘調査・報告書作成にいたる間には関係諸機関、苅田町・同教育委員会、そして地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

また、本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及にわずかなりとも寄与できれば望外の喜びとするところであります。

平成16年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　森山　良一

例　言

1．本書は、東九州自動車道苅田インターチェンジ建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県京都郡苅田町大字雨窪に所在する遺跡の報告である。遺跡名は苅田町教育委員会によって登録された周知の埋蔵文化財包蔵地「雨窪遺跡群」を使用した。

2．発掘調査・報告書作製は、日本道路公団の委託を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。

なお、調査・報告書作製に関して福岡県高速道路対策室・同新北九州空港連絡道路建設事務所、苅田町・同教育委員会の多大な御協力を得た。

3．出土遺物は、福岡県立九州歴史資料館において、文化財保護課岸本圭・今井涼子・坂元雄紀の指導の下で整理・復原を行った。

4．掲載した図は、遺構を飛野・坂元・内野陽子・津田容子・平川倫広・弘津宏一が、遺物を飛野・坂元・吉田東明（甘木歴史資料館）・平田春美・久富美智子・田中典子・坂田順子・堀江圭子・若松三枝子・寺岡和子・柳町陽子・中村洋子・中川真理子・荒川妙・西亜彩子が作製し、敬福弥生・原カヨ子・江上佳子が製図を行ったものである。

なお、打製石器の大部分は福岡県教育庁筑豊教育事務所主任技師杉原敏之による。

5．掲載した写真は、遺構を飛野・坂元が、遺物は巻頭図版を九州歴史資料館参事石丸洋、その他を同氏の指導の下、文化財保護課北岡伸一が撮影したものを使用した。

なお、空中写真は（株）九州航空による。

6．花粉分析・樹種鑑定等の自然科学的分析は(株)古環境研究所に依頼した。

7．使用した座標は日本測地系九州東（Ⅱ）系にしたがった。また、磁北の場合には明記した。

8．本書の執筆・編集は飛野（第一次調査）・坂元（第二次調査）が協力して行った。なお、旧石器・縄文時代の遺物については杉原敏之、文字資料については酒井芳司（九州歴史資料館学芸一課）、豊前地域の古代官道に関しては坂本真一（文化財保護課調査第一係）各氏の寄稿を得た。

本文目次

頁

Ⅰ．はじめに ---- 1

Ⅱ．位置と環境 ---- 7

Ⅲ．調査の内容 ---- 13

1.第一次調査（谷部の調査）---- 13

1）概要 ---- 13

2）土坑 ---- 14

3）流路跡 ---- 18

4）各グリッドの内容 ---- 21

5）金属製品 ---- 86

6）特殊土器・土製品 ---- 87

7）石器・石製品 ---- 94

8）木製品等 ---- 103

9）小結 ---- 105

2.第二次調査 ---- 107

1）概要 ---- 107

2）Ⅰ区の出土遺物 ---- 108

3）Ⅱ区の遺構・包含層および出土遺物 ---- 108

4）Ⅲ区の遺構と出土遺物 ---- 133

5）Ⅳ区の遺構と出土遺物 ---- 134

6）小結 ---- 137

3.試掘・確認調査 ---- 139

Ⅳ．おわりに ---- 141

1.遺構と遺物 ---- 141

2.木簡・墨書土器 ---- 143

3.豊前の古代官道とその周辺 ---- 143

Ⅴ．自然科学的調査 ---- 150

図版目次

巻頭図版1　雨窪遺跡群遠景（西上空から）

巻頭図版2　1；第一次調査区全景（上空から）　2；第二次調査

巻頭図版3　1；第一次調査区出土旧石器　2；緑釉陶器・銅製品

第一次調査

図版 1　1；調査区全景（南西上空から）　2；調査区全景（北東上空から）

図版 2　1；調査区全景（東上空から）　2；調査区全景（北西上空から）

図版 3　1；雨窪遺跡群遠景（上空から）　2；調査区全景（上空から）

図版 4　1；1号上坑検出状態（西から）　2；1号土坑鉢出土状態（北から）
3；2号土坑検出状態（北西から）

図版 5　1；2号土坑完掘後（北西から）　2；1A区完掘後（北西から）
3；1A区南東部土層（北東から）

図版 6　1；1B・C区完掘後（北東から）　2；1C・B区完掘後（西から）
3；1D・C区完掘後（北西から）

図版 7　1；1D区株検出状態（南東から）　2；1E区完掘後（南西から）
3；1F区礫床断割り状態（南東から）

図版 8　1；1G区西畦（4Tr）上層（南東から）　2；1G区完掘後（南東から）
3；1G区遺物出土状態（北東から）

図版 9　1；1G区西端遺物出土状態（北東から）　2；1G区中央付近遺物出土状態（北東から）
3；1H区溝状遺構検出状態（南西から）

図版10　1；1I区西畦（2Tr）土層（南東から）　2；1I区西端付近遺物出土状態（北から）
3；1I区西端付近遺物出土状態（南から）

図版11　1；1I区西端付近遺物出土状態（西から）　2；1I区中央付近遺物出土状態（東から）
3；1I区東端付近遺物出土状態（南西から）

図版12　1；1I区東端付近遺物出土状態（南東から）　2；1I区東端付近遺物出土状態（南西から）
3；1I区東端付近土馬出土状態（北西から）

図版13　1；1I区東端付近曲げ物出土状態（北東から）　2；1I区東端付近槌の子出土状態（北西から）
3；1J区全景（南から）

図版14　1；1J区自然遺物検出状態（北東から）　2；2A区東方トレンチ西壁土層（南東から）
3；2B区全景（北西から）

図版15　1；2B区流路跡肩（北から）　2；2B区西畦土層（北東から）
3；2B区南畦土層（北西から）

図版16　1；2B・G区全景（東から）　2；2H区遺物出土状態（北から）
3；2J区遺物出土状態（北西から）

図版17　1；2J区柱穴土器出上状態（東から）　2；2L・Q区木株検出状態（南東から）
3；2L・Q区木株検出状態（北東から）

図版18　1：2O区南半全景（東から）　2：2O区南半遺物出土状態（北から）
3：2Q区不明銅製品出土状態（西から）
図版19　1：2V区自然遺物出土状態（北西から）　2：2W区全景（南西から）
3：2W区全景（北東から）
図版20　出土遺物1（上坑・1A区出土土器）
図版21　出土遺物2（1B～D・F区出土土器）
図版22　出土遺物3（1E～G・I区出土土器）
図版23　出土遺物4（1I区出土土器）
図版24　出土遺物5（1I区出土土器）
図版25　出土遺物6（1I区出土土器）
図版26　出土遺物7（1I区出土土器）
図版27　出土遺物8（1I・J区、トレンチ、2B区出土土器）
図版28　出土遺物9（2B・G・H・O区出土土器）
図版29　出土遺物10（2O・Q区出土土器）
図版30　出土遺物11（金属製品・特殊土器）
図版31　出土遺物12（製塩土器・飯銷壺・土錘）
図版32　出土遺物13（熔着土器・石器）
図版33　出土遺物14（石器）
図版34　出土遺物15（石器）
図版35　出土遺物16（石器）
図版36　出土遺物17（石器・石製品）
図版37　出土遺物18（石器・石製品）
図版38　出土遺物19（木製遺物）

第二次調査

図版39　1：全景（南上空から）　2：全景（北上空から）
図版40　1：I～IV区全景（上空から）　2：II区全景（上空から）
図版41　1：III区全景（上空から）　2：I・IV区全景（上空から）
図版42　1：II区1号土坑（北から）　2：II区2号土坑（北から）
3：II区流路跡（東から）
図版43　1：II区流路跡（北から）　2：II区不明竪穴（南から）
図版44　1：II区溝（南から）　2：II区溝東壁土層（東から）
3：II区溝南壁土層（南から）
図版45　1：II区石組（北から）　2：II区石組内ピット北壁土層（北から）
3：II区石だまり（北西から）
図版46　1：II区ベルト1～7東壁土層（東から）
図版47　1：II区E土器出土状況（南から）　2：II区E土器出土状況（東から）
3：II区E土器出土状況（北西から）
図版48　1：II区G土器出土状況（東から）　2：III区大溝（東から）
図版49　1：III区東壁大溝土層図（西から）　2：IV区1号土坑（南から）

図版49　3．Ⅳ区２号土坑（西から）
図版50　出土土器１（Ⅱ区溝、石だまり、包含層）
図版51　出土土器２（Ⅱ区包含層）
図版52　出土土器３（Ⅱ区包含層）
図版53　出土土器４（Ⅱ区包含層・遺構面）
図版54　出土土器５（Ⅱ区攪乱、ピット、遺構面、包含層・Ⅲ区大溝）
図版55　その他の遺物１（Ⅰ区出土遺物・Ⅱ区土坑出土遺物・Ⅱ区出土銅鏡、土錘、砥石）
図版56　その他の遺物２（Ⅱ区出土製塩土器、タコ壺状土製品・Ⅳ区出土遺物）

挿図目次

頁
第 1図　東九州自動車道位置図（1/500,000）------ 2
第 2図　周辺地形図（1/2,500）------ 4
第 3図　周辺遺跡分布地図（1/50,000）------ 6
第 4図　遺構配置図1（1/600）------ 11
第 5図　遺構配置図2（1/300）------ 12
第一次調査
第 6図　1号土坑実測図（1/20）------ 14
第 7図　1号土坑出土土器実測図（1/3）------ 16
第 8図　2号土坑実測図（1/20）------ 17
第 9図　2号土坑出土土器実測図（1/3）------ 18
第10図　土層実測図（1/80）------ 19
第11図　1A区出土土器実測図1（1/3）------ 20
第12図　1A区出土土器実測図2（1/3）------ 22
第13図　1B区出土土器実測図1（1/3）------ 24
第14図　1B区出土土器実測図2（1/3）------ 26
第15図　1C区出土土器実測図（1/3）------ 28
第16図　1D区出土土器実測図（1/3）------ 30
第17図　1E区出土土器実測図（1/3）------ 32
第18図　1F区出土土器実測図1（1/3）------ 34
第19図　1F区出土土器実測図2（1/3）------ 36
第20図　1F区出土土器実測図3（1/3）------ 37
第21図　1G区出土土器実測図1（1/3）------ 38
第22図　1G区出土土器実測図2（1/3）------ 40
第23図　1H区出土土器実測図（1/3）------ 42
第24図　1I区南西部遺物出土状態実測図（1/20）------ 44
第25図　1I区南東部遺物出土状態実測図（1/20）------ 45
第26図　1I区出土土器実測図1（1/3）------ 46

第27図　1Ⅰ区出土土器実測図2（1/3）　48
第28図　1Ⅰ区出土土器実測図3（1/3）　50
第29図　1Ⅰ区出土土器実測図4（1/3）　52
第30図　1Ⅰ区出土土器実測図5（1/3）　54
第31図　1Ⅰ区出土土器実測図6（1/3）　56
第32図　1Ⅰ区出土土器実測図7（1/3）　58
第33図　1J区出土土器実測図（1/3）　59
第34図　1K・L区出土土器実測図（1/3）　60
第35図　1区トレンチ等出土土器実測図（1/3）　62
第36図　2B区出土土器実測図1（1/3）　64
第37図　2B区出土土器実測図2（1/3）　66
第38図　2C・E区出土土器実測図（1/3）　68
第39図　2G区出土土器実測図（1/3）　69
第40図　2H・Ⅰ区出土土器実測図（1/3）　70
第41図　2H区流路跡肩付近遺物出土状態（1/20）　71
第42図　2J区木材等出土状態実測図（1/20）　73
第43図　2J・L・M・N区出土土器実測図（1/3）　74
第44図　2O区出土土器実測図1（1/3）　76
第45図　2O区出土土器実測図2（1/3）　78
第46図　2O区出土土器実測図3（1/3）　80
第47図　2O区出土土器実測図4（1/3）　82
第48図　2L・Q区大型木株検出状態実測図（1/40）　83
第49図　2Q・V・W区出土土器実測図（1/3）　84
第50図　金属製品実測図（1/2）　86
第51図　墨書土器実測図（1/3）　87
第52図　緑釉陶器・土馬等実測図（1/2、1/3）　88
第53図　飯蛸壺実測図（1/3）　89
第54図　製塩土器実測図（1/3）　90
第55図　土錘実測図（1/2）　92
第56図　焼着土器実測図（1/3）　93
第57図　弥生土器等実測図（1/3）　94
第58図　石器・石製品等実測図1（2/3）　96
第59図　石器・石製品等実測図2（2/3）　97
第60図　石器・石製品等実測図3（2/3）　98
第61図　石器・石製品等実測図4（1/2）　100
第62図　石器・石製品等実測図5（1/3）　102
第63図　木製品等実測図（1/3）　104
第二次調査
第64図　Ⅰ区出土土器実測図（1/3）　108

第65図　Ⅱ区１・２号土坑実測図（1/30）---------- 109
第66図　Ⅱ区１・２号土坑および流路跡出土土器実測図（1/3）---------- 110
第67図　Ⅱ区流路跡実測図（1/60）---------- 111
第68図　Ⅱ不明竪穴実測図（1/60）---------- 112
第69図　Ⅱ区溝実測図（1/60）---------- 113
第70図　Ⅱ区石組および石だまり実測図（1/30）---------- 114
第71図　Ⅱ区溝、石組および石だまり出土土器実測図（1/3）---------- 115
第72図　Ⅱ区ベルト１～７東壁土層実測図（1/60）---------- 117
第73図　Ⅱ区包含層出土須恵器実測図１（1/3）---------- 119
第74図　Ⅱ区包含層出土須恵器実測図２（1/3）---------- 121
第75図　Ⅱ区包含層出上須恵器実測図３（1/3）---------- 123
第76図　Ⅱ区包含層出上須恵器実測図４（1/3）---------- 124
第77図　Ⅱ区包含層出土土師器およびその他上器実測図（1/3）---------- 125
第78図　Ⅱ区遺構面出土土器実測図（1/3）---------- 127
第79図　Ⅱ区ピットおよびその他出土土器実測図（1/3、1/5）---------- 129
第80図　Ⅱ区出土銅鏡実測図（1/2）---------- 130
第81図　Ⅱ区出土上錘および砥石実測図（1/2）---------- 130
第82図　Ⅱ区出上製塩土器実測図（1/3）---------- 131
第83図　Ⅱ区出土タコ壺状土製品実測図（1/3）---------- 132
第84図　Ⅲ区大溝実測図（1/160）---------- 133
第85図　Ⅲ区大溝出土土器実測図（1/3）---------- 134
第86図　Ⅳ区１号土坑実測図（1/30）---------- 135
第87図　Ⅳ区２号土坑実測図（1/30）---------- 136
第88図　Ⅳ区出土遺物実測図（1/3、1/2）---------- 137
第89図　苅田インターチェンジ建設予定地内試掘確認調査地点 ---------- 140
第90図　古代豊前国内官道推定線 ---------- 144
第91図　豊前国府推定地周辺官道遺構 ---------- 146
第92図　雨窪遺跡群における植物珪酸体分析結果 ---------- 154
第93図　植物珪酸体（プラントオパール）の顕微鏡写真 ---------- 155
第94図　花粉ダイアグラム ---------- 159
第95図　花粉・胞子 ---------- 160
第96図　樹種同定試料顕微鏡写真1 ---------- 167
第97図　樹種同定試料顕微鏡写真2 ---------- 168
第98図　樹種同定試料顕微鏡写真3 ---------- 169

Ⅰ．はじめに

九州で最初に開通した高速道路である九州縦貫自動車道は、北九州市東北端の関門海峡から福岡市を経て南下、熊本・鹿児島市へと至る九州の大動脈であるが西に偏している。東九州の県庁所在地である大分・宮崎両市へのルートは九州縦貫自動車道に繋がる大分道・宮崎道が建設されたが、東九州の交通事情は西九州に比して著しく停滞し、南北を貫く高規格道路が待望されて久しかった。こうした中で計画された東九州自動車道は、北九州市から東九州の主要都市を網羅的に経由して鹿児島県加治木で九州縦貫自動車道に合流する総延長436kmが予定されている。

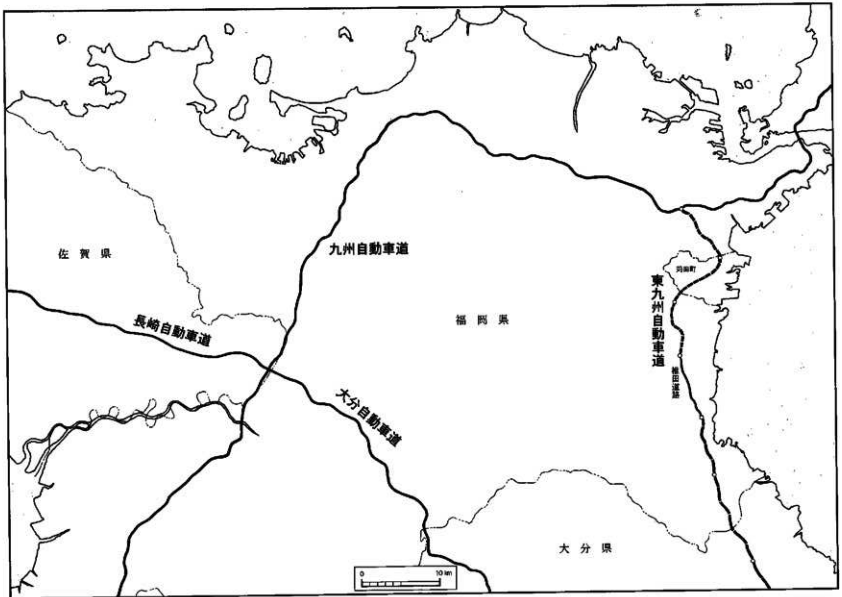
福岡県下のルートは道路公団が管理する既存の椎田道路を利用するためにその南北で分かれる。九州縦貫自動車道小倉東および小倉南インターチェンジ間に設置予定のジャンクションを起点として北九州市から苅田町・行橋市を経て豊津町の椎田道路に接続する部分、そして椎田道路から分岐して椎田町・豊前市・新吉富村・大平村を経て大分県へと続く部分である。平成8年12月に北九州－豊津間が整備計画決定され、9年12月に北九州－行橋間（17.3km）、同11年1月には行橋－豊津間（8km）の施工命令が出された。現在急ピッチで工事が行われているのは北九州－行橋間の北半にあたる北九州－苅田間である。それは平成17年度に開港予定の北九州市・苅田町沖の周防灘に建設中の新北九州空港への主要アクセス道としての位置付けがされたためでもある。すなわち、両市町の境界に接する苅田町雨窪地区にインターチェンジを設置し、そこから新空港へ接続する県道を新設・改良するというものである。

この東九州自動車道建設予定地内の埋蔵文化財の有無についての照会が福岡県教育委員会に対してなされたのは9年3月（苅田－豊津間）であった。上記した新空港との関連で苅田インターチェンジ建設予定地が最優先されたのであるが、当該地はほぼ全域が苅田町教育委員会によって「雨窪遺跡群」の遺跡名で埋蔵文化財包蔵地として周知化されている。このインターチェンジ予定地内で初めて確認調査を実施したのは12年10月のことで、対象地は3筆に過ぎなかった。その後、用地買収、物件移転に合わせて13年6・7月にも確認調査を行い、ここに報告する第一次調査対象地を決定した。本発掘調査は同年9月12日に着手、翌14年3月29日までの間に実施した。

その間にも周辺の家屋移転が進み、同年5月に文化財の有無が未確認であった残余の用地の確認調査を実施して最終的な調査範囲を確定し、同年7月29日に第二次の本発掘調査に着手、11月8日を以て苅田インターチェンジ本体部内の埋蔵文化財調査を終了した。

また、調査地点に南接する丘陵地が工事用土砂の採掘地に設定されており、その部分の試掘調査を14・15年度にかけて実施したが、ここでは遺構・遺物ともに検出しなかった。

上記したようにインターチェンジ予定地は全域が「雨窪遺跡群」として登録されていたが、確認調査の結果は意に反して遺構・遺物ともに広範囲で確認できなかった。地形的に高い低丘陵地は過去の開墾が予想以上に甚だしく、谷奥部は扇状地となっていて生活に適しなかったのであろう。大量の遺物を出土した調査地周辺に相応の遺跡が存在したはずであり、『延喜式』に記載された古代の「刈田」駅が近くに存在した可能性が非常に高いと考えているが、今回の大規模な調査ではほとんど遺構の痕跡さえつかむことができなかった。今後に残された課題である。



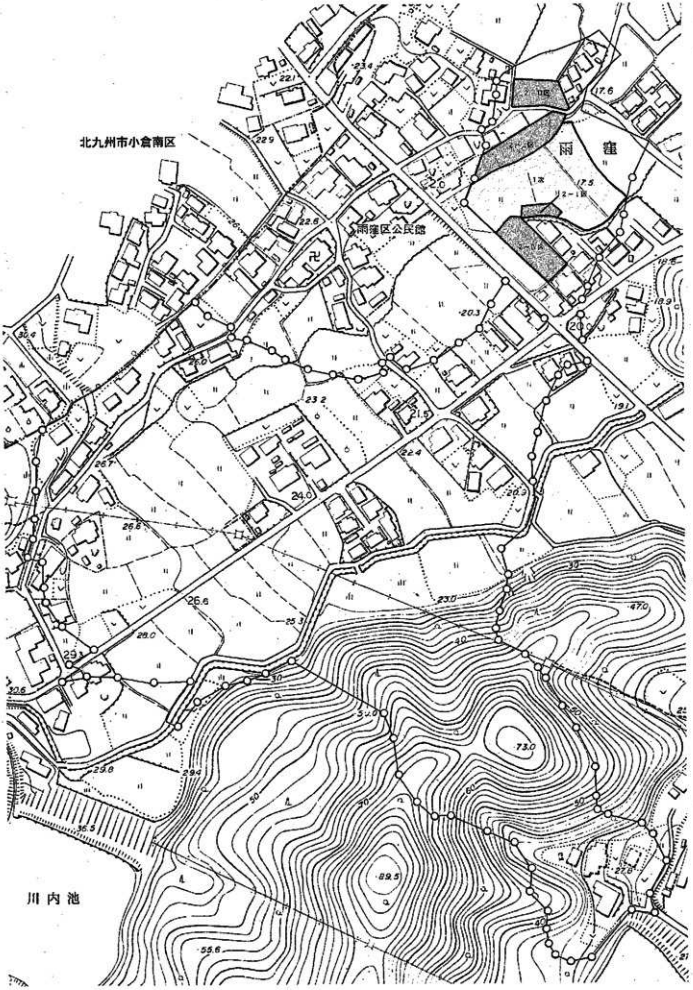
第1図　東九州自動車道位置図（1/500,000）

発掘調査から本報告書作成にいたる間の日本道路公団関係者は以下の通り。

	13年度	14年度	15年度
日本道路公団九州支社			
支 社 長	西田　行宏	西田　行宏	
		伊藤　容三 (H14.4.16)	伊藤　容三
用地部長	児玉　源義	児玉　源義	
		小寺　光 (H14.11.0)	小寺　光
管理課長	渕上　美彦	渕上　美彦	
		坂本　貞治 (H14.8.1)	坂本　貞治
同　代理	市原　裕次郎	市原　裕次郎	市原　裕次郎
			横山　敏彦 (H15.7.1)
担　　当	町田　繁	町田　繁	町田　繁
日本道路公団九州支社福岡工事事務所			
所　　長	今村　明弘		
	香月　廣志 (H13.8.1)	香月　廣志	香月　廣志
副所長 (技術担当)	井口　謙一	井口　謙一	
		中村　秀策 (H14.7.1)	中村　秀策
副所長 (事務担当)	仲田　純一	仲田　純一	仲田　純一
庶務係長	中村　俊一	中村　俊一	中村　俊一
用地課長	原野　安博	原野　安博	
		木須　俊哉 (H14.7.1)	木須　俊哉
工務課長	奥野　博敏	奥野　博敏	
		内野　雅彦 (H14.7.1)	内野　雅彦
苅田工事長	大串　久之		
	黒木　浩 (H13.8.1)	黒木　浩	黒木　浩

また、発掘調査にかかる福岡県教育委員会の関係者は以下の通り。

	13年度	14年度	15年度
総　　括			
教 育 長	光安　常喜	森山　良一	森山　良一
教育次長	榊原　英夫	三瓶　寧夫	三瓶　寧夫
総務部長	岩本　　誠	松本　通憲	清水　圭輔
文化財保護課長	柳田　康雄	井上　裕弘	井上　裕弘
同参事	井上　裕弘	橋口　達也 (業務系技術補佐)	木下　修 (参事系技術補佐)
	橋口　達也 (参事系技術補佐)		
同参事兼課長補佐	平野　義峰	久芳　昭文	久芳　昭文
同参事補佐	佐々木隆彦 (調査第一係長)	佐々木隆彦 (調査第一係長)	小池　史哲 (業務系第一係長)

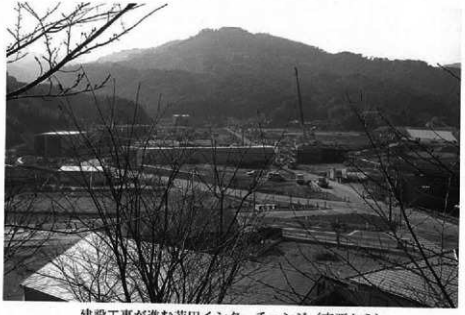


第2図　周辺地形図（1/2,500）

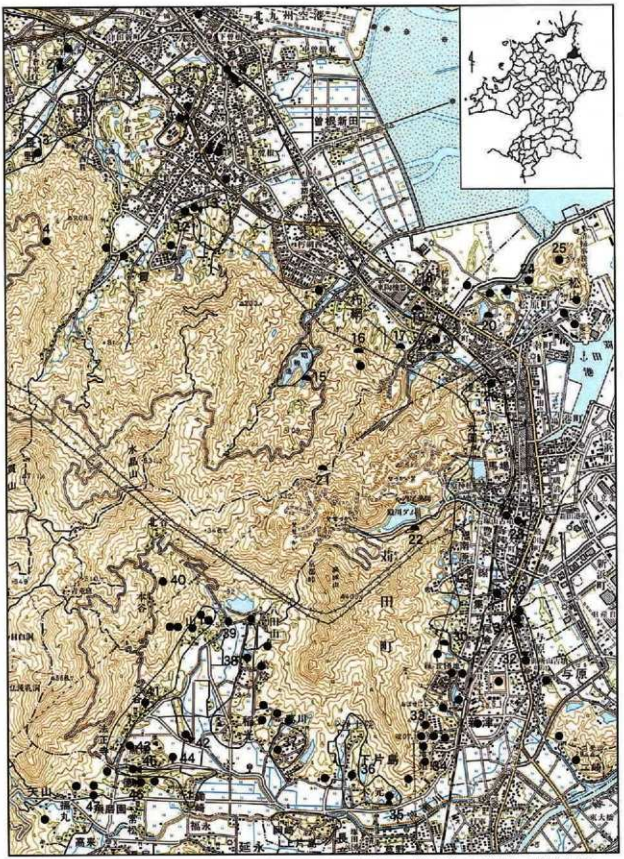
	13年度	14年度	15年度
庶　務	児玉　真一（調査第二係長）	児玉　真一（調査第二係長）	中間　研志（調査第二係長）
参事補佐		古賀　敏生（管理係長）	古賀　敏生（管理係長）
事務主査		宮崎　志行	宮崎　志行
主任主事	鎮守　俊明	鎮守　俊明	末竹　元
	佐藤　雅二	秦　俊二	秦　俊二
調査・報告書作製			
参事補佐			飛野　博文
技術主査	飛野　博文（調査担当）		
主任技師	進村　真之		
技　師		坂元　雄紀	坂元　雄紀
試掘担当			
主任技師		宮地聡一郎	秦　憲二
同			小沢　佳憲
技　師		坂元　雄紀	
整理担当			
主任技師	岸本　圭	岸本　圭	今井　涼子
		今井　涼子	
技　師	大庭　孝夫		坂元　雄紀

なお、発掘調査にあたっては、苅田町および苅田町教育委員会、福岡県教育庁京築教育事務所、そして地元有志および調査地に隣接する方々の大きな御協力を得ることができた。

また、報告書作成時には限られた時間の中で遺物実測・トレース等を援助していただいた文化財保護課太宰府事務所の方々および同僚諸氏に対しましても感謝の意を表します。



建設工事が進む苅田インターチェンジ（南西から）



1.長野A遺跡　2.観音寺古墳　3.長野小西田遺跡　4.長野城跡　5.鼎山遺跡　6.鼎山古墳　7.荒神森古墳　8.丸山古墳　9.茶臼志山古墳
10.上ん山古墳　11.高島遺跡　12.貫川遺跡　13.岡岡根古墳群　14.御座遺跡　15.洗子窯跡群　16.御笠神社窯跡群　17.トギバ窯跡　18.摩山窯跡群
19.天観寺山窯跡群　20.尚野山窯跡　21.山方窯跡群　22.殿川窯跡　23.雨窪遺跡群　24.松山古墳群　25.松山城跡　26.神田遺跡　27.富久遺跡
28.石塚山古墳　29.近衛ノ丘遺跡群　30.荒原池窯跡　31.番塚古墳　32.御所山古墳　33.百合ヶ丘古墳群　34.熊鷹古墳群　35.水之元寺古墳群1号墳
36.浄土院遺跡群　37.馬川遺跡　38.天座神社古墳群　39.山口遺跡群　40.等覚寺遺跡　41.谷遺跡群　42.神後前方後円墳　43.法正寺木ノ坪遺跡
44.黒部赤木遺跡　45.黒部メオト塚古墳　46.岩永丸山古墳　47.勝市廃寺

第3図　周辺遺跡分布地図（1/50,000）

Ⅱ．位置と環境

京都郡苅田町は福岡県東部、通称京都平野の北東部に位置して北九州市の南に接する。町域は瀬戸内海西端の周防灘に面し、背面に標高400mほどの山塊が南北に連なる奥行きの浅い市街地（苅田地区）と、その山塊の西側、カルスト地形平尾台の南にあって南を除く三方を山塊に囲まれる盆地状の白川地区に分かれる。苅田地区は北端付近に松山、南端付近に二崎山という小山があって、それぞれが南北に連なる山塊と低丘陵で連接する。その間に展開する苅田地区はちょうど入り江の中に位置する形となる。また、巨視的に見れば苅田地区の北には北九州市に属する曽根平野、南は行橋市・京都郡の京都平野があって、この地域は山塊が直接周防灘へ達して両平野を隔てる地形となっている。江戸時代の海岸線は現在の国道10号に卓近な旧街道にほぼ近いと考えられていて、現在の陸地の多くは埋め立て地である。

白川地区は農村地帯で、圃場整備事業などによって大規模な調査がなされて歴史的資料の蓄積が進んでいる。石塚山古墳・御所山古墳（いずれも国史跡）、番塚古墳（県史跡）といった著名な古墳が所在する苅田地区は市街化が進んでいることもあって、それらの基盤や背景を得る手掛かりは未だ得られていない。とはいえ、近年では苅田地区での発掘調査もなされており、それらをもとに歴史的環境の概略を記すとともに、北に隣接する北九州市域南端付近の様子も若干紹介する。

町内出土の旧石器時代遺物には富久遺跡の三稜尖頭器があるが、遺物群を認定できるものではないようで、確実な遺跡は未発見といった状況にある。周辺部では平成11・12年度に調査を行った行橋市稲童の渡築紫遺跡C区に纏まった資料がある。遺跡は海岸に近い低丘陵上にあって古墳時代の漁労を一つの生業とする集落であるが、部分的に後期旧石器時代の包含層が検出され、水晶・チャート・黒曜石などの剥片が多く出土し、石器製作の場であったと評価されている。

縄文時代の遺跡は苅田・白川両地区を遮る山塊の南端にある浄土院遺跡が火葬骨を収めた後期西平式甕棺を出土して古くから知られている。近年の圃場整備事業などに伴う調査で白川地区から早期以降の遺物が出土するというが多くは未報告で詳細は不明である。中小河川に近接する縄文後期の集落跡が周防灘沿岸で相次いで調査されており、いずれ当地も類例を加えることであろう。周辺部も含めて後期を遡る生活遺跡はまだはっきりしないが、犀川町の祓川上流域や築上郡築城町の城井川上流域などの山間部で早期以降の各時期の遺物が採集されている。また、航空自衛隊築城基地を挟んで渡築紫遺跡の南に位置する、海岸にほど近い築上郡椎田町東八田地区の圃場整備事業では早期押形文土器が集中出土したが、遺構は判然としなかった。

地域最古の弥生土器は海岸砂丘上の行橋市長井遺跡で採集された一群とされる。小壺・夜臼型甕などが石棺墓群に伴っていたというが発掘の手は入っていない。近年、祓川中流域でやはり同様な土器が出土したが、環濠の一部とされる溝以外の遺構は判然としない。前期中頃以降の遺跡は爆発的に増加する。中でも行橋市内の竹並・前田山・下稗田遺跡の調査は当地域で行われた初期の大規模発掘であるとともに、弥生・古墳時代に属する膨大な量の遺構・遺物を出土、研究を大きく前進させた。苅田町内では白川地区の貯蔵穴を囲繞する環濠を有する前期中頃の葛川遺跡、中期後半から後期末・古墳時代を中心とする大集落であった法正寺木ノ坪遺跡が代表的であるが、白川地区ではいずれの発掘調査でも弥生前期以降の遺物が出土するようであり、その拡散には目を見張るものがある。一方、苅田地区では神田遺跡Ⅰ地区・近衛ヶ丘遺跡群で弥生終末頃の集落が調査されるが、

真正な布留式以前の、かつ短期的な集落であった。それ以前の遺跡は未発見である。

京都郡は県下でも前方後円墳が集中する地域の一つであり、かつ全期間を通じて比較的大型の古墳が築造され、小規模墳が稠密に分布する。前期前方後円墳としては7面の三角縁神獣鏡などを現存する苅田町石塚山古墳[14]（墳長110m）が唯一で突出する。その周辺部の調査で前期に遡る小型古墳も含めて後期古墳まで発見されているが、破壊が進んでいて内容がはっきりしない。また、同町白川地区の天疫神社古墳群[15]で小規模な3基の方墳が調査されている。主体部を残す1基は木棺直葬で、鉄鏃・斧を副葬し、布留式二重口縁壺を含む上器を伴う。勝山町野添遺跡[16]や竹並遺跡・豊津町徳永川ノ上遺跡[17]にも同様の遺構があるが、川ノ上遺跡のみ豊富な副葬品を有して異彩を放つ。

中期古墳では周濠を有する苅田町御所山古墳[18]（同120m）が圧倒的な存在である。石障・屍床を有する初期の肥後形横穴式石室を主体部とするようだが、開口が古くスケッチ図が残るのみである。行橋市稲童地区では周溝を有する墳長60mほどの石並古墳（帆立貝形）を盟主として小古墳が散在する。発掘調査された古墳にはいわゆる竪穴系横口式石室を主体部とし、船載鏡や甲冑を副葬するものがあって、畿内政権に近い有力な集団の墓所と目される。

後期前半代の代表的な古墳は全長50m前後に推定される前方後円墳の苅田町番塚古墳[19]である。墳丘が失われたことは残念であるが、主体部が未掘であったために船載鏡や甲冑・馬具などの豊富な副葬品を出土し、6世紀初めに比定される。前後して以降、内陸部に勝山町箕田丸山古墳（墳長40m）・扇八幡古墳（墳長54m）や、同町庄屋塚古墳[20]（墳長75m）、行橋市八雷神社古墳[21]（墳長78m）など周溝・周堤を含めた全長100m前後の前方後円墳が築造される。箕田丸山古墳・庄屋塚古墳はいずれも複数の内部主体をもち、その一部の調査がなされるが詳細は発表されていない。6世紀後半頃にはさらに小規模な前方後円墳が各水系ごとに営まれる様な状況となる。

前方後円墳が消滅する頃には大型の円・方墳が築かれる。勝山町に所在する綾塚（円墳）・橘塚（方墳）はともに直径（一辺）40mほどの大型墳で、巨石を用いた横穴式石室を主体部とする国指定史跡である。また、それらに先行する巨石使用の横穴式石室を有し、46×36mの長方形墳丘全体に葺石を施すとともに周溝・周堤を備えた甲塚方墳[22]、内部主体は不明ながら直径29mの円形墳丘に二重の周溝を巡らした彦徳甲塚古墳（県指定史跡）の豊津町内の2古墳も注目される。これらは前者が旧京都郡、後者が旧仲津郡に属し、それぞれこの時期の最大規模の古墳である。

小規模な古墳は苅田地区背後の山裾から白川地区の山麓まで広範に造られ、特に白川地区から行橋市西端の福丸地区付近にかけては後期古墳が大規模に群集する。苅田地区では猪熊古墳群[23]・百合ヶ丘古墳群[24]に小規模な竪穴式石室を有するものがあり、後者では古式須恵器が出土する。町北東部の海に突き出した松山北麓にある松山古墳群[25]は当地では珍しい初期横穴式石室を主体とする古墳群で、内容的には劣るものの稲童古墳群に通じる部分がある。これらは比較的初期に形成された古墳群で、時期が下るにつれて内陸部が優位になるようである。また、竹並遺跡・前田山遺跡に代表される横穴墓が平野中南部の山麓や河岸段丘法面などに盛んに造られる。

古代の集落は白川地区の圃場整備事業に伴っていくつかが調査された。黒添赤木遺跡[26]では8基の竪穴式住居跡などが調査され、8世紀代の須恵器・黒色土器とともに平底から張りの弱い長胴、大きく外反する口縁といった形態を持つ特異な土師器甕が出土している。また、同じく谷遺跡[27]では掘立柱建物跡などが検出され、緑釉陶器や唐三彩陶枕片などの優れた遺物が出土していて当時の中心的集落の一つであったことを思わせるが、遺跡・遺構の内容・性格はなお判然としない。

白川地区の南に隣接する行橋市福丸に旧京都郡唯一の古代寺院椿市廃寺[32]がある。講堂の基壇・礎石が良好に遺存していることは以前から知られていたが、講堂に取り付く回廊と思われる掘立柱列などが発見されて、四天王寺式伽藍配置がほぼ確認された。700年前後に創建されたと考えられていて、平城宮と同笵の軒丸瓦も出土している。古代寺院は往々にして郡衙に近接するが、京都郡衙はなお所在不明である。ただ、行橋市延永では豊前国の要港「草野津」と椿市廃寺のある福丸地区を繋いだと思われる古代の運河状の遺構の一部が発見されており、瓦や製塩土器・越州窯青磁片などを出土した[31]。調査範囲が狭小であったが意義は大きい。今後、福丸・白川の周辺で「京都郡衙」が発見される可能性は高い。

隣接する北九州市域（小倉南区）も現在の国道10号付近がやはり旧海岸線と考えられ、南の貫山塊、北の足立山を主峰とする企救山塊に挟まれて、その山麓谷筋に小規模な平野が存在する。小河川に沿って稠密に各時代の遺跡が存在し、豊かな歴史遺産を有している。

縄文時代の遺跡としては企救半島の南西部付け根の丘陵斜面に位置する下吉田遺跡[32]で後期の集落跡が調査されている。そのほかにも各地の調査で旧石器時代・縄文早期以降の遺物が出土し、特に貫川遺跡[33]では各時期の遺物が大量に出土するが、生活遺構はまだ判然としない。

弥生時代になって板付Ⅰ式併行期の遺物は出土するが、遺構は前期後半から明らかになるという。畠山遺跡・高島遺跡[34]・御座遺跡[35]などで前期・中期の貯蔵穴・住居跡などが調査されている。また、長野小西田遺跡[36]・上清水遺跡[37]などは後期後半に至る拠点集落と考えられており、付近から中広形銅戈1口、広形銅矛2口などが出土している。弥生後期の竪穴式住居跡内土坑に埋納された広型銅矛が発掘調査で確認された重留遺跡[38]も記憶に新しい。

古墳時代には曽根平野に市内で唯一前方後円墳が集中することから、旧企救郡内で最も卓越した政治勢力が存在したことが知られる。最古の前方後円墳は全長23mの御座1号古墳[39]である。木棺直葬と粘土槨の2基の埋葬部が確認され、「主体部覆土上面には三角縁獣文帯三神三獣鏡片が副葬されていた」。周溝からは布留式土器が出土していて、4世紀後半から5世紀初頭に比定されている。以後、茶毘志山古墳（54m、5世紀後半～末）、上ん山古墳（50m、6世紀前半）、畠山古墳（44m、6世紀中頃）と続く系譜が想定されている。荒神森古墳（68m、6世紀中頃）、丸山古墳（推定50m前後、6世紀後半）も別の系譜にあるとされ、さらに6世紀後半頃に両岡様1号古墳（推定27m）、観音寺古墳（20m）がまた孤立的に立地する[40]。これらはいずれも内部主体が不明であるが、狭い範囲に集中していて、地域の生産力の高さあるいは政治的優越を示している。

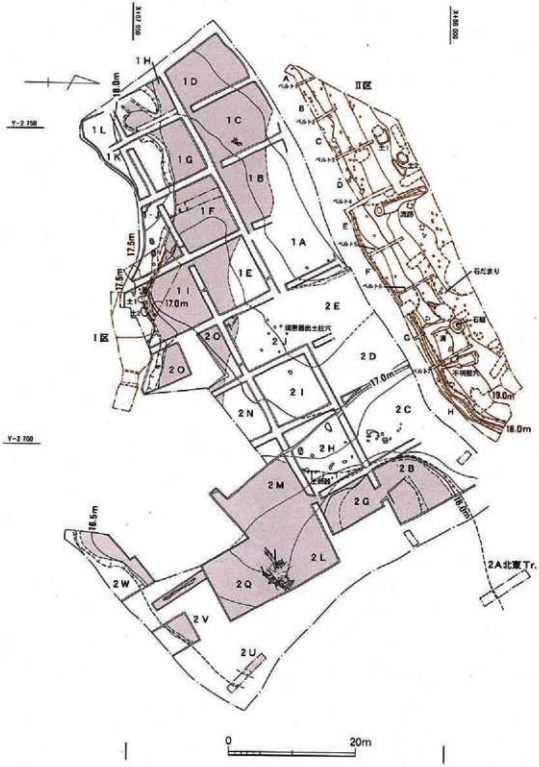
これらの前方後円墳の集中と関連するものか、6世紀後半～10世紀にいたる長期にわたって、小倉南区から苅田町にかけての地域に須恵器窯跡群が造られる。詳細な調査・報告がなされた天観寺山窯跡群[41]は10基からなり、6世紀後半から7世紀中頃にいたる遺跡であり、その成果は地域の須恵器研究のバイブルとなっている。

古代において北九州市東半部（小倉北・南区・門司区）は「企救郡」に属していた。今までの考古学的成果から、郡衙は九州縦貫自動車道小倉東インターチェンジ周辺の長野A遺跡[42]付近に想定されている。遺構は判然としないものの、「企救一」などの墨書土器、瓦、緑釉・灰釉陶器、越州窯系青磁、硯、石帯などが出土し、周辺部に木簡や類似する遺物をもつ遺跡が集中する。調査の進展が期待される地域である。

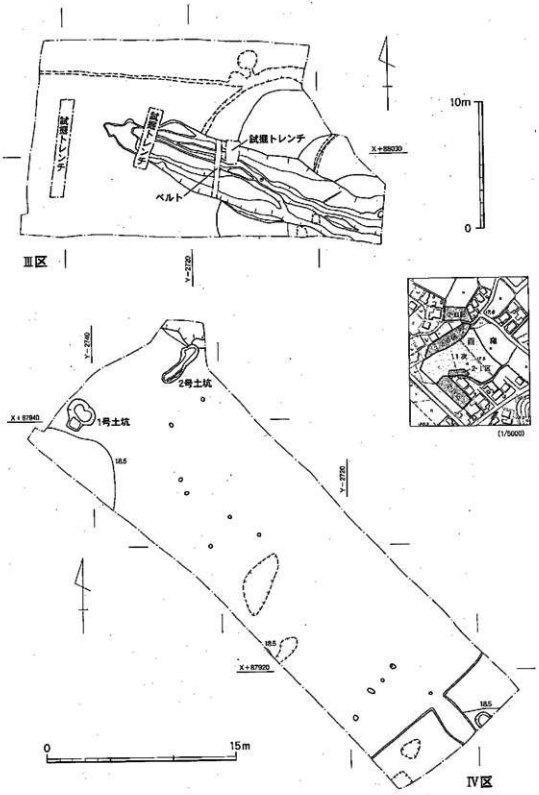
また、『延喜式』には豊後へと通じる西海道東路では到津・刈田・築城・下毛に駅が置かれたと記されている。これらも所在は確認されていないが、築城駅は現築上郡椎田町越路地区で越州窯系青磁や緑釉陶器、石帯などが出土していて近くに駅の存在が推定される。

註

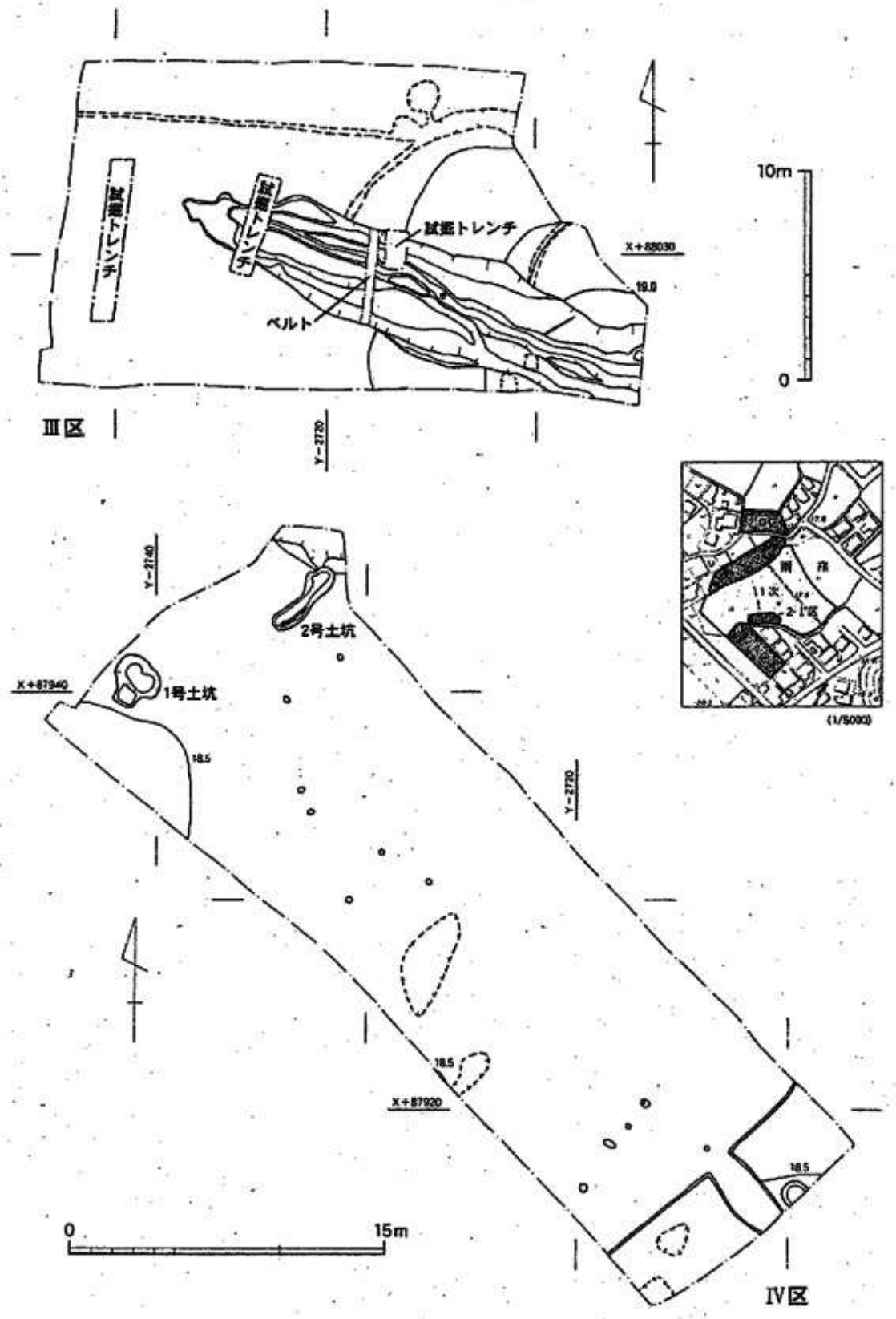
1. 苅田町教育委員会「富久遺跡Ⅱ区」(『苅田町文化財調査報告書』第17集、1992)
2. 行橋市教育委員会が工業団地造成に伴って発掘調査。未報告。
3. 浄土院遺跡調査団『浄土院遺跡調査概報』、1972
4. 椎田町教育委員会「今津・西八田の遺跡」(『椎田町文化財調査報告書』第9集、1999)
5. 定村貴二・小田富士雄「福岡県長井遺跡の弥生土器」(『九州考古学』25・26号、1965)
6. 福岡県教育委員会「辻垣ヲサマル遺跡」(『一般国道10号線椎田道路開係埋蔵文化財調査報告』第1集、1993)
7. 竹並遺跡調査会『竹並遺跡』、1979
8. 行橋市教育委員会「前田山遺跡」(『行橋市文化財調査報告書』第19集、1987)
9. 行橋市教育委員会「下稗田遺跡」(『行橋市文化財調査報告書』第17集、1985)
10. 苅田町教育委員会「葛川遺跡」(『苅田町文化財調査報告書』第3集、1984)
11. 苅田町教育委員会「黒添・法正寺地区遺跡群」(『苅田町文化財調査報告書』第6集、1987)
12. 苅田町教育委員会「神田遺跡Ⅰ地区」(『苅田町文化財調査報告書』第28集、1997)
13. 苅田町教育委員会「近衛ヶ丘遺跡群」(『苅田町文化財調査報告書』第33集、2000)
14. 苅田町教育委員会「石塚山古墳発掘調査概報」(『苅田町文化財調査報告書』第9集、1988)
15. 苅田町教育委員会「富久遺跡」(『苅田町文化財調査報告書』第12集、1990)および註1文献
16. 苅田町教育委員会「松熊天疫神社古墳群」(『苅田町文化財調査報告書』第10集、1988)
17. 福岡県教育委員会「野添遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第141集、1999)
18. 福岡県教育委員会「徳水川ノ上遺跡」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第4・7・9集、1995・96・97)
19. 苅田町教育委員会「史跡鹿所山古墳保存管理計画策定報告書」、1976
20. 藏内古文化研究所『福岡県行橋市稲荷古墳群第1次、第2次調査抄報』、1964・65
21. 苅田町教育委員会・九州大学文学部考古学研究室「番塚古墳」(『苅田町文化財調査報告』第20集、1993)
22. 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」(『史淵』第100輯、1968)
23. 行橋市教育委員会「八雷古墳」(『行橋市文化財調査報告書』第14集、1984)
24. 豊津町教育委員会「中塚方墳」(『豊津町文化財調査報告書』第13集、1994)
25. 猪熊古墳群調査団『猪熊古墳群』
26. 苅田町教育委員会「苅田町の文化遺産」(『苅田町文化財調査報告書』第34集、2000)に概要紹介。
27. 苅田町教育委員会「松山古墳群」(『苅田町文化財調査報告書』第13集、1991)
28. 註1)文献に所収。
29. 苅田町教育委員会「谷遺跡」(『苅田町文化財調査報告書』第11集、1990)
30. 行橋市教育委員会「椿市廃寺Ⅱ」(『行橋市文化財調査報告書』第24集、1996)
31. 福岡県教育委員会「延永水取遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第159集、2001)
32. (財)北九州市教育文化事業団「下吉田遺跡」(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第39集、1985)
33. (財)北九州市教育文化事業団「貫川遺跡」8(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第144集、1994)
34. (財)北九州市教育文化事業団「品山遺跡」(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第94集、1990)
35. (財)北九州市教育文化事業団「高島遺跡調査概」(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第5集、1987)
36. (財)北九州市教育文化事業団「御座遺跡」(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第236集、1999)
37. (財)北九州市教育文化事業団「長野小西田遺跡」(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第248集、2000)
38. (財)北九州市教育文化事業団「上清水遺跡Ⅱ区」(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第100集、1991)
39. (財)北九州市教育文化事業団「重富遺跡第2地点」(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第230集、1999)
40. 宇野慎敏「御座一号古墳」(『北九州市史』総論　先史・原史、1985)
41. 宇野慎敏「豊前北部における古墳の消長とその背景」(『東アジアの考古と歴史』下、1987)
42. 北九州市埋蔵文化財調査会『天観寺山窯跡群』、1977
43. 梅崎惠司「旧豊前国企救郡官衙考」(『研究紀要』第7号、(財)北九州教育文化事業団、1993)
44. 福岡県教育委員会「越路六郎遺跡　越路貴船遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第161集、2001)



第4図　遺構配置図1（1/600）



第5図　遺構配置図2（1/300）



第5図　遺構配置図2（1/300）

Ⅲ．調査の内容

試掘調査を受けて最初に決定した調査対象地は水田化した谷部である（第一次調査）。現在では幅0.6mのコンクリート製U字溝が用水路として谷状地形の南辺にそって設置されていて、その南は部分的に宅地化するが、造成以前の地形図でも調査区に比べて0.4mほど高く、本来的な地形を踏襲していることが判る。県道以西の直線道路両側に展開する住宅も比較的新しく建てられたようで、本来この谷部には人家がなかったようである。扇状地上に当たり、生活に適しなかったのであろう。また、山塊から離れた比高20mほどの独立丘陵があって、山頂には塊石神社が祀られている。

調査対象地の北側は苅田町を南北に縦断する山塊から派生する低台地が延び、その東端は古代に築城され、江戸期の一国一城令まで命脈を保ったといわれる松山城に到るまで起伏を以て連続する。その低台地上に古くからの「雨窪集落」が立地するとともに、丘陵を斜めに横切って北九州市との町境が引かれている。現在はやはり小さなU字溝が境界を示しているが、ここが古くからの京都郡・企救郡境であったのだろう。

年度が替わって実施した第二次調査は、主として第一次調査の南北の微高地および低台地を対象に行った確認調査で決定した。第一次調査の内容から官衙的遺跡が存在すると予想されていたが、予想に反し遺構密度が非常に薄く、後世に相当の地形改変がなされたことが判明した。

結果的に、出土遺物の内容にふさわしい遺跡を確認することができなかったが、計画変更が不可能に近い状況の中にあって、重要な遺跡が発見されなかったことは僥倖であったのかも知れない。

1．第一次調査（谷部の調査）

1）概　要

発掘調査は県道須磨園南原曽根線に近い西側から実施した。先ず県道に近い1枚の水田の表土を除去し、東側水田を排土置き場とした。この最初の掘削範囲を1区とし、ほぼ一辺10mのグリッドを設定して各区画にアルファベットを当てはめ、1A区から1L区と呼称した。その後に調査を行った東側の水田区画を2K区とし、同様に2A区から2W区を設定した。なお、この区割りは概ね谷状地形に合わせてK割りを行ったもので方位とは無関係である。

発掘調査は表土および床土を除去して現れる灰黄褐色土に部分的に食い込むレベルまで重機による掘削を行い、以降は人力によって灰黄褐色土層（上層として遺物を取り上げる）、下位の灰黒褐色土層・淡灰色土層（下層として取り上げる）を除去し、黄褐色粘質土を基本とする地山面で新たに現れた土坑・柱穴の若干を発掘して終了した。

主要な遺構は土坑2基、若干の柱穴、そして調査区を縦断する流路跡と思われる礫床に過ぎないが、主として流路跡を覆う包含層中から以下に紹介する多種多様な遺物を出土した。

以下では土坑の紹介を行った後に、調査時の便宜的な区割りにしたがって所見・出土遺物の記述を行う。なお、出土遺物のうち、須恵器・土師器についてはグリッドごとに、金属製品や石器・石製品、木製遺物、墨書土器・緑釉陶器・製塩土器・蛸壺等はそれぞれまとめて説明を加える。

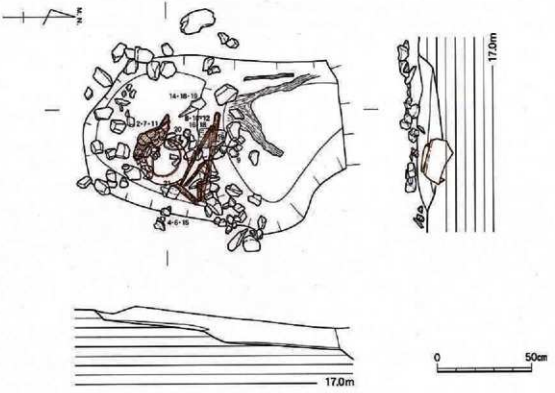
2) 土　坑

第一次調査対象地中程の南側には突出するように宅地がせり出し、その擁壁の直下を用水路が東流する。この擁壁と流路跡の肩まではわずかに8mほどを測るに過ぎないが、この狭い部分に第一次調査で検出した2基の土坑が近接していた。また、ついでながら、これらの土坑が検出された1Ⅰ区は最も遺物が豊富に出土したグリッドであり、そのことは後述する。

1号土坑（図版4、第6図）

この付近は地山の黄(褐)色土が地下水のために還元されて青灰色に発色し、遺構の判別が困難であった。この土坑付近では地山を覆う包含層を発掘する際に多くの小石や細片化した土器片が比較的集中していたものの、土坑があるとの認識はなかった。ただ、出土遺物を残して掘り下げるうちに大型土器の底部が現れたため、周辺を再度精査してようやく掘形を確認できたものである。

土坑は長軸長1.4m、最大幅0.9mの不整長方形に近いプランを有し、南側の深さは0.1mを測る。



第6図　1号土坑実測図（1/20）

中央付近に段があって、北側ではさらに0.1mほど低くなるが、地山自体が北へ向かって傾斜するために土坑の深さはやはり0.1mほどとなる。埋土には地山に似た灰黒色粘質土が堆積していて、特異なものではなかった。

出土遺物

土坑中央付近に倒立して据え置かれたと思われる須恵器鉢の周辺で比較的まとまった土器を出土したが、遺構断面図に見るようにいずれも土坑検出面の上方に遊離している。ただ、土質が判別困難で検出時に掘り下げたことを考慮すればこの10cm内外のレベル差は小さいといえる。

須恵器（図版20、第7図1～19）

1は杯蓋、2～6は無高台の、7･8･12～15は高台付の杯身、16～18は皿、19は据え置かれたと思われる鉢である。

1は天井部が曲線を描き、口縁部付近で大きく折れて烏嘴状の口縁部へ続く。内面の外側半分ほどに灰被りが見られ、口端部外面は黒変する。天井部外面はヘラキリの後に痕跡を撫で消す。

2は体部が内彎しつつ急角度で立ち上がり、口縁部が小さく外彎するもの。焼成が非常に甘く、特に底部付近の内外面は灰黄色～淡灰色となる。外底面は丁寧にヘラキリを行ったままで、外周は比較的シャープな稜線をもつ。3･4は体部が直線的に開くもので、底部から曲線をもって連続的に移行する点やその角度も両者はよく似る。3は体部内外面にヨコナデによる凹凸が顕著で、外底面はヘラキリのままである。4の外底面はヘラキリの後に丁寧に撫で消す。5は立ち上がりがやや急となり、外底面は丁寧なヘラキリを行う。この3点も焼成が甘い。6も体部は直線的に立ち上がるが、口端部がわずかに外彎する。外底面は丁寧なヘラキリを行い、胎土を含めて丁寧に作られた土器で、焼成も良好である。

7は底部付近が完存し、口縁部の1/3が残存する。小振りな高台が外方へ踏ん張り、体部は小さく内彎しつつ、これもわずかに外反する口縁部へ続く。底部外面はヘラキリ痕を丁寧にナデ消し、内面ではヨコナデの後に中央付近に軽く仕上げ撫でを施す。8は1/3の残片で、外底面は丁寧なヘラキリを行い、浅く弱い細線で×状のヘラ記号を刻む。9も丁寧に作られた土器で、外面がわずかに黒変している。10は小片であるが、図のように外面に墨と思われる黒色付着物が明瞭に認められる。12は口縁部が小さく外反する小片。

12は1/4の残片で、焼成が甘い。底部内面はヨコナデ、外面はヘラキリのままである。13は1/2強が残り、華奢でシャープな高台をもつ丁寧に作られた土器である。14は高温で焼かれ、器表が発泡する1/2強の残片。内底面はヨコナデ、外底面はヘラキリのままである。15は1/4が残存する。これも底部内外面の仕上げは14に似る。

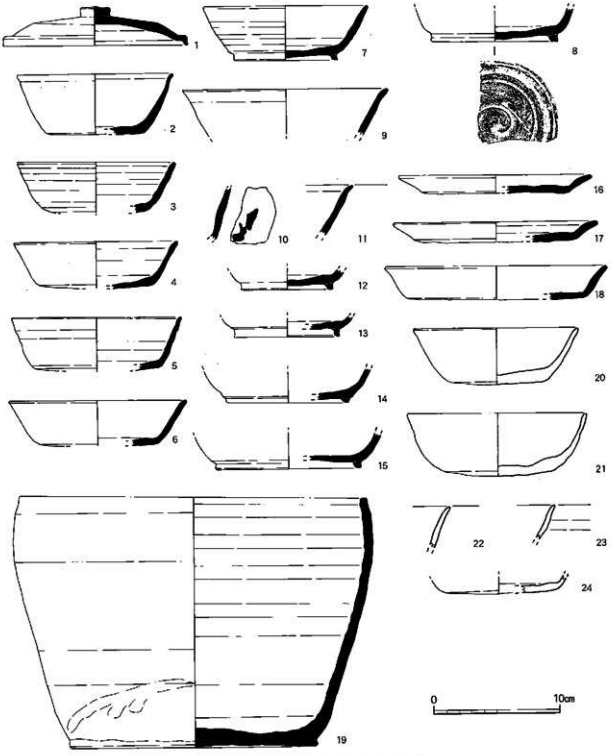
16･17はいずれも1/4ほどが残存する。法量のほか、体部が外彎するとともに中位の内面がわずかに肥厚するといった形態や、内底面中央付近を仕上げナデで調整する点でよく似る。ただ、16は外底面のヘラキリ痕を丁寧に撫で消し、17では丁寧なヘラキリのまま終わる。18は小片のため復原径に不安がある。口縁部付近の内面が灰被りし、体部外面が黒変する。

19はこの遺構の主役である。底部から体部中位付近まではそのまま倒置されていたが、その他の部位は割られて周辺の堆積層中にあり、結果的にほぼ完形に近く復原できた。わずかに膨らみをもち、最大径部が口縁部に近く位置する体部が垂直に近く立ち上がり、口縁部は端面を小さく窪ませるだけの装飾性に乏しい形状となる。口縁部は楕円形に歪み、体部外面下位に熔着痕があってその上方の自然釉が飛ぶなど非常な高温に晒されたようである。全体に灰を被るために調整痕の細部は

解らないが、体部内外面をヨコナデで仕上げるようである。内底面はユビナデ、外底面は不定方向のヘラケズリを行うようであるが、いずれも粗雑である。底部外縁の形状も不整で、特別な目的のために作られた土器とは思えない。

土師器（第7図20～24）

いずれも杯身である。20は底部付近が完存するが、口縁部付近は殆どを欠いている。器形は須恵器に似るが底部が肉厚となる。体部上半の内外面が淡灰色、その他の部分は黄褐色となり、内底面



第7図　1号土坑出土土器実測図（1/3）

の一部に墨あるいは煤と思われる小さな黒色付着物がある。21は底部から口縁部にかけて連続的に内彎するもので、これも底部付近が完存、口縁部がわずかに残る。外底面はヘラキリのままである。22は口縁部付近が黒色、以下が灰白色～灰黄色となる小片。全体に明黄褐色を呈し、一部が赤変する。23は口縁部付近が暗褐色となる。外面ではその下位が幅1cmに満たない灰白色帯、以下が黒色となる。内面には灰白色帯が見えない。これは胎土・作りともに良好。24は器肉・器表ともに黒色となる。これらを含めて、これから紹介する上器の中には当地の瓦器椀のような発色をするものが多く見られるが、器形は言うに及ばず、胎土・調整技法などで明らかにそれとは区別される。むしろ焼成不良の須恵器との差が小さい。

2号土坑（図版4・5、第8図）

1号土坑の東に近接して位置する。中央付近に焼土が認められたが、変色した地山上と遺構埋土が似ていたために幾度か精査してようやく図示したような形状の土坑を検出したものである。

遺構は長軸長1.35m、短軸長0.85mの不整円形プランを呈し、深さは0.15m余を測る。北東小口部では北に偏してやはり不整円形土坑が穿たれるが、その深さは0.1mに過ぎない。

土坑は一端が流路跡の肩にほぼ接するが、軸が流路跡や方位を意識したとは認められない。また、埋土に顕著な特徴を見出すことはできなかった。

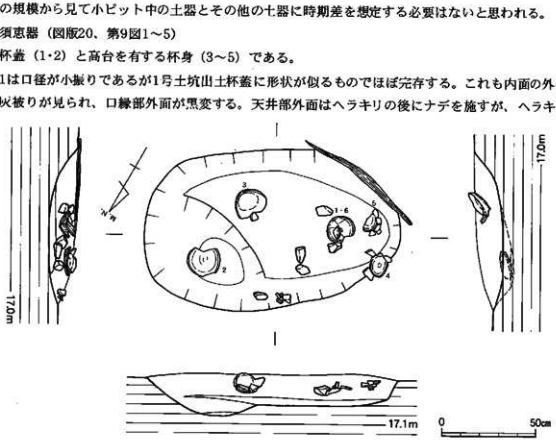
出土遺物

第9図2に示した杯蓋が北西小口に穿たれた小ピット中で出土したほかは土坑床面から0.1m弱浮いた状態で検出した。ただ、いずれもほぼ同じレベルで検出したことは、原形を保っていた個体が多いこととあわせて同時に遺棄されたことを示していよう。詳細な土層観察を行っていないが、土坑の規模から見て小ピット中の土器とその他の土器に時期差を想定する必要はないと思われる。

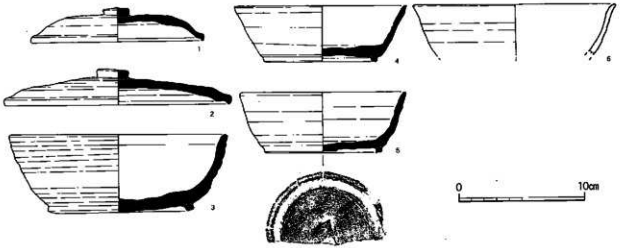
須恵器（図版20、第9図1～5）

杯蓋（1・2）と高台を有する杯身（3～5）である。

1は口径が小振りであるが1号土坑出土杯蓋に形状が似るものでほぼ完存する。これも内面の外半に灰被りが見られ、口縁部外面が黒変する。天井部外面はヘラキリの後にナデを施すが、ヘラキリ



第8図　2号土坑実測図（1/20）



第9図　2号土坑出土土器実測図（1/3）

痕は消えていない。2は口縁部の1/4を欠く。天井は低く、外面は広範囲を丁寧にヘラケズリで仕上げる。内面は丁寧なヨコナデ調整を施し、全体に薄く灰を被る。口縁部はやはり鳥嘴状となるが、肉厚のため鈍重な感がある。

3は底部付近が完存、口縁部は1/4を欠く。体部は内彎して急角度で立ち上がり、口端部が小さく外反するが、器肉が厚く、ヨコナデによる体部外面の凹凸が顕著である。しかし、体部内面は丁寧に仕上げている。底部外面はヘラキリのままで終わり、内面は磨られたかと思われる感触がある。墨の痕跡は見えないが硯として使用された可能性がある。4は底部付近が完存、口縁部付近は1/2を欠く。体部は直線的に立ち上がり、口縁部外面に弱い面取を行う。底部内面は比較的広く仕上げナデを行い、外面はヘラキリの後に部分的にナデを施している。5はほぼ高台に接して立ち上がる体部の下半が内彎し、上半は直線的となる。外底面はヘラキリ痕を丁寧にナデ消し、繊細な1条のヘラ記号が刻まれている。底部付近の1/2が残存する。

上師器（第9図6）

体部が内彎し、口縁部が小さく外反する杯あるいは椀で、口縁部の1/4ほどが残存する。灰赤褐色～灰黄褐色を呈し、外面には轆轤によるヨコナデ痕が見える。

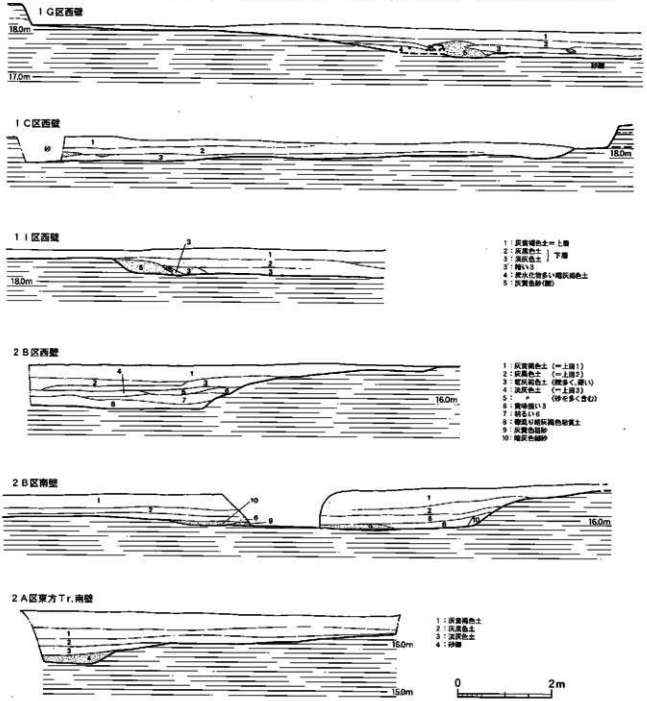
3）流路跡

調査区を縦断する礫床部分をこう呼んでいる。この南北両側は基本的に黄褐色粘土を地山とするが、Ⅰ区付近の南側は礫を非常に多く含む土質であった。ⅠF区の礫床部を重機を用いて掘削してみたところ、図版7に示すように、－0.8m付近で青灰色に変色するがやはり同様の礫が続いていて、この礫床が突発的なものではなく長期にわたって形成されたことを窺わせた。

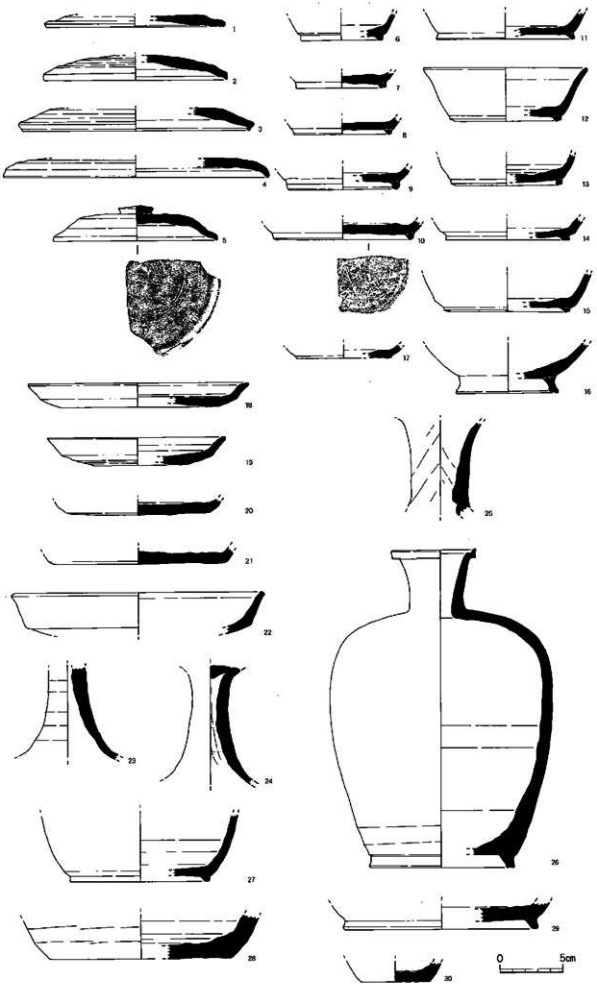
この流路は調査区西端付近で幅16mの規模を有し、北側は2Mとした付近まで黄褐色粘土の地山から緩傾斜を以て明瞭な段を有さない。南側では西端で名称を付していない小さな流路が流れ込むが、小流路が後出するようである。1区とした範囲の南辺では0.2～0.3mの明瞭な段差を認めることができた。1B・J・F区付近の礫床上面レベルを見ると、北端17.5m、中央付近17.3m、南端17.4mとなっていて北端がやや高くなっている。

2M区付近で北辺は大きく向きを変え、対応する南辺も大きく開くようである。2M・W区付近の礫床上面のレベルは北端16.6m、中央付近16.8m、南端16.5mとなり、中央付近が盛り上がる形となる。これが流路を大きく変更させた原因であろうか。2M・H・B区にかけて北辺はほぼ90度の角度で流路を変え、2B区では北辺で0.4m強の段差をもつようになるとともに、約4mの幅をもって南にも0.2m弱の立ち上がりを確認できた。この北辺は12m東で開けたトレンチで確認した北辺層へ直線的に続き、そこでの深さは0.2m強であった。この北辺が描く大きな角度をもつ曲線が人為的なものであるかどうかは確認できない。

他方、南辺東端に開けたトレンチでは3.5mの間に2段の段落ちを検出し、その最大差は0.25mであった。南辺が2W区付近で大きく方向を変えているのは、現在宅地化している部分が本来的に高



第10図　土層実測図（1/80）



第11図　1A区出土土器実測図1（1/3）

くなっていて遮られたものと思われる。

この流路跡は当然ながらさらに東へ続き、本調査区の東で発掘調査を実施した新北九州空港連絡道路建設に伴う雨窪前田遺跡（今年度報告。『福岡県文化財調査報告書』第187集）でも北辺と思われる一部を検出している。ＪＲ日豊線と国道10号線の間は古くに区画整理がなされていてその痕跡を見出しがたいが、流路の先端は当然松山南岸の周防灘へ通じたはずである。

この流路の堆積層は後述の土層図（第10図）に示した2･3層が相当し、その出土遺物は「下層出土」として取り上げたものである。また、これらについて1Ｃ区西畦南端付近で土壌を採取して分析を行っている。後章を参考していただきたい。

4）各グリッドの内容

1Ａ区（図版5）

第一次調査対象地の中程北側に設定したグリッドで、北には第二次調査で対象地とした宅地があって両者の比高差は現況で約1.2～2.0mである。

地山は鮮やかな黄褐色粘質土を主体とし、部分的に拳大内外の礫を噛んでいる。発掘区北辺付近では表土掘削時にほぼ地山が露出し、そこから南西に向かって徐々に下降、グリッド南西隅で流路跡がかろうじて現れている。西辺で見れば、北端の標高が17.7m前後、南端では17.5m弱となり、包含層の厚さは最大で0.2m強となる。

出土遺物

5･12～17･19～25･27～29･31･35～38･40･41･43･44が地山上出土、その他は上層あるいは出土層位を特定できないものである。

須恵器（図版20、第11図1～第12図39）

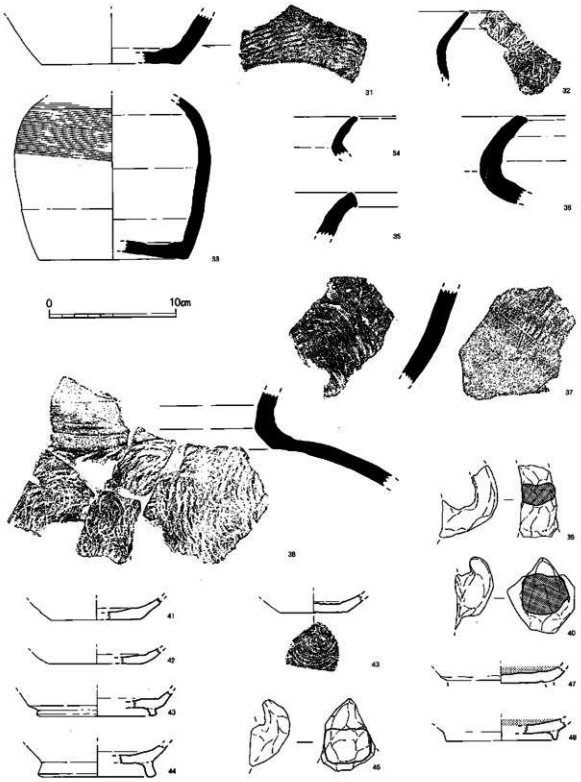
1～5は杯蓋。1は低平な天井部をもち、口縁部付近が肉厚となるために端部が不明瞭となっている。天井部は雑なヘラキリのままで、焼成は甘い。2は天井部が丸みをもち、内面は外周を除いて灰を被り黒色化する。3も雑な作りであるが、口縁部は鋭い。これも内面に灰を被り、口端部の一部が潰れる。5は天井部が比較的高く、口縁部はほぼ垂直に接地する。これも焼成が甘く、口縁部付近の外面および内面の外半が灰黒色となり、その他の部位は灰褐色となる。天井部内面に繊細な×状のヘラ記号が刻まれている。

6～16は高台付杯身。6は体部外面が灰を被って黒色化する。7は外底面のヘラキリ痕が明瞭に残る3/4の残片。8も外底面はヘラキリのままで、体部から高台にかけての外面が灰を被り黒色化する。9は外面の全体が灰を被り、伏せて焼成されたことが判るが、内面でも黒色粒が多く溶融していてかなりの高温に晒されたようである。10は底部内面が磨れるようで、明瞭な墨跡は見られないが硯として使用された可能性がある。なお、外面はヘラキリ後にヨコナデを施し、2条の平行線が刻まれている。11は高台の開きが大きいが、やはり底部外縁に付される。12は内外面を丁寧にヨコナデ調整していて、外底面のヘラキリ痕は見えない。体部下半は直線的に、角度をもって立ち上がるが、口縁部付近が大きく外反する。13は外面の全体に灰を被り内面では黒色粒が溶け出している。14は底部下端付近に明瞭な稜線をもつが、そこから外底面にかけて丁寧にヨコナデされてヘラケズリ痕は見えない。内面のヨコナデ調整は粗雑で、焼成は甘い。15は焼成が甘く、器表が荒れる。16は体部が椀状に、底部から連続的に内彎して立ち上がり、高台も他例に比して高く明らかに形態

が異なる。内面はやや雑なヨコナデ、体部外面はヘラケズリの後にヨコナデを施すようで、外底面も丁寧に撫でられている。底部の1/3が残存。

17は無高台の杯身小片で、胎土は精良である。

18・19は皿。18は口縁部付近の内面が肥厚して弱い稜線をもち、内底面外周には意識したものか判然としないが弱い圏線が巡る。体部外面中位付近から外底面にかけてはヘラケズリを行った後に



第12図　1A区出土土器実測図2（1/3）

ヨコナデで仕上げるようである。体部外面から内底面にかけて灰を被ってる。19は口縁部の外反の度合いが弱いもので、口端部付近の外面のみが黒変する。内外面全体を丁寧なヨコナデで仕上げるが、内底面は非常にツルツルとしており、硯として使用された可能性がある。

20・21は底部片で、無高台の杯身あるいは皿であろう。20は1/6ほどの残片で、底部外面はヘラキリ後に撫で消している。内面にはツルツル感があり、これも硯として使用された可能性がある。21は1/2の残片で外底面はヘラキリの後に雑なナデを施すが、全体に丁寧に作られている。

22～24は高杯。22は杯部外面に比較的明瞭な稜をもち、それ以上はほぼ直線的に開いて端部はわずかに外反傾向が見える。また、口端部内面は小さく窪んでいる。内面は全体に丁寧なヨコナデで仕上げ、稜以下の外面は丁寧なヘラケズリで仕上げる。稜以上の外面から内面にかけては灰を被る。23・24は細身の柱状部で、図示した部分がほぼ完周する。ともに胎土が粗い。

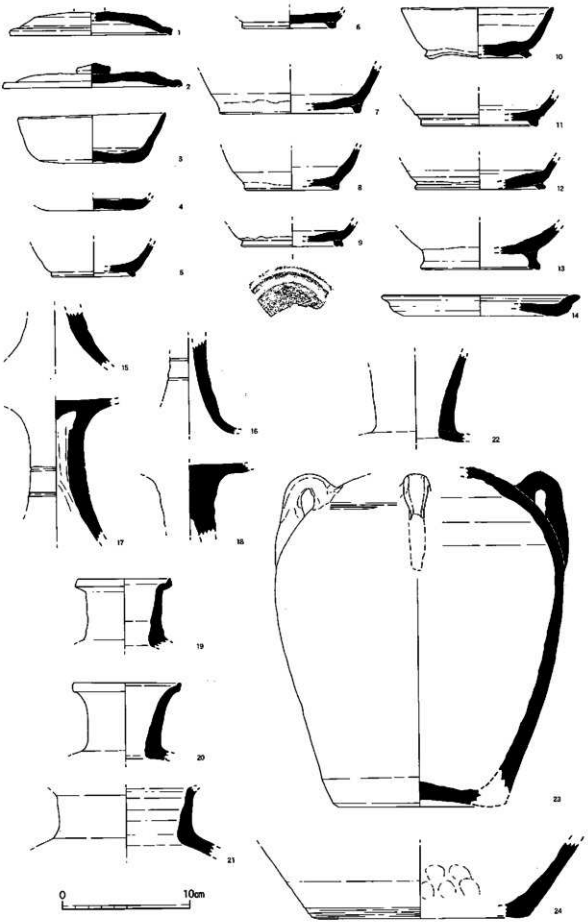
25は長頸壺で内外面にシボリの痕が見えるが、外面ではその上にヨコナデ調整を行う。26は全体を窺える資料で底部の1/2、口縁部の1/4が残存するが、南に隣接するIEK下層でも一部が出土する。口頸部は開きが小さく、口縁部は鋭く屈曲して受け口となる。体部の張りは小さいが、底部まで直径に大きな変化はない。底部はほぼ水平に切られて外縁に外方へ踏ん張る形の高台を付すが、高台端面はわずかに凹面となっている。体部下端付近をヘラケズリ、それ以上をヘラケズリの後にヨコナデ調整を施している。口縁部から体部中位にかけての外面は厚く垂れた濃緑色灰釉を残して大部分の自然釉が飛んでいて、調整の細部は判らない。また、口頸部内面も自然釉を被って黒色となる。27の体部内外面はヨコナデ、外底面はヘラキリの後にヘラケズリで仕上げるようである。体部下端付近の調整技法や器壁の厚さなどから見て杯身であるかも知れない。28は無高台の底部で、これは外面にヘラケズリが見え、内面のヨコナデも粗いことから壺底部としてよかろう。外底面はナデのようである。29は器壁の厚さや内底面の粗いヨコナデなどから見て壺であろう。胎土は精良で、体部下端外面はヨコナデ、外底面の調整痕は見えない。30はほぼ1/2が残存する小型壺底部。胎土精良で、内底面は凹凸が目立ち、外底面には糸切り痕を残す。31も壺の底部であろう。体部下端外面は平行タタキの後に部分的に縦方向のヘラケズリを施す。外底面にはユビオサエの痕が残っている。32は小型の壺であろうか。IB区でも同一個体と思われるものが出土している。体部の張りは小さく、口縁部は緩く屈曲して端部は薄くなるが断面方形とする。外面には篦描波状文を刻むが、構成は整美なものではない。33は胎土が精良な壺で、底部の1/2が残る。体部は張りが弱く、底径が大きい。体部外面は下端付近をヘラケズリ、そこから最大頸部付近は撫でられているが、以上は弱いカキメを施すようである。IB・D・E区でも破片が出土する。

34～38は甕。34は小型品で口端部に面を付す。口縁部内面および肩部外面に灰を被る。35は肉厚で、口端部を上下に小さく鋭く摘み出す。36は大型品であるが、口縁部の形状は34によく似る。口頸部の内外面を丁寧にヨコナデ調整する。37は体部片で×状のヘラ記号があり、そのあたりにはハケメが見える。38は甘い焼成で器肉が淡灰赤色となっているが、肩部外面は灰を被る。

38は環状の取っ手で長頸壺に付くものであろう。手捏ねで整形され、断面は長方形に近くなる。39は角状の取っ手で甑に取り付くものであろう。正面観は三角形となり、これも全体に手捏ねで整形するが、両側面はヘラケズリを行っている。

上師器（第12図41～46）

41～43は杯。41は体部が底部との間に稜をもって浅く立ち上がるもので、外面は灰黒色、内面は灰黄褐色となる。器表が荒れていて調整痕は見えない。42は体部が浅く立ち上がるもので、これ



第13図　1B区出土土器実測図1（1/3）

も器表が荒れているが外底面には回転ヘラキリ痕が見える。胎土はとても精良である。43は42に形状が似ているが、この内底面にはヨコナデによるの小さな凹凸が顕著である。これも器表が荒れるが外底面には回転糸切り痕が残る。

44・45は高台付杯。44は器形・調整ともに須恵器のそれと同様であるが酸化炎焼成されて灰黄色となっている。45はしっかりした高い高台をもち、底部から体部にかけては曲線を描いて連続的に移行する。胎土は精良で器表は荒れている。椀とすべきであろうか。

46は赤褐色を呈する甑の取っ手で、これも正面観は三角形とし、断面は長方形となる。

黒色土器（第12図47・48）

内面を黒色化し、外面は黄褐色あるいは灰黄褐色となっている。47は1/2の残片であるが高台がすべて剥落している。内面には密にヘラミガキを施し、外底面は荒れて調整痕は不明であるが、高台の剥離面にはヘラケズリと思われる痕跡が残る。48は断面三角形となる高台をもつ小片で、胎土粗く、器表も荒れている。

1B区（図版6）

1A区の西隣にあり、グリッド中程に流路跡の礫床が走る。西辺で見ると南北両端の比高差は0.4mほどである。なお、このグリッドで皇朝十二銭の一つ萬年通宝が出土したが、包含層発掘時のものであり、詳細な位置は把握できていない。

出土遺物

1～4・8～14・17・18・22・23・25（口縁部）・27・30～33が下層出土、それ以外が上層出土である。

須恵器（図版21、第13図1～第14図27）

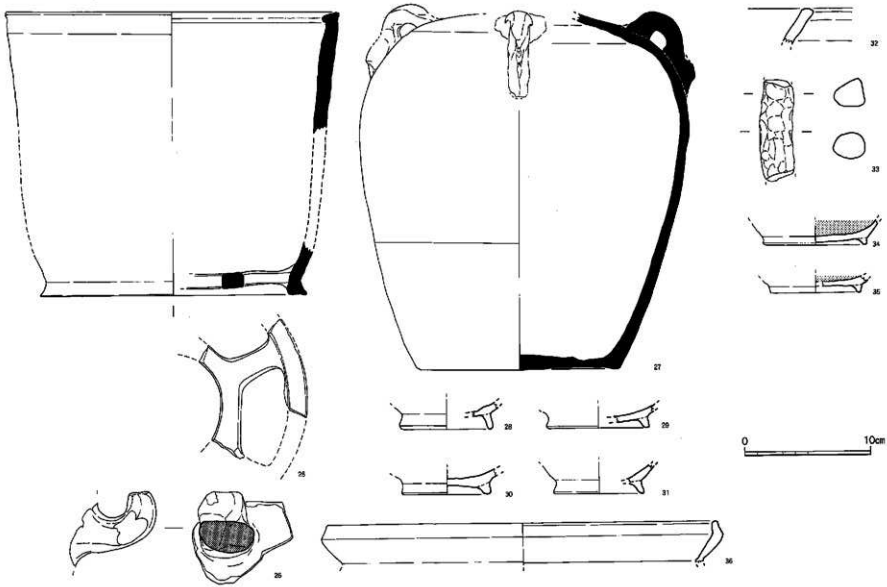
1・2は杯蓋。1はつまみが剥離する焼成不良の土器で、口縁部付近の器肉が厚くシャープさを欠く。天井部外面は丁寧なヘラキリを行う。2も器肉が厚く、口縁部は急に薄くなってバランスを欠いている。天井部外面はナデによってヘラキリ痕を消し、内面は仕上げナデを施す。口縁部付近の外面は灰を被って濃灰緑色に変色する。

3・4は無高台の杯身。3は底部から体部へ丸みをもって移行し、体部は直線的に立ち上がって口端部にいたる。底部付近は完存し、外面はヘラキリ後に丁寧に撫で消す。焼成甘く、体部下端の一部が赤変する。4は底部の3/4が残存し、外底面はヘラキリのまま終わっている。

5～12は高台付杯身。5は内外の全面を丁寧にヨコナデ調整する。6は完存する底部であるが、焼成不良で器表が荒れている。7は内底面付近が丁寧にヨコナデ調整される。なお、見込み外縁の沈線状の刻みが意図的なものとの確信はない。高台は小振りで直立し、貼り付け痕が明瞭に残る。8は内外面全体を丁寧にヨコナデで仕上げるが、体部下端に高台接合時の痕跡が明瞭に残る。1/2の残片。9も同様の土器で、高台接合痕が明瞭である。この外底面には×状のヘラ記号がある。10は唯一全体を窺える土器であるが焼成時に大きく焼け歪んでいる。底部から体部にかけて弧を描き、体部から口縁部にかけては直線的に開いてそのまま終わる。これも全体を丁寧にヨコナデ調整する。11・12も丁寧にヨコナデ調整された土器であるが、高台接合痕は明瞭に残る。11は焼成不良、12は外面全体が灰を被って黒色化する。

13は椀としたほうが妥当であろうか。底部から体部へ連続的に移行し、高い高台を付す。高台下端は内外に小さく肥厚して、内傾する面をもち、体部への接合部はその痕跡を残す。1/3弱の残片。

14は1/4が残存する皿。全体に雑な調整がなされ、器肉も厚く粗い作りである。



第14図　1B区出土土器実測図2（1/3）

15～18は高杯。15は大きく開く脚部片で調整は丁寧になされるようである。16は柱状部に甘い凹線を2条巡らせるもので、胎土粗く、調整も粗雑となる。17も同様に2条の凹線を刻むが、これは鋭い。杯部底面は丁寧な仕上げナデが施され、脚部も全体にヨコナデで調整するようである。

19～24・27は壺あるいはそれと思われるもの。19は頸部が筒状になり、口縁部が緩く屈曲して受け口となるやや変わった形態となる。細部がシャープに作られた小片。20は通常の長頸壺で、これも口端部を上方に摘み上げて受け口状とする。焼成は甘いが、作りは丁寧である。21は頸部が太く短いものの、残存状況からやはり受け口状の口縁部をもつものであろう。肩部内面には当て具痕が残る。胎土精良で、丁寧に作られる。22も口縁部を欠くがやはり受け口状口縁の壺であろう。これも丁寧に作られた土器。23は口頸部を除いて全体が焼える土器で、1G区の地山に近い砂層中・1F区下層出土資料と接合している。縦位の環状取っ手は大振りで相対して一対が付される。その付近には甘い凹線が刻まれているが、これは取っ手の貼り付け位置の目安も兼ねるようである。底部はヘラキリ痕がかすかに見え、不定方向のヘラケズリ、ナデも併用しているようだが概して粗雑の感を免れない。ただ、外縁は丁寧にヘラケズリを行う。体部も大部分を粗いヘラケズリのまま終わっているように見える。焼成は甘い。24は底部片。外底面はヘラキリのまま終わり、体部下端では一単位のカキメを施し、それ以上はヘラケズリの後に雑に撫でるようである。体部下端付近の内面にはユビオサエが顕著である。27も同程度に復原できる壺で、これも1F区下層・J区下層から出土した土器片が接合した。これも縦位に大型の環状取っ手を一対付し、その付近には不連続となる繊細な沈線が見える。底部外面の調整は判然とせず、外周のヘラケズリも見られないがよく平滑化する。1×2cmほどの小さな土器片が熔着するが、使用にはさして影響しないようである。体部外面は下位をヘラケズリし、中位以上ではヘラケズリの後に撫でるようである。外面全体に灰を被って黒色化している。

25は図上復原した甑で、これも1A・1C・1Fの各区下層出土土器片が接合している。口縁部から体部にかけてほぼ直線をなし、口端部内側に粘土帯を付して突出させる。底部は大きな高台を外周に付し、大きな孔を開けているが、この穿孔はヘラを用いて丁寧になされている。全体にヨコナデで仕上げるが、口縁部付近を除いた体部内面は砂粒が多く浮き上がっている。26は取っ手であるが、25とは別個体のようである。直方体の粘土塊を手捏ねで細工したような形状となり、先端頂部はヘラで切り落としている。

土師器（第14図28～33）

28～31は高台付杯。28は高台が高く、端部が丸く終わるもので、器表が荒れているが全体に灰黄褐色となる。29は高台断面が方形となり、外底面をヘラキリ後ナデで調整するなど器形・製作技法が須恵器に似る。全体に灰黄色となり、胎土は精良である。30も高台の形状は須恵器に似る。胎土は粗く、被熱赤変して器表が荒れている。31は体部の立ち上がりが急角度をなすようである。灰赤褐色を呈し、器表が荒れている。

32は甕口縁部の小片で、胎土粗く、外面が黒変する。

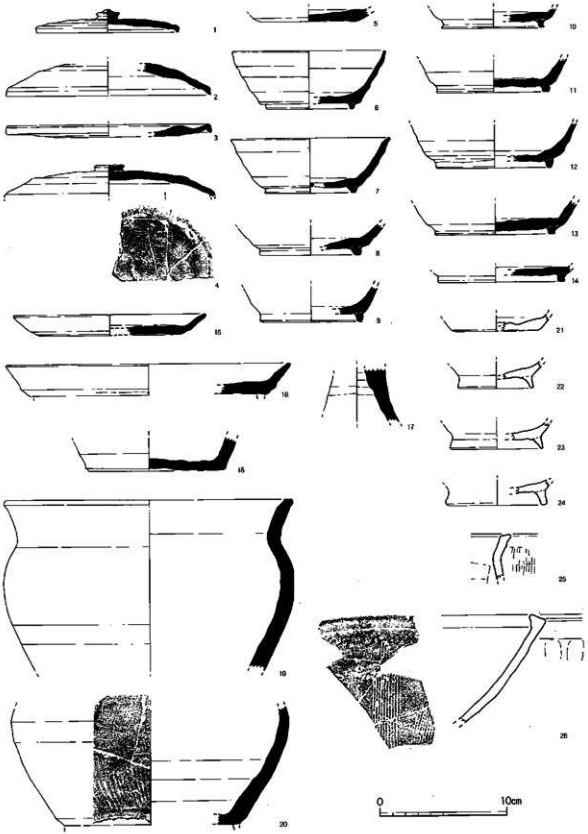
33は手捏ねの棒状製品で性格は不明。全体に黄褐色を呈し、胎土は比較的精良である。

黒色土器（第14図34・35）

いずれも内面のみ黒色化した高台付椀。いずれも小振りの高台を付し、外面は黄褐色、灰黄色となり、器表が荒れている。35は外底面に黒斑が残る。

瓦器（第14図36）

頸部で外反し、口縁部が内側へ屈曲する鍋口縁の小片。胎土は灰白色となる精良なもので、内外面は漆黒に近い色となる。



第15図　1C区出土土器実測図（1/3）

1C区（図版6）

1B区の西にあり、このグリッドは北東隅の一部を除いて流路跡内に位置する。礫床のレベルを西側畦付近で見ると、北で17.8m、南で17.5mほどとなる。

このグリッドの東辺近くの中央付近で2本の木株を検出している。約1mの距離を置き、そのうちの1本は1.5mの範囲で根を広げていた。他方は明瞭な根を残さないほどの小さなものであった。

また、この調査区西側畦の南端付近で土壌分析試料を採取した。

出土遺物

14・17・18・22・26が上層出土、ほかは下層出土で、うち23・24は地山上から出土した。

須恵器（図版21、第15図1～20）

1～3は杯蓋。1は天井が低平で、外面では口縁部との境が明瞭とならないが、内面では口縁部付近を強く窪ませて変化を付けるが、細部はシャープに作られる。外面は口縁部付近を除く大部分をヘラキリするが、その中央1/2ほどと内面全体を丁寧なヨコナデで仕上げる。なお、口縁部付近外面が黒変する。2は口縁部から天井部にかけて明瞭な反転を見せずに連続し、器高が高い。調整は全体に丁寧にヨコナデを施し、内面に灰被りが見られる。3は大きく歪み、外面に濃緑色の自然釉が付着する。内外面中央付近に磨ったような感触があり、墨は見えないが硯として使用されたのかも知れない。4も大きく焼け歪むが図は復原実測している。天井部外面はヘラキリ後に雑に撫で消し、内面では仕上げナデを施す。また、内面には1条のヘラ記号が刻まれる。

5は無高台の杯身で図示部は完存する。外底面はヘラキリのままで終わり、一部に煤あるいは墨が付着するが、磨ったような痕跡は認められない。

6～14は高台付杯身。6は底部が完存、体部は直線的に開き、口縁部は殆どを欠くがわずかに内側へ屈曲する。図では高台が底部外縁のやや内側に付くようになっているが、この稜は不整で完周しない。体部外面には小粘土塊が付着したり雑な仕上げであるが、内面および外底面は丁寧にヨコナデを施す。7は体部が内彎して立ち上がり、口縁部は外反するとともに内面に弱い稜をもつ。外底面はヘラキリ後に撫で消すが、その際に高台のやや内側に繊細な爪痕と思われる痕跡が連続的に残っている。なお、底部に焼成後に内側から敲打した孔と思われる痕跡がある。8は体部下端付近に比較的明瞭な稜を残し、外面全体が灰を被って黒色化する。作りは雑である。9は外面の自然釉が飛んで器表が荒れる。11は内底面に仕上げナデの痕跡を残し、ほかの部分も丁寧にヨコナデを施す。12は焼成が甘く、内面および外底面がくすんだ赤褐色、体部外面が灰色となる。13は図示部が完存するもので、調整は雑である。14は焼成が甘く、外底面はヘラキリの後に撫でている。

15は口縁部が浅く直線的に開く皿で、1/2が残存する。外底面は雑なナデで仕上げるようであるがヘラキリ痕は見えない。内底面は磨った痕跡は見えないが黒ずんでいて硯として使用されたものかも知れない。16は1/4の残片で、これも口縁部は直線的に開く。器壁が厚く、調整も粗雑である。

17は器表が荒れる高杯の小片。

18は壺底部であろう。底部内外面に雑なユビナデ・ユビオサエが残り、体部下端はヘラケズリで仕上げる。19は胎土精良な壺で、口縁部の1/3が残存する。口縁部は弱く外反し、端部は外方へわずかに肥厚するが装飾に乏しい土器である。体部下半はケズリともカキメともつかない技法で調整され、それ以外はヨコナデを施す。20は内外面の大部分が丁寧なヨコナデで仕上げられるが、下端には平行タタキと思われる痕跡が明瞭に残される。

土師器（第15図21～25）

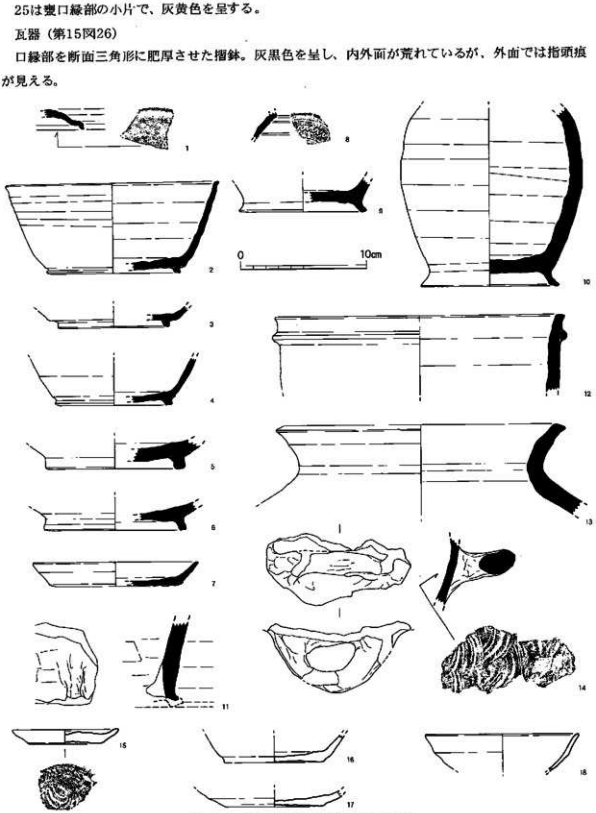
21は須恵器の器形に似る杯で、被熱赤変して器表が荒れる。

22～24は細身の、外方へ踏ん張る比較的高い高台をもつ。器表は灰黄色～灰赤色を呈し、いずれも器表が荒れている。

25は甕口縁部の小片で、灰黄色を呈する。

瓦器（第15図26）

口縁部を断面三角形に肥厚させた擂鉢。灰黒色を呈し、内外面が荒れているが、外面では指頭痕が見える。



第16図　1D区出土土器実測図（1/3）

1D区（図版6・7）

調査区西北端のグリッドで全面が流路跡中にある。西辺での礫床の標高は北端で18.0m、南端で17.6m余となる。ちなみに南端部の旧表土（耕作土）面の標高は18.8mほどであり、1m以上の堆積層が形成されている。

出土遺物

このグリッドは調査区内で最高所に位置し、区外からの漏水を溜めて排水するために北西隅の礫床に水溜を掘削した。その際に出土した土器が5・7・12・13、礫床上面に混入していたものである。そのほかの土器は包含層下層から出土した。

須恵器（図版21、第16図1～14）

1は口縁部の屈曲が大きい杯蓋小片で、細部がシャープに作られている。内面に格子に似たヘラ記号が細くくっきりと刻まれる。

2～6は高台付杯身。2は口径16.6cmを測る大型品でほぼ完存する。体部は急角度で直線的に立ち上がり、口端部が小さく外反する。外面にはヨコナデによる凹凸が著しく、内底面は仕上げナデ、外底面も撫でてヘラキリ痕を消す。3は1/2が残存する焼け歪んだ残片。高台外面から内底面まで高温により灰が飛んでいる。4も1/2の残片で外底面はヘラキリの後にナデ、体部外面および内面は丁寧にヨコナデで仕上げられる。5は内面が灰黄色、外面が灰色となる焼成不良の土器で全面がヨコナデで終わる。6も丁寧に作られている。

7は1/4が残存する皿で、体部内面から口端部外面にかけて灰を被る。外底面はヘラキリの後にナデを施すようで、その他の部位は丁寧なヨコナデで仕上げる。

8は甕あるいは壺の肩であろうか。細部が丁寧に作られ、単線の波状文を刻む。

9は壺であろうか。底部外周に高台を付し、外底面はナデで調整する。10は底部が完存する焼成の甘い壺で、今までに見た壺が弱いながら肩が張るのに比してこれは最大径部が中位にある。高台は華奢な作りで、外方に踏ん張る形となる。器肉が厚く、体部外面はヘラキリの後に撫でるようで、外底面も撫でられている。

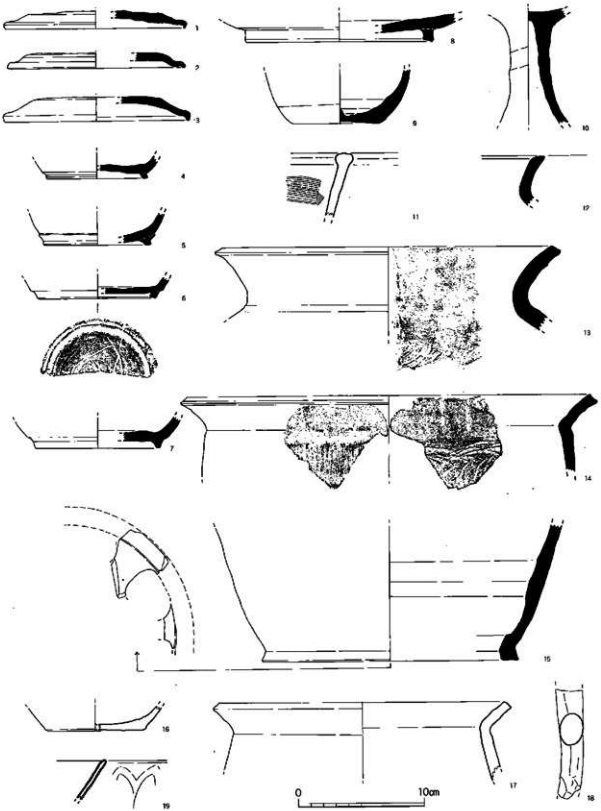
12は甑片。体部は直線的に、垂直に近く立ち上がり、口縁部は小さく外反して端部が水平な面をなす。装飾の乏しい器形であるが、口縁部下位の外面に断面台形の突帯を付す。器面は全体にやや雑なヨコナデ調整で終わる。11は同じく甑の底部片で焼成が甘く、器肉中央付近が淡灰色、内外の器表付近が淡褐色となる。図下端は欠損するが高台を有したようで、桟の一部も残存する。体部下端付近の内外面はヘラケズリで調整する。14は甑か壺か判らないが横位に取り付く環状取っ手で、整形は全体を手捏ねで行い、断面は長円形に近い。

土師器（第16図15～18）

15は口径8.2cm、器高1.2cmを測る皿で、器表が荒れているが外底面にイトキリ痕が残る。

16・17は椀で16は底部が完存する。底部・体部界は全周の1/2ほどが非常にシャープに作られている。器表が非常に荒れていて調整痕が見えないが、残存部上端付近を境に以上では内外が灰黄色となり、以下では内外が灰黒色となっている。17は体部の開きが非常に浅いもので皿としたほうが妥当であるかも知れない。全体が灰褐色を呈し、内面は丁寧なナデで、外面はイトキリ痕が見えるようである。胎土はとても粗い。

12は体部下半が内彎、口縁部付近が弱く外反し、灰黄褐色を呈する小片。



第17図　1E区出土土器実測図（1/3）

1E区（図版7）

1A区の南に位置し、1A区の南西隅で現れていた流路の礫床はこのグリッドの北西隅から南東隅

にかけて斜めに走る。

西畦付近の地山の標高を見ると、北端の黄褐色土上で17.3m、南端の礫床上で17.1mほどとなる。人力で掘削を開始した高さは17.7mほどからで、最大で0.6mほどの包含層を掘削したこととなる。

出土遺物

9・11・19は上層、2・8・10・12・13が地山上、ほかが下層出土である。

須恵器（図版22、第17図1～15）

1～3は杯蓋。1は天井部が低く平となり、口縁部上端が丸みをもって屈曲し、垂直に近く接地する。天井部外面はヘラキリ後に撫で、内面は全体をヨコナデ調整する。口縁部外面から天井部内面中央付近まで灰を被り、口端部は熔着したようで大部分が欠ける。また、天井部と口縁部の境付近の外面にも熔着痕がある。2は天井部から口縁部への移行部がすでに接地するかのような形態となる。その付近の外面に熔着痕があって、そこから口端部にかけては風変する。天井部外面はヘラキリ後に撫でている。3は口端部が内傾気味に高く作られ、天井部にかけての屈曲が弱い。口端部付近の外面が黒色化する。

4は丁寧に作られた土器で、外底面はヘラキリ後に撫でている。5も内外面が丁寧に撫でて仕上げられる。焼成が甘く、高台から体部外面にかけて灰黒色、外底面および内面が暗灰赤褐色となっている。6も焼成が甘い土器で、底部内面が丁寧なヨコナデ、外面はヘラキリ後に撫でてヘラ記号を刻む。7は全体を丁寧にヨコナデ調整し、これも外底面に繊細な1条のヘラ記号を刻む。

8は1/3が残存する。底径が大きく高台付の皿あるいは盤であろうか。高台も大振りで垂直につき、接地部は内傾する面をもつ。内面は丁寧にヨコナデ、残存する体部下端はヘラケズリ、外底面はナデで仕上げられる。

9は小型壺底部で、内底面付近はヨコナデによる凹凸が顕著である。外面は体部下端付近をヘラケズリ後に撫でているようで、それ以上の部分はヘラケズリのままで終わる。外底面はヘラキリ後に雑に撫でている。

10は高杯で、図示部は完存するが器表が荒れている。

11は甑であろう。体部から口縁部にかけて直線的に小さく開き、口縁部内面に粘土帯を付す。外面は雑な調整がなされ、内面ではハケメが残る。

12は甕小片で、口縁部は緩く外彎して端部に面をもつが装飾はない。13は12をやや大型にしたような形態で、やはり装飾に乏しい。頸部内面は丁寧に撫でられる。14はく字状に外反する口縁部の端部を凹面とし、体部は張りをもたない。土師器に似た形状の甕であるが、体部外面のタタキは甘く内面にもごく浅い同心円当て具痕が残り、焼成・色調は通常の須恵器と同じである。

15は甑で、胎土粗く焼成は甘い。高台を除く体部外面が黄褐色となっているが、ムラがなく何よりも高台や内面に全く見えないことから顔料が塗られたようである。

土師器（第17図16～18）

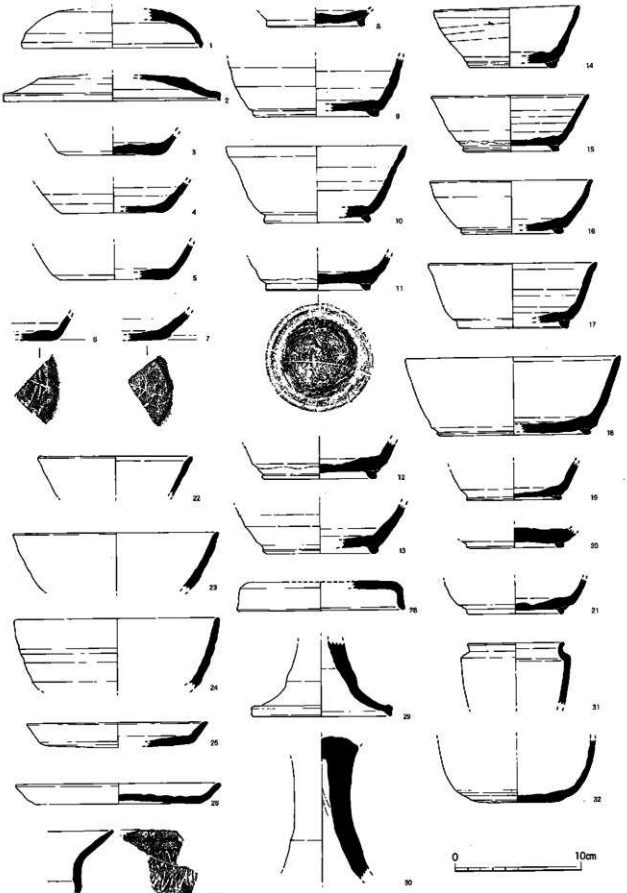
16は底部・体部界が不鞏ながら明瞭に稜線をもつ杯身。黄褐色を呈し、器表が荒れる。

17はロ縁部がく字状に外反し、口端部を断面方形に作る甕で、器表は荒れる。胎土は砂粒が多く、最大のものは径5mmにも達する。内外の器表は灰褐色、器肉の中心部付近は黒色となっている。

18は黄白色を呈する鍋の足で、縦方向に煤けて黒色化した部分がある。断面は楕円形。

磁器（第17図19）

龍泉窯系青磁蓮弁文椀の小片で、釉は淡灰緑色に発色する。



第18図　1F区出土土器実測図1 (1/3)

1F区（図版7）

1B区の南、1E区の西に位置する。ここも大部分が流路跡中に位置するが、南西隅でその肩が現れている。1G区・1I区で説明を加えるが、出土遺物中で砂層としたものは流路跡の南端で礫床上に堆積した粗砂層である。この地山は黄褐色粘土に礫が多く噛んでいた。また、流路跡南端付近に長さ0.7m、幅0.2mほどの木材が出土しているが、人為的加工の痕跡は見られなかった。

西辺での標高を見ると、北端で17.4m、流路下端も17.4m、同上端で17.7mとなっている。

出土遺物

8・9・43・44は上層から、1・2・7・10～13・28・29・31・34～39・42は下層から、その他が砂層から出土したものである。

須恵器（図版21・22、第18・19図）

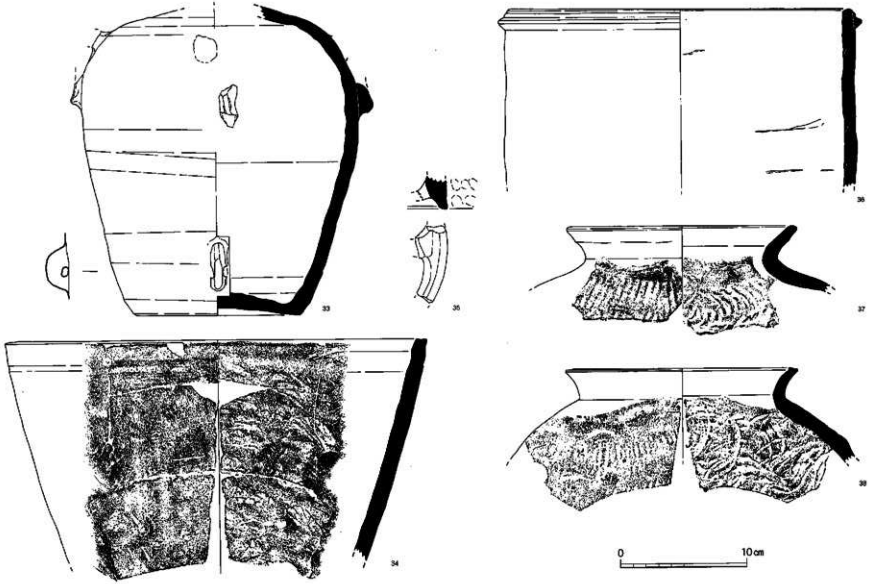
1は天井部が丸く、口端部内面に沈線をもつことから古墳時代に属する杯蓋の形態に似るが、外面全体を丁寧にヨコナデしており、口端部から口縁部内面にかけて灰を被るなどの特徴は今回多く出土した古代の杯蓋に共通する。2は天井部が平坦となり、内彎気味に口端部にいたる小片。天井部外面は粗雑なヘラ切りを行っている。

3～7は無高台の杯身で、いずれも底部から体部への移行は丸みを持つ。3は焼成が甘く、器表が荒れている。4は内面をヨコナデ、外底面は丁寧なヘラキリのままである。5も焼成が甘く灰黄色となり、器表が荒れている。6・7は外底面にヘラ記号を残す残片。

9は1/2の残片。10は体部の器肉が厚く、下半が内彎気味となる。調整はヨコナデを主体として丁寧になされる。10は体部上半がわずかに窄むが、概ね直線的に開く体部をもつ。11は外底面をヘラキリ後に雑に撫でて、浅いヘラ記号を刻む。12は焼成が甘く器表が荒れているが、外底面はナデ、ほかはヨコナデで仕上げるようである。13は底部内面に仕上げナデが見え、外面は丁寧に撫でている。この3点は高台の貼り付け部が明瞭に見える。14は焼け歪むがほぼ完形で、体部は急角度をもって立ち上がり、口縁部付近がわずかに内傾する。調整は雑で、高台の形状も乱れる。外底面はヘラキリ後にナデを施すようである。15は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。焼成は甘いが、調整は丁寧になされる。16は体部下半が内彎し、口縁部が小さく外反する。これも焼成が甘く器表が荒れているが、調整はヨコナデ・ナデを用いて丁寧になされるようである。17は体部が直線的に立ち上がり、口縁部が小さく外反するもので、これも焼成が甘い。口端部付近の外面が黒変している。18は体部から口縁部にかけて直線的に開き、口端部内面を斜めに面取する。体部下端の稜も明瞭であるが、外底面も含めてヘラキリ痕は撫で消される。底部の1/4、口縁部は小片が残存する。19は内外の全体を丁寧に撫でて仕上げている。20は肉厚で完存する。焼成不良で灰黄色～淡灰色を呈し、器表が荒れている。21は内底面中央付近の一部仕上げナデが見え、外底面はヘラキリ後に撫でている。

22は口縁部内面を面取風に整形するもので、外面には煤あるいは墨のような黒色付着物がある。23は体部から口縁部にかけて緩やかに内彎するもので、丁寧に作られる。外面に灰を被る。24は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる丁寧な作りの土器である。器表に径5㎜の石英が現れているが、なお胎土は概ね良好といえる。これは1/2ほどが残存する。

25は口縁部が直線的に開き、器肉が厚い。全体が丁寧にヨコナデ調整される。26も直線的に開く口縁部を有し、内底面に弱い凹凸が顕著である。しかし、なお作りは丁寧といってよい。



第19図　1F区山土土器実測図2（1/3）

27は壺小片で、1A区出土品と同一個体である。

28は断面が方形に近くなる蓋で、口端部内側に甘い面をもつ。胎土精良、作りもとても丁寧で、天井部外面が灰を被る。

29は脚中央付近がわずかに膨らみ、端部が杯蓋口縁部のような鳥嘴上となる。内外に灰を被っていて、焼成時に倒置されていたようである。30は焼成甘く、器表が荒れる。

31は小壺で、肩に稜をもち、口縁部がわずかに外反して短く立ち上がる。丁寧に作られるようだが、外面は全体に灰を被って剥落の詳細は不明である。32は丸底をもち、これも丁寧に作られる。33は1B区出土資料と接合し、体部の全体が窺える。体部は張りが弱く撫で肩となり、比較的大振りの底部へ続く。体部外面は全体にやや雑なヘラケズリで調整するようであるが、部分的に強いヨコナデを施して窪む部分がある。外底面はヘラキリの後にナデで痕跡をほぼ消しているが、その仕上がりは粗雑である。肩部下位に一対の取っ手があるが、これは欠失していて形状は不明。肩部付近の取っ手とは90度ずらして体部下端にも小振りの一対の取っ手が付される。この正面観は扁平板状となる。

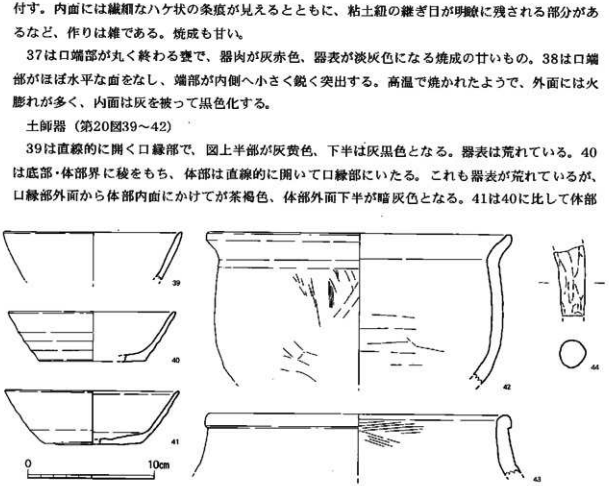
34は体部から口縁部にかけてほぼ直線的に開く鉢で、口縁部付近で小さく変化を加えるが、口端部はわずかに窪む凹面となるだけで装飾に乏しい。拓本で見るように内面の全面に撫で消された当て具の痕跡が見られるが、外面ではタタキの痕跡は殆ど残らず、丁寧に撫で消されるようである。

35は甑の高台部分の小片で、外面にユビオサエが見える。孔はやはりヘラ状工具で鋭利に穿たれる。36は体部から口縁部にかけて直線的となる甑で、口縁部下位の外面に断面三角形となる突帯を付す。内面には繊細なハケ状の条痕が見えるとともに、粘土紐の継ぎ目が明瞭に残される部分があるなど、作りは雑である。焼成も甘い。

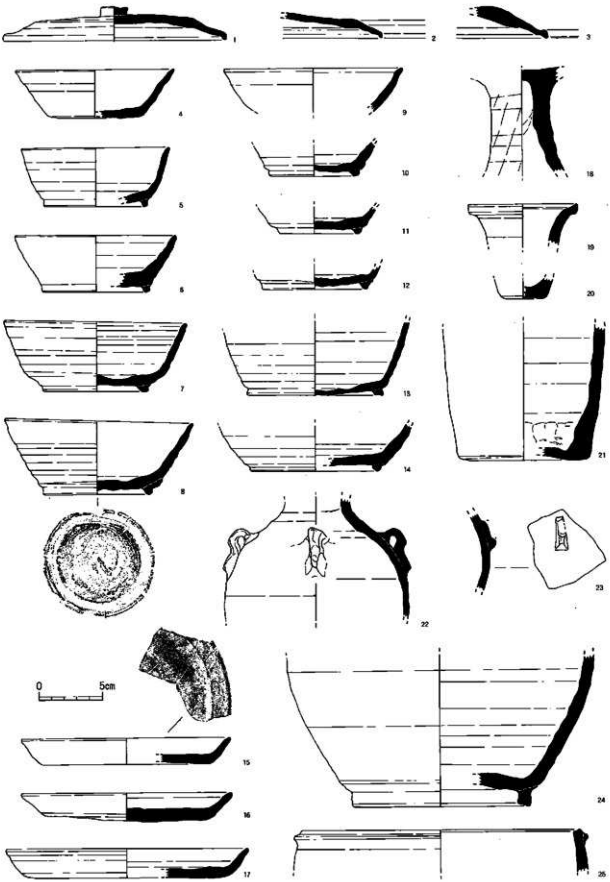
37は口端部が丸く終わる甕で、器肉が灰赤色、器表が淡灰色になる焼成の甘いもの。38は口端部がほぼ水平な面をなし、端部が内側へ小さく鋭く突出する。高温で焼かれたようで、外面には火膨れが多く、内面は灰を被って黒色化する。

土師器（第20図39～42）

39は直線的に開く口縁部で、図上半部が灰黄色、下半は灰黒色となる。器表は荒れている。40は底部・体部界に稜をもち、体部は直線的に開いて口縁部にいたる。これも器表が荒れているが、口縁部外面から体部内面にかけてが茶褐色、体部外面下半が暗灰色となる。41は40に比して体部



第20図　1F区出土土器実測図3（1/3）



第21図　1G区出土土器実測図1（1/3）

ド端が丸みをもち、体部は直線的にほぼ同じ角度で開いて、口端部付近が小さく外反する。外底面をヘラキリ後に撫でるなど、調整技法は須恵器と同様であるが全体に灰黒色となる。

42は口縁部が短く外反する甕で、口端部内側がわずかに摘み出される。体部外面下半はヘラケズリ調整であるが、上半はヘラケズリともハケメとも言い難い痕跡が残る。内面も同様にはっきりしない技法で調整し、図下端付近には焦げ跡が付着する。

瓦器（第20図43・44）

43は壺であろうか。内傾する口端部外面を、折り曲げることによって玉縁状とする。器肉は灰白色、器表は黒色となる。44は灰白色を呈する鍋の足。

1G区（図版8・9）

1F区の西、1C区の南に位置するグリッドで、中央付近やや南を東西方向に流路跡の肩が緩い曲線を描いて走る。

西畦の土層を図示している（第10図）。ちょうど、流路跡の肩が畦と斜行する部分にあたったために段落ちは不明瞭となり、木質が多く出土したりして不十分な部分もあるが堆積の状況は概ね把握できる。図の1～3層とした各層は遺跡全体にほぼ共通するもので、遺物は先述したように1層を上層、2・3層を下層として取り上げている。このうちの2・3層が流路跡の堆積層である。1G区西畦の土層では3層に掘り込む形で砂層が検出されたが、後述する1I区西壁の土層観察では3層の下位に砂層が形成されていて、そのままではこの土層と対比できない。ただ、ここでは3層の下位に炭化材等を多く含む4層が確認されており、そのラインは礫で中断するが砂層中に色調の違いで引いたラインに続きそうである。そうすれば、砂層の北端付近の落ちと対応する溝状の遺構が復原でき、この内部に堆積した砂層をII区西畦の砂礫層に対応させることができる。4層を平面的にとらえることはできていないが、炭化材を含んでいることから、後述する1I区で多く出土した木製遺物がこれに対応するものかも知れない。

発掘時には詳細を検討していなかったために砂層中資料を一括の遺物群に相当するものとして取り扱ったが、上記の検討によれば二時期の遺物が含まれる可能性が高い。

ちなみにこの南辺の流路跡床は青灰色シルトで、北へ向かって急激に下降するようである。礫はその上を覆う。

出土遺物

図版8・9に示したように流路跡南辺の西端近くおよび中央付近で比較的まとまった土器と木質が検出された。木質はほぼ加工痕の見られない流木と思われるもので、その一部が焼け焦げたものもあった。土器は多くが割れた状態であったが、中央付近では須恵器杯蓋が置かれたかのような状態で出土した。また、流路跡南側は礫を多く含む土質であったが、この地山に張り付くような状態でもかなりの土器を出土している。

6・18・20・23・37・38が上層、4・7・10・19・21・24・30・32・36が下層、9・12が地山上、そしてほかの土器の殆どが砂層中から出土したものである。

須恵器（図版22、第21図1～第22図28）

1～3は杯蓋で、1はこのグリッドの中央付近に置かれたような状態で出土したもので完存する。天井部は低平で、口縁部との境は丸みをもって移行し、端部は垂直に接地する。端部付近も細部に鋭さは見えず、丸く作られる。胎土・作りともに特に精良なものではない。2も同様の形態となるも

の。3は焼成時に膨れて形状が変形する。烏嘴状の口端部は上面が水平となるように屈曲する。

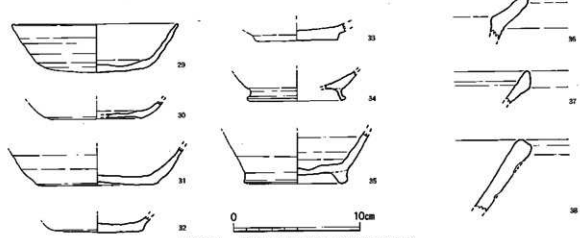
4は無高台の杯身で、底部の1/4が残存するが口縁部は殆どを欠く。焼成甘く、淡灰色となり器表が荒れている。

5～14は高台付杯。5は体部の立ち上がりが急角度となり、口縁部が小さく外反する。口縁部の一部が片口状に焼け歪む。6は底部・体部ともに器肉が厚い。体部から口縁部にかけては連続して緩く内彎し、口端部から外底面まで厚く灰を被る。7は体部が直線的に開いて口縁部が小さく外反し、内外面にヨコナデによる凹凸が著しい。外底面はヘラキリの後に丁寧に撫で消され、爪痕と思われる痕跡がある。底部は完存。8も底部が完存し、体部の立ち上がり角度がやや大きくなるものの7に似た形態となる。これも外面は小さな凹凸が顕著であるが、内面はヨコナデを施して平滑にする。外底面はヘラキリのままで終わり、浅く細い沈線で×状のヘラ記号を刻む。9は体部が内彎し、口縁部が小さく外反するもので、胎土精良で作りも丁寧である。10は高台から体部の外面が淡灰色、底部内外面が淡灰赤褐色となる焼成不良の上器で、外底面は丁寧にヘラキリを行って終わる。11も淡灰色～灰黄色に発色する焼成不良の土器で器表が荒れている。12は外底面を丁寧にヘラケズリする。13は器壁が薄いもので、体部内外面に凹凸が目立つ。高台はシャープに整形され、外底面はヘラキリのままである。14は胎土精良で丁寧に作られた土器で、外底面も丁寧にヘラキリを行う。高台は形状が崩れて断面が逆台形に近い形となる。

15～17はいずれも底部から体部にかけて丸みをもって移行し、口縁部が内彎気味に直線的に開く皿。15は口縁部の1/4が残存し、胎土・作りともに良好である。外底面はヘラキリの後に撫で消すようである。16は底部が完存する焼成不良の土器。底部が肉厚となり、外底面はヘラキリの後に撫で消す。17は底部の3/4が残存する。この外底面はヘラキリのままで終わる。

18は大型の高杯で図示部が完存する。シボリ痕が見える。

19は口縁部が受け口となる長頸壺で、胎土精良、丁寧に作られた土器である。内面全体が灰を被る。20は小型壺の肉厚となる底部で、これも丁寧に作られる。21は体部が寸胴形となる壺。体部内面下端付近にユビナデ痕が顕著で、外面で撫でて仕上げるようである。作りが雑である。22は縦位に環状取っ手を一対付す壺で、外面は全体にヘラケズリを行うようである。23はやはり縦位に扁



第22図　1G区出土土器実測図2（1/3）

平な板状の取っ手を付すもので、孔は残らない。24は壺の底部で図示部の2/3が残存する。断面方形に近いしっかりした高台が底部外周に配され、体部は比較的膨らみをもつ。体部外面の下端付近はヘラケズリのままであるが、大部分はその後に粗雑に撫でるようである。外底面はユビオサエなどが見えるがケズリの痕跡は見えない。25は甑の口縁部小片。体部から口縁部にかけて垂直に近く直線的に立ち上がり、口縁部外面に小振りの断面三角突帯を巡らせる。また、口端部には小さな凹面を作っている。胎土精良で丁寧に作られた土器である。26・27は甕。26は復原実測したもので、実際は大きく焼け歪んでいる。口縁部内面には小さな黛七が付着し、体部内外面は高温による膨れ・弾けが多く見られ実用に供されたものか疑問がある。27も肩部付近に厚く灰を被る。口端部は小さな外形する面をもつ。

28は壺であろうか。器形が判然としないのでここに配置した。これも外面に灰被りが著しい。

土師器（図版22、第22図29～36）

29～32は無高台の杯身。29は底部の1/2が残存し、底部・体部間は丸みをもつ。ヨコナデを多用し、外底面はヘラキリ後に丁寧な撫でを行う。口縁部付近の内外が黒褐色、外面ではその下位に灰黄色帯があり、さらに底部にかけては黒色となる。内面には灰黄色帯が見られず、黒色となる。30は図示部が1/3残存する。底部はやや上げ底状となって体部との境は明瞭であるが、ヘラキリは体部下端から行っている。胎土精良で作りも丁寧である。灰黄褐色を呈し、外底面に黒斑が見られる。31は図示部の1/2が残存し、底部・体部の境は比較的明瞭である。底部内面には指頭痕が見え、外面は丁寧にヘラキリを行う。全体が灰黒色となっている。32は底部が完存し、体部への移行は実測図以上にやや丸みをもつ。全体に灰黒色を呈するが部分的に黄白色となり、器表が荒れる。

33は椀であろうか。平高台を有し、外底面は丁寧にヘラキリがなされている。全体に黄白色となり、器表が荒れている。

34は華奢でシャープな高台をもつもので、器表が荒れているが胎土・作りなど丁寧になされる。35は体部が角度をもって直線的に立ち上がるもので、高台が大きくなっている。灰赤色となる。

36は甕口縁部の小片で、口端部は丸く終わる。胎土は粗く、茶褐色を呈する。

瓦器（第22図37・38）

37は摺鉢の口縁部小片で、器表が荒れている。口縁部外面が暗灰色、ほかの部位は灰黄色となる。38も摺鉢の小片で、これは口端部を小さく肥厚させて端部にわずかな凹面を作るのみである。胎土は精良であるが器表が荒れ、灰黄色～淡灰赤色となる。

1H区（図版9）

1G区の西、1D区の南に位置する。ここでは流路跡と呼称してきたものと別個の溝状遺構をその南で検出している。この溝状遺構は狭い調査区内で幅2～4.5mと平面規模が一定せず、深さは0.1m強とごく浅いもので、砂層を主たる埋土としていた。この調査区東畦に上層観察用のサブトレンチを設定したものの、1G区の面で用が足りると安心して詳細な観察を行わなかったが、先の1F区で3層に切り込む砂層が相当するものであろう。この谷状の地形の中で最後まで流れを保った流路であったと思われる。

出土遺物

図示した遺物のうち、7が溝状遺構、14・17・18が流路跡上層、その他が同下層から出土したものである。

須恵器（第23図1～11）

1は口端部とつまみを欠失する杯蓋で、天井部は平坦となる。同外面は比較的丁寧に撫でて仕上げ、全体が淡灰色を呈する中で口縁部上面だけが黒色化する。

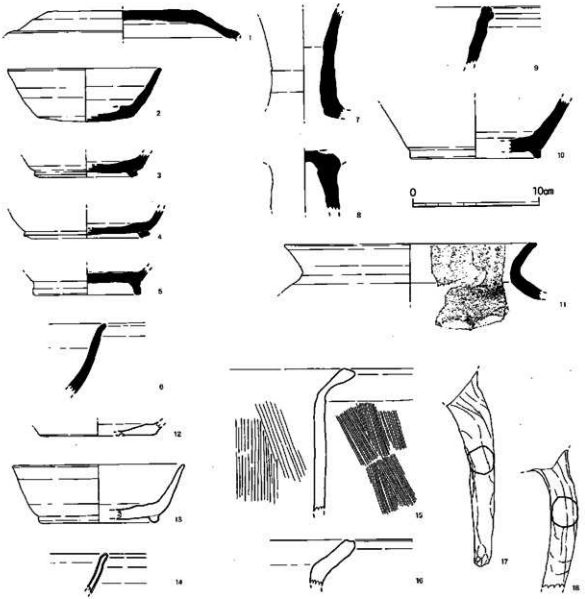
2は無高台の杯身で、丸みをもつ底部から明瞭な境をもたずに直線的に開く体部へ続き、口縁部はわずかに外反する。全体に丁寧に作られ、底部外面はナデで仕上げる。内面には焼成時に弾けた部分があり、口端部付近の内面から口縁部外面にかけて黒色化する。

3･4は外方へ開く低い高台をもつ杯身。3は焼成が甘く器表が荒れる。4は外底面にいたるまで全体に灰を被り、内面は丁寧に撫でられている。高台の作りはシャープ。5は底部が完存する。高台が高く、外底面は丁寧にヘラキリを行っている。6は弱く内彎する体部と小さく外反する口縁部をもつ小片。胎土や作りは良好で、外面に灰を被る。

7は長頸壺と思われるもので、中位に甘い1条の凹線が刻まれる。焼成甘く器表が荒れている。

10は壺の底部であろう。高台は底部外周に付され、ほぼ直に接地する。底部･体部は器肉が厚く、全体を丁寧に撫でて仕上げる。

8は高杯で、これも焼成が甘く器表がとても荒れている。



第23図　1H区出土土器実測図（1/3）

9は甑の小片。頸きには不安があるが、体部から口縁部まで直線的に連続する形態はほかの多くと共通する。口端部に面をもち、外面に断面台形の突帯を巡らせる。胎土は精良で、調整も丁寧になされている。

11は甕で、装飾はないが口端部を水平な面とする。口縁部内面から体部外面にかけて灰を被るとともに口端部外面が弾け、肩部付近が膨らむなどとても荒れている。

土師器（第23図12・13・15・16）

12は体部が稜線をもって立ち上がる杯身で、器表・器肉ともに黒色を呈し、器表が荒れている。

13は須恵器と同様の技法で作られているが酸化炎焼成されて灰赤褐色を呈する。焼成不良というわけではない。全体に丁寧に撫でられ、外底面には2条の弱いヘラ記号（×か？）の一端がわずかに見える。

15・16は土師器甕。15はほかの多くと異なり、器肉が薄く、口端部が極度に肥厚している。器表は灰褐色～灰黄褐色を呈するが、器肉は黒色となり、口縁部上端にいたるまで外面には煤が付着する。体部内面には粗い条線が見えるが、通常のハケメではなくあるいは貝殻条痕であるかも知れない。16は肉厚で口縁部が内彎して開く、類例の多い形態である。口端部を凹面とする。

瓦器（第23図17・18）

鍋・釜の足で、17は器表が灰黒色、器肉が灰赤褐色、18は器表は黒色、器肉が灰白色となる。いずれも内側に相当する部位に熱を受けた痕跡が認められる。

磁器（第23図14）

無文の白磁椀小片。体部は内彎し、口縁部は緩やかに小さく外彎する。釉は灰黄色に近く発色する透明釉である。

１Ｉ区（図版10～13、第24・25図）

東西を２Ｏ区・１Ｊ区に挟まれ、北は１Ｅ区に接する位置にある。調査区南は発掘区から３～６mの距離に用水路があり、その南に接して宅地の擁壁が築かれる。この宅地を含む遺跡南側の宅地擁壁が形成するラインは用水路に沿うとともに、調査で検出した流路跡の南辺にもほぼ合致していることから、用水路が地形の変換点に配されていたことが予想される。

このグリッドも西畦で土層図を作成している（第10図）。ここの堆積は単純で、流路跡の基本的堆積層である2・3層の下位に砂礫層・黒色土層が形成されている。後述する出土遺物の多くは砂層中で検出したものであり、遺物が遺棄された時点ではこの流路は礫層が露出していた状態であったと推測される。また、ここで多く出土した木製遺物は１Ｇ区の4層に対応するものと思われるが、確認できていない。

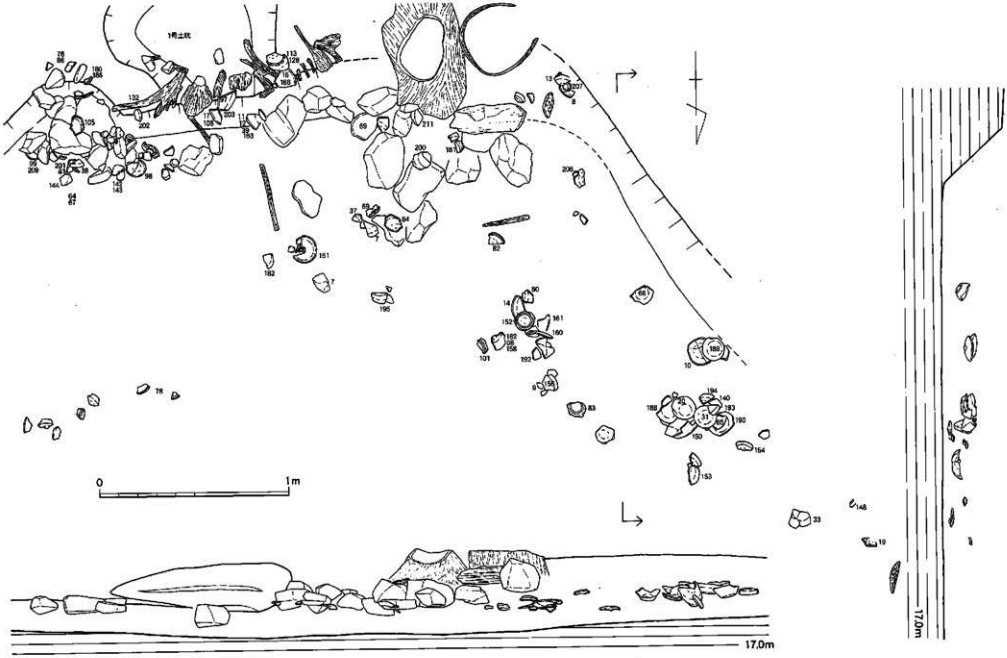
いずれにしても、このグリッド内には第一次調査で唯一とも言ってよい土坑2基が検出され、かつ多くの土器、桃や松の種子・木製遺物や焼土を出土したことなどから本遺跡内で重要な意味を持っていたものと思われる。このグリッドも当初は10mで設定していたが、土坑を検出したことや遺物量が非常に多いことから南へ拡張し、これを「１Ｉ拡張区」として登録している。

出土遺物

大量の遺物が出土しており、図示した点数も多い。以下では器種ごとに出土層位の概略を記す。

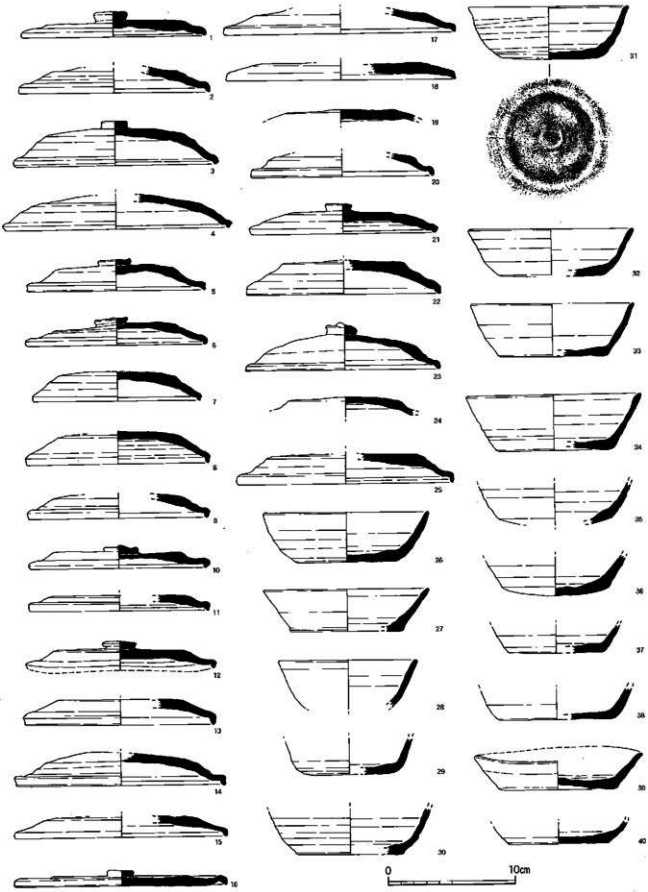
須恵器（図版22～26，第26～31図）

杯蓋（1～25）　1～4が上層、5・6が下層、7～19が砂層、20～25が地山上からそれぞれ出土し



第24図　１Ｉ区南西部遺物出土状態実測図（1/20）

第25図　1Ⅰ区南東部遺物出土状態実測図（1/20）



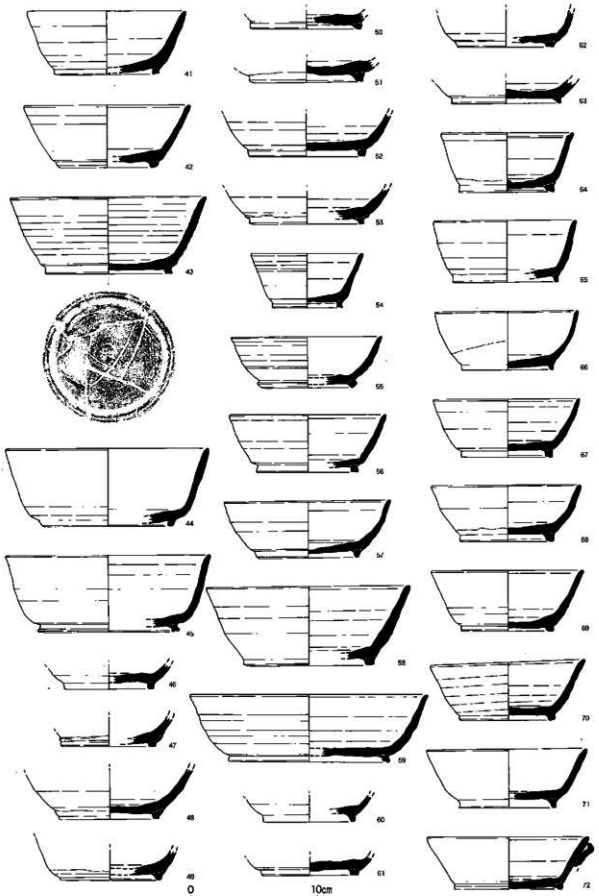
第26図　1Ⅰ区出土土器実測図1（1/3）

たものである。1は天井部が低く、反転して口縁部へ続くがその端部は小さく摘み出したようになる。肉厚で、天井部外面はヘラキリの後に撫でるが雑な仕上げである。口縁部上面から天井部内面の半分ほどまでが灰を被る。また、内面中央部付近は磨れるようであり、墨と思われる黒色付着物も見えることから転用硯であったと思われる。2は焼け歪むが、灰被りはさほどでなく口縁部内外面付近が薄く黒変するのみである。天井部外面のヘラキリ痕はナデで消される。3は天井部が丸みをもって比較的高くなるもので、口縁部は鳥嘴状となるが細部は丸く甘い。天井部外面はヘラキリ痕を撫で消し、内面には仕上げナデが見える。これも口縁部上面から天井部内面の半分ほどが灰を被る。4も天井部が丸みをもつもので、口縁部は小さく屈曲して鳥嘴状となり、その外面のみが黒変する。これも天井部外面はヘラキリ痕を撫で消すが、同内面は全面をヨコナデで仕上げる。

5・6は天井部が扁平で、口縁部が大きく反転して端部を鳥嘴状とするよく似た形態となるが、5は端部を鋭く作り、6は丸く収めている。いずれも天井部外面を雑なヘラキリで処理し、それ以外の部分は全体を丁寧なヨコナデで仕上げるが、6では口縁部内外面が黒変し、内面中央付近には墨と思われる黒色付着物が残り、部分的に磨れているようで転用硯の可能性がある。

7は完存するがつまみをもたないもので、天井部は比較的高いがやはり頂部は平坦となる。口縁部の反転は小さく、端部は鳥嘴状となって直に踏ん張る。天井部外面はヘラキリ痕を撫で消し、同内面ではごく一部に仕上げナデが施される。また、口縁部付近の内面が灰を被り、口端部外面が黒変する。8もつまみをもたないもので、形態は7に似るが器肉が薄いためにシャープに作られた感がある。この天井部は外面をヘラキリのままで終わり、内面はヨコナデで仕上げる。灰被りの状況も7に似る。9も先の2点に似た法量・器形を有するが、つまみの有無は確認できない。天井部外面はヘラキリのままである。10は低平な天井部をもち、口縁部上面も幅広い平坦面をなす完存に近いもの。口縁部は鳥嘴状となるが、端部は内傾している。天井部外面はヘラキリ痕を撫で消す。焼成が甘く、灰黄色～暗灰黄色となる。11はさらに天井部が低くなり、天井部外面はヘラキリ痕を丁寧に撫で消している。胎土・作りが精良な土器。12は天井部が完存するが、口縁部の大部分を欠く。天井部外面はヘラキリ後に撫で、口縁部外面から天井部内面にかけては丁寧にヨコナデを施す。また、天井部内面には磨られた痕跡は見えないが、墨が付着するようである。13は小片で、口縁部が直線的となってそのまま鳥嘴状の端部に続く。天井部は丁寧にヘラキリがなされる。14は天井部が丸みをもち、短く屈曲して鳥嘴状の口端部へ続くが、端部はシャープに作られている。15は低平な天井部から口縁部へかけて直線的に続き、直立する端部へいたる。これは天井部外面をヘラキリのままで終わり、細部が丸くなる。16は大きく焼け歪むもので、天井部外面はヘラキリのまま、内面は仕上げナデで仕上げる。17も焼け歪んで天井が高くなる。天井部外面はヘラキリ痕を消し、口縁部上面から天井部内面にかけて灰を被る。18は低平な天井部から直線的に口端部にいたり、端面はほぼ垂直となる。天井部外面は丁寧なヘラキリ痕が残り、内面は全体をヨコナデで仕上げる。19はやはり平坦に近い天井部をもつ残片。

20は口縁部が大きく屈曲するもので、鳥嘴状の端部も含めて細部が丸みをもつ。21は器肉が厚く、鳥嘴状の形態を意識した口端部も内面をわずかに窪ませることで表現する。焼成が甘く、灰黄色を某剥とするが、口端部外面のみが黒変する。22は比較的高い天井部が平となり、直線的に口端部へ続く。天井部外面は雑なヘラキリのまま終わり、内面は丁寧にヨコナデ・仕上げナデで調整する。22は天井が高く、丸みをもつように図示するが、焼け歪み・焼け膨れがあって本来の姿を示すものではない。25は天井部が水平となり、口端部付近で屈曲をもつもので、丸みをもって作られた



第27図　1Ⅰ区出土土器実測図2（1/3）

端部は直立する。天井部外面はとても丁寧にヘラキリがなされ、内面には仕上げナデが見える。焼成が甘く、全体に灰白色となるが、口端部上面のみ黒変する。

無高台杯身（26～40）　26～30が上層、31～39が砂層、40が地山上から出土した。

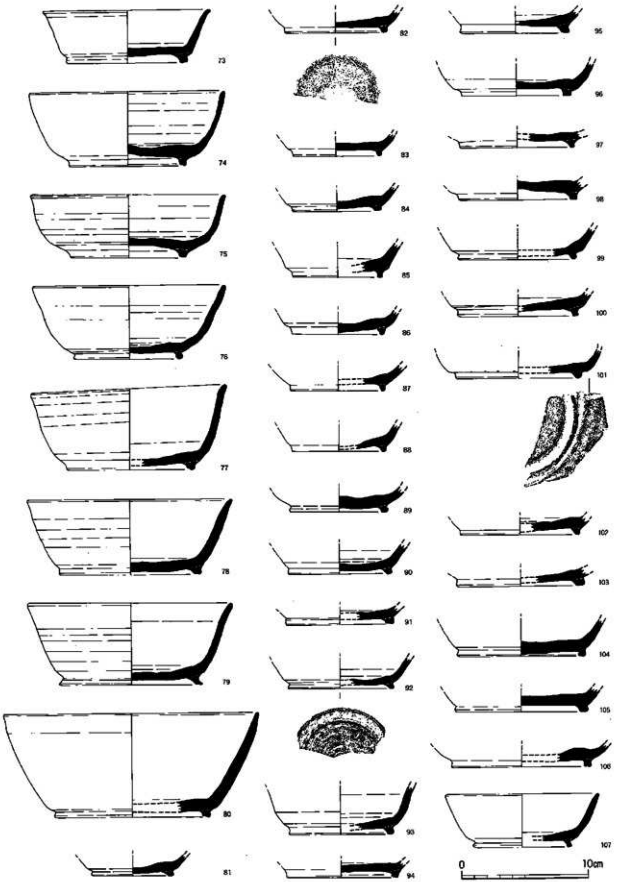
26は底部の1/2が残存するが口縁部の殆どを欠いている。底部は平底で、ヘラキリのままで終わっている。内彎しつつ立ち上がる体部との境は比較的明瞭に区別でき、口縁部は殆ど変化を加えずに終わる。口縁部付近の内外面が灰黄色、その他の部位は灰黒色となり、器表が荒れている。27はより明瞭な平底となる。体部は直線的に開き、口縁部には変化を加えない。口縁部付近の内外が黒変する。28は体部が内彎するもので、口縁部にはやはり変化を加えていない。29は底部・体部界が丸くなるもので、外底面は丁寧にヘラケズリを行う。また、内面全体および体部外面は灰被りが著しい。30は平底の底部から体部が内彎して立ち上がるもので、両者の境は比較的明瞭となる。外底面はヘラキリのままで終わる。

31は完存する。底部・体部の境は丸みをもち、体部は弱く内彎しつつ立ち上がって小さく外反する口縁部へ続く。焼成が甘く、全体に淡灰色～暗灰色、口端部付近の内外は部分的に黄白色となり器表が荒れる。なお、内底面に×状のヘラ記号が見えるが、浅い細線で刻まれている。32は焼成不良で器表が荒れる。底部は丸みをもち、体部下半は内彎、上半は外彎して口縁部へ続く。33・34は明瞭な平底の底部をもつ。33は胎土が粗く、外底面はヘラキリ痕を撫で消す。34は体部下半のヨコナデによる凹凸が顕著で、外底面はヘラキリのまま終わる。35・36は丸底傾向の杯で、35は焼成不良で器表が荒れるが、外面上位に焦げ付きのような痕跡がある。36も器表が荒れる。37は外底面を丁寧にヘラキリして平底化する。38も外底面を丁寧にヘラキリするが、これは体部との境を丸くする。淡灰色～灰黄褐色となる焼成不良の土器。39は大きく焼け歪むが、平底の底部・直線的に立ち上がる体部・小さく外反する口縁部などの特徴は知ることができる。外底面はヘラキリのままで終わり、外面の全面に灰を被る。

40は平底の底部から体部が内彎して立ち上がるもの。焼成が甘く、外面は灰白色、内面は本来灰黒色となっていたようであるが色落ちする。器表も荒れていて調整痕は見えない。

高台付杯身（41～135）　41～53が上層、54～63が下層、64～106が砂層、そして107～135が地山上から出土したものである。

41は体部から口縁部にかけて直線的に延びて肉厚となるもので、底部は完存する。内面は丁寧なヨコナデ、外底面はヘラキリ痕を丁寧に撫で消す。42も体部以上は同様の器形となるが、体部下端に稜をもつ。これも内面はヨコナデ、外底面は丁寧にヘラキリを行う。内面はくすんだ小豆色となる。43は口縁部が小さく外反し、体部内外面に小さな凹凸が顕著である。体部に比して高台は小さい。外底面はヘラキリ後に撫で消し、×状のヘラ記号がある。44・45は高台が底部・体部界より内側に位置し、身の大きさに比して小さい。44は口縁部が直行、外底面に2条の平行線が刻まれる。45の口縁部は小さく外反し、高台は外方に踏ん張るとともにシャープに作られる。46は焼け膨れがあり、外底面はヘラキリ痕を丁寧に撫で消す。47は高台貼り付け痕が明瞭に残り、特に外面は灰被りが顕著である。48は底部から体部へかけて弧を描いて連続的に移行し、外底面はヘラキリのまま終わる。これも内外面に灰を被るとともに高台端部が熔着し、一部欠ける。49は1/2強が残存し、これは外面に灰を被る。50は外底面をヘラキリのままで終わり、内外全面に灰被りが顕著である。51は底部が完存し、外底面をヘラキリのまま、内底面中央付近には仕上げナデが施される。52は1/3の残片で高台断面は整った方形となる。外底面はヘラキリ後に雑に撫で、内底面では仕上げナ

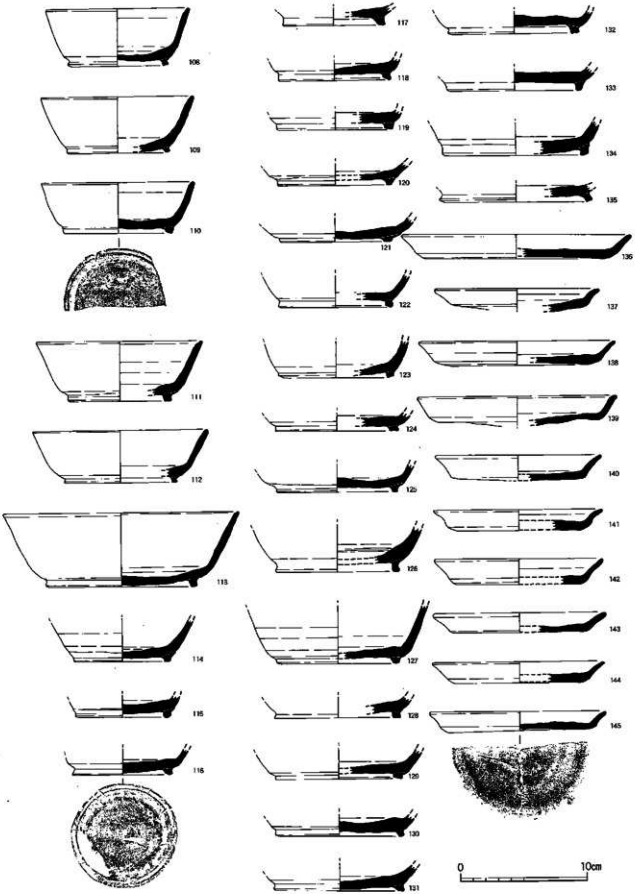


第28図　11区出土土器実測図3（1/3）

デを行う。53は高台接合部の仕上げが雑である。

54は口径8.6cmの小型品で、全体に丁寧に作られる。体部は直立し、口縁部は小さく外反する。体部下端にはやや雑なヘラケズリがなされ、外底面はヘラキリ後に雑に撫で消す。内面に薄く黒色付着物があり、硯として使用された可能性がある。55は体部が内彎し、口縁部がわずかに外反する。小振りの高台は外方に踏ん張り、形状は不整である。外底面はヘラキリ後に丁寧に撫で消す。56は体部が直線的に立ち上がり、下端に明瞭な稜をもつ。外底面は撫で消している。57は体部上半が小さく屈曲し、口縁部は弱く外反する。これも外底面はヘラキリ痕を丁寧に撫で消す。58は体部が直線的となり、口端部内側を撫でて面取風とする。外底面はヘラキリのままで終わる。59は底部の2/3が残存する。体部は弱く内彎し、これも口端部内側を面取風に撫でる。外底面はヘラキリ痕を撫で消し、ほかの部位も丁寧に仕上げられている。60は丁寧に作られているが焼成が甘く、内面はくすんだ小豆色、外面は暗灰色となる1/2の残片。61は高台断面が方形に近く、直に接地するもので、外底面は丁寧にヘラキリを行っている。62は内面および高台底部に熔着が見られ、外底面はヘラキリのままで終わる。63は断面三角形となる高台が付き、外底面はヘラキリ後に撫でている。

64は内傾する面をもつ低い高台となり、体部は緩く内彎、口縁部も内傾する面を作る。外底面はヘラキリのまま終わり、体部外面には濃緑色自然釉が付着する。65は体部が直線的に立ち上がって口端部もそのまま終わる。外面に径1cmの石英が見えるが、全体に仕上げは丁寧である。なお、内底面には仕上げナデが見える。66は体部が内彎し、直口縁となる。器肉が薄く、高台も華奢でシャープに作られる。外底面は丁寧にヘラキリされ、体部下半には斜めに粘土紐巻き上げ痕と思われる筋が見える。67は体部から口縁部にかけてほぼ直線的となる。酸化炎焼成されて全体に灰黄褐色となり、口端部の一部が黒変する。外底面はヘラキリ後に撫で消している。68は体部下半が直線的に開き、上半はわずかに外彎して開く。高台貼り付け部の仕上げが雑で、外底面は粗いヘラキリの後に撫で消している。69は体部から口縁部にかけて直線的に開く。外底面はヘラキリ後に撫で消すが、その際に爪痕と思われる圧痕が残される。70は完存する。同様の器形・調整であるが、これは外面に薄く灰を被り、体部下端付近に窯土小片が熔着している。71も同様の器形で、これは外底面をヘラキリのまま終わる。72も体部から口縁部にかけて直線的となるが、口端部内面を面取風に強く撫でる。体部外面は灰を被って黒色化し、図のように杯蓋片が熔着する。73は体部が直線的に開き、口縁部が短く強く外反する。調整は丁寧で、内底面は仕上げナデが顕著、外底面はヘラキリのままである。また、外面全体に灰を被り、内面では黒色粒が溶けている。74は底部が完存するもので、体部下半が内彎し、口縁部がほぼ直立する。外底面は丁寧なヘラキリがなされる。75もよく似た形状であるが、これは口縁部がわずかに外反する。底部内面は仕上げナデ、外面はヘラキリ痕を撫で消す。76は体部下半の内彎が弱く、上半が直線的に開く。体部内面はヨコナデによる凹凸が目立ち、外底面には丁寧なヘラキリ痕が残る。77も体部下半の内彎が弱く、急な角度で立ち上がって弱く外反する口縁部へ続く。外底面から体部外面に欠けて一部に墨あるいは煤のような黒色付着物が見える。焼成が甘く、内面は小豆色に近く発色する。78は体部下半が直線的に開き、外反する口縁部へ続く。外底面は丁寧なヘラキリのまま終わる。なお、焼成時に混入物が燃えたものか、底部に一辺長5～10mmの三角形に近い穴があいている。79も同様の器形を呈するが、口縁部の外反が大きい。高台は体部に比して華奢で外方に踏ん張る。底部内外面に煤あるいは墨のような黒色付着物が残る。80は底部の1/3が残存し、口径は20cmを測る。これも体部に比して高台が低く小さい。体部外面は淡灰色、底部内外面は灰黄褐色を呈する。外底面は丁寧なヘラキリで終わる。81は外底面



第29図　1Ⅰ区出土土器実測図4 (1/3)

をヘラキリのまま終わる。82は内面全体をヨコナデ、外底面は丁寧にヘラキリを行うが、図示したように高台に近い位置に爪痕のような浅い弧線が連続的に残っている。83～88・90は外底面をヘラキリのままで終わるもの。85は体部下端に稜をもち、内外全面に灰を被る。87は体部下端付近が灰被りとなる。84は内底面に仕上げナデが見え、ほかはヨコナデで仕上げている。89は底部外面のヘラキリ痕を撫で消し、内面は仕上げナデで処理する。92は外底面にヘラキリ痕を残し、繊細な1条のヘラ記号を刻む。ほかの部位はヨコナデで終わる。93は底部内面に仕上げナデが残り、外面は撫でるよう。94は焼きが甘く器表が荒れるが、外底面は丁寧にヘラキリを行う。95は胎土が粗いが、調整は丁寧になされる。96は底部内面のほぼ全面を仕上げナデで処理し、外面は丁寧にヘラケズリを行った後に撫で消す。体部下端の一部が灰を被る。97の外底面はヘラキリのままである。98も完存する底部。内面は大部分を仕上げナデ、外面はヘラキリ後に撫でている。外面は灰が飛んでいて、高台端部も一部が熔着・剥離する。99の内面には仕上げナデが残る。100は焼成が甘く器表が荒れているが、外底面は丁寧にヘラキリを行っている。101は底部内面をヨコナデ、外面も撫でるようである。ここでは高台の外側に接するように、また内側では高台下に潜り込むようにシャープな爪痕が連続的に刻まれている。82に示したものと位置は異なるがいずれも高台に近接していることから高台の接合・成形時に刻まれたものであろう。102は焼きが甘く器表が荒れるが、外底面に1条のヘラ描沈線の一部が残る。103は外底面のヘラキリ痕を丁寧に撫で消す。104は底部内面を仕上げナデ、外面はヘラキリのままで終わる。体部外面は灰被りにより黒色化する。105は生焼けで灰黄色～淡灰色となる。106は内面に焼き膨れがあるために図では厚くなっている。外底面はヘラキリのままである。

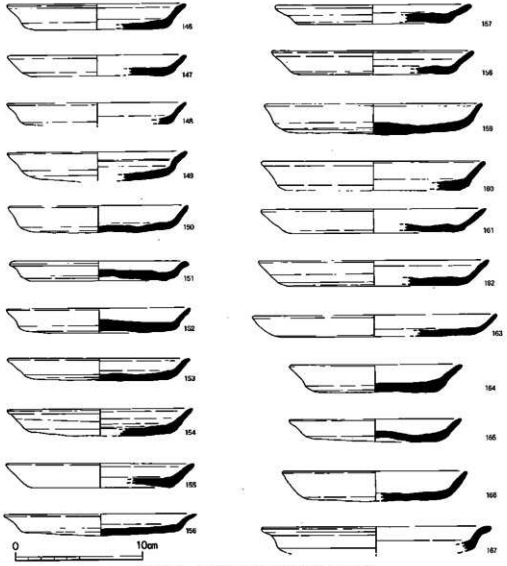
107は華奢な高台をもち、体部から口縁部にかけて直線的に開いて口端部は薄くなって終わる。外面は灰が飛んで明灰色～灰白色となる。108は口縁部が小さく外反するもので、これも内底面から体部外面にかけて濃灰緑色釉が掛かる。外底面はヘラキリのままで、窯土の細片が付着する。109も体部から口縁部にかけて直線的に開くもので、焼成時の高熱によって器表が発泡したように荒れている。外底面は丁寧にヘラキリ痕を消す。110は体部下半が弱く内彎、上半が弱く外反する。外底面はヘラキリ痕を撫で消し、間隔が広い2条の細線が刻まれる。また、体部および高台の外面が黒色化する。111は体部・口縁部が直線的となり、口端部内面を小さく窪ませる。112は華奢な高台を付し、体部下半が丸みをもつが以上は直線的となる。これは小片のため復原径に不安がある。113は体部下端付近が弧を描くが以上は直線的となり、口端部内面に面取を施す。焼成が甘く器肉を含めて全面が灰白色となる。外底面はとても丁寧にヘラキリを行っている。114は外形線が体部から高台まで直線的となるもので、高台貼り付け部は仕上げが雑である。底部外面は丁寧にヘラキリを行い、内面は全面に墨と思われる付着物がある。磨った痕跡は認められないが硯として使用されたようである。115は底部内面がヨコナデ、外面がヘラキリのまま終わるがいずれも丁寧になされている。内外面に灰を被る。116は底部内面をヨコナデ、外面はヘラキリ痕を丁寧に撫で消して3条のヘラ描沈線を刻む。117は外面に灰被りが著しく、焼け歪む。118は底部内面をヨコナデ、外面は丁寧にヘラキリを行う。119は器表が荒れていて細部不明。120は高台貼り付け部の仕上げが雑で、外底面は丁寧にヘラキリを行う。121は低い高台をもち、内面は仕上げナデ、外面はヘラキリ痕を消している。122は丁寧に調整するようだが、砂粒が器表に多く浮く。123は外面に厚く灰を被るが、外底面に灰被りの内部分が円形にあって重ね焼きの痕跡を示す。126は内面に底部・体部の境がなく連続的に立ち上がるもので、高台の形状もほかの多くと異なる。127は底部内面をヨコ

ナデ、外面を丁寧なヘラキリで仕上げるもので、高台内に爪痕状の痕跡がある。128・129も外底面はヘラキリのままである。129は内面に仕上げナデが見える。130は底部内面の大部分を仕上げナデ、外面ではヘラキリ痕を撫で消し、高台に近い部分に爪痕状の圧痕が残る。131は外底面及び体部下端にも墨のような黒色付着物が見えるが、磨った痕跡はない。132～135はいずれも外底面を丁寧にヘラキリしている。

皿（136～167）　136は上層、137～139が下層、140～163が砂層、164～167が地山上から出土したものである。

136は口縁部の1/3の残片で、口縁部はわずかに内彎する。底部は内面中央付近が仕上げナデ、外面ではヘラキリ後に雑なナデを行う。

137は底部が丸みをもち、口縁部が強く外彎する。底部は内面がよく磨られていて墨も付着する。外面はヘラキリのままで終わっているが、ここも部分的に磨ったような痕跡がある。口縁部内面と外面の上半に灰を被る。138は口縁部がほぼ直行して端部をわずかに外反させるもので、焼成が甘く器肉がくすんだ小豆色となる。外底面はヘラケズリのままで終わる。139は口縁部が直行し、端部が肉厚となる。外底面は中央付近をヘラキリのまま、外周ではその上を撫で消す。140は底部が



第30図　1Ⅰ区出土土器実測図5（1/3）

平底となり、口縁部は明瞭な稜をもって外反する。底部は内面を仕上げナデ、外面は丁寧なヘラキリを行う。141は口縁部が折れるように強く外反する。底部は焼け膨れのために厚く図示しており、外面はヘラキリのままで終わる。142は口縁部の外反の度合いが異なるが、調整等は141と同様である。144は口端部から内面にかけて灰を被り、小片のため復原口径に不安がある。145は丁寧に作られた土器で、外面に×状のヘラ記号がある。この2点はいずれも外底面をヘラキリのままで終わっている。146は底部が平底をなし、口縁部が外反する。特に端部内面は弱い稜を作っている。底部内面は丁寧なヨコナデ、外面はヘラキリのままで終わり、口端部外面に灰を被る。147は口縁部が直行するもので、底部内面は仕上げナデ、外面はヘラキリの後に部分的に撫で消すようである。148は器肉が薄く口縁部が外彎する小片で、内底面に仕上げナデを施す。149は底部が丸みをもち、口縁部が強く外彎する。口縁部内面に見える沈線は意図したものか判然としない。底部は内面を仕上げナデ、外面を丁寧にヘラキリしている。150の口縁部はほぼ直行するが、下半部外面はわずかに窪む。151はほぼ完存する。口縁部が強く外彎し、端部は肥厚して断面方形となり、外面の一部が黒色化する。152は口縁部が外反して薄く終わる。153も口縁部が外反するもので、これら4点の外底面はヘラキリのままである。155は体部が直線的に開き、外底面の中央付近がヘラキリのままで終わり、外周はヨコナデを施す。156は口縁部が外反して薄く終わる。157の口縁部も緩く外彎するが、これは器肉が厚く口端部付近が肥厚する。158は口縁部がやはり緩く外彎し、端部内面を面取している。159は底部・体部界が丸くなり、緩く外彎する口縁部へ続く。底部内面は仕上げナデ、外面はヘラキリのままで終わる。内底面外周付近から口縁部下端まで灰を被るとともに、内面に窯土粒が付着し、外面では一部が大きく剥離している。160は口縁部が緩く外反し、その内外面が灰を被って黒色化する。この外底面はヘラキリ後に撫でている。161は口縁部下端が小さく内彎し、上半が直行する。162は口縁部が緩く外反し、内面に肥厚する部分がある。163は口縁部が緩く内彎するもので、内底面外周から口縁部下端にかけて灰を被る。この2点は底部内面を仕上げナデ、外面はヘラキリのままで終わる。

164は口縁部が外反するが器肉が厚いために鈍重な感がある。底部内外面が幾分磨れるような感があり、外面では墨が付着しているようにも見える。165もよく似た器形であるが器肉が薄い。外底面はヘラキリのままである。166は外底面外周から内底面にかけて薄く灰を被る。この2点も外底面はヘラキリのままで終わる。167は口縁部が強く外反するもので、底部との境には明瞭な稜がある。その稜以上および内面が灰を被って黒色となる。

高杯（168～173）　170が西畦、168・169・171が下層、172が砂層、173が地山上からの出土である。

168は口縁部が外反するもので、端部は薄くなって終わる。全体を丁寧なヨコナデで仕上げ、灰を被る。169は口縁部が直立し、端部に水平な面をもつもので、胎土精良で作りも丁寧である。170・171は焼成が甘く器表が荒れている。172は胎土精良で、杯底部に高台を乗せて焼いたと思われる痕跡がある。173は焼成が甘く淡灰色となる。また、わずかに残存する杯底面は触るとツルツル感があり、墨は見えないが硯として使用されたのかも知れない。

蓋（174・175）

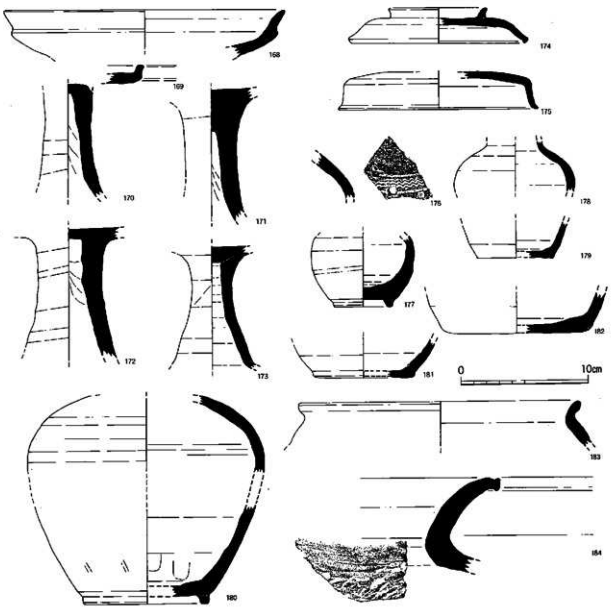
174は下層出土の輪状つまみをもつ蓋で、口縁部・天井部のほぼ1/3が残存する。つまみは断面三角形に近く、杯の高台と同様の形態となる。天井部はほぼ水平となり、丸みをもって直線的な口縁部へ続く。口端部は折り曲げるが、その端部は丸い。天井部は丁寧にヘラキリを行い、ほかの部分

は丁寧にヨコナデを施す。口端部からつまみ外面まで灰を被る。

18は下層出土。天井部はわずかに丸みをもつがほぼ平となり、口縁部は直角に近い角度をもって曲がるが境は丸い。口端部は内傾する面をもち、端部は外方へ鋭く突出している。天井部外面は灰を被って判然としない部分があるが丁寧にヘラキリを行うようである。内面中央付近は仕上げナデを施す。これも丁寧に作られた土器である。

壺（176～180）　183が上層、179・184が拡張区、176～178が地山上から、その他が砂層中から出土した。

176は肩部の小片で、文様帯を区切る2条の沈線の間に櫛描波状文を刻む。拓本の中央部に孔のように見える部分は器表剥離したものである。178は焼成が甘い小型品で、外面は灰黒色となる。高台は形状が不整となり、体部も歪みが見られる。体部中位に浅い凹線が見られるが、これも歪んでいて文様を意識したものか判らない。なお、内底面が黒色となっていて、これも墨によるものかも知れない。178は肩部片で、復原径に不安がある。外面はヨコナデ調整し、灰を被る。179は178



第31図　ⅠⅠ区出土土器実測図6（1/3）

と同一ではないようであるが同形品であろう。丁寧に作られた土器で、底部外面は撫でられる。180は肩部と底部が接合しないが同一個体と思われる。胎土精良で作りも丁寧な壺。外面下半にわずかにタタキの痕跡がみえるが、肩部以下はヘラケズリして後底部外面も撫でられ、ヘラキリの痕跡は見えない。底部外面も丁寧に撫でてヘラキリ痕は見えない。181は高台を付さないが、体部下端を強くヨコナデすることによって高台をもつように見える。外底面はヘラキリの後に雑に撫でている。182は底部・体部界が丸みをもつもので、外底面はヘラキリの後に撫でるようである。

183は口縁部が短く外反する甕で、胎土は精良。残存部は内外を丁寧にヨコナデ調整する。これも小片のため復原口径には不安がある。184は口端部内面を窪ませて変化を付ける。

土師器（図版27、第32図185～211）　197・198は出土層位を特定できないもの、185・187・199・206・209は下層、186・188～196・200～203・207・208・210・211が砂層、204・205が地山上から出土した。

185は1/2が残存し、須恵器の形態を模倣するが細部が甘い。天井部外面に静止ヘラケズリが見えるほかは器表が荒れて調整痕が見えない。口縁部上面が黒色化し、内面は灰黄褐色となる。

186は底部の1/4が残存する高台付杯でこれも器表が荒れている。

187～205は無高台の杯身であるが、中に焼成不良の須恵器とも思われる判断つきかねる個体が多く含まれている。187は丸みをもつ底部から稜をもって体部が直線的に立ち上がり、口端部内側に面取を施す。底部内面はヨコナデ、外面はヘラキリの後に撫で消すようである。口縁部内面から体部外面下半にかけて暗褐色、以下は内面が灰黒色、外面が暗灰色となる。188は同様の形状を呈するが、口縁部を短く強く外反させる。また、底部は肉厚となり、外面をヘラケズリで処理する。内面は底部から体部の一部にかけてが灰黒色、その周囲が灰黄色となり、さらに外側が灰黒色～茶褐色となり、外面では同じく底部から灰黒色、その周囲に幅の狭い灰白色～黄褐色帯、外側が黒色となっている。これらは同心円上に変化するものではなく、また内外面の変色域が対応するものでもない。189は先の2者に比べて体部が角度をもって立ち上がり、口縁部はそのまま薄くなって終わる。底部内面中央が円形に高くなり、強くヨコナデされたものであろう。外面は丁寧にヘラキリを行う。体部外面のほぼ半分および底部内面・体部内面のほぼ半分が黒色となり、その他の部位は黄褐色となる。190は187に器形が似るが、口端部の変化はない。外底面は丁寧にヘラキリを行うようで、口縁部付近内外面および底部付近の内外面が黒色、その間が黄白色となる。191も器形が似ており、底部外面のヘラキリも同様であるが、これは内面に仕上げナデを使用する。口縁部付近の内外が灰黄色、以下の部位は灰黒色となる。192も似た形態となるが、底部がやや肉厚となる。器面調整はほかと同様のようで、内面の口端部付近と外面の体部中位付近に幅数mmの灰白色帯があり、その他の部位は黒色となる。193も同様の土器で、これも灰黒色・灰黄色の部分がある。134は底部が丸みをもち、体部が直行して端部がわずかに外反するもので187・188に似る。器表が荒れて調整痕は判然とせず、内外面は淡灰黄色となる。195は底部が平底、体部は直線的に開いて口縁部はやはり小さく外反する。外底面はヘラキリのままである。口端部内面から体部外面中位にかけて灰色、以下は内面は暗灰色、外面が灰黒色となる。変色部は斜めに走る。195は体部から口縁部にかけて内彎するもので、器肉が厚い。器表が荒れていて、口縁部付近の内外面が灰黄色、それ以下が暗灰色となる。197・198は器肉も含めて全体が黒色となり、器表が荒れている。199は明瞭な平底となり、底部付近の内外面および器肉が黒色、体部が灰黄色～灰白色となる。これも器表が荒れる。200は底部が丸みをもち、残存する外面の上端付近が灰黄色、その他の部位が黒色となる。

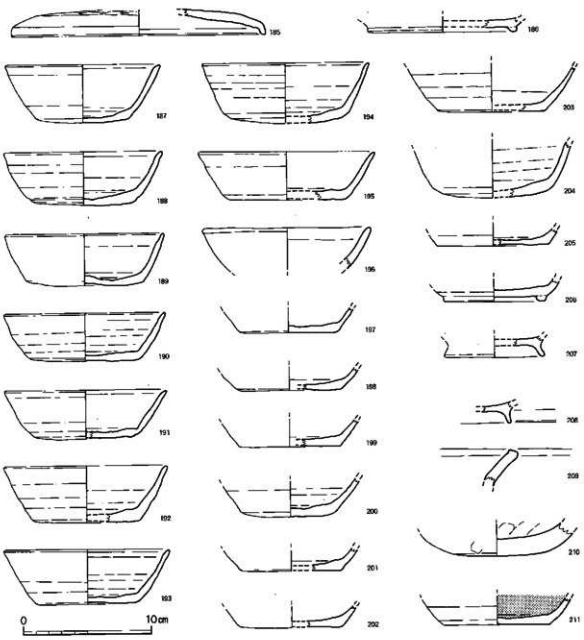
201～203は器表・器肉とも黒色となるもので、203では外底面に丁寧なヘラキリ痕が残る。204は胎土精良で器表が荒れている。外面上端付近が灰黄色、その下位に2cmの幅の灰黄色帯、さらに下位および内面が灰褐色となる。205は明瞭な平底をもつ。外底面にはかすかにヘラキリ痕が見え、器表・器肉ともに灰黒色となる。

206～208は高台をもつもの。206は断面方形に近い高台を付す須恵器と同様の形態となり、酸化炎焼成されて灰黄褐色を呈する。器表は荒れる。207は高い高台をもつ小片で復原径には不安がある。器表が荒れているがあるいは黒色土器であるかも知れない。208も同様の上器。

209は甕の口縁部小片。口端部内面は小さく摘まれ、黄褐色となる。210も甕であろう。肉厚となる底部片で、内面にはユビナデ痕が残り、外面は煤が付着するとともに非常に赤変する。

黒色土器（第32図211）

211は平底をもち、体部が内彎して立ち上がる黒色土器で須恵器・土師器の器形に似る。内面は黒



第32図　1Ⅰ区出土上器実測図7（1/3）

色となり、ヨコナデは見えるがヘラミガキは見えない。外面は黄白色となり、調整痕は見えない。

1Ｊ区（図版13･14）

1Ｉ区の西、1Ｆ区の南に位置する。このあたりは用水路が北へ張り出すためにグリッドとしては狭くなる。この北東隅付近で流路跡の肩が現れ、その深さは0.2m弱を測る。ここからは長さ1.5m、幅0.5mの木材が長軸を流路跡肩に揃えて出土した。この木材自体には焼けたあるいは加工を加えたような痕跡は見られなかった。

また、流路跡の南側で柱穴あるいは小土坑のような落ち込みを発掘したが、積極的に遺構とするには至っていない。

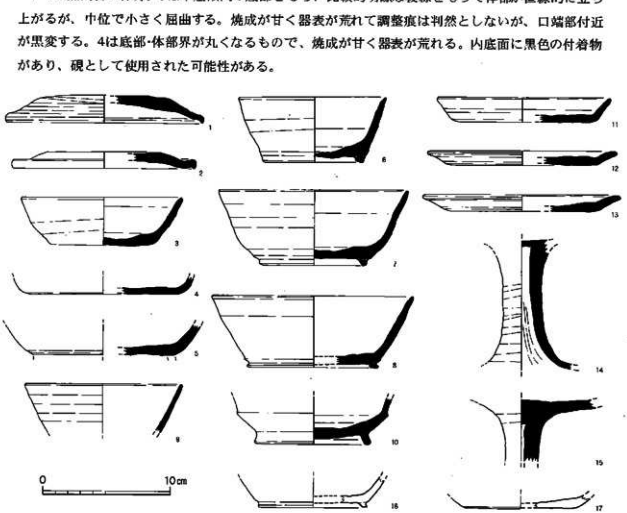
出土遺物

1･15･16が下層、9･13が地山上、その他が砂層から出土した。

須恵器（図版27、第33図1～15）

1･2は杯蓋。1は天井部が水平となり、弱く内彎しつつ鳥嘴状の口端部へ続く。天井部内面には仕上げナデが施される。天井部につまみは残らないが、つまみを囲むような形状で墨書かと思われる圏線が見える（「墨書土器」の項参照）。2は低平な天井をもつもので、口縁部上面が大きく彎曲する。口縁部内面から外面が黒色化、上面から天井部にかけて灰を被り、別個体の土器片が熔着する。

3･4は無高台の杯身。3は平底傾向の底部をもち、比較的明瞭な稜線をもって体部が直線的に立ち上がるが、中位で小さく屈曲する。焼成が甘く器表が荒れて調整痕は判然としないが、口端部付近が黒変する。4は底部･体部界が丸くなるもので、焼成が甘く器表が荒れる。内底面に黒色の付着物があり、硯として使用された可能性がある。



第33図　1Ｊ区出土土器実測図（1/3）

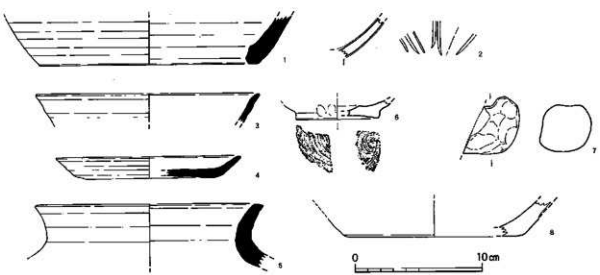
5･6～11は高台付の杯身。5は高台がすべて剥離する。内底面に焼け膨れがあり、黒色粒が溶融することから高温に晒されたようである。6は口縁部の1/4を欠くほかは完存する。高台は底部外周にあって、外形ラインは口端部から連続的となる。体部は微妙な凹凸があるもののほぼ直線といってよく、口縁部はわずかに外反して薄く終わる。外底面にはヘラキリ痕を残す。口端部から高台外面にかけて灰を被って黒色となり、内面および高台内は淡灰色となる。7は体部下半が膨らみをもち、中位付近以上はほぼ直線的に口縁部へ続く。焼成が甘く、器表が荒れている。8は体部が直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。高台は身に比して小さく、貼り付け部の仕上げが雑である。外底面はヘラキリで終わる。9は口端部まで直線的に開くもの。焼成が甘く、口縁部内外面が淡灰色、以下が内外とも黒色となる。10は金属器を模倣したもので、断面長方形の整った高台は高く外方へ踏ん張る。体部下位は内彎して立ち上がり、鋭い稜をもって反転する。大型の砂粒を一部に含むが胎土は概ね精良で、焼成は甘い。体部下半の外面は丁寧なヘラケズリのようで、外底面にはヘラキリ痕が見えず仕上げナデが残る。1/4の残片。

11～13は皿で、いずれも外底面はヘラキリのままで終わる。11は口縁部がわずかに外彎して立ち上がるもので、口端部付近が黒変する。12は口縁部が強く外彎しながら浅く開く。13もよく似た器形で、この2点は同一であるかも知れない。

14は細身の高杯柱状部で、図示部が完存する。外面は丁寧に撫でられる。15も同様の器形で、杯部底面に重ね焼きの痕がある。

土師器（図版27、第33図16･17）

16は須恵器と共通の器形となり、内外面が灰黒色となる。17は体部の開きが浅くなるもので、外底面は丁寧なヘラキリを行う。内面に煤が付着するようである。



第34図　1K･L区出土土器実測図（1/3）

1K・L区

1J区の西、1G・H区の南に位置する狭いグリッドで、発掘した包含層の厚さは最大で0.2mほどである。地形は南に向かって高くなるため、南端近くでは礫を含む黄褐色土の地山が露出していた。地山上には何らの遺構も検出できず、出土遺物も乏しいために両グリッドをまとめて紹介する。

出土遺物（第34図）

1～2は1K区出土、3～8が1L区出土である。

1は須恵器甑片で、これには高台が付かない。桟が取り付く部分、孔の外縁はヘラ状工具を用いて丁寧に穿孔され、面取りされた底部も同様である。また、体部外面もヘラケズリで調整される。

2は龍泉窯系青磁蓮弁文椀の体部片。釉は暗黄緑色に発色する。

3～5は須恵器。3は杯身の口縁部小片で、復原口径には不安がある。口縁部が小さく外反するもので、焼成が甘い。4は口縁部が直線的に開く皿で、外底面はヘラキリ後に撫でられる。これも焼成が甘い。5は口縁部が短く外反する甕で、口端部がわずかに外傾する面をもつ。6は暗褐色～茶褐色となる土師器で、底部は平高台となる。椀であろう。外底面には回転イトキリ痕が残る。8は手捏ねの土師質の取っ手で、太さに比して短い。断面は方形に近く、正面観は三角形に近い。9は土師質の摺鉢であろう。明黄褐色を呈し、器表がとても荒れている。

1区トレンチ

1区を発掘するに当たって堆積状況を把握するために4本のトレンチを設定し、その土層観察によって分層発掘の目安とした。そのトレンチから出土した遺物をここでまとめて紹介する。

1Tr.は東西に開けたトレンチで、グリッドでいえば1A～D区にまたがる。2Tr.は1A・G区の西端、3Tr.は1B・F区西端、4Tr.は1C・G区の西端にそれぞれ位置する。

出土遺物

1Tr.（第35図1～11）

1～5は須恵器。1は体部が直線的に開く杯身で、下端が鋭く屈曲する小片。2は底部が完存する杯身で、小振りの高台が付く。3は高台を有する壺底部で、残存する部位はいずれもヨコナデで調整する。4は高台付の土師器で、図示部は完存。明黄褐色を呈し、器表が荒れる。5は須恵器高杯。

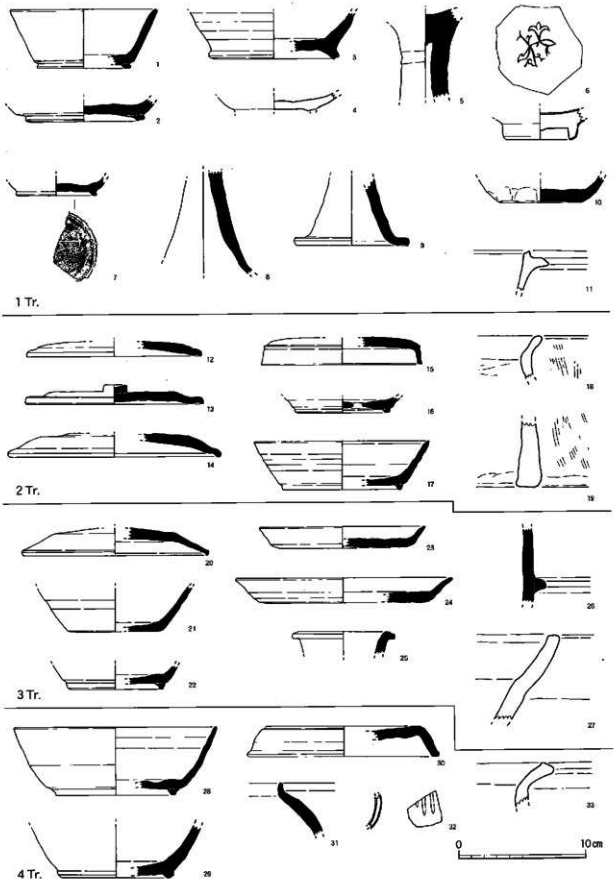
6は見込に印花文をもつ龍泉窯系青磁椀で、釉は淡黄緑色に発色する。

7～10は須恵器。7は華奢な高台をもつ杯身で、外底面に1条のヘラ記号がある。8は図示部が完周する高杯で、外面にはカキメともヨコナデともつかない条痕が横位に走る。9は脚端部が水平に近く外彎し、端部を折り返す。細部の作りはシャープである。10は壺底部であろう。体部は丸みをもち、外底面はヘラキリの後にナデ、体部下端付近はヘラケズリで調整する。

11は土師質の羽釜小片。口縁は小さく、端面が内傾する。反して鍔が大きく、その下面には煤が多く付着する。

2Tr.（図版27、第35図12～19）

12～17は須恵器。12は低平な天井部をもつ杯蓋で、口縁部は萎縮するが烏嘴状の形態をとる。天井部外面はヨコナデ、内面は灰を被る。13も低平な天井部をもつが、口縁部は明瞭に外反、烏嘴状の端部をもつ。天井部外面は灰を被って調整痕は見えない。14は天井部が丸みをもつもので、焼成が甘い。天井部外面にはヘラキリ痕を残し、口縁部上面から内面半ばにかけて黒変する。15は胎



第35図　1区トレンチ等出土土器実測図（1/3）

土精良でとても丁寧に作られた土器。天井部は平坦化するが、口縁部下位はシャープな突帯が巡る。口縁部は直立して端部は凹面をもつ。天井部外面は灰を被って調整痕はよく見えないが、古墳時代中期の須恵器であろう。今回の調査で唯一の破片である。

18は土師器甕の小片で、口端部を含めて内面が黒色化する。19は胎土・作りともにとても雑な土器で、移動式竈の底部であろうか。

3Tr.（図版27、第35図20～27）

20～26は須恵器。20は天井部が比較的高く、華奢な作りの口端部へ直線的に開く。天井部外面はヘラキリ痕を残し、口縁部付近は内外面が灰を被る。21は平底の底部から体部が直線的に立ち上がる杯身で、丁寧に作られている。22は1/3が残存する杯身。外底面はヘラキリ後に撫でている。23は口縁部が外彎気味に開く皿で、外底面はヘラキリのままで終わり、1条の浅いヘラ記号が見える。24も同様の器形の皿。口縁部内面から底部外周付近まで灰を被って灰黒色となり、外底面に熔着痕がある。25は壺小片で、口縁部は外方へ直角に近い角度で折り曲げ、端部は面をもつ。26は甑であろうか。体部に突帯をもつものはこの調査ではほかに出土していない。

27は土師器の鍋小片で、口縁部は外反内彎して長く延びる。外面が赤変する。

4Tr.（図版27、第35図28～33）

28～31は須恵器。28は底部の1/3が残存し、全体が窺える。体部から口縁部にかけてわずかに内彎しながら開くもので、口縁部もそのまま終わる。器肉が薄く、胎土・作りともに良好である。外底面はヘラキリの後にナデ、口端部外面にかけて薄く灰を被る。29は肉厚となる杯身で、淡灰色を呈し、器表が荒れている。30は蓋で、天井部は本来水平に近かったと思われ、口縁部は直角に近く曲がり、端部は外方に摘まれて凹面をもつ。天井部外面はヘラキリのまま終わるようで、外面全体に灰を被る。31は無頸壺小片。外面はカキメともナデともつかない技法で仕上げる。

32は青白磁の小片で、釉は文字通りに美しく発色する。地文は細弁の花文であろう。

33は土師器甕の小片。外面が赤変する。

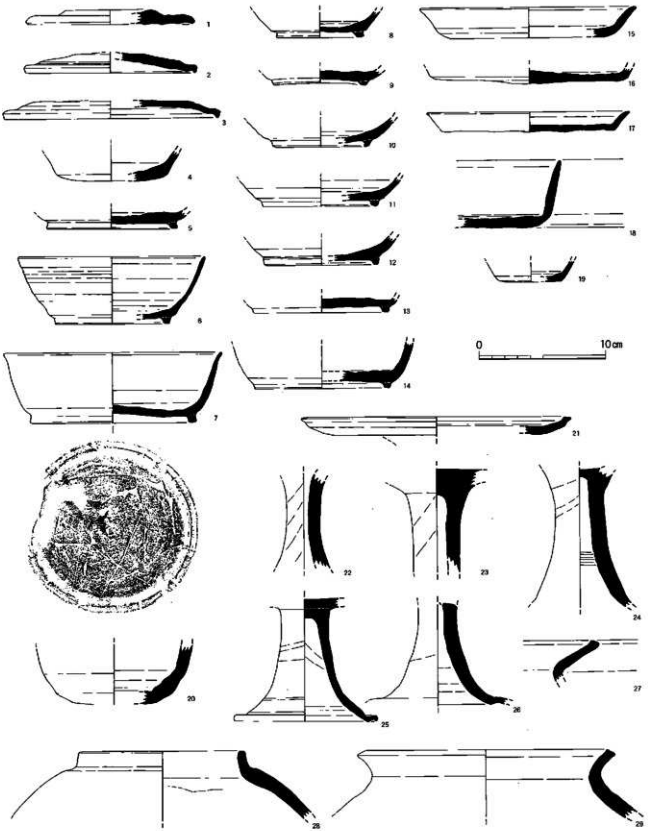
2B区（図版14～16）

第1次調査区最北東部に位置するグリッドである。表土掘削に先立って重機による確認調査を行ったところ、北半では黄褐色～赤褐色の粘質土がすぐに露出したが、中程で落ち込みを確認した。さらにこの落ち込みを重機で掘削し、礫床を確認したことから流路跡との関係をつかむため調査区を順次拡大することとなった。

このグリッドの西および南畦土層図を図示している（第10図）。西畦は流路跡の肩と斜交するため、図示するに留めて説明を省略する。南畦では1区で広く検出された1・2層が確認されたが、3層に相当する土層はない。替わって礫混じりの硬い暗灰褐色土、その下位に礫混じりの暗灰褐色粘質土が堆積していた。この暗灰褐色粘質土は東側で粗砂層に載っているが、その粗砂層の形状は地形測量図に示している。この付近での流路跡の深さは0.7mほどとなり、後述する2H区あたりから急激に深くなっている。こうした地形が自然にできるものか疑問であり、人為的な力が働いている可能性があると考えている。

出土遺物

ここも1区と同様に1層を上層、2層を下層とし、2層の下位も下層としている。1・4・15・16・19・22～24・30・32・33・35・37・39・41が上層、ほかが下層から出土したものである。



第36図　2B区出土土器実測図1（1/3）

須恵器（図版27・28、第36図1～第37図34）

1～3は杯蓋。1は焼け歪んでいるものの、天井部が非常に厚く、内面全体が口端部と同じ高さとなる鈍重なものであるが、口縁部は外面を屈曲させ、あるいは口端部内面を窪ませて一応の形式は踏んでいる。天井部内面は丁寧に撫でている。2も天井部が低く、口縁部が短く屈曲するもので、端部を丸く収める。口端部外面から天井部内面にかけて灰を被る。3も天井部が低平であるが、これは器肉が通常の厚さとなる。口縁部は大きく屈曲し、端部は通有の鳥嘴状となる。これも口端部外面から天井部内面にかけて灰を被る。

4は無高台の杯身で、底部が丸みをもち、体部下半がわずかに内彎する。外底面はヘラキリのままで終わるようで、全体に黒色となるが、外面の残存部上端が一部灰白色となっている。

5～14は高台付杯身。5は1/3の残片で、外底面は丁寧に撫でられている。6も底部の1/3が残存する。体部下端が小さく内彎するが、それ以上はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部にも変化を加えない。器肉が薄く、特に体部外面で小さな凹凸が目立つ。外底面はヘラキリのままで終わる。7は体部の立ち上がりが垂直に近くなり、口縁部が外反するもので、これも器肉が薄い。外底面はヘラキリ後に撫で、細いヘラ記号を刻む。焼成が甘く、胎土も粗い。8は胎土・作りともに丁寧な土器で、外底面はヘラキリのままである。9は低い高台をもつもので、外底面は非常に丁寧にヘラキリされる。焼け歪んでいる。10は1/2が残存し、焼きが甘い。11～13も焼きが甘い。12は外底面を丁寧にヘラキリし、内面は淡灰黒色、外面は灰黒色となる。13は1/2が残存し、底部内面が部分的に滑らかとなるようで硯として使用されたのかも知れない。外面にはヘラキリ痕が見えない。14は外底面を丁寧にヘラキリする1/2の残片。

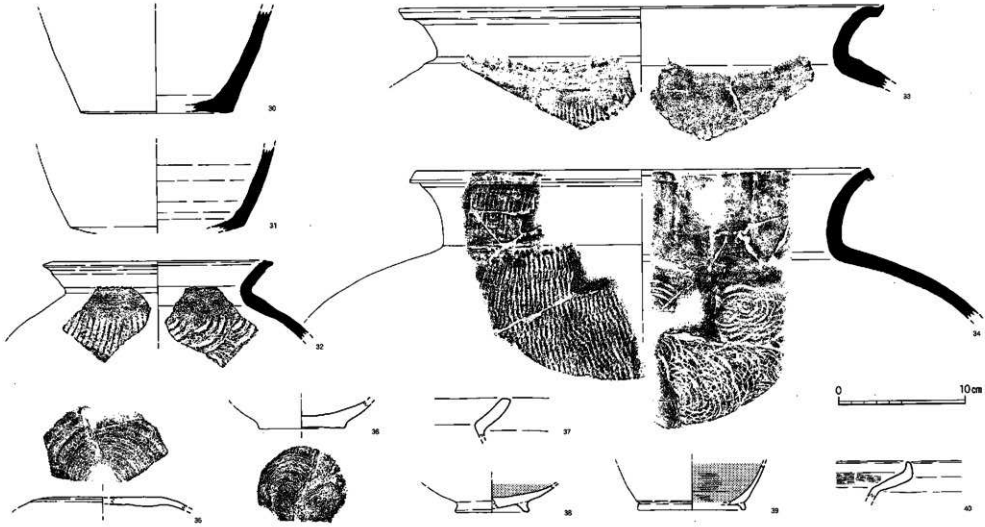
15～17は皿。15は口縁部が緩く外彎する小片。16は底部片で、外面は丁寧にヘラキリを行う。17は口縁部が直行し、端部がわずかに反転して薄く終わる。外底面はヘラキリ後に撫でている。

18は盤の小片。口縁部は直角に近く直線的に立ち上がり、端部は薄くなって終わる。外底面には丁寧なヘラキリ痕が見え、口縁部内面から底部内面外周付近にかけて灰を被る。

19・20・28・30・31は壺であろう。19は小型壺の底部片で、胎土精良で作りも丁寧。底部外面も丁寧にヘラケズリを行う。20は器肉が厚く、図で底部とした部分は円盤で塞ぐようである。横瓶の可能性もある。胎土は精良で、図で底部とした付近はヘラケズリで調整しているかも知れないが主としてヨコナデを用いる。30は残存する体部外面を丁寧にヘラケズリを行う。外底面は撫でて仕上げ、ヘラキリ痕は見えない。31も体部下端は丁寧なヘラケズリで仕上げる。

21～16は高杯。21の杯部は口縁部が屈曲せず非常に浅い器形となる。口端部は水平な面をもち、端部を外方へ摘む。小片であり、復原口径には不安がある。22は細身の柱状部で、シボリ痕が見える。23は器表が荒れるがやはりシボリが見える。29も器表が荒れ、これはシボリ痕も不明瞭なものとなる。30は胎土・作りともに丁寧な土器で、器肉が薄い。脚端部は一旦接地した後に鳥嘴状の端部を付し、細部がシャープに作られる。凹線と断定できるものはない。26も丁寧に作られている。

27・29・32～34は甕。27は小片で、一見土師器の布留式甕を思わせる。内外面が丁寧にヨコナデされ、外面は灰色、内面は灰白色となる。29も小型の甕で、口縁部は短く外反も弱い。口端部には外傾する面を付す32も小型の甕で、直線的に外反する口縁部は端部にわずかに外傾する面をもち、その直下の内外面を強くヨコナデして窪ませる。33は口端部が水平に近く外反し、頂部を摘み出して受け口状とする。34は口端部に外傾する面を付し、その下端を摘み出している。この甕の頸部には薄く平行タタキの痕が残る。



第37図　2B区出土土器実測図2（1/3）

土師器（第37図35～37）

35は天井部の1/4ほどが残存するもので、外面にベンガラと思われる赤色顔料が塗布されている。胎土は特別なものでなく普通であるが、天井部外面は回転ヘラケズリによってイトキリ状の細線が同心円上に残る。内面は非常に丁寧に撫でて仕上げるようである。本来はつまみが付く須恵器蓋と同様の器形をしていたものと思われるが、「酸化炎焼成された須恵器」といったものとは明らかに異なる。36は平高台が付く椀と思われるもので高台にはイトキリ痕が残る。器表が荒れているが、丁寧に作られていて灰黄褐色を呈する。37は口縁部が内彎する甕で、端部に甘い面をもつ。いずれも小片ではあるが、この遺跡で主体的に出土する形態。

黒色土器（第37図38・39）

38は高台が外方へ踏ん張る形の椀で、底部から浅く、曲線的に体部へ移行する。内面はよく黒色化し、外面は黄褐色となるが、調整痕等はよく分からない。39は高台が小さく、体部が急角度をもって立ち上がるもので、内面は黒色化して密なヘラミガキが施されるようである。外面は灰黄褐色～灰赤褐色を呈し、これも丁寧に作られる。

瓦器（第37図40）

口縁部が大きな受け口状となる鍋の小片。内外面はよく黒色化する。

2C区

B区の西に位置するグリッドで、南東部が流路跡に向かってわずかに傾斜し、若干の包含層を残していた。ほかの部分は表土掘削時にすでに地山が露出していた。また、このグリッド内で柱穴状の落ち込みを若干発掘したが、出土遺物も少なく、確実な遺構と断定するに至ってない。

出土遺物

須恵器（第38図1～5・7）

1・2は杯蓋。1は天井部の1/4が残存するが口縁部を欠く。天井部外面は丁寧なヘラキリを行っている。2も同様の形態となるもので、天井部外面はやはりヘラキリのまま終わる。3は杯身の小片。体部から口縁部にかけて直線的となり、端部はやや薄くなる。丁寧に作られている。4は輪状つまみをもつ蓋で、つまみ頂部は面をなす。5は球形の底部片で、外底面はヘラケズリを行うようである。7は甑片で、体部は直立して口縁部付近が小さく外反する。口端部はわずかに窪んで内傾する面を作り、外面には断面台形となる突帯を巡らせる。この突帯は形状がやや歪で、下端部の貼り付けが粗雑に行われている。胎土は精良で、内外面の調整も丁寧なナデで行う。

土師器（第38図6）

甕あるいは鍋の口縁部小片。強く外反する口縁部は上面が窪む形となり、端部上面に小さな面を付す。胎土粗く、焼成も甘い。

2D区

2B区の西に位置する。表土掘削時にほぼ全面に地山土が露出し、包含層を発掘していない。

2E区

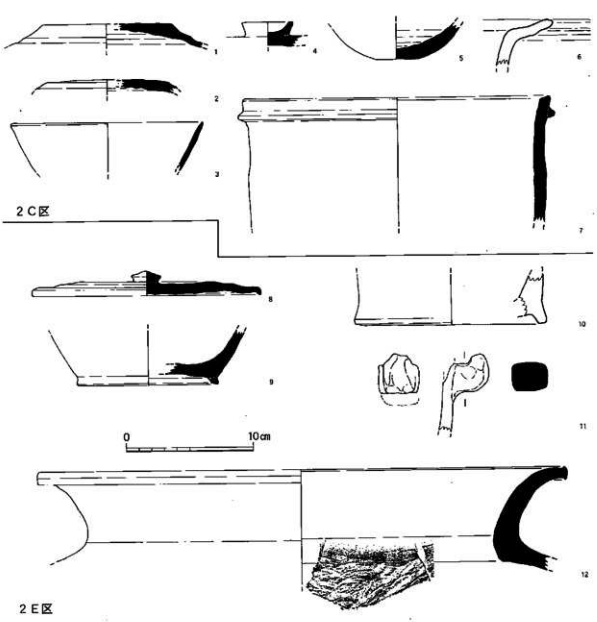
2D区の西に位置し、1A区の東に当たる。ここもほぼ地山が露出していたが、1A区との境界に近い部分に現況の水田境が位置していて、そのために生じた段がある。この段下に若干の包含層が

依存していた。また、畦を除去する際にも遺物が出土している。図示した土器は「北東畦」との注記があるが、このグリッドに「北東畦」は存在せず、「西畦」の間違いではないかと思う。

出土遺物

須恵器（第38図8・9・11・12）

8は杯蓋小片。天井部は非常に低く、天井部内面が殆ど接地する。口縁部の形状は通常の高さのものと同様の形態をとり、口端部は鳥嘴状となって直立する。全体にヨコナデを多用し、口縁部内外面付近が灰を被る。2は1/4が残存する杯身で、底部および体部の器肉が厚い。残存部は全面をヨコナデで仕上げ、ほぼ全面が灰を被る。内面には鎹上の小片が付着する。11は取っ手で、側面観はほぼL字形となり、正面観は頂部の潰れた三角形となる。断面は図に見るように整った長方形である。手捏ねで作られる。



第38図　2C・E区出土土器実測図（1/3）

上師器（第38図10）

10は甑であろう。他で出土する須恵器製品と同様の形態となるようで、高台をもち、桟の一部が残存する。器表が非常に荒れているが、色調は概ね黄褐色を呈し、高台付近の一部が赤変する。

2G区（図版16）

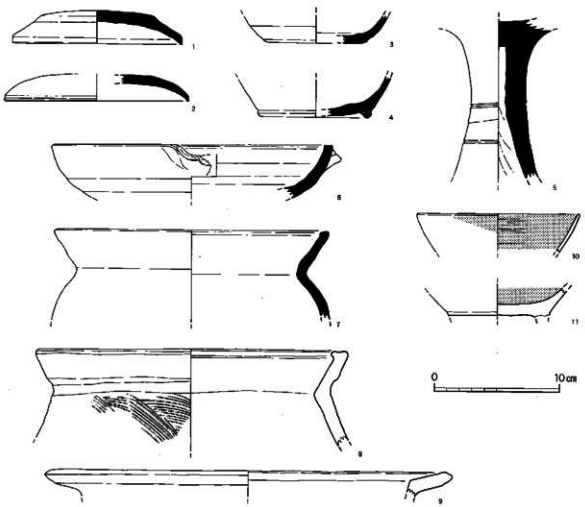
2B区の南に位置するグリッドで、ほぼ全体が流路跡の中となる。東半は発掘を行っていない。

出土遺物

1・4は西畔から、その他が下層から出土した。

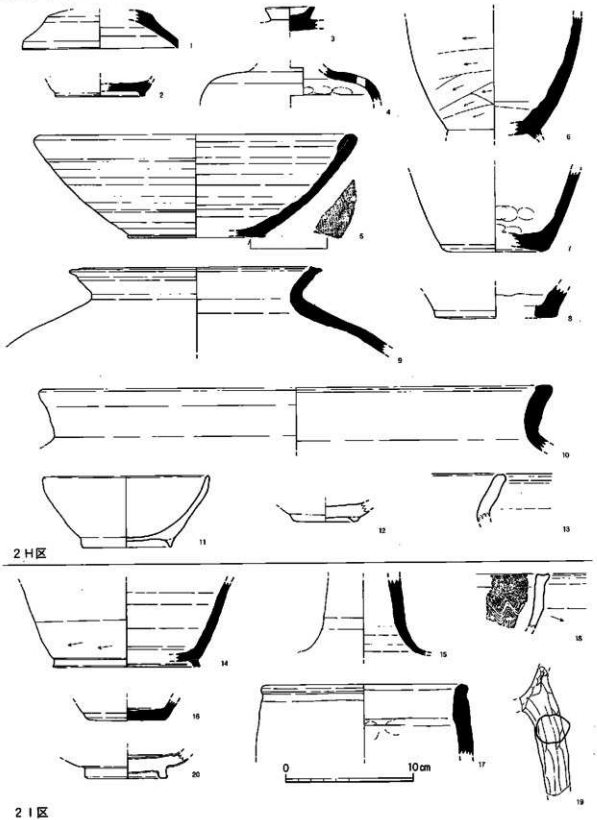
須恵器（第39図1～7）

1・2は杯蓋。1はつまみをもたないもので、わずかに丸みをもつ天井部から小さく屈曲して口端部へ直線的に続く。口端部付近は変化が小さく、内面では鳥嘴状を意識した形状を見せる。天井部はヘラキリのままで終わり、内面はヨコナデの後に1条の仕上げナデを施す。口縁部付近の内面が薄く灰を被り、焼け膨れる部分がある。2は口端部から天井部まで連続的に弧を描くもので、焼成が甘く外面は灰褐色、内面は口縁部付近が淡灰色、その他が淡褐色となる。外面は全体をヘラケズリで調整し、口縁端部のすぐ上に沈線を刻む。内面は丁寧なヨコナデを施す。3は無高台の杯身で底部・体部間は明瞭な稜をもち、体部は内彎しつつ立ち上がる。残存する外面上端の一部が灰白色と



第39図　2G区出土土器実測図（1/3）

なるほかは器表・器肉ともに黒色となる。土師器とすべきであるかも知れない。4は高台付杯で、焼成が甘く器表が荒れている。外底面は丁寧なヘラキリで終わっている。5は高杯で、これも焼成不良で器表が荒れている。2条の沈線が刻まれる。6は片口鉢の小片。体部は浅いようで、口端部は上面を水平な面とし、内側を小さく摘む。全体を主としてヨコナデで仕上げ、内面が薄く灰を被ると



第40図　2H・I区出土土器実測図（1/3）

ともに口縁部外面も黒色化する。ただ、片口部は変色していない。7は焼成が甘い小型薄手の甕で、内面は灰白色、外面は灰黒色となる。胎土は精良で、内外全面を丁寧にヨコナデで仕上げる。

土師器（図版22、第39図8・9）

8は口縁部の立ち上がりが比較的急で、口端部を内側に摘み出して上面に凹面を作る。体部外面には粗いハケメを施す。9は甕口縁部小片。口縁部が浅く開いて端部に面を有して、頸部内面に明瞭な稜をもつ。内面は茶褐色となり、外面は全面に煤が付着する。

黒色土器（第39図10・11）

10は椀あるいは杯の口縁部片で器肉が薄い。口縁部付近の外面と内面がよく黒色化し、胎土精良で作りも丁寧である。体部内面にはヨコナデとするには粗い細条線が見えるが、ヘラミガキ痕ははっきりしない。外面はヘラケズリのようである。11は高台がすべて剥離し、胎土は精良であるが器表が非常に荒れている。内面は黒色化するが剥落がひどく、ヘラミガキの痕跡がわずかにみえる。外面は灰黄褐色となり、調整は不明。外底面にはヘラキリの痕跡が一部に見える。

2H区

2G区の西、2C区の南に位置する。このグリッドは0.2mほど掘り下げてほぼ地山に達する。西端近くでは旧水田の区画（段差）が地山に反映しており、南東隅で流路跡の肩が現れ、また若干の柱穴状の落ち込みも検出している。

流路跡は肩を検出したものの、明瞭な下端は判然とせず、非常に緩い傾斜をもって下降している。この緩い傾斜面の中で完形に復原できた土師器椀が出土した（図版16、第41図）。

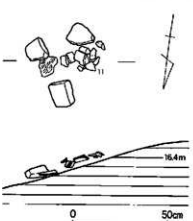
柱穴状の落ち込みには若干の遺物が入っていたが、形状や配置から見て建物跡を形成する、あるいは特異な在り方を示すものはなく、単なるシミ状の落ち込みに過ぎないものもあると思われる。

出土遺物

出土土器の注記には「2H区」・「地山上」としたものがあるが、前者は流路跡上の堆積層を含む包含層から出土したものである。1・6～8・10・12・13が「H区」、2が柱穴、11が流路跡肩の地山上、その他が「地山上」出土である。

須恵器（図版28、第40図1～10）

1は杯蓋で、口縁部の1/4が残存する口径12cmの小型品。ヘラケズリのままで終わる天井部はやや丸みをもち、強く反転して口端部へ続くが、端部は鳥嘴状とはならず端面をもつだけとなる。つまみの有無は不明で、内面は薄く灰を被り、口縁部外面は黒色化する。2も1/4が残存する杯身で、底部外面は丁寧にヘラキリを行う。内面はヨコナデで仕上げ、薄く灰を被る。3は小さな輪状つまみをもつ蓋で、つまみ周辺だけの残片。4は壺肩部の小片で、傾き・復原径には不安がある。胎土精良で、全体にヨコナデが施される。肩部の一部に穿孔が認められるが、本来の形状や大きさは判らない。5は玉縁状の口縁部をもつ鉢で、京都市西部の窯跡から搬入されたものであろう。平底となる底部外面には一部にイトキリ痕が見え、内彎して立ち上がる体部内外面はヨコナデによる凹凸が著しい。なお、内底面付近に顕著な使用痕は認めら



第41図　2H区流路跡肩付近遺物出土状態実測図(1/20)

れない。胎土は精良で、全体に灰白色～淡灰色となる。6･7は壺底部。6は体部外面を丁寧にヘラケズリしている。底部外面は撫でている。7も体部外面を丁寧にヘラケズリするもので、外底面は丁寧に撫でて仕上げる。なお、底部外周には高台が剥離したような状態の破面、摩滅しているがわずかな高台状の高まりなどがあり、本来は高台を付していたものと思われる。内面には黒色付着物が数mmの幅で帯状に残るが、水平とはなっていない。8は体部がごくわずかに内彎し、口縁部が直立する甕で、口端部外面に小さく面取を施す。胎土粗く、焼成も甘く器表が荒れる。小片のため復原口径には不安がある。9は甕で、口端部に水平な面を作り、内外を窪ませる。10も甕で、口縁部は外反が弱く、端部にほぼ水平な面をもつが端部が甘い。

土師器（図版28、第40図11～13）

11は完形に復原できる椀で、出土状態は第41図に示している。高台は断面三角形となって直立し、体部は角度をもって内彎しつつ立ち上がり、端部が丸く終わる口縁部もほぼ直立する。全体に灰赤褐色を呈し、器表が非常に荒れていて調整痕は全く見えない。12は黄白色～黄褐色となる底部で、高台が剥離した部分にはイトキリ痕が見えるが、器表は全体に荒れて低い高台をもつ。13は甕口縁部小片で、全体が茶褐色となる。これも調整痕は不明である。

2Ｉ区

2H区の西、2D区の南に位置する。10cm前後の包含層を除去して地山面を露出して遺構検出を試みたが、ほとんど認められなかった。

出土遺物

16･20が地山上から、ほかは包含層出上である。

須恵器（第40図14～17）

14は内面の調整が丁寧であり、大型の杯身と思われる。体部に比して華奢な高台をもち、体部は直線的に立ち上がる。底部外面および体部下半には丁寧なヘラキリあるいはヘラケズリが見え、その他の部位にはヨコナデを施す。底部の2/3が残存する。15は径の大きい高杯脚部片で、器表が荒れている。あるいは壺の口頸部であるかも知れない。16は底部の2/3が残存する。底部外面はヘラキリの後に雑に撫で消すようで、内面では雑なヨコナデを施しており小型壺の底部であろう。17も甕で、体部･底部の外面を丁寧にヘラケズリを行い、孔の周縁も同様である。内底面の外周はユビオサエがよく残る。これは胎土精良で、焼成も良好。小片のため復原口径には不安がある。

瓦器（第40図18･19）

18は鍋の類であろうか。体部上半が屈曲して直立し、口端部は水平な面となって外方へ大きく摘み出す。外面は屈曲部以上はヨコナデであるが、以下はヘラケズリで仕上げてシャープな稜を作る。内面はヨコナデを施し、整った櫛描波状文を刻む。器表は灰黒色となるが、器肉中心は黒色、その周辺は灰黄褐色となる。ほかに近世の陶製摺鉢が出土しており、これも近世に属するものであろう。19は羽釜の足で器肉は灰白色となる。体部内外面も灰黒色であるが、足の表面は焼けたためか灰白色となる部分が多い。

磁器（第40図20）

龍泉窯系青磁椀で、底部の1/2が残存する。見込みは無文で、外周に圏線を刻む。釉は淡い青緑色となるが、焼けたようで黄味が強くなっている。

２Ｊ区（図版16･17、第42図）

２Ｉ区の西、２Ｅ区の南に位置する。ここも包含層を0.1mほど掘り下げて黄褐色の地山を露出させ、流路跡の一部と若干の柱穴を発掘した。

流路跡の一角を検出した南西隅では木製遺物と若干の土器が出土し、その状態は第42図に示している。ここで出土した木質には加工痕を認めるものはないが、部分的に炭化したものがある。

柱穴には須恵器蓋が壁に貼り付いたような状態で出土したものがあり（図版17）、当時に掘削されたものがあるのは間違いないが、その配置などに規則性を認めることができなかった。

出土遺物

1は柱穴出土で、ほかはいずれも「ＩＪ区」で取り上げている。

須恵器（第43図1～7）

1は天井部が非常に低平となる杯蓋で、つまみは剥がれている。天井部はほぼ水平となり、屈曲して口端部へ続くが、口端部はわずかに浮き上がる形となる。口端部の形状は比較的シャープな鳥嘴状となるが小さい。天井部外面はヘラキリの後に雑に撫でるようで、内面では仕上げナデが広く見える。口縁部外面に別個体の一部が熔着し、そこから口端部内面までが灰を被って黒色化する。2は天井部が丸みをもち、口縁部が緩く短く彎曲して鳥嘴状の口端部へ続く。細部の作りはシャープである。天井部外面はヘラキリのまま終わり、内面は灰被りがひどくて見えない。また、外面は高温に晒されて茶褐色となっている。3は口縁部を欠く、天井部は1/3ほどが残存する。天井部外面はヘラキリのまま終わり、内面には仕上げナデが見える。4も口縁部を欠き、天井部外面はヘラキリのまま、内面は薄く灰を被ってよく見えない。また、内面には小さな熔着痕が数箇所ある。5は壺の口縁部で図示した部分は口端部を除きほぼ完存する。口縁部を小さく垂直に引き出して受け口状にするもので、細部はシャープに作られる。頸部外面には右上がりのシボリ痕が見え、その上を粗雑な感のあるヨコナデで仕上げる。6は短頸壺片で、小片のた

第42図　２Ｊ区木材等出土状態実測図（1/20）

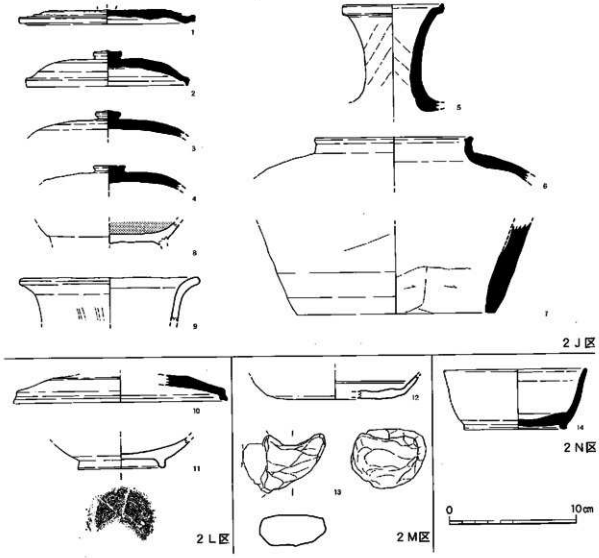
めに復原口径には不安がある。口縁部は直立し、端部に内傾する面を作るとともにその内側を小さく突出させる。胎土は精良で、丁寧に作られている。口縁部を除く体部に自然釉が掛かる。7は甕の底部片。外面はヘラケズリを主体とするが、凹部には及ばない。内面下端付近も丁寧なヘラケズリを施し、接地部も丁寧に削って面を作る。桟は残らない。

黒色土器（第43図8）

高台のすべてを欠くが、底部の1/3が残存する。内面はよく黒色化するが、器表が荒れているようでヘラミガキはよく見えない。外面は灰褐色～暗褐色となる。胎土は粗いというものではないが、白色微砂粒（石英か）が多く浮いているために粗く感じる。

土師器（第43図9）

甕の口縁部小片。口頸部は彎曲しつつ大きく外反し、口端部は丸く収める。胎土は粗く、外面にはハケメが見えるが、内面はナデのようである。また、外面には全面に煤が付着、内面ではやはり口端部まで焦げ付きと思われる変色が見られる。本来の器表は内外が灰褐色を呈するようで、器肉は黒色となる。



第43図　2J・L・M・N区出土土器実測図（1/3）

2L区

2G区の南に位置する。このグリッドは流路跡内に位置するようで、全面で礫床が現れるとともに南端では大型の木株が検出された（2Q区参照）。礫床上面の標高は北西隅で16.3m、北東隅で16.1m、2Q区との間には畦を残さなかったのでその南辺で見ると南西隅で16.5m、東端では16.2mとなり、南へ向かってわずかに高くなっている。しかし木株付近では16.6mを測る部分があって木株周辺が高まりをもっていて、そのことは16.25mの等高線に表れている。

このグリッド周辺では上層観察を行っていないが、発掘した堆積層の厚さは0.3m前後である。

出土遺物（第43図10・11）

図示した遺物実測図を見て明らかだが、この付近では流路跡中とはいえ、細片化していて図示に耐える土器は極端に少なくなっている。

10は須恵器高杯の杯部片で、胎土・作りは良好である。身はとても浅く、直に立ち上がる口縁部も短い。口端部はわずかに内傾する面をなし、側面は窪ませて変化を加える。底部外面は丁寧なヘラケズリを行い、外周をヨコナデする。内面には仕上げナデが残る。

11は土師器椀で、高台の形状はほかに多く出土した須恵器杯身の形状に似るが、体部が浅く大きく立ち上がる点で異なる。内外面が黄白色を呈し、高台内にはイトキリ痕が残る。

2M区

2L区の西、2H区の南に位置する。2C区から連続する地境が西端近くにあり、主としてそれ以東を発掘し、深さは0.2～0.3mほどであった。このグリッドの北西隅で流路跡の礫床の一部を検出しているが、段落ちはなかった。

出土遺物（第43図12・13）

ここも図示にたえる遺物は少ない。

12は土師器杯で器表・器肉とも黒色となる。胎土は粗く、外底面はヘラキリのままである。

13は土師器の取っ手で黄褐色を呈する。本体に差し込んだようで、ほぞの部分が残る。やや幅広の直方体粘土塊を細工したようで、全体を手捏ねで整形している。また、先端部が非常に赤変する。

2N区

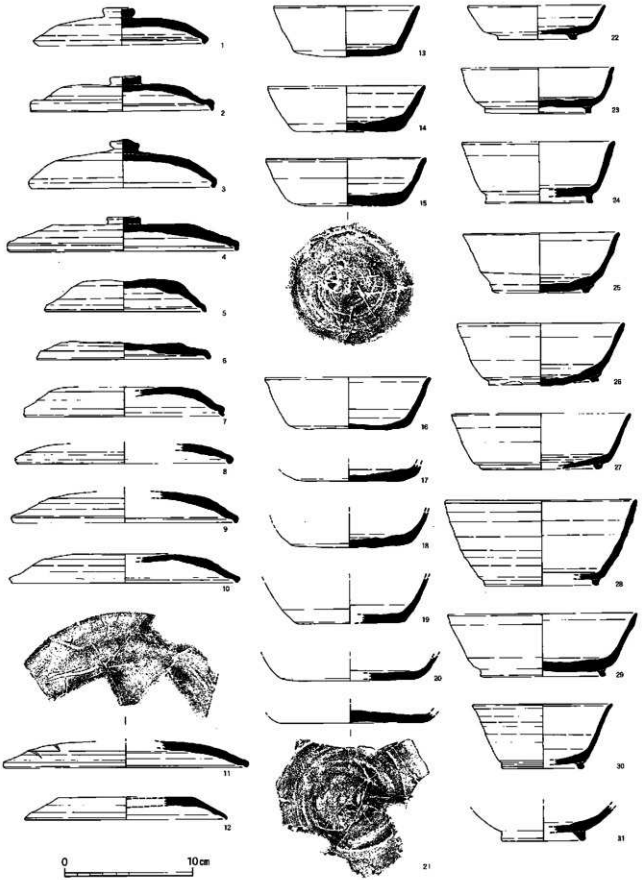
2M区の西、2I区の南にある。この南は排上置き場として使用していたために、発掘範囲はグリッドの北半である。包含層を0.2mほど発掘して地山が表れた。この南西隅付近で流路跡の礫床を検出したが、地山から連続し、レベル差はない。

出土遺物（第43図14）

ここも殆ど図示にたえる遺物がない。15は底部の2/3が残存する杯身で、小振りの高台が直に立つ。体部は内彎して垂直に近い角度で立ち上がり、口縁部は緩やかに外彎する。外底面はヘラキリの後にナデを行うようで、内面では溶融した黒色粒が目立つ。

2O区（図版18）

2N区の西、1J区の南、1I区の東に位置する。ここも1N区と同様に排土置き場を想定していたことから当初は北辺の狭い範囲を発掘したが、1I区の状況を受けて、流路跡の肩を探すべく南



第44図　２０区出土土器実測図１（1/3）

側に拡張した。機械的に区割りを充てれば2Ｔ区とすべき部分があるが、便宜的に2Ｏ区のままとしている。

ここでは流路跡の南肩を検出し、それが現況で宅地となる部分に沿うらしいことが推測できた。段落ちのレベル差は西端で0.3m、発掘区南端で0.1mほどと急に浅くなっている。

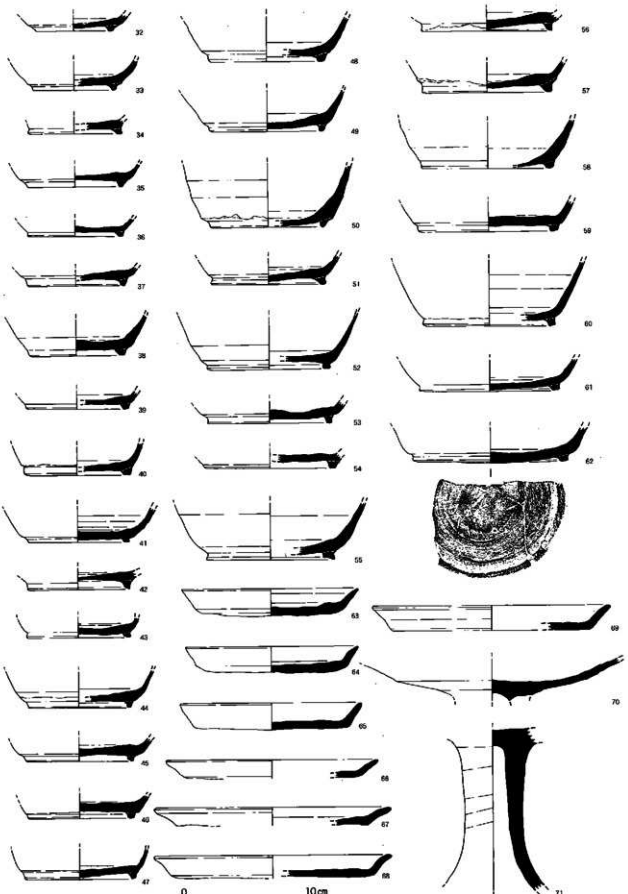
出土遺物

１Ｉ区同様、多くの遺物が出土しているが、3月中旬から発掘を開始したために時間的な余裕がなく、分層発掘を行っていない。

須恵器（図版28･29、第441～46図74）

1～12は杯蓋で、1～4はつまみをもつもの。1は天井部がやや丸みをもち、直線的に口端部へ続いて口縁部が屈曲しない。端部は断面三角形となって内側へ踏ん張る。天井部内外面にヨコナデを施す完形品。2は天井部が平らとなり、口縁部が大きく屈曲して鳥嘴状の端部をもつもので、天井部外面はヘラキリのままで終わり、口縁部外面から天井部内面の外半ほどに灰を被る。また、内面の1/2ほどに墨と思われるものが付着しており、磨った痕跡は見えないが硯として使用されたようである。3は天井部が比較的高く、丸みをもち、口端部へやはり直線的に続く。口端部は小さく折り曲げたような形となり、端部は丸い。天井部外面はヘラキリの後に撫でており、口端部側面から同内面付近が灰を被って変色する。4は低平な天井部から口端部へ直線的に開き、端部はやはり折り曲げたようになる。ただ、内面を強く窪ませていて鳥嘴状の形態を意識するようである。天井部外面はヘラキリの後にナデ、内面は磨れたようにも見えるが確信がない。5は平らだが比較的高い天井となり、口端部へは直線的に続く。口端部は小さく折り曲げて外面にシャープな稜をもたせ、内面にも段を付す。天井部外面はヘラキリ後に丁寧に撫でている。6は低平な天井部をもち、口縁部は屈曲する。端部は折り曲げて整形し、細部はいずれも丸くなる。天井部外面は丁寧なヘラキリを施し、内面全体が灰を被って、口縁部側面のみ黒変する。7は天井部が丸みをもち、口端部へ直線的に続くもので、口端部は鳥嘴状となる。この細部はシャープに作られている。天井部外面はヘラキリ後に撫でられる。8は口縁部片で、残存部では天井部との境が判然としない。口端部上面の屈曲は小さく、断面三角形状とするが丸みが強くなる。9は天井部が丸みをもち、口端部上面の屈曲は小さい。端部は鳥嘴状となるものの、細部は丸い。天井部外面はヘラキリのままで終わる。これは焼け歪んでいて口径に不安がある。10も天井部が丸みをもつもので、口端部へ直線的に続く。口端部は鳥嘴状となるが、小さい。天井部外面はヘラキリ後に撫で、口端部付近の外面から天井部内面外半は灰を被る。11の天井部は丸みをもつが、低い。口端部までほぼ連続的に移行し、口端部も殆ど屈曲がないが、内面では意識して小さく窪ませている。焼成が甘く器表が荒れていて、天井部に不整な幅広いボケが見えるが、偶然に生じたもののようである。12は天井部が平らとなり、口端部に向かって直線的に開く。口端部が緩く屈曲するのは鳥嘴状口端部の名残であろう。天井部外面はヘラキリ後にナデ、内面は全体を丁寧にヨコナデする。

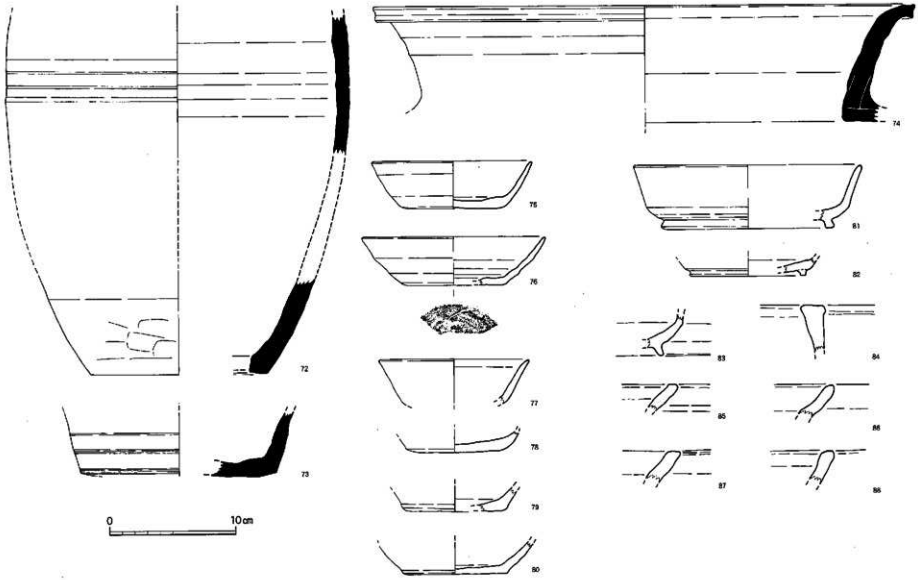
13～21は杯身。13･14は体部から口端部にかけてわずかに内彎しながら直線的に続く。13は底部･体部界が比較的明瞭となるもので、口端部内面をヨコナデして面取を施すような形となる。焼成が甘く器表が荒れ、外底面は丁寧なヘラキリのままで終わる。14は底部が厚く、口端部内面の面取風の処理範囲が広い。これも外底面はヘラキリのままである。15も底部が厚い。これは体部下半がわずかに外彎し、中位で弱い稜をもって上半も緩く外反する。外底面はヘラキリのまま、×状のヘラ記号を刻む。16は体部がわずかに内彎し、口縁部が小さく外反する。これも底部が薄く作ら



第45図　2O区出土土器実測図2（1/3）

れ、外面はヘラキリのままで終わる。還元が不十分で茶褐色に発色するが、口端部内面から体部上半にかけての全周が灰黒色となる。17は内面に灰を被り、外底面をヘラキリで終わっている。18の外底面はヘラキリの後に雑に撫でていて、弱い線で×状のヘラ記号を刻む。19は体部・底部界が明瞭となり、体部下半が内彎して立ち上がる。外底面はヘラキリ後にナデ消し、残存部上端付近が黒変する。20は底部内面を丁寧にヨコナデし、外面はヘラキリのまま2条の弱い平行線を刻む。21も底部片。これも外底面はヘラキリのままで、×状のヘラ記号を弱い線で刻む。

22～68は高台付杯身。22は体部から口縁部にかけて直線的に短く開いて、口端部が薄くなって終わる。身に比してしっかりした高台が屈曲部よりかなり内側に付され、内外全体がヨコナデで仕上げられるようである。内面は全体に灰を被る。23は体部が直に近い急な角度で立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部内面はヨコナデ、外面はヘラキリのままのようで灰を被って黒色化する。24は体部下端が稜をもって直線的立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部内面には仕上げナデが見え、外周の一部が灰を被る。外面はヘラキリ痕を撫で消す。25は体部から口縁部にかけて直線的に延びる。ヨコナデによって外面を窪ませ、外底面はヘラキリの後に撫でるようである。26も25に似るが、外底面はヘラキリの後に撫でる。27は体部下端がシャープな稜線をもって直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。内底面に凹凸が目立つ。28は体部から口縁部にかけてわずかに内彎し、外面にヨコナデによる凹凸が著しい。29は体部下半が小さく内彎して立ち上がり、口縁部付近で再度外反して薄く終わる。高台は非常に華奢で、外底面はヘラキリのまま終わる。外面の全体が黒色化する。30は身が深くなるもので、体部は直線的に立ち上がって、口縁部が強く外反する。丁寧に作られている。31は底部から体部にかけての内面が連続的に弧を描き境をもたないもので、高台もほかの例に比して大きく、高い。内面は丁寧に撫でられ、底部外面もナデ、体部ド端はヘラケズリの後に撫でるようである。32は高台貼り付け部の仕上げが雑で、外底面はヘラキリのまま終わる。33は底部内面に仕上げナデを施し、外面はヘラキリのままである。内面に黒色付着物があり、墨であるかも知れない。34は焼成が甘く器表が荒れ、内面が暗灰色、外面は灰黄色となる。35は底部内面の全体をヨコナデ、外面のヘラキリ痕をケズリで消す。36の外底面はヘラキリ痕を撫で消している。39は外底面にヘラキリ痕が見え、灰を被って黒色化する。40は体部から底部にかけて外形線が連続するもので、体部から外底面にかけて灰被りが著しい。41は体部下半が内彎し、外底面はヘラキリのままである。42は底部が薄くなり、外面はヘラキリのままで灰を被る。43は雑な作りであるが、外底面は丁寧にヘラキリを行う。内外面が灰黒色となるが、体部下半の一部が赤変する。45は底部が完存する。体部はほぼ同じ高さで上部を欠失していて、積極的な根拠はないが硬として使用するために打ち欠いたものであるかも知れない。外底面はヘラキリ後に痕跡を撫で消している。46は焼成不良で淡灰色～灰黄色となる。47は図示部がほぼ完存するもので、底部内面に大きな器表剥離があって使用には不便なものである。内面は仕上げナデで、外面はヘラキリのまま終わっている。48は内面に黒色粒の溶融が目立ち、外底面には1条の細線の一部が残る。49は底部が完周するが、焼成甘く器表が荒れる。50は体部が下端に鋭い稜線をもって急角度で直線的に立ち上がり、下端部の器肉が非常に厚くなる。高台は体部に比して小さく、そのためか潰れる部分が多い。底部内面は仕上げナデ、外面は丁寧にヘラキリを行っている。51も高台が潰れ、外底面にヘラキリ痕が残る。52は須恵器の技法で整形・調整するが酸化炎焼成され、内外面が黄白色となる。これも体部は下端に比較的明瞭な稜線をもって直線的に立ち上がり、外底面はヘラキリのまま終わる。53は底部内面のほぼ全体を仕上げナデ、外面はヘラキリのまま終わる。54の外底面



第46図　2O区出土土器実測図3（1/3）

はヘラキリを消している。55は胎土が粗く作りも全体に粗雑であるが、高台の細部はシャープに作られる。56は体部外面をヘラキリのままで終わり、高台の貼り付け部が不整である。57は底部内面を仕上げナデ、外面はヘラケズリを消していて、これも高台貼り付け部の仕上げが雑となる。58は体部下端が肉厚となり、焼成が甘い。59は形状が整い、外底面はヘラキリのままで終わる。60は体部が直線的に延びるもので、胎土は精良、作りも丁寧である。外底面に1条の非常に甘い直線の一端が残る。61は焼成が甘く器表が荒れている。外底面はヘラキリの後に撫でている。62は肉厚となり、それに比して高台が小さい。外底面はヘラキリの後に中央部を撫で消すようであるが、そこに浅い工具痕が残る。爪のように見えるものもあるが、多くは幅広く浅い。

63～69は皿。63はほぼ完存するもので、口縁部が外彎気味に開き、端部は薄くなって終わる。口端部内面から口縁部外面にかけて灰を被るとともに、黒色粒が溶融し、焼け膨れが見られる。外底面はヘラキリのまま終わる。64は大きさも含めて外形線は63によく似るが、口縁部内面に弱い稜線をもつ。また、外底面はヘラキリ痕をナデ消す。これも内面は焼け膨れが顕著である。65は口縁部がほぼ直線的に開き、端部も厚みをもって終わる。口端部内面から口縁部外面下端までが黒色化し、外底面はヘラキリ痕を残す。66は口縁部が外彎しつつ浅く開き、口端部も厚みを保って終わる。これも口端部内面から口縁部外面にかけて灰を被り、外底面はヘラキリのままである。67は口縁部がさらに浅く、強く外彎して開くもので、口縁部外面から内面全体が灰を被り焼け歪む。外底面はヘラキリのままである。68は口縁部が強く外彎し、角度をもって開く。これも口端部内面から口縁部外面にかけて灰を被り、外底面はヘラキリ痕が残る。69は口縁部が緩く外彎して開くもので、端部の肉厚は替わらない。底部内面は丁寧なナデ、外面はヘラキリ後にナデを施す。

70は高杯杯部片。中位に弱い屈曲部があるが、それ以下は丁寧なヘラケズリを施し、以上はやや雑なヨコナデで終わる。内面は底面付近を仕上げナデで、その他の部位はヨコナデで仕上げる。

72は同一個体と思われる甑片。2条の筮描沈線はシャープで整ったものであるが、その下位にある凹線上の種みは意図的なものとは思えず、調整痕であろう。内面の調整は丁寧なヨコナデである。底部は接地部および内面下端を丁寧にヘラケズリし、外面もヘラケズリで調整するようである。これは器表が荒れている。

73は壺の底部で体部外面は灰を被り、内面では焼け膨れがある。体部外面はヨコナデで、外底面は丁寧なナデで仕上げる。

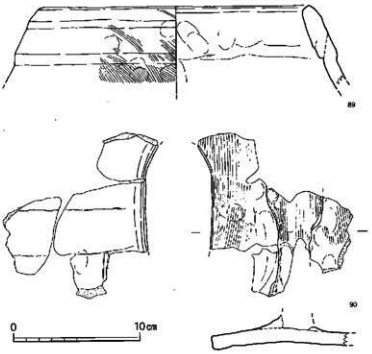
74は甕で、口端部付近は大きく外反して垂直となる凹面をもつ。

土師器（図版29、第46図75～89）

75～83は杯。75は須恵器と共通する器形となるもので、底部から体部へ曲線的に移行し、体部は直線的に立ち上がり、端部は薄くなって終わる。外底面はヘラキリの後に撫で消すようである。器肉は暗灰色、器表は灰褐色～灰黒色となる。76は体部が大きく開き、外面を強くヨコナデして凹凸を付け、口端部は直行して終わる。黄褐色を呈し、外底面にはイトキリ痕と思われる痕がある。77は体部が直線的に開き、口縁部が外反するもので、口端部付近の内面から体部中位外面にかけて黒色、以下の部位が灰黄色となる。78は76に似た土器で、器肉を含めて全体に黒色となるが、体部下端付近の一部が灰黄色となっている。外底面はヘラキリ痕を丁寧に消している。79は底部が平底となり、体部下端が内彎、器表が明黄褐色となるなどほかの多くと異なるものだが、器表が荒れて調整痕は判らない。1/4の残片。80も平底・体部下端の内彎など図面上は先の79に似るが、器肉・器表とも全体に黒色となり、外面上端の一部および体部内面の一部が灰黄色となるなど、1Ⅰ区な

どに類似品の多い土器である。

81～83は高台の付くもの。81は断面方形の整った高台を有し、体部下端が外彎、そしてシャープな稜をもってわずかに内彎しつつ直線的に立ち上がり、端部は薄くなって終わる。器表が荒れているが、体部下端の外彎部ではヘラケズリを使用している。胎土は比較的粗く、内面は灰黄褐色、外面は灰白色に近くなるが、稜線上や高台端部は内面と同様の色となることから、化粧土が掛けられているのかも知れない。82も須恵器に似た形態の土器で、外面は黒色化する部分もあるが、多くが灰茶褐色となる。外底面は丁寧なヘラキリで終わり、内面は器表が荒れている。83は比較的高い高台が外方へ踏ん張り、体部下端が外彎して立ち上がるが、途中でシャープな段をもつ。1J区から出土した同類品と同一個体であろう。



第47図　2O区出土土器実測図4（1/3）

84は肉厚で直立する口縁部の頂部に幅広い平坦面を作る。胎土は比較的精良といえ、焼成は堅致。内外面・頂部も丁寧にヨコナデで仕上げるようである。また、外面・頂部では表面が薄く剥離する部分があって、これも化粧土がなされているかも知れない。化粧土と思われる部分は暗褐色、剥離した部分は暗黄褐色となる。近世に属するものと考えているが、よく分からない。85～88は土師器甕の口縁部小片で、口端部は水平な面をもつあるいは丸く終わるものがあるが、いずれも灰褐色に近い色となり、胎土が粗い。

89は移動式竈で、頂部と焚き口の一部が残存する。いずれも胎土が粗く、灰茶褐色を呈する。頂部は直線的に内傾する部分が残存し、端部は丸くなる。外面は突部に対しては比較的丁寧なヨコナデを施すが、粘土紐の継目などの凹部についてはそのままにしている。残存部下位は粗いハケメを施す。内面は粘土紐の継目を明瞭に残す付近が帯状に煤けて黒色化するが、以下は色が濃くなる程度で、器表が特に荒れるということもない。なお、黒色化は破面にも及んでいる。復原口径は21cm。

焚き口部は側縁から上部へ移行する付近である。開孔はヘラキリで行ったようで整った形状となり、後で撫でている。開口部から3.5cmほどの位置に幅5cmの剥離痕や部分的な高まりがあって鍔が剥離したものである。調整はタテハケで行われる。内面には横方向に走る粘土紐の継ぎ目が明瞭に残されていてその幅は3.5cmである。調整は条痕が見えないもののハケメの小口あたりのような痕跡があることかあらヨコハケが使用されたようである。また、開口部付近はヨコナデで仕上げられ、黒ずんでいて、その他の多くの部分は赤みが増している。

2Q区（図版17、第48図）

2L区の南に位置し、ここも0.4mほどの包含層を除去すると全面で礫床が表れた。その標高は南

西隅で16.5m、南東隅では16.2mを測る。

2L区との境に大きな株－正確には根が検出された。北東－南西方向に7.5m、直角方向に4.5mほどの広がりをもつ。直径の大きな根は南西方向に延び、北および西側は概して小さいものが多い傾向となる。

出土遺物（第49図1～3）

ここも周辺の調査区と同様に遺物が少ない。図示した土器は1が須恵器、2は土師器、3は瓦質土

第48図　2L・Q区大型木株検出状態実測図（1/20）

器である。また、南辺中央付近の包含層中位で青銅製品を出土している（後述）。

1は天井部が低く丸みをもつもので、口縁部は小さく屈曲し、端部を下方に摘み出して鳥嘴状とする。細部の作りは甘い。天井部外面は丁寧にヘラキリを行い、内面はヨコナデで仕上げる。

2は底部外面をヘラケズリする杯あるいは椀で、高台を欠失する。ヘラケズリが明瞭に残らない部分も削って後に丁寧に撫でるようで、内面は密にヘラミガキを施しているようである。

3は摺鉢で、口縁部はほぼ直立して肥厚し、頂部にほぼ平坦な面、外面に中央を窪ませる面を作る。黄白色～灰黄色となる。内外面で黒色が剥がれて灰白色～淡灰色となるが、中心部は黒色である。器肉胎土は非常に精良である。

2U区

調査区南東端に位置し、流路跡の肩を確認するためにトレンチを開けた。土層観察を行っていないが、平面的には2箇所の段落ちを検出した。南の段は包含層を0.1mほど掘り下げて現れ、その方の標高は16.5mほどである。段落ちの深さは0.1mに満たない浅いものである。北側の段は肩の標高が16.3m、下端の標高が16.2mでこれも深さは0.1mほどに過ぎない。このトレンチの北端の礫床上面のレベルは16.1m強で、下端との差は5cmに満たない。

このトレンチからは図示にたえる遺物は出土していない。

2V区（図版19）

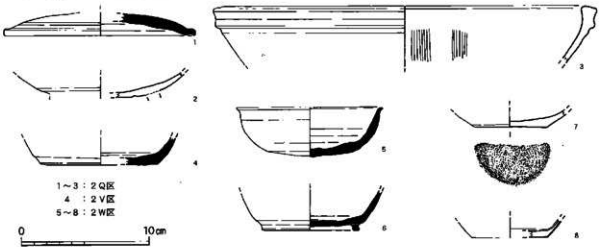
2Q区の南に位置するグリッドで、流路跡の南肩を確認するためにその南東の一部を発掘した。

堆積層を0.2mほど掘り下げると地山の黄褐色粘質土を切り込む流路跡の肩が現れた。南の宅地擁壁までの距離は6m弱である。その標高は16.5m前後で、深さは0.1m強であった。床は他の地区と同様の礫床である。

なお、この小グリッドの北西部で表土掘削時に大型になると予想させる連続した木質が露出していたためにその部分を拡張した。その結果、長さ6m、最大幅0.4mほどのU字形の木材を検出した。一見、丸木船のような形態をするが、加工痕といったものは全く見えず、流木であろうと判断した。

出土遺物（第49図4）

出土遺物は少ない。図示したものは須恵器杯の底部片。底部は平底となり、体部との境にはシャープな稜をもち、体部は内彎して立ち上がる。外底面は丁寧なヘラキリで終わっている。



第49図　2Q・V・W区出土土器実測図（1/3）

2W区（図版19）

2V区の西に位置し、これも流路跡の南肩を探るために開けたもので、北側を排土置き場としていたために南半を発掘した。

堆積層を0.2m前後発掘すると黄褐色の地山が現れ、蛇行する流路跡の肩を確認した。その標高は西端で16.8m、東端では16.6mを測り、深さは0.1～0.2mである。床面はやはり礫床であった。この流路跡肩の描くラインは南の宅地擁壁のライン、すなわち地籍にほぼ合致するといってよく、本来的に宅地部分が流路がおよばない高い地形であったことを思わせる。

出土遺物（第49図5～8）

ここも遺物は多くない。5･6は須恵器、7は土師器、8は磁器である。

5は椀で、底部の1/3が残存する。底部から体部にかけて連続的に彎曲し、口縁部は器肉が薄くなって小さく外彎する。底部外面はヘラケズリのままで終わり、それ以外の部分は内底面までヨコナデで仕上げる。6は高台を有する杯身で、体部はわずかに内彎気味に立ち上がる。外底面はヘラキリの後に撫で、内面はヨコナデで終わる。

7は平底の底部をもち、大部は浅く大きく開く。外底面にはイトキリ痕が残り、内外面が灰黄褐色を呈する。

8は白磁口禿の皿。

2A区東方トレンチ（図版14、第10図）

面的に調査を行った範囲の北東辺（2B区）からさらに北東へ16mの位置に、流路跡の方向を確認するために開けたトレンチである。このトレンチの北側は田面から0.9m高い畑地となっていて、さらに町道を挟んで北に田面との比高3.5mの宅地･水田が展開する。トレンチ北の畑地は低丘陵の裾部に相当し、流路跡の肩はこの辺りで検出されるだろうと推測していた。調査は重機で地山面を出し、流路跡埋土の発掘は人力で実施した。

地山は黄褐色粘質土で、上面に礫が貼り付くといった状況で南へ向かって緩やかに下降する。トレンチ内では約5mの距離で0.2mの比高がある。

明らかな流路跡の肩はトレンチ南端近くで検出できた。そこでは約0.3mの段落ちが認められ、埋土は砂礫層からなっていた。この砂礫層は概ね下位に黄色砂、上位に暗灰色砂と小礫が載るといったものである。この砂礫層の上には1区で見た1～3層が順次堆積する。

図示にたえる出土遺物はない。

ある冬の日の光景

5) 金属製品（図版30、第50図）

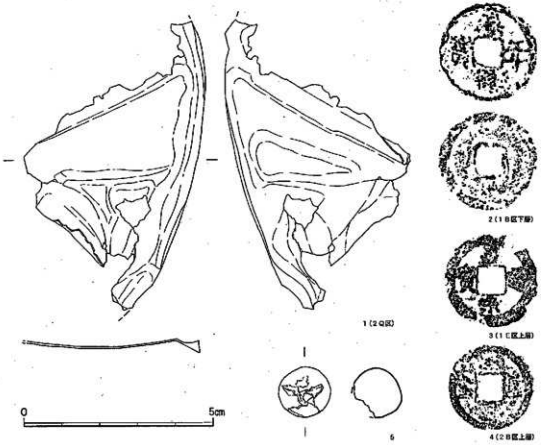
1は2Q区南辺近くで出土した不明銅製品。薄い銅板を用いたもので、図左の中央付近は軒丸瓦に見るような蓮弁を打ち出しているようにも見えるが、その両側が変形して文様の構成は判然としない。縁は3mmの厚さの断面三角形、その他の部位は0.2ミリほどの厚みである。試みに径を復原すると16.6cmとなる。包含層中から出土したもので帰属時期も不明。

2は皇朝十二銭の一つ「萬年通宝」である。初鋳は天平宝字4年（760）で、和同開珎に次ぐ国産貨幣とされる。1B区下層から出土したが、包含層発掘中のことであり出土状態の詳細は把握できていない。直径2.6cm、中央の孔はやや歪んでいるが、一辺0.6cmとなる。重量は3.4gを測る。

3は文字の判読が難しいが「寛永通宝」のようである。直径2.2cm、方孔の一辺は0.6cm、重量は2.2gを測る。背面に文様などは見えない。

4は「寛永通宝」と読め、所謂マ頭通となる。銅質が悪いようで風化が進む。直径2.5cm、方孔の一辺は0.7cm、一部を欠くが残存重量は1.9gでる。これも背面は無文。

5は鉛製の鉄砲玉で、表面は灰白色となり、直径1.3cm、重量は9.2gである。図示した半分に亀裂が入るが、反対側の半球部分には顕著な傷がない。付近では戦国時代の大友・大内の合戦や、幕末の長州藩と譜代小倉小笠原藩による狸山合戦が記録されている。狸山とは国道10号線の苅田町・北九州市境に位置する丘陵のことで、今回の調査区から北へ1km弱の位置にある。



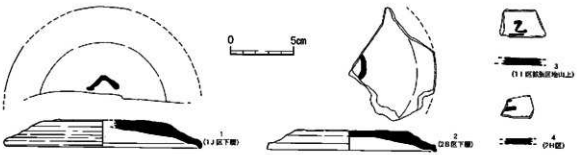
第50図　金属製品実測図（1/1）

6) 特殊土器・土製品

通常の須恵器・土師器以外の墨書土器、土馬やミニチュア土器といった祭祀関係の土器、緑釉陶器、飯蛸壺や製塩土器・竈上の付着した須恵器やフイゴ羽口など生産関係の遺物を出土地点に無関係に紹介する。

墨書土器 (図版30、第51図)

1はJ区下層出土でほぼ1/2が残存する須恵器杯蓋。天井部が水平となり、弱く内彎しつつ烏嘴状の口端部へ続く。天井部内面には仕上げナデが施される。天井部につまみは残らないが、つまみを囲むような形状で墨書かと思われる圏線が見える。2は須恵器杯蓋で、天井部はほぼ水平となり、口端部に向かってほぼ直線的に延びる。口端部は烏嘴状となって、外方へ踏ん張る。天井部外面はナデ、内面も横ナデで仕上げる。3は須恵器身杯の底部外面であろう。胎土・調整は普通で、内外面を撫でている。4も須恵器杯身であろうか。内面に墨書（？）があり、同様に内外面を撫でて調整する。



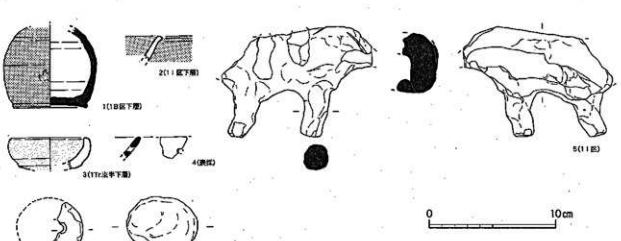
第51図　墨書土器実測図 (1/3)

土馬 (図版30、第32図5)

1I区の東端、木製遺物などとともに出土したものである。首・頭および尾を欠いており、胴部は縦に半截されている。背には鞍を表す粘土が付され、後輪の裾は残存するものの、前輪および後輪の鞍に当たる部分は剥離する。後輪付近から尾にかけての背は発掘時によるものか削られるようである。後輪から臀部頂にかけて、および臀部頂から尾に向かって篦描沈線刻まれていて、尻繋を表現する。想像を逞しくすれば臀部頂に辻金具が表現されていたのかも知れない。鞍・尻繋以外の装飾は見られないが、裸馬でないことは確かである。体部は全体に手捏ねで作られているが、足の端部はヘラケズリで水平に近くする。右に図示した破面部は、上部が破面、中央付近は空洞であったようで、ナデ痕がよく残る。下部は剥離面で、体部上半（および足も同時か）を作った後に下部から粘土を添えて腹部を作ったようである。須恵質に焼かれていて、陶馬とすべきであろうか。胎土は精良といってよく、焼成も良好である。

祭祀土器 (図版30、第32図3・4)

3は「1Tr.東半下層」の注記があり、1A・B区で出土した小片である。復原口径6.3cm、器高2.5cmの小型品で、体部は半球形となって口縁部は丸く終わる。また、体部下半には窪みが認められる。土師器で、胎土は精良。残存する内外面に赤色顔料が塗布されている。



第52図　緑釉陶器・土馬等実測図（1/3・1/2）

4は須恵器杯身の小片で、口縁部下に小孔が焼成前に開けられるようである。胎土は普通で、焼成はやや甘いようである。

5は須恵質の円盤状土製品。復原径3cm強で、厚さは5mmである。中央と思われる付近に方形をなすかと思われる孔がある。外周が突出する部分があるが、全体に焼け歪んでいるために本来的なものか判断できない。用途不明。

6は扁平な粘土板で、平面形は3～3.7cmの楕円形となり、厚さは最大で9mmとなる。胎土は精良といえるものではないが、整形は比較的丁寧になされている。器表は黄褐色を基調とするようで、外周が部分的に赤変する。これも用途は判らない。

緑釉陶器（図版30、第52図）

1は「2Tr.北半」・「3Tr.北半」・「1B区下層」から出土した破片が接合し、底部は3/4、体部も1/3ほどが残存する。体部最大径部が残存部の中位近くにある小型壺で、底径は5.8cm、体部最大径7.2cm、残存高6.3cmである。肩部付近に浅い凹線状のものが薄く見え、体部下端も小さな段を付けて高台状にして装飾する。釉は緑色～灰緑褐色となるが、これは焼成時の火回りによる変色であろう。これと別に最大径部の下位により濃く発色する部分があり、所謂緑釉緑彩と言われるものに似る。なお、胎土は非常に精良な陶器質で、器肉は黄白色、内面はそれが赤みを帯びた色となる。外底面は釉が部分的に掛かり、器面が荒れるなどで明瞭な調整痕ははっきりしないが丁寧なヘラケズリのようである。2は椀あるいは杯の外反する口縁部小片。胎土はとても精良で灰白色～灰黄色を呈する土師質の素地に明灰緑色の釉を掛けているが、釉は殆どが剥落する。図示していないが、「3Tr.北半下層」からも同様の緑釉陶器の体部小片が出土している。

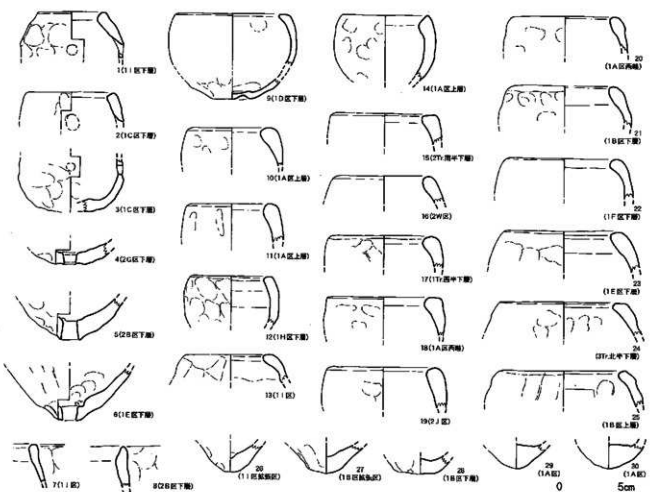
これらはいずれも1A・B区に集中していることから、1I区のように流路跡の南に主体があるのではなく、北側の台地状から投棄されたものであろう。

飯蛸壺（図版31、第53図）

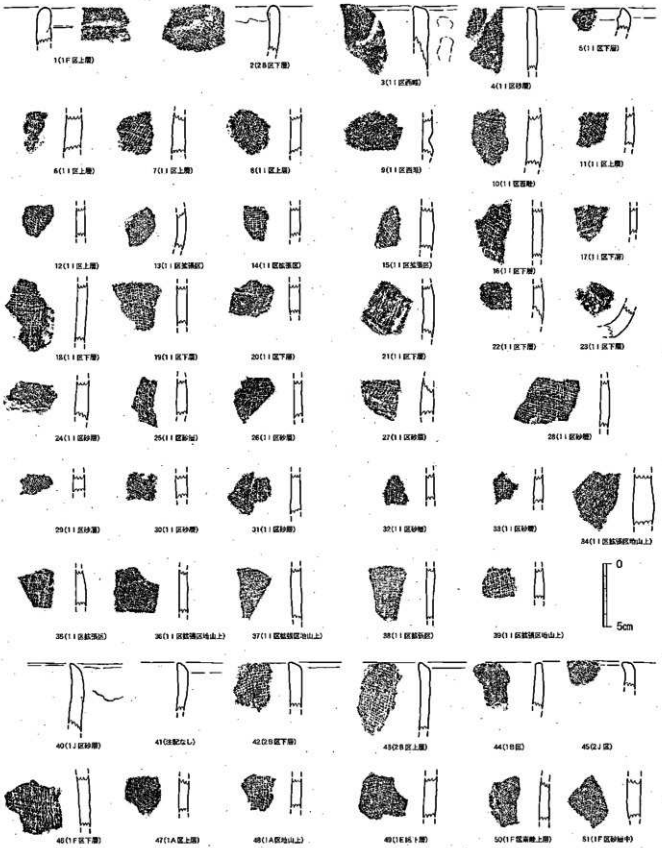
口縁部が肉厚となって内傾し、時には幅広い面をもち、口縁部下位あるいは底部に孔をもつ明ら

かに飯蛸壺と認められるものと、形状がほぼ同じであるものの胎土が非常に精良で、灰黄色～灰白色を呈するものがある。後者は器表が脆いこともあって孔を確認できるものがなく、蛸壺と断定できるものではないが、形状を重視してここで紹介する。なお、ここに図示した土器はいずれも外面はユビオサエで、内面を比較的丁寧にヨコナデしており、整形・調整技法もほぼ同じで、すべて酸化炎焼成の土師質である。

1は口縁部下位に円孔の一部が残るが、これは焼成前に斜めに穿たれている。胎土は粗い。2もよく似た胎土の小片であるが、下端に孔の一部が残る。3もよく似た胎土の土器で当初は2と同一個体かとも考えたが別個体のようである。復原図には不安がある。残存部上端付近に円孔の一部らしい痕跡が見える。4は孔の一部が残る底部で、丸底状に復原しているが、5・6を見るともっと尖っているのかも知れない。5・6はいずれも尖底の先端に孔を穿つ。内面は比較的丁寧に撫でられるが、外面は指頭痕を顕著に残す。また、5は熱を受けるようで外面が赤変する。7は口縁部の肥厚が弱く、器肉の薄いものであるが、胎土や焼成は10以下と同様である。8は口縁部の形状が異なる以外は、やはり10以下に似る。9は全面が赤褐色となる土器で、胎土は10以下に比して比較的粗い。10以下は胎土がごく精良で、器表が灰黄色、灰白色、淡灰色等を呈するよく似た土器である。ただ、12は赤みが強くなっている。26～28の底部も同様。29・30は形状が26などに似るが、底部内側から粘土を充填して肉厚とする点や胎土・色調などでも異なる。この2点は製塩土器であろう。



第53図　飯蛸壺実測図（1/3）



第54図　製塩土器実測図（1/3）

製塩土器（図版31、第54図）

製塩土器（主として焼塩壺）はかなり出土するがその多くが細片化している。したがって、ここでは1Ⅰ区出土品を主として図示し、その他の地区出土例は口縁部片などの一部の紹介に留める。1は土師器小片で、胎土が粗く内外面が灰褐色となる。外面に明瞭な粘土紐接合痕を残していて、特異なものであり製塩土器と考えたが、外面が顕著に焼けるといった特徴はない。2は口縁部を小さく内側へ折り曲げ、その痕跡をよく残す土器で、これも胎土が粗く外面が焼けて赤変する。内面は灰褐色となっている。これも積極的に製塩土器とする根拠はないが、粗製土器であり、可能性をもつ。3以下は内面に布目を残す筒状となるいわゆる焼塩壺土器である。胎土は概ね粗く、色調は黄白色となる飯蛸壺に似たものや灰赤褐色となるもの、灰黒色を呈して一見須恵器かと思えるものなどもあるが、すべて土師質である。器肉は17のように3mmと薄いものから34のように1cmとなる厚いものまである。内面に残る布目痕も5・34・36のようにごく細かいものから、18・19などのように粗いものまでバラエティがある。

3～5、40～45は口縁部片で、多くは口端部に外傾する面をもつがその仕上げは雑でヘラキリを行ったままのようなものもある。15は口端部内面のすぐ下位に段をもつもの、44は口端部を丸く収めるものである。

土錘（図版31、第55図）

1～12は端部に孔をもつ棒状土錘で、完存する例はない。1・3・5は胎土に殆ど砂粒を含まないごく精良な粘土を使用するが、ほかは微砂粒を含む通常のものである。また、いずれも土師質で、色調は黄褐色、灰赤褐色、暗褐色など様々である。身中央付近の直径は1.0～1.3cm、最も長く残存するもので5.6cmである。図示した以外に孔の一端を認めることができる程度の残片や全く孔を残さない棒状品などが数点ある。

13～31は紡錘状の土錘。これも胎土が非常に精良なものがある。いずれも土師質で、色調灰白色、灰赤褐色から灰黒色を呈するものまで様々である。完存するものの長さは3.6～4.5cm、重量は4.5～6.3gで、それ以外も含めて最大径は1.1～1.8cmである。最も重量のあるものは24に図示した例で9.9gである。

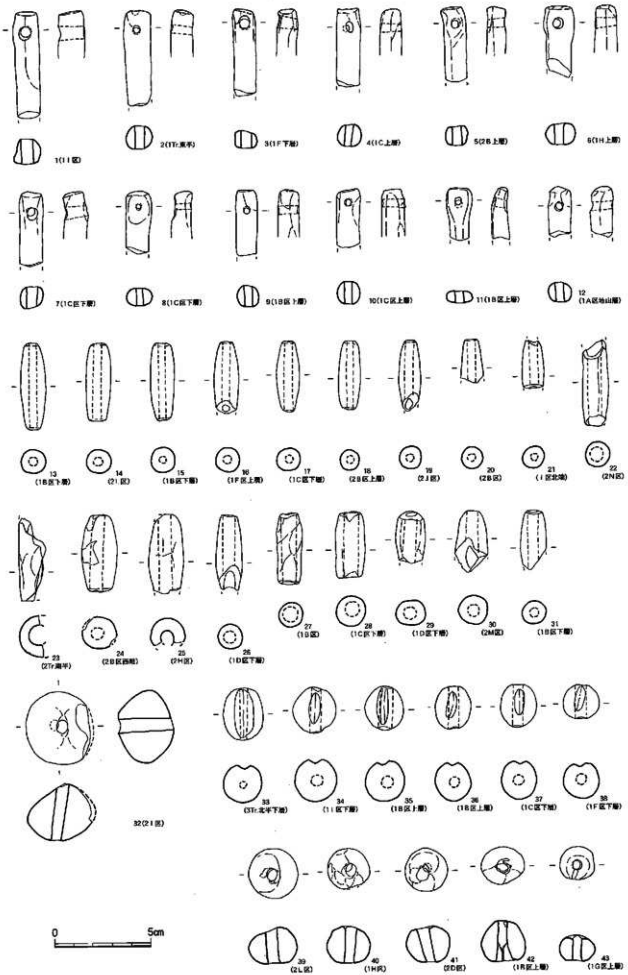
32は算盤玉形の土錘で最大径3.8cm、高さ3.0cmで、一部を欠くが残存重量は30.5gを測る。手捏ねで作られ、形状は歪んでいるものの器表は比較的平滑化している。胎土は非常に精良で砂粒を殆ど含まない。表面は暗灰褐色を呈する。

33～38は外面に溝を刻む球形土錘で、いずれも土師質。最大径はいずれも1.9～2.2cmとなりほぼ規格的に作られるが、33は高さが2.8cm、34～37は高さ2.2～2.4cm、38は高さ1.8cmとなっている。重量は6.0～10.8gを測る。33は胎土が非常に粗く、38は殆ど砂粒を含まないようである。製作地（者）が異なるのであろうか。色調は35が非常に赤くなるほかは灰褐色～茶褐色となる。

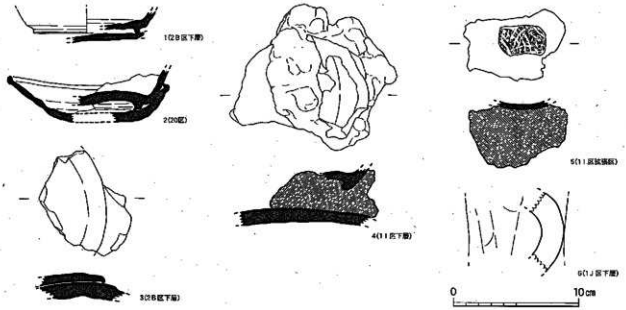
34・39～43は球形土錘でいずれも整形が雑である。最大径は1.9～2.6cmで、器高は1.3～2.2cm、重量は3.1～18.5gと非常にばらつきがある。灰黒色ないし灰褐色となる。

熔着土器（図版32、第56図）

1は杯蓋天井部外面に杯身が熔着する。杯蓋は天井部の1/4が、身は底部の2/3が残存している。



第55図　土錘実測図（1/2）



第56図　熔着土器実測図（1/3）

身の内面はわずかに灰を被るだけで、蓋の内面には灰被りは見られない。ただ両個体の間の狭い部分では、多くが飛んでいるようだが黄緑色釉が部分的に付着する。しかし、いずれの破面にも灰被りは見られず、焼成時の破損はかったようである。

2は杯蓋内面に杯身の高台が熔着する。顕著な自然釉は見られないが、杯身外面、杯蓋内面および同口端部付近の外面が黒色化する。これも焼成時に割れたと積極的に示す痕跡は見えない。なお、両個体とも胎土中の黒色粒が溶け出している。

3は甕の体部片に杯蓋の内面が熔着している。甕の内面には灰被りは認められず、露出した甕外面は黒色化、杯蓋外面は窯土粒の付着が認められるが黒色化するのみである。ガラス化した釉は杯蓋と甕外面の狭い隙間に充填している。このガラス化した自然釉は土器の破面には及んでいない。

4は窯土ブロックの相対する面に甕と思われる体部片・杯蓋口縁部片などと杯身底部片が熔着したもので、窯の整体が崩落したものであろうか。窯土の表面は部分的に溶融している。杯身は内底面が黒色化し、高台は窯土にめり込んでいる。甕体部はやはり内面（図下面、窯土の接していない面）が黒色化し、部分的に自然釉を被るが、ここでは破面にもガラス化した自然釉が付着する。

5は窯土に付着した甕の体部小片。窯土は表面が溶融するとともに発泡してスポンジ状に軽くなっている。土器は内面も破面にも自然釉は見られない。

フイゴ羽口（第56図6）

胎土は微砂粒を含むが概ね精良としてよく、器肉は灰赤褐色、内面は灰黄色、そして外面が灰褐色となっている。小片のために復原径には不安がある。

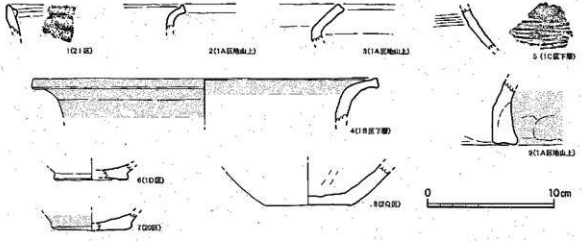
なお、関連して、今回紹介をしていないが鉄滓の小片がいくつか出土している。

縄文・弥生土器（第57図）

1は縄文晩期突帯文の小片で、内外面が灰黄色を呈する非常に胎土の粗い土器。やや内傾するようで、口端部やや下位に断面三角形となる突帯を付す。なお、下端は外傾する破面となっているが、

これは粘土紐接合部での剥離のようである。6は縄文晩期に属すると思われる底部片で、ほぼ2/3が残存する。若干上げ底となるもので、側縁が明瞭にくびれる。外面は熱を受けたものか灰赤褐色となり、内面は灰褐色となる。胎土は粗い。

2は甕口縁部小片。口縁部は緩く、大きく外反し、頸部内面は丸く、口端部は外傾する面をもって上方へ摘まれる。胎土が粗く灰黄褐色となる。3はく字状に外反する口縁部が直線的に延びて、端部はわずかに窪む面をなす。これも胎土粗く、器肉が黒色、器表が灰黄色となる。4は大きく開く口縁部の小片で、傾き・径ともに不安がある。端部上端を小さく摘み出し、その部分に赤色顔料の痕跡がわずかに残る。器形的に違和感があるが、胎土が非常に粗く、濃い黄褐色を呈することから弥生土器であることは間違いないと思われる。5は甕の肩部付近で、内面はハケメ、外面には粗い平行タタキが付される。外面は灰褐色、内面は灰黒色となる。5は1C区下層出土土器を図示したが、1G区下層出土の小片が接合する。7は底部が小さく膨らむもので、外底面は丁寧にヘラケズリを行うようである。外底面そこを見ると灰褐色となる中央付近に対して、外縁部では赤色顔料を塗布したような部分が見え、顔料は体部下端ではより明瞭となる。これも胎土が粗いもの。8は平底の底部から体部が大きく開くもので、これも砂粒が多く器表に浮き上がる胎土の粗い土器。外面は灰褐色となり、底部の一部が赤変し、内面は黒色である。9は胎土が粗く、底部は肥厚して幅広い面を作るが、この仕上げは敷物の痕跡以外見えず雑なものである。内面にはユビナデと思われる斜位の痕跡、外面下端には指頭痕が見え、また赤色顔料の塗布も明らかである。これについては本来の器形や所属時期は判らない。



第57図　弥生土器等実測図（1/3）

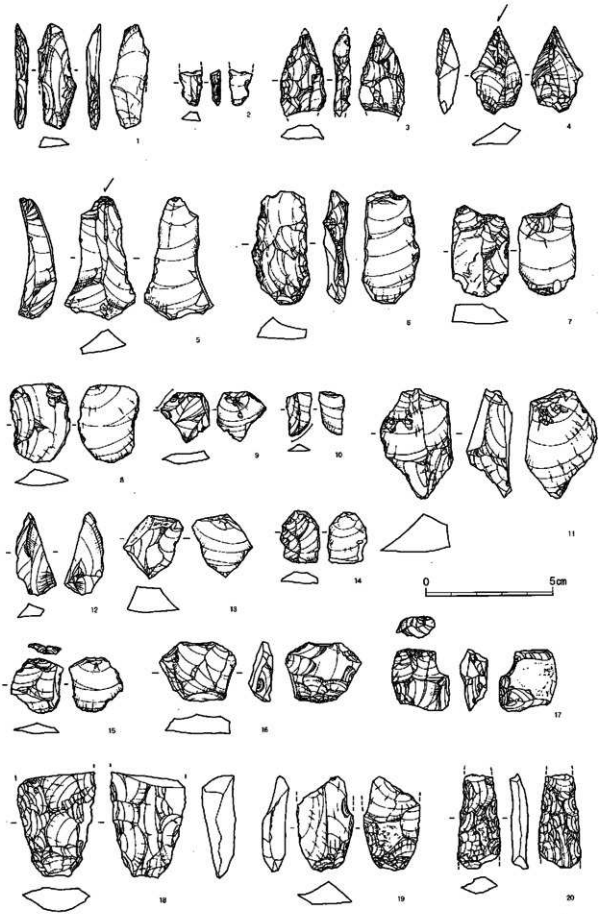
7）石器・石製品

今回の調査で量的に最も多い遺物は須恵器である。それは今までに紹介してきた内容を見れば一目瞭然であろう。風化の著しいサヌカイトや色鮮やかな珪質岩が出土することは発掘時にも気づいていたことであるが、発掘調査の主たる内容が包含層の除去であり、かつ地山には多くの礫が包含されるなど、小型の石器を発見するには悪条件であったといえる。そうした中でも以下に紹介する各種石器・石製品が採集されたことは、幸運であったと言えよう。なお、掲載図の関係から小型で細部調整の細かい旧石器・縄文時代の石器と粗製大型の石斧を分けて紹介する。

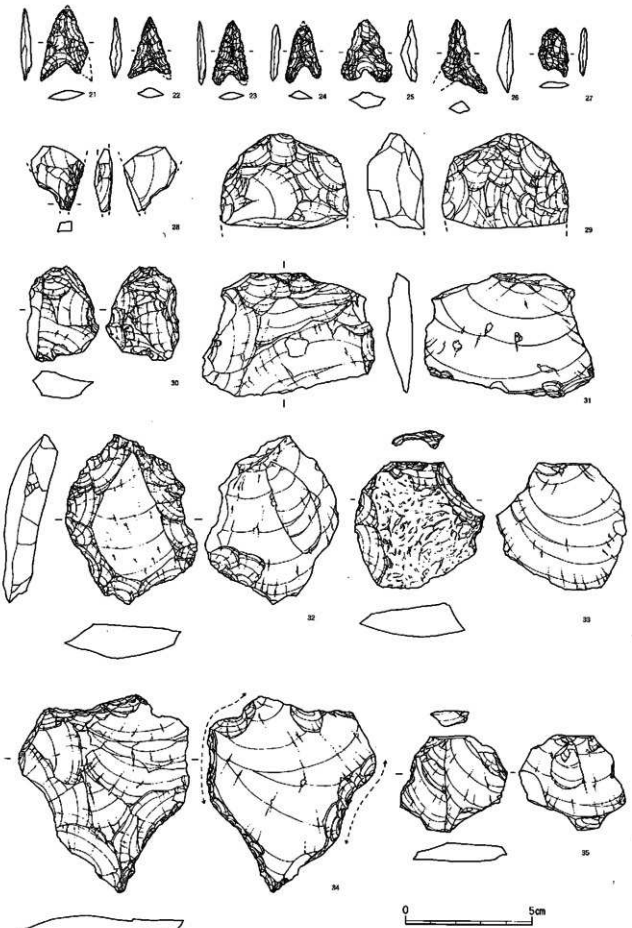
旧石器時代の石器（図版32・33、第58図1～17）

1から17は旧石器時代に属すると考えられる石器である。いずれも原位置を保っていないが、定形石器のほか、素材形状から想定される剥片剥離技術や選択石材などから取り挙げた。

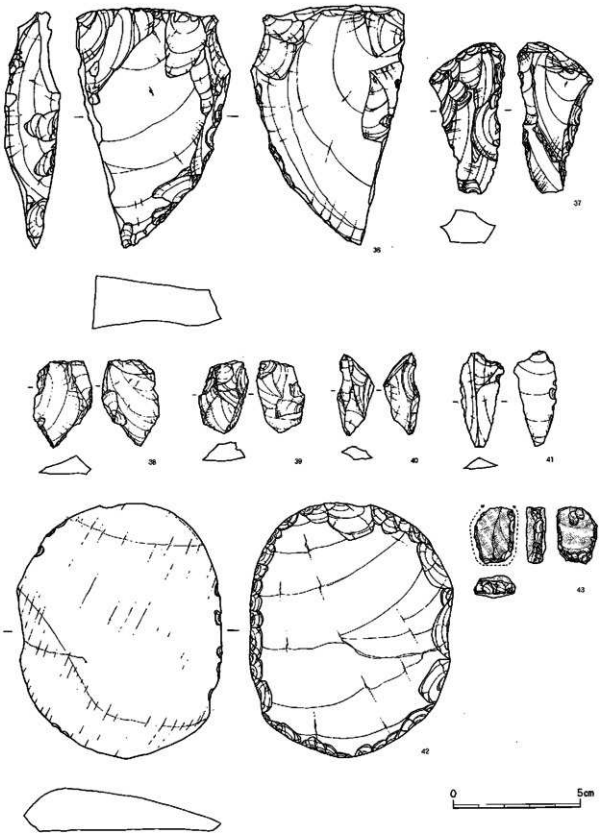
1は二側縁加工のナイフ形石器である。厚手の縦長剥片を素材とするが、背面の剥離軸はやや斜め方向となる。両側縁に刃潰し加工を施し厚手の刃部を確保している。左側縁から基部付近を欠損している。赤色の堆積岩系石材を使用。2は一側縁加工のナイフ形石器である。縦長剥片素材で先端部から胴部、基端部を欠損する。表面の風化は進んでおり、ローリングを受けている。針尾淀姫産と考えられる黒曜石石材を使用。3は槍先形尖頭器である。平坦剥離による両面調整を行っている。右側縁先端付近は裏面への平坦剥離によって厚みを減じている。先端部と胴部を大きく欠損する。ナイフ形石器文化後半期における角錐状石器の「扁平化」形態である。針尾淀姫産黒曜石石材を使用。4・5は彫器である。4は不定形の幅広剥片を素材とし、下端部に二次加工を施している。先端から側縁にファシットが一条入る。比較的良質の水晶を石材として使用。5は連続的に行われた縦長剥片剥離によって得られた剥片を素材としている。打面部の形状は不明。左側縁部に一条のファシットが入る。背面に残る自然面は円礫であり、風化は進んでいる。針尾淀姫産黒曜石石材を使用。6はスクレイパーである。無調整の単設打面を加撃し得られた縦長剥片を素材とする。右側縁部に刃部加工を施している。背面の調整と刃部加工の風化に若干の差が認められる。黄褐色の珪質岩石材を使用している。7は縦長剥片を素材とする二次加工剥片である。打面部は除去されており形状は不明。右側縁から上端部にかけて二次加工が施される。左側縁を欠損する。茶褐色の珪質岩石材を使用。8～10は微細剥離を有する剥片である。8は珪質岩製で両側縁に微細剥離が認められる。9は調整剥片の一端に微細剥離が認められる。腰岳産黒曜石を使用。10はポジ面を取り入れた縦長剥片の端部に微細剥離が認められる。打面から胴部を大きく欠損する。腰岳産黒曜石を使用。11は無調整の単設打面より加撃し得られた厚手の剥片である。赤チャート製。12は石核ポジ面を素材に取り入れた横長剥片剥離技術によって得られた剥片である。「瀬戸内技法」にも通じるが、その崩壊期である今峠型ナイフ形石器の時期に比定される。類例は水城跡33次下層などで認められる。13は自然面の稜部を加撃し、得られた幅広剥片である。針尾淀姫系黒曜石製。14は調整剥片で不純物が混じる。15は珪質岩製の調整剥片。16・17は石核である。16は単設打面より、作業面を併行に移動させ小型縦長剥片を連続剥離している。その後、楔形石器に転用されている。頁岩製。17は90度の打面転移を行い、小型縦長剥片を連続剥離している。傾斜のある自然面や無調整単設の打面を設定している。赤チャート製。16・17は小型ナイフ形石器等の素材剥片が得られたと考えられる。



第58図　石器・石製品等実測図1（2/3）



第59図　石器・石製品等実測図2（2/3）



第60図　石器・石製品等実測図3（2/3）

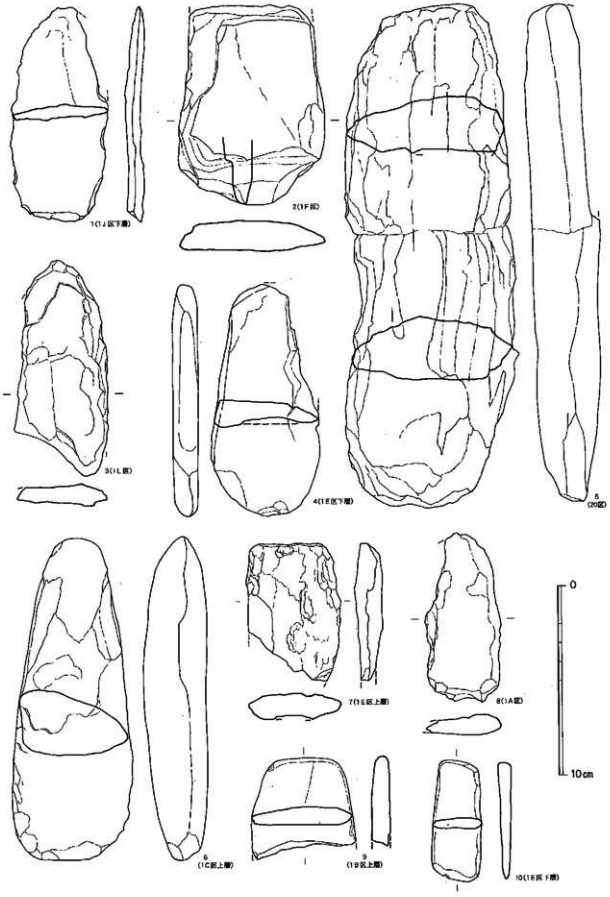
縄文時代以降の石器（図版33・34、第58図18～第60図43）

18から20は槍先形尖頭器である。18は平坦剥離による粗い両面調製によって仕上げられるが、厚みを残す。先端部から胴部を大きく欠損する。サヌカイト製。19は剥片素材の端部に基部加工を施す。素材は、石核小口に設定された作業面より行われた剥片剥離によって得られており、ナイフ形石器文化後半期の剥離技術にも通じる。ただし、素材に自然面を残すことや二次加工が軟質のハンマーによるものと考えられることから旧石器時代資料とは区別した。サヌカイト製。20は両側縁が併行し、細身に仕上げられる。両端部を欠損し、一部自然面を残す。サヌカイト製。これらの槍先形尖頭器は19が古くなる可能性を残すがその他については、縄文時代草創期以降、早期までの所産と見られる。21から27は石鏃である。21から24は比較的基端が尖り、丁寧な押圧剥離によって仕上げられる。基端から抉りまでが直線的なもの（21・22）や、抉りが深いもの（23・24）などがある。21はサヌカイト製、22・23・24は姫島産黒曜石である。これらは縄文時代早期前後に比定されよう。25は粗い調整剥離によって成形される。未製品であろう。26は尖頭部から側縁部中位にかけて直線的に至り、そこで大きく屈曲し直線的に基端部に至る。断面は錐状で厚手になる。縄文時代晩期以降の所産である。姫島産黒曜石製。27は側縁部に丸みを持ち小さな基端を持つ。先端部と左基部を欠損する。姫島産黒曜石製。28はドリルである。剥片の側縁部を加工し、錐部を作出している。両端を欠損する。石材は腰岳産黒曜石と考えられるが、風化は激しい。29は石斧の基部である。両面を整形しているが、風化が激しく研磨されているかは不明。玄武岩製で縄文時代草創～早期の所産と考えられる。30は楔形石器である。厚手の剥片の上下、両側縁部剥離面を残す。上下両端部は多少つぶれている。姫島産ハリ質安山岩製。31から37はスクレイパーである。31は幅広剥片の素材側縁に刃部加工が認められる。サヌカイト製。32は厚手幅広剥片の周縁に腹面からの加撃による刃部加工したラウンド・スクレイパーである。一部、主要剥離面にも加工が認められる。背面には自然面を残す。姫島産ハリ質安山岩製。33は厚手の礫状剥片の側縁に刃部加工している。転礫の自然面を持つサヌカイト製である。34は板状の剥片を素材とし、端部が尖頭状の形態をとる。刃部加工は上端、両側縁部に認められるが、左側縁部と右側縁上部については風化が新しく後世に再加工されたと考えられる。また、両面には、風化により流状の抵理が顕著に見られる。金山産サヌカイト製。35は厚手の幅広剥片を素材とする。両側縁に刃部加工している。サヌカイト製。

図番号		出土場所	長さ	幅	厚さ	重量(g)	材質
1	ナイフ形石器	1H区土層	4.10	1.50	0.50	3.40	姫島産黒曜石（赤チャート？）
2	ナイフ形石器	2G区土層	1.40	0.90	0.40	0.50	針尾瀬戸原黒曜石
3	槍先形尖頭器	1D区下層	3.25	1.80	0.70	3.50	針尾瀬戸原黒曜石
4	原槍	1I区下層	3.40	2.00	0.95	4.30	水晶
5	原槍	2W区	4.80	2.70	1.45	10.70	針尾瀬戸原黒曜石
6	スクレイパー	1C区下層	4.45	2.30	1.00	11.20	硅質岩
7	二次調工剥片	1C区下層	3.60	2.30	1.25	9.10	硅質岩
8	微細剥離を有する剥片	2G区	3.00	2.35	0.70	4.70	硅質岩
9	微細剥離を有する剥片	1G区上層	2.00	1.90	0.60	1.70	姫島産黒曜石
10	微細剥離を有する剥片	2L区	1.75	1.00	0.35	0.50	姫島産黒曜石
11	剥片	1J区攪乱	4.30	2.90	1.80	17.10	硅質岩
12	剥片	1C区下層	3.25	1.60	0.65	1.90	姫島産黒曜石
13	剥片	2B区下層	2.50	2.40	1.00	4.80	針尾瀬戸原黒曜石
14	剥片	2I区	2.00	1.60	0.50	1.50	針尾瀬戸原黒曜石
15	剥片	1C区下層	2.10	2.05	0.50	2.00	硅質岩
16	石核	1F区上層	2.35	3.00	0.95	7.50	黄岩
17	石核	1B区下層	2.40	2.30	1.05	6.60	赤チャート
18	槍先形尖頭器	1F区	4.10	2.90	1.30	15.90	サヌカイト
19	槍先形尖頭器	1I区下層	3.70	2.25	1.05	6.90	サヌカイト
20	槍先形尖頭器	1G区上層	2.60	1.70	0.70	4.30	サヌカイト
21	石鏃	2H区西壁地山上	2.80	1.85	0.40	1.60	サヌカイト
22	石鏃	1B区下層	2.35	1.65	0.45	1.30	姫島産黒曜石

図番号		出土場所	長さ	幅	厚さ	重量(g)	材質
23	石鏃	1I区下層	2.90	1.80	0.60	0.80	姫島産黒曜石
24	石鏃	2G区西ブチ	2.30	1.35	0.35	0.80	姫島産黒曜石
25	石鏃	1B区下層	2.40	2.00	0.65	2.30	姫島産黒曜石
26	石鏃	1C区上層	2.90	1.80	0.60	0.90	姫島産黒曜石
27	石鏃	1T区転倒区	1.90	1.15	0.35	0.60	姫島産黒曜石
28	ドリル	2J区	2.55	2.10	0.70	3.30	姫島産黒曜石
29	石斧	2B区地山上	3.75	5.00	2.25	47.20	玄武岩
30	楔形石器	2C区	3.60	2.50	1.20	11.40	ハリ質安山岩
31	スクレイパー	1B区下層	4.90	5.80	1.15	42.50	サヌカイト
32	スクレイパー	2C区	6.75	5.20	1.45	56.10	ハリ質安山岩
33	スクレイパー	1C区下層	5.00	5.20	1.50	38.40	サヌカイト
34	スクレイパー	1G区上層	7.70	6.70	0.90	45.80	サヌカイト（金山産）
35	スクレイパー	1T1T西半下層	3.80	4.20	0.55	17.00	サヌカイト
36	スクレイパー	1D区下層	9.30	5.10	2.25	117.80	サヌカイト
37	スクレイパー	1E石塊山	5.90	2.90	1.60	21.20	姫島産黒曜石
38	微細剥離を有する剥片	2B区上層	3.40	2.30	0.90	4.60	姫島産黒曜石
39	微細剥離を有する剥片	1I区上層	2.85	1.85	0.90	4.30	姫島産黒曜石
40	微細剥離を有する剥片	2L区	3.20	1.40	0.60	2.10	姫島産黒曜石
41	微細剥離を有する剥片	1C区下層	3.90	1.50	0.50	2.30	姫島産黒曜石
42	棒状形石器	1B区下層	10.00	9.00	1.80	193.80	石英岩
43	「火打ち石」	2B区下層	2.20	1.55	0.65	3.40	姫島産黒曜石

表1　旧石器・縄文時代石器一覧表（石斧を除く）



第61図　石器・石製品等実測図4（1/2）

36は大型サヌカイト剥片を素材とする。右側縁部に刃部加工が認められるが風化面は器体より新しい。37は楔状に使用した剥片素材石核スクレイパーに転用している。姫島産黒曜石製。38～41は微細剥離を有する剥片である。いずれも姫島産黒曜石を使用。38は固定打面より連続剥離された素材を使用する。39・40は楔状の石核より剥離されている。41は小口を作業面に設定した縦長剥片である。42は器種不明。ここでは「楕円石器」と報告する。分割された磨石の剥離面を中心に周縁に二次加工が認められる。ただし、一部の風化は新しい。

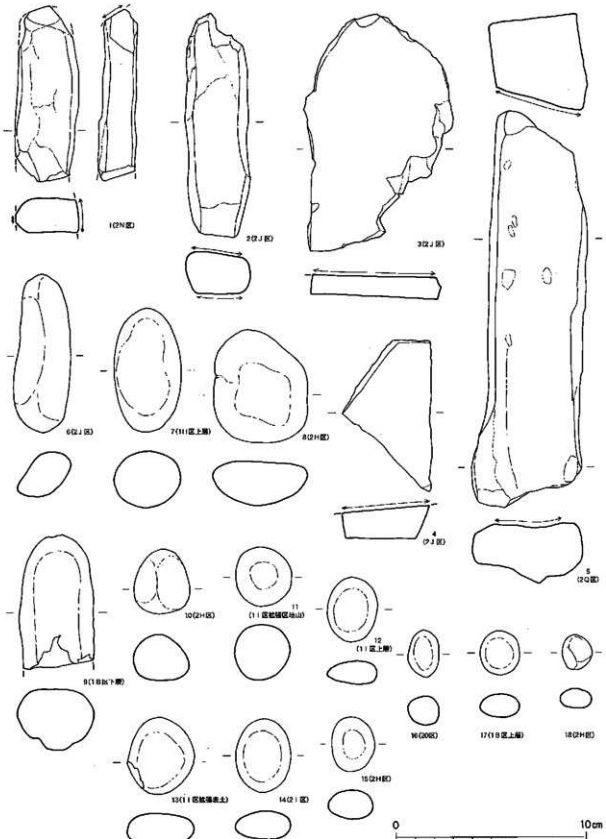
43は「火打石」と考えられる石器。小型縦長剥片の縁辺に裏面側よりパティナの新しい連続剥離が廻る。それぞれの剥離面の打点部は顕著な潰れが認められ、数度の剥離が行われたことが分かる。縄文期の剥片を転用した「火打石」の可能性が高い。8世紀代の包含層から出土している。

石斧（図版34～36、第61図）

石斧はいずれも緑色片岩製である。1は一見完存する石斧に見えるが、縁辺も含めて細部調整が殆ど見られない。刃部状に図示する下端は本来折損面で、これを利用したものであろう。表面に5㎜前後の瘤状隆起が多く見られる。長さ17.3cm、幅5cm、重さは48.2gである。2は刃部と考えている残片で、これも細部調整は非常に雑なようである。図左上からL字状に続く剥離は大きなものだが器形に無関係で意図的に行ったものか不明である。左側縁は表裏から浅い剥離を行い、刃部はほぼ上面のみから大きな剥離を行う。右側縁は断面位置付近を除いて調整を行っていないようである。残存長16.5cm、幅7.9cm、重量は197.6gである。3は刃部および左側縁を欠く。図示した面は比較的丁寧に細部調整を行うが、背面では殆ど剥離作業を行っていないようである。あるいはこの面自体が後世に大きく剥離したものであるかも知れない。残存長11.3cm、幅4.9cm、重量は69.2gである。4は図上端左側に磨った面があり、背面の刃部右側付近にも同様に磨った面があるのでほぼ本来の長さを保っているものと思われる。ただ、刃部では磨った面を打ち欠いて刃部を作り出すようである。図右側縁は折損するようで、左側縁は調整を行わず切断（？）面のままで終わる。残存長12.2cm、幅5.7cm、重量は120.6gである。5は全長26.3cm、幅9.1cm、厚さ3.6cm、重量1,145gを測る大型の石斧。頭部には磨ったような部分があり、左側縁の下半は剥離を行っているようだが、大部分は調整痕がよく解からない。6は断面が三角形に近くなるもので、長さ13センチ、幅6.3cm、厚さ3.4cm、重量は444gを測る。厚くなる図左側縁は自然面、右側縁も細部調整の痕は殆ど見えず、刃部も刃は鈍い。また、器表の風化が進み、剥離しやすくなっている。7は頭部とした部分が断面楔形となっていてあるいは刃部かも知れないが、これは細部調整によって作り出したものではなく切断面（破面？）のままのようである。図示した面は調整が殆ど見られず、むしろ背面から側縁形状を整えるようである。残存長7.2cm、幅4.9cm、重量は64.7gである。8は左側縁および刃部を欠損。これも細部調整はよく見えない。残存長8.9cm、幅4.1cm、重量45.6gとなる。

9・10は全体を磨いている。9は幅5.5cm、厚さ1cmと幅広のもので、丁寧とはいえないが剥離痕を一切残さなず、頭部・側縁まで磨いている。残存重量は44.9gである。10は完存する。長さ6.4cm、頭部幅2.1cm、刃部幅2.5cm、重量18.0gの小型品である。身の最大厚部は頭部で、0.7cmを測る。表裏面は刃部付近を特に丁寧に磨き、他の部位では必ずしも平滑化していないが、剥離の痕跡は消している。側縁および頭頂部も同様である。

砥石（図版36・37、第62図1～5）



第62図　石器・石製品等実測図5（1/2）

1は玄武岩かと思われる砥石で、石理にそって割れているが、残存する3面で使用が認められる。このうち最も幅広く残る使用面は触るとツルツルとしているが、全体に平滑化しておらず余り使用されていないようである。ほかの2面はよく平滑化、研磨されている。2は砥石としてよいものか躊躇するが、両側縁に比べて上下両面がやや磨られるようである。図上端を欠損し、方柱状の緑色片岩を使用する。3・4はいずれも灰白色安山岩を使用し、外見から見て同一個体の可能性が高い。これも器面全体が磨れているが、器表が平滑化するには至っていない。5は緑色片岩を用いた砥石で完存するようである。長さ20.8cm、幅5.8cm、最大厚5.0cmの歪な方柱状石材を使用し、使用面も図下端付近では横断面U字形に、その他の部位では直線的に傾斜する。また、1と同様に石理が現れる面を使用する。重量は911gを測る。

円礫（図版37、第62図6～15）

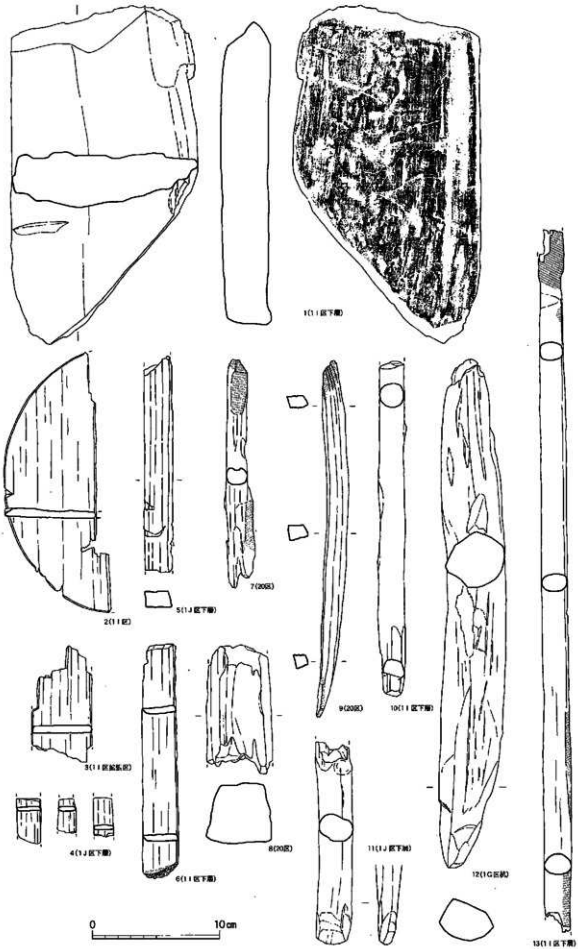
流路跡の礫床はバラスといってよい大小の角礫で、地山の黄褐色粘質土に含まれるものも同様である。背後の山塊は三郡変成岩からなり、その距離もごく短いことから自然の状態で円礫が存在するとは考えられず、持ち込まれたものであるに違いない。かつ、紹介するものの殆どは表面が非常に滑らかとなっていって、選別あるいは人為的な加工を受けたものと思われる。ただ、いずれも使用痕といったものは見えず、使用の目的は不明である。

6は灰緑色の緑色片岩で、形状はやや扁であるが全面が滑らかとなる。長さ8.3cm、重量は94.8gである。7は灰白色石灰岩のようで投弾のような形状となる。長さ6.5cm、重量は92.3gを測る。8は濃い小豆色といった色の形状不整の頁岩であるが、やはり表面は全体に滑らかとなる。長軸5.9cm、重量は103.6g。9は表面が灰白色に近い緑色片岩で、部分的に剥離し、他例ほどではないがある程度滑らかとなる。棒状で折損するが、残存長7.0cm、重量は144.4gである。10は乳白色に近い地に暗茶褐色となる部分が入る石灰岩で、形状はやや扁であるがよく円滑化する。長軸は3.4cm、重量は30.7g。11は暗灰色～灰褐色を呈する緑色片岩と思われる礫で、やや扁な球形となる。径3.0cm前後で、重量は37.4gを測る。12は黄白色不透明の石英で、長さ3.4cm、重量は15.0gである。厚さが1.2cmと薄い。13も緑色片岩であろう。表面が灰白色から灰黒色に近い色に順次弧状に変化し、形状も相まってちょうどハマグリのように見える美しい礫である。一部を欠くが、長さ4.0cm、重量は32.7gである。14は緑色片岩であろうか。表面が灰白色～暗灰色と弧状に変化してこれも貝殻のようである。長さ3.8cm、重量は21.9gである。15は緑色片岩で表面は灰色であるが、白色の石英脈が入るとともに灰黒色に近い嵌入物（？）が細く縦横に走り、やはり美しい石である。長さ2.9cm、重量は13.5gである。16は白濁する石英で、長さ2.5cm、重さは7.7gを測る。17も石英であろう。半透明で大部分が茶褐色となる。長さ2.3cm、重さ8.0gである。18は紹介する中では最も小さなもので、長さ1.8cm、重さ3.6gである。形状はやや不整であるが、やはり非常に円滑となる。白色となる部分と、半透明淡茶褐色となる部分があり、やはり美しい。

8）木製品（図版38、第63図）

多くの木製遺物が出土したが、確実に製品といえるものは少なく、流木や株、種子といった自然遺物が殆どである。その中で、加工痕等のあるいくつかを紹介する。なお、図版に紹介した種の子は遺存状態が悪く、図示していない。

1は板状材で厚さは最大で7.4cmほどある。表面は表裏ともに平滑化しておらず、図下端は斜めに



第63図　木製品等実測図 (1/3)

切ったように直な面となるが、工具痕は判らない。また、図上端は両側から削ったように尖るもののここも工具痕は不明である。拓本に示したように×状のものをはじめとして多くの細い線刻（傷）があるが、規則性といったものは認められない。2は曲げ物の底板である。図左端の縁辺に切り込みがある。3は厚さ7mm、幅5センチ弱の板状材で、図右側縁は丸く加工されるようである。4も板状材の残片で、厚さは4mmほどである。5は角柱状の材。6は下層出土の板材で、図上端は斜めに削られたようになり、下端は焼け焦げる。7は丸太状の材で明瞭な加工痕は見えないが焼け焦げている。8は角柱状の材で、四面はやや不整であるが面取りを行ったようである。9も角柱状の材を思わせるが、形状が各部で異なることから偶然に生じたものであろうか。これも両端部が焼け焦げる。

10は杭で、頂部に切断の痕跡を残す。図下部も鋭利な刃物で削ったようであるが先端を欠く。身は形状が整っているが、加工痕はよく分からない。11も杭で、これは上半を折損する。身は楕円形を呈し、皮が付いている。先端部をくさび形の形状に削る。12も杭で、これは樹皮を残していない。断面形状では面取を行ったように見えるが、積極的にそうといえる材料はない。13は棒状品。図上端付近がやや太く、柄状に加工されたものであるかも知れないが、明確な加工痕は見えない。大部分が幅2cm、厚さ1.5cmほどの楕円形となり、上端の断面図を作成した付近は側縁を面取したようにも見える。図示したように、上端および下方に焼け焦げた部分がある。図上下を欠損するが、残存長は約55cmを測り、真っ直ぐな棒状品であることから加工されたことは間違いないものと思われる。

9）小　結

以上が第一次調査で得た内容である。遺構は土坑2基と若干の柱穴に過ぎなかったものの、流路跡およびその周辺の包含層から出土した遺物には目を見張るものがある。出土遺物には後期旧石器時代から縄文時代前半期にいたる石器群、縄文晩期から古墳時代中期にいたる断片的な土器片・石器などが出土するが、量的に圧倒するのは奈良～平安時代の土器群である。

出土した古代土器の概略を以下に示す。

須恵器

杯蓋：大部分はヘラケズリのままで終わる低平な天井部を有し、口縁部が大きく屈曲して鳥嘴状の口端部となり、細部が甘い作りものである。また、新しい様相としてつまみをもたず、口端部を折り返すように作るもの（20区5）がある。

無高台杯身：底部は平底に近いが、体部界に稜をもつものは少ない。体部が緩やかに内彎しつつ口縁部が小さく外反するもの、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に開くものが大部分である。1II区33・34のように明瞭な平底を有し、体部が内彎気味であるとしてもなお直線的に開く例もある。

高台付杯身：底部外縁・体部界に接して直立する断面方形もしくは低い高台を巡らせるものが多く、外底面はヘラキリのままで終わるあるいはその後に雑に撫でるものが多い。体部から口縁部にかけては下端部はなお丸みをもつが、以上は内彎気味あるいは直線的に立ち上がって、口縁部はわずかに外反する。1J区10・20区81などの体部下位に稜をもつものは金属器を模倣した特殊な器形である。

皿：口縁部は直線的に開くものと外彎するものとがあるが、それぞれ立ち上がり角度の高低にも差異がある。外底面はほぼヘラキリのままで終わり、一部に撫でるものもある。底部か

ら体部への移行は杯身と同様2種がある。

その他：高杯は概ね口縁部が直立し、端部に水平面をもつが、2B区21のように口縁部が大きく外傾して非常に浅くなるものもある。脚部については径の大小が見られる。鉢はいずれも体部から口縁部ににかけて直行する。甑も同様の形態となるが、外面に突帯を付すものがある。確認できる長頸壺は寸胴形で口縁部はすべて段を付けて受け口状とする瓶子形のものである。算盤玉形の体部・水平に折り返す口縁部をもつ器形は見られない。

土師器

ここでは須恵器と共通する器形・技法で作られて酸化炎焼成するものを除く。器種は無高台の杯身が殆どで、甕は細片化したものが多い。

無高台杯身：杯身は須恵器と同じ形態を示し、外底面を見る限りではヘラキリ痕をそのまま残すなど技法的にも共通する。須恵器窯に入れればそのまま須恵器となるのであるが、1I区出土例をはじめとして、同一個体で同一色に焼き上がらない土師質となる例が多く、このことは「須恵器」を焼こうとしたものでないことを示している。ちなみにこれらに見られる幅の狭い白色系や黄色系の変色帯は当地の瓦器椀のそれに似る。

高台付杯身：量的に多いとはいえないが、土師器の中では一定程度を占める。1G区33・2B区36のように黄白色を呈し平高台をもつものと通常の高台をもつものがある。通常の高台は大多数の須恵器高台より高く、形状が整う。黒色土器に似て外方へ踏ん張る。

甕：胎土が粗く、器表が茶褐色に発色、口縁部を直線的あるいは内彎気味に外反させて端部に面を付す、あるいは丸く終わるものが多く出土するが、いずれも細片化する。口縁部内側を大きく突出させる2G区8の様な形態は少ない。

その他

黒色土器：無高台の杯身・高台付椀（杯）があり、内面および口端部付近の外面を黒色化する。高台は外方へ踏ん張るがさほど高くはない。胎土が精良で薄手に作られるものと、胎土が比較的粗く、肉厚となるものがあるが、いずれも残片である。ちなみに瓦器椀は出土していないか、あってもごく小片である。

外来系土器：京都洛西で作られたと思われる椀が2H区で出土し（5）、器形は11世紀前後とされる西長尾5・6号窯に似る。1A区出土の緑釉陶器小壺は胎土が非常に精良で、酸化炎で陶器質に焼成されるものであるが、同様の器形は9世紀代のものとされている。ほかの2点の小片も酸化炎焼成され、これらは軟質である。2B区35もまた異質な土器である。

その他：明らかに中世に下る輸入陶磁器や土師質・瓦質鍋類が若干出土するが、供伴すべき土師器小皿類は非常に少ない。

以上、当遺跡を構成する主たる遺物である須恵器・土師器については8世紀後半から9世紀前半の時期に大部分が収まるものと思われる。また、中世的な土師器皿類が皆無に近いことはその頃までにこの地域がほぼ利用されなくなった、あるいは周辺の環境が大きく変わったことを暗示する。

木簡・墨書土器や萬年通宝、緑釉陶器といった特殊な遺物は、付近に古代官衙的遺跡が存在したことを推測させるが、その場合に第一に候補となるのは『延喜式』に記された「刈田駅」である。現大字苅田は大字雨降の南に隣接する地名であるが、調査対象地内にも苅田の地名が一部入り込んでいる。取石神社が鎮座する視界のきく小山を控え、調査区北の松山に続く低台地上に駅本体あるいは付属施設のような存在を十分予想しうると言えよう。

2. 第二次調査（主に丘陵部の調査）

1）概要

第二次調査区は、Ⅰ～Ⅳ区に分かれる。検出した遺構は、近世の遺構で土坑4基、流路跡1条、奈良時代の遺構で石組1基、石だまり1基、溝1条、大溝1条、他に不明竪穴1基と少ない。遺物の大部分は、Ⅱ区の奈良時代の包含層の出土で、全体でパンケース11箱分である。調査面積は、Ⅰ～Ⅳ区の合計で1860㎡である。それぞれの概要は、以下のとおりである。

Ⅰ区

Ⅰ区は、第一次調査時に土置き場となっていた部分を調査した地点である。谷となる低地部分で、調査面積は180㎡である。一部は第一次調査区と重なっており、第一次調査時の土坑や流路跡への落ち部を確認している。第一次調査と同様の奈良時代の包含層の検出が目的であったが、その包含層は連続しておらず、また第二次調査では新しい遺構は全く検出されなかった。遺物は、中・近世等の遺物も含む灰褐色包含層から少量ながら主に須恵器が出土している。このⅠ区は湧水が著しく、丸一日で冠水するような状況であった。

Ⅱ区

Ⅱ区は第一次調査地点の北側に隣接した台地上に位置し、北東・南西の軸で細長く、調査面積は710㎡である。調査区の南半全面にわたって奈良時代の包含層が広がっている。調査区北半になるにつれ包含層は薄くなり、やがて表土直下から礫混じりの黄褐色土基盤層が現れる。奈良時代の包含層は、主に黒褐色土の上層と主に暗茶褐色土の下層に分かれる。包含層中のベルト1～7により、Ⅱ区はA～Hに区切られている。主な遺構は土坑2基、流路跡1条、溝1条、石組1基、石だまり1基、不明竪穴1基である。また、多数のピットを検出した。

地形は、全体的に第一次調査区へ向けて北西から南東の方向で緩やかに傾斜している。第一次調査区との境界付近で急な勾配となるが、この斜面上にも部分的に包含層の堆積が認められ、傾斜はある程度旧地形を反映していると考えられる。また、ベルト6、7の最高所で基盤層の立ち上がりが認められ（第72図参照）、北側へやや強く高まる旧地形が想定される。

Ⅲ区

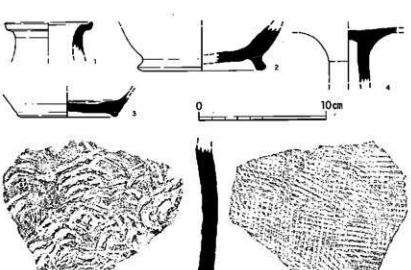
Ⅲ区はⅡ区の北側に位置し、4カ所の調査区の中で最高所にあたり、調査面積は400㎡である。遺構は、奈良時代の大溝が1条あるのみで、ピット等含めて他の遺構は一切存在しないため、大きな削平を受けていると考えられる。遺物は、主に須恵器・土師器が出土している。

Ⅳ区

Ⅳ区は第一次調査区やⅠ区の南側に位置し、調査面積は570㎡である。表土掘削のみは第一次調査の時点で終了していた。主な遺構は近世土坑2基のみで、ピットもごくわずかである。奈良時代の須恵器も出土するが、その時期の明確な遺構は検出されていない。南東端では、表土掘削時に遺物が若干まとまっていたため、一部他より検出面が高くなっている。

Ⅰ区での基本層序は第一次調査区に準ずる。Ⅱ区は、北側高所では現地表面から10～30㎝のほぼ表土直下で礫混じりの黄褐色基盤層に達する。南側の急勾配となる斜面付近では、現地表より約40㎝程度で暗灰褐色の中・近世の遺物を含む暗灰褐色上の包含層となる。更に15㎝程度

ドがると奈良時代の包含層となる。奈良時代の包含層は主に黒褐色土主体の上層と暗茶褐色土主体の下層に分かれる（第72図参照）。以下は地山で、暗赤茶褐色土、さらに礫混じりの黄褐色土となるが、包含層直下で黄褐色土となる部分もある。Ⅲ区では、現地表下20～30㎝程度のほぼ表土直下で地山の暗赤茶褐色土となる。西端の検出面が低くなる部分では、表土に次いで40㎝程度の淡茶褐色土層があり、以下は溝の覆土、地山で礫混じりの黄褐色土となる（第84図大溝土層図参照）。Ⅳ区は現地表から40㎝程度の厚さの表土、耕作土以下で地山である黄茶褐色土となる。地山は部分的に礫を含んでいる。



第64図　Ⅰ区出土器実測図（1/3）

なお、第二次調査は第一次調査と異なり、調査地点が複数にわたることから、以下では遺構・遺物については各調査区ごとにまとめている。また、遺構番号についても、各調査区ごとで独立した番号を使用している。

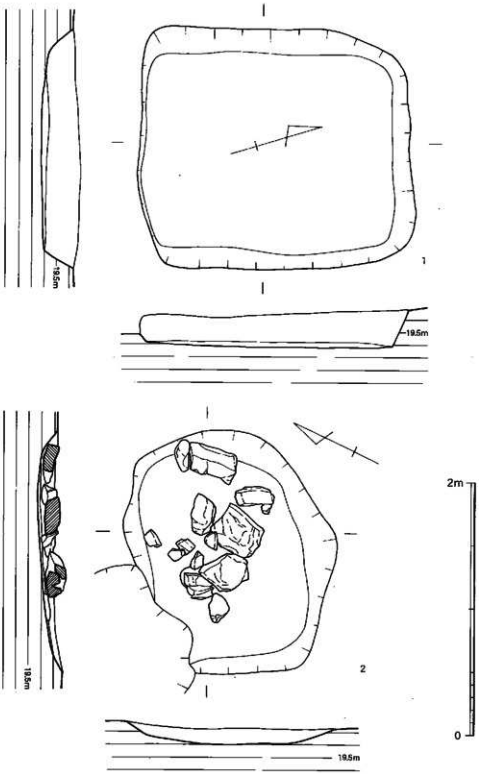
2）Ⅰ区の出土遺物（図版56、第64図）

1～5はすべて須恵器であり、中・近世の遺物も含む包含層からの出土である。1は長頸壺の口縁部である。焼成は非常に堅緻であり、灰白褐色を呈す。内外面ともに回転ナデを施す。2は長頸壺の底部で高台を有す。摩滅が極めて著しく、焼成は非常に甘く黄灰褐色を呈す。3は杯身の底部で高台はほとんど剥落するが、一部は残存する。焼成は堅緻で淡灰褐色を呈す。摩滅は著しいが、内面の一部に回転ナデの痕跡を残す。4は高坏の杯部と脚部の接合部付近である。焼成は堅緻で、外面は黒灰褐色で内面は灰褐色を呈す。内面はやや摩滅するが、外面は回転ナデを施す。5は大甕の胴部破片である。焼成は堅緻で、外面は灰を被り黒灰褐色、内面は淡灰褐色を呈す。外面に格子タタキ痕、内面に同心円文当具痕を残す。

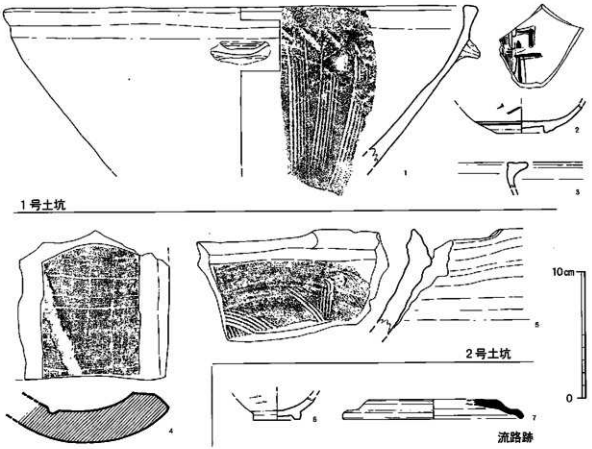
3）Ⅱ区の遺構・包含層および出土遺物

1号土坑（図版42、第65図）

1号土坑は、ベルト3の北側で検出し、平面形は方形プランで壁の立ち上がりはやや急である。一部攪乱を受けるが、大きさは長軸で218㎝、短軸で190㎝を計り、検出面からの深さは30㎝



第65図　Ⅱ区1・2号土坑実測図（1/30）



第66図　Ⅱ区1・2号土坑および流路跡出土土器実測図（1/3）

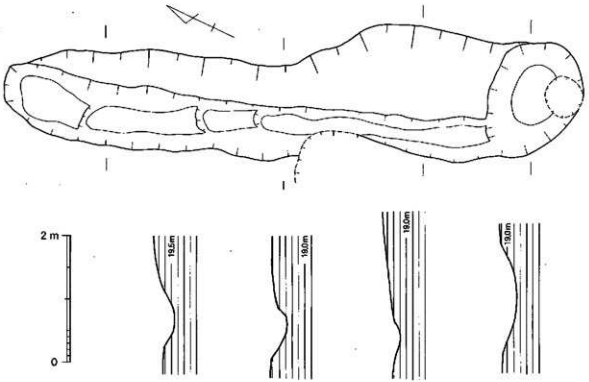
程度である。覆土は灰褐色の粘質土で、遺物は擂鉢と陶磁器が出土している。17世紀前半頃と考えられる。

出土遺物（図版55、第66図1～3）

1は素焼きの擂鉢である。焼成は良好で、外面と内面口縁部付近は淡橙黄褐色で、残りの内面は黒褐色を呈す。内面の擂目のやや上部には、斜行する沈線を全体的に施しているようである。また、外面上部には小型の耳を貼り付ける。体部外面にはケズリの痕跡が微かに見られる。2は磁器皿で、底部は碁笥底となっている。内外面ともに一部に文様を残すが、欠失部が多く全体を把握することはできない。3は陶器甕の口縁部で、内外面ともに施釉され黒茶褐色から暗茶褐色を呈す。

2号土坑（第65図）

2号土坑はDで検出し、1号土坑の東側に位置する。平面形は不整方形プランで、長軸で193㎝、短軸で167㎝を計る。検出面からの深さは15㎝程度と残りは悪く、非常に緩やかな傾斜で落ちている。床面よりわずかに浮いて複数の礫が検出されているが、意図的に配置したものとは思われない。覆土は灰褐色の粘質土である。遺物は瓦と陶器擂鉢が出土している。17世紀前半頃と考えられる。



第67図　Ⅱ区流路跡実測図（1/60）

出土遺物（図版66、第66図4・5）

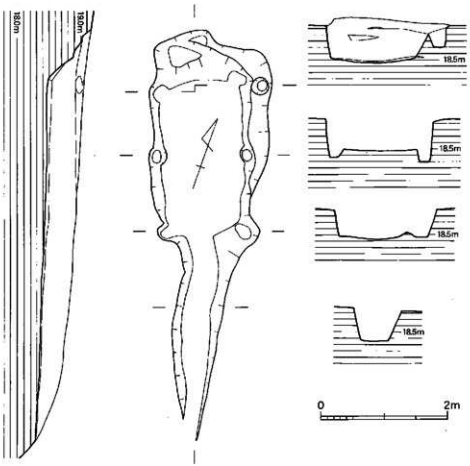
4は上野、高取系の擂鉢の片口部付近で、細砂を多く含み、焼締めである。非常に堅緻で、暗赤茶褐色を呈す。内外面ともに回転ナデを施し、内面に一部擂り目が残存する。5は平瓦で、非常に堅緻であり、表面は燻されて暗青灰色を呈す。外面はナデが施され、内面は布目が鮮明に残り、ケズリ、ナデが施される。また内面には、製作途中で縄等に強く押しつけられた結果生じたような沈線が残る。

流路跡（図版42・43、第67図）

流路跡はEで検出し、地形的に高所の北側から低い第一次調査区方向へとまっすぐ延びた軸となっている。急勾配となる斜面の手前で、底面が一段深くなる部分があり、そこで遺構は途切れている。長さは約9m程度で、幅については撹乱を受けているが、残存部の最大で2m程度である。底面の幅は概ね20～35cmと狭く、壁の落ち込みは非常に緩やかで、人為的な掘削によるとは考えにくい。北端と南端の検出面の高低差は78cmである。覆土は灰褐色土で、出土遺物は大半が流れ込んだと思われる須恵器の小片であるが、陶器碗の底部が出土しており、遺構の時期は近世と考えられる。

出土遺物（第66図6・7）

6は上野、高取系の陶器碗底部で、ケズリ出しによる高台を有す。外面は無施釉で暗茶褐色を呈し、内面は施釉され暗緑色を呈す。7は須恵器杯蓋で、出土須恵器の大半が小片の中で唯一図示できるがものである。焼成は堅緻で青灰色を呈し、回転ナデを施す。



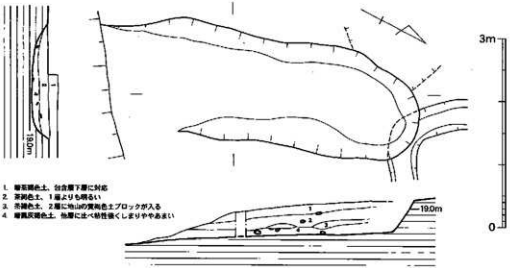
第68図　Ⅱ区不明竪穴実測図（1/60）

不明竪穴（図版43、第68図）

不明竪穴はHで検出し、平面形は、長方形の本体に入口部と目される細長い張出部が付属するプランである。長軸は張出部を含めて6m50cm程度で、短軸は2m程度である。検出面からの深さは70cm程度である。壁の立ち上がりはやや急である。四隅と両長辺の中央部の計6ヶ所には、柱を立てたような形状が認められる。遺物は出土しておらず、覆土の様子では遺構の時期は近世以降と考えられる。

溝（図版44、第69図）

溝はGで検出され、石組と石だまりの間に位置し、一部は石組や撹乱に切られる。溝の軸は、地形に則した形で高所から低い第一次調査区へ向く。高所側は、石組の下層付近から突然始まっており、その端部の掘り込みも深く、壁の立ち上がりもしっかりしている。一方、第一次調査区側へ急激に傾斜する付近で、徐々に途切れていく。長さは約5m程度、幅は約170cm程度で、検出面からの深さは約50cm程度である。覆土は主に2層に分かれ、上層は明茶褐色土、下層は暗黒灰褐色土で、中間に黄褐色地山ブロックが混じる層も部分的に見られる。また、埋没後の包含層暗茶褐色土の堆積が確認できる。遺物は、奈良時代の須恵器・土師器が出土している。



第69図　Ⅱ区溝実測図（1/60）

出土遺物（図版50、第71図1～23）

1～3は須恵器杯蓋、4～10は高台を有する須恵器杯身、11～16は高台のない須恵器杯身、17・18は須恵器皿、19～22は土師器杯身、23は土師器甕の口縁部である。

1は下層出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。外天井部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。焼け歪でやや変形しており、内面に重ね焼痕が残る。2は灰茶褐色を呈し、焼成は堅緻である。外天井部は回転ヘラケズリの後にナデ、他は回転ナデを施す。天井部は高い。3は天井部に輪状摘みを貼付する。外面が淡青灰色、内面は黒灰褐色を呈し、焼成は堅緻である。内外面とも回転ナデを施す。

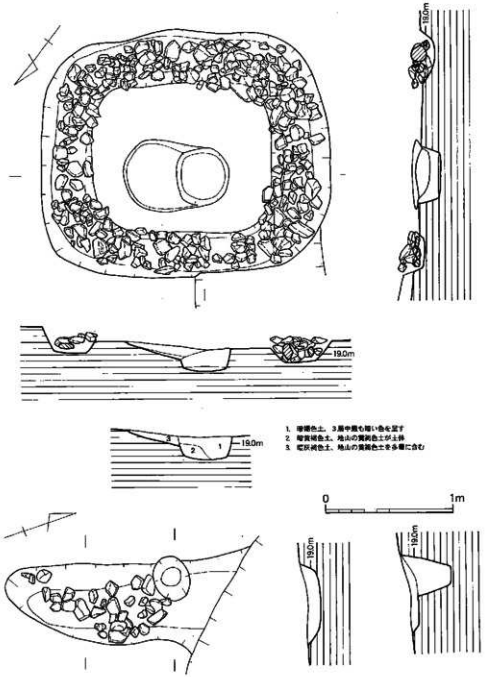
4は外面が暗灰褐色、内面は淡灰茶褐色を呈し、焼成は堅緻である。内外面とも回転ナデを施す。5は下層出土で、外面は黒灰褐色、内面は淡青灰色を呈し、焼成は堅緻である。内外面ともに回転ナデを施す。6は、高台自体は残存していないが、剥落した痕跡が認められる。焼成は甘くやや軟質であり、黄灰褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。7は下層出土で、焼成は甘くやや軟質である。黄灰褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。8は下層出土で、焼成は若干甘く、器表はやや摩滅し淡青灰色を呈す。9の焼成は堅緻で、青灰色を呈す。外底部はヘラ切り後未調整で、他は回転ナデを施す。10の焼成は堅緻で、外面は暗青灰色、内面は淡青灰色を呈す。内外面ともに回転ナデを施す。底部付近の体部の立ち上がりはやや内湾気味である。

11の焼成は甘く軟質で、暗褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。12は下層出土で、焼成は甘くやや軟質である。淡白灰褐色を呈し、器表は摩滅が激しい。13の焼成は若干甘く、白灰褐色を呈す。外底部はヘラ切り後未調整で、他は回転ナデを施す。14の焼成は甘く軟質で、黒褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。15の焼成は甘く軟質で、暗灰茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。16の焼成は非常に甘く軟質で、黄灰褐色を呈し、器表の摩滅は激しい。

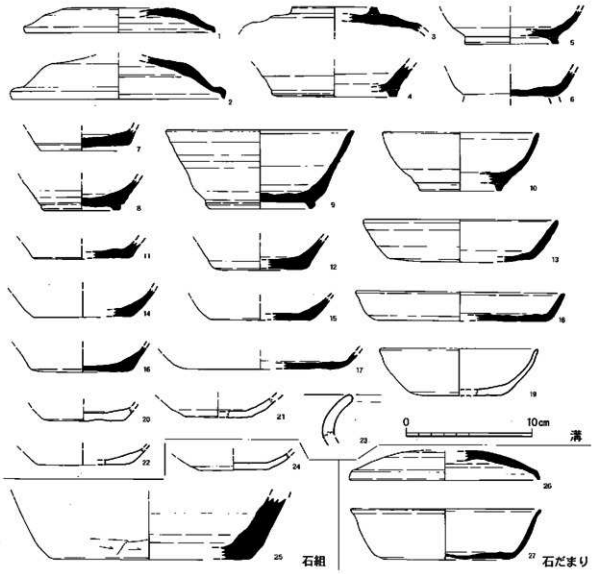
17の焼成は堅緻で、灰茶褐色を呈す。底部内外面とも不定方向のナデを施す。18の焼成は堅緻で、淡青灰色を呈す。内外面ともに回転ナデを施す。

19の焼成は極めて甘く、黄白褐色を呈す。器表の摩滅も極めて激しい。20の焼成は極めて甘く、橙黄褐色を呈す。器表の摩滅も極めて激しい。21は下層出土で、焼成は極めて甘く、黄茶褐色を呈す。器表の摩滅も極めて激しい。22は、焼成は良好で赤橙褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。19～21は、いずれも小片で判然としないが、形状等から焼成に失敗した須恵器の可能性も考えられる。

23は、口縁部のみがわずかに残存している。焼成はやや甘く、黄茶褐色を呈す。器表はやや摩滅する。



第70図　Ⅱ区石組および石だまり実測図（1/30）



第71図　Ⅱ区溝、石組および石だまり出土土器実測図（1/3）

石組（図版45、第70図）

石組はGで検出し、長方形プランで廻る浅い周溝部と、その中に位置するピットからなる。長軸は229cm、短軸は195cmで、周溝部の幅は40cm程度で検出面からの深さは20cm程度である。周溝部は全面に角張った礫が詰まった状態で、礫のほとんどはこぶし大に近いものである。この遺構は、一部で包含層暗茶褐色土を切り込んでおり、覆土は包含層黒褐色土に近い。遺物は、土師器杯底部と須恵器長頸壺の底部付近が周溝部から出土しており、中心のピットでは土師器・須恵器が出土するが、ごく小片のため図示できない。何らかの基礎や墓といった可能性も考えられるが、検証材料に乏しく遺構の性格は判然としない。

出土遺物（図版50、第71図24、25）

24は土師器杯底部で石組周溝部の出土である。焼成は良好で橙茶褐色を呈し、内外面ともに摩滅が激しい。25は須恵器長頸壺の底部付近で、石組周溝部の出土である。焼成は堅緻で、青

灰色を呈す。内面は回転ナデが施され、外面は回転ヘラケズリの後にナデが施され、下端はさらにケズリによって調整されている。

石だまり（図版45、第70図）

石だまりはGで検出され、石組の南西に位置する。細長い溝状のプランであるが、撹乱によって途切れており、全体の形状は不明である。長さは190cm程度残存しており、幅は55cm程度で検出面からの深さは15cm程度と浅く、非常に緩やかに落ちている。石組と同様に角張った礫が検出されたが、石組と比してまばらな状態である。ピット部分は、この石だまり自体に伴うものかどうかは不確実である。覆土は包含層暗茶褐色土に近い。遺物は、須恵器杯身・杯蓋が各1点ずつ出土している。

出土遺物（図版50、第71図26、27）

26は須恵器杯蓋である。焼成は堅緻であり、青灰色を呈す。調整は、内面は回転ナデ、外面では口縁部付近は回転ナデを施すが、上半は回転ヘラケズリを施す。27は須恵器杯身である。焼成は堅緻で、内外面ともに口縁付近は灰白褐色で以下は黒褐色を呈す。内外面ともに摩滅が激しい。器壁が全体的に非常に薄い点が特徴的である。

奈良時代の包含層（図版46、第72図）

奈良時代の包含層は、Ⅱ区南半に全体的に広がっており、主として黒褐色土の上層と暗茶褐色土の下層に分かれる。ただ、7層の暗褐色土も上層とほぼ同様で、3層の暗黄茶褐色土は下層とほぼ同様と考える。奈良時代の遺構面は、検出面や覆土の様子等から下層上面と下層下の地山面のものと双方認められる。ベルト6・7では上層の堆積は見られないように、調査区東側のG・H付近では上層の残存状態は部分的でわずかなものであった。

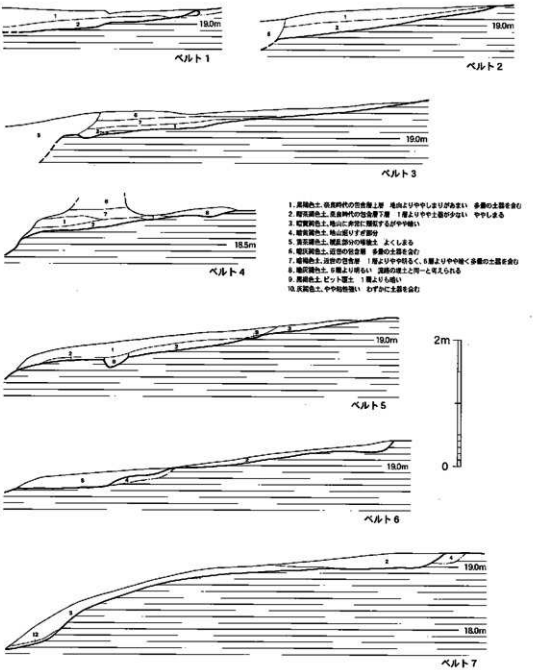
遺物は上下層ともに多量に出土するが、下層の方がより多い。残存状態のよいものでは圧倒的に下層に集中し、上層は細片が目立っている。特にEとGを中心とした範囲に集中している。Gにおいては、北端の最高所で包含層が途切れ、基盤層の立ち上がりから段差が生じている付近での出土が多い。その範囲では、部分的に包含層に焼土ブロックが含まれる点が特徴的である。更に南側の急勾配となる斜面部分でも、Gに対応する範囲で包含層の堆積が目立ち、遺物が他の斜面部分よりも多く出土し、斜面下方の灰褐色土からも遺物が出土する。

第二次調査の出土遺物の大半が、この包含層に集中しているが、量だけでなく製塩土器や上錘、銅鋺など第二次調査の他の地点では出土していない特殊な遺物の存在が注目される。

包含層出土須恵器（図版50～52、第73～76図）

1～21は杯蓋、22～36は高台のない杯身、37～67は高台を有する杯身、68～81は皿、82～86は長頸壺、87は短頸壺蓋、88～90は甕、91・92は高坏、93は鉢形の鉢、94～96は甑、97は横瓶である。

1はF上層出土で、焼成は堅緻で暗青灰色を呈す。内外面ともに回転ナデを施す。2はE下層出土で、ほぼ完形である。焼成は非常に堅緻で、暗青灰色を呈す。外面はナデ、内面は回転ナデを施す。内面には一部スラグが多量に付着し、重ね焼きの痕跡が残る。3はC下層出土で、焼成は堅緻で灰褐色を呈す。外面は、天井部に粗雑なナデを施すが若干回転ヘラ切り痕が残り、

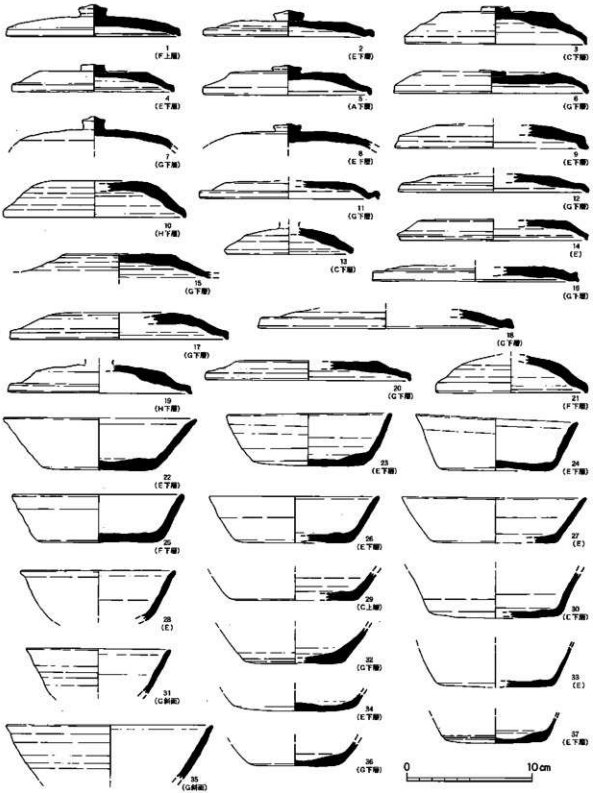


第72図　Ⅱ区ベルト1～7東壁上層実測図（1/60）

以下は回転ナデ、内面は回転ナデを施す。天井部は高い。4はE下層出土で、焼成は堅緻で暗青灰色を呈す。外天井部が未調整で回転ヘラ切り痕を残し、以下は回転ナデ、内面は回転ナデ後不定方向のナデを施す。天井部はやや平坦である。5はA下層出土で、焼成はやや甘く淡黄灰褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。天井部はやや平坦である。6はG下層出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。外面は多量のスラグが付着し、重ね焼きの痕跡も残り、内面は回転ナデを施す。7はG下層出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。外面はナデ、内面は回転ナデを施す。やや高い摘みを有す。8はE下層出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。外天井部はナデ、内面は回転ナデを

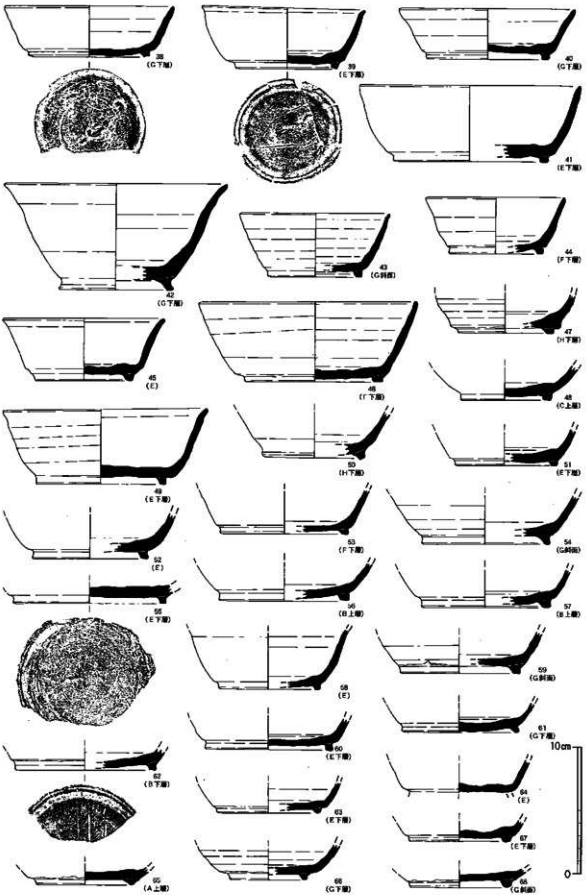
施す。9はE下層の出土で、焼成は堅緻で外面は茶灰褐色、内面は暗灰褐色を呈す。外面は回転ナデ、内面は不定方向のナデを施す。口縁端部の形態は高坏に類似するが、復元口径が大幅に小さいため杯蓋とした。しかし、高坏杯部や皿である可能性も捨てられない。10はH下層出土で、焼成は堅緻で、外面は青灰色、内面は灰茶褐色を呈す。外面は天井部がナデ、以下は回転ナデ、内面も回転ナデを施す。若干焼け歪んでいる。天井部は高い。11はG下層出土で、焼成は堅緻で淡灰褐色を呈す。内外面とも回転ナデを施す。12はG下層出土で、焼成は堅緻で外面は淡青灰色、内面は暗灰褐色を呈す。内外面ともに回転ナデを施す。13はC下層出土で、焼成は堅緻で淡青灰色を呈す。若干焼け歪んだような感があり、口径はより大きい可能性が強い。内外面ともに回転ナデを施す。14はE出土で、焼成は堅緻で灰褐色を呈す。外面は多量のスラグが付着し、内面は回転ナデを施す。若干焼け歪んでいる。15はG下層出土で、焼成は堅緻で灰茶褐色を呈す。天井部はやや平坦で、摘みは無く、剥落した痕跡も認められない。外面は天井部がナデ、以下は回転横ナデ、内面は回転ナデ後不定方向のナデを施す。16はG下層出土で、焼成は堅緻で、外面は暗青灰色、内面は淡灰褐色を呈す。内外面ともに回転ナデを施す。17はG下層出土で、焼成は若干甘く淡黄灰褐色を呈す。器表は摩滅がやや著しい。18はG下層出土で、焼成は堅緻で外面は灰褐色、内面は暗灰褐色を呈す。回転ナデを施す。復元口縁部径は大きい。19はH下層の出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。外天井部は回転ヘラケズリ後にナデ、以下は回転ナデ、内面は回転ナデの後に一部不定方向のナデを施す。天井部はやや高い。20はG下層出土で、焼成は堅緻で外面は灰褐色、内面は暗灰褐色を呈す。外天井部は回転ヘラ切り後未調整で、他は回転ナデを施す。21はF下層出土で、焼成は堅緻で外面は暗灰褐色、内面は淡灰褐色である。外面は天井部がナデ、他は回転ナデを施す。若干焼け歪んだような感があり、口径はより大きい可能性が高い。

22はE下層出土で、焼成は若干甘く淡灰褐色を呈す。摩滅がやや激しいが、外底部はナデ、他は回転ナデと思われる。胎土に角閃石がやや目立つ。23はE下層出土で、完形に近い。焼成は堅緻で、灰茶褐色を呈す。外底部は粗雑なナデを施すが回転ヘラ切り痕が残り、他は回転ナデを施す。24はE下層出土で、焼成は堅緻で灰褐色を呈す。外底部は未調整で回転ヘラ切り痕が著しく残り、他は回転ナデを施す。25はF下層の出土で、焼成は若干甘く淡灰褐色を呈す。外底部はナデ、他は回転ナデを施す。26はE下層出土で、焼成は堅緻で暗灰褐色を呈す。外底部はナデ、他は回転ナデを施す。27はE出土で、焼成は堅緻で灰褐色を呈す。回転ナデを施す。28はE出土で、焼成は堅緻で外面は暗灰褐色、内面は灰茶褐色を呈す。回転ナデを施す。29はC上層出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。回転ナデを施す。30はE下層出土で、焼成は若干甘く淡白灰色を呈す。器表は摩滅が激しく、調整は不明である。器壁は薄く、やや外反した体部の立ち上がりを見せる。31はG斜面部分の出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。回転ナデを施す。32はG下層出土で、焼成は甘く、淡灰褐色を呈す。器表は摩滅が極めて著しい。33はE出土で、焼成は甘く淡灰茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しく、器壁は非常に薄い。34はE下層出土で、焼成は若干甘く灰茶褐色を呈す。器表はやや摩滅する。35はG斜面部分の出土で、焼成は堅緻で灰褐色を呈す。回転ナデを施す。36はG下層出土で、焼成はやや甘く淡灰茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。37はE下層出土で、焼成は甘く淡灰黄褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。



第73図　Ⅱ区包含層出土須恵器実測図1　(1/3)

38はG ド層出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。外底部は粗雑なナデ、他は回転ナデを施す。外底部に「×」のヘラ記号が残る。39はE下層出土で、焼成は堅緻である。青灰色を呈し、外底部はナデ、他は回転ナデを施す。外底部に「×」のヘラ記号が残る。40はG下層出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。回転ナデを施す。41はE下層出土で、大型である。焼成は堅緻で淡白灰褐色を呈し、器表はやや摩滅する。42はG下層出土で、焼成は堅緻で外面は黒灰褐色、内面は灰褐色を呈す。体部下端に回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。上半から外反し、口を大きく開く外形である。43はG斜面部分の出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。回転ナデを施す。44はF ド層出土で、焼成は堅緻で外面は黒灰褐色、内面は灰褐色を呈す。外底部は未調整、他は回転ナデを施す。45はE出土で、焼成は堅緻である。一部に白然釉が残り、全体に黒灰褐色を呈す。外底部は回転ヘラ切り後未調整で他は回転ナデを施す。高台と口縁部内面付近に重ね焼きの痕跡がある。体部はやや内湾して立ち上がる。46はF下層出土で、大型で完形に近い。焼成は堅緻で、黒灰褐色を呈す。外底部はナデ、他は回転ナデを施す。47はH下層出土で、焼成はやや甘く、淡灰褐色を呈す。回転ナデを施し、高台は外低端部よりやや内側に貼り付ける。48はC上層出土で、焼成は堅緻で暗青灰色を呈す。外底部はナデ、他は回転ナデを施す。体部の立ち上がりはやや緩やかである。49はE下層出土で、大型のほぼ完形品である。焼成は堅緻で淡灰褐色を呈す。内外底部はナデ、他は回転ナデを施す。50はH下層出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。回転ナデを施す。高台は外低端部より若干外側に貼り付けられる。51はE下層出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。外底部はナデ、他は回転ナデを施す。52はE出土で、焼成は堅緻で外面は黒灰褐色、内面は暗灰褐色を呈す。内外底部はナデ、他は回転ナデを施す。外底部には高台貼り付けの際の爪による痕跡が残る。53はF下層出土で、焼成は堅緻で暗青灰色を呈す。外底部は未調整で他は回転ナデを施す。54はG斜面部分の出土で、焼成は堅緻で暗灰褐色を呈す。回転ナデを施す。55はE下層出土で、焼成は堅緻で灰茶褐色を呈す。外底部は粗雑なナデ、内底部は回転ナデを施す。外底部に微かにヘラ記号が残る。56はB上層出土で、焼成は堅緻で淡灰褐色を呈す。外底部はナデ、他は摩滅がやや激しい。57はB上層出土で、焼成は堅緻で淡灰褐色を呈す。外底部はナデ、体部外面は白然釉が付着し、内面は摩滅がやや激しい。55と同一個体の可能性がある。58はE出土で、焼成は堅緻で淡灰茶褐色を呈す。器表はやや摩滅するが、外底部はナデ、他は回転ナデを施す。高台は小さい。59はG斜面部分の出土で、焼成は堅緻である。外面は黒灰褐色、内面は青灰色を呈す。外底部はナデ、他は回転ナデを施す。60はE下層出土で、焼成は堅緻で暗灰褐色を呈す。外底部はナデ、他は回転ナデを施す。61はG下層出土で、焼成は若干甘く黒灰褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。62はB下層出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。内外底部はナデを施す。外底部にはヘラ記号を有す。63はE下層出土で、焼成は堅緻である。内面は暗灰褐色を呈し、外面はスラグが付着する。64はE出土で、焼成は堅緻で外面は暗灰褐色、内面は青灰色を呈す。回転ナデを施す。高台は欠失するが、剥落の痕跡が認められる。65はA上層出土で、焼成は堅緻で淡青灰色を呈す。器表は摩滅が激しく、高台は粗雑である。66はG下層出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。外底部は未調整で、他は回転ナデを施す。高台は小さく、体部の立ち上がりは緩やかである。67はE下層出土で、焼成は堅緻で灰褐色を呈す。外底部は粗雑なナデ、内底部は回転ナデを施す。68はG斜面部分の出土で、焼成はやや甘く淡茶灰褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。



第74図　Ⅱ区包含層出土須恵器実測図2　(1/3)

69はE下層出土で、焼成は若干甘く淡黄灰褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。70はE下層出土で、焼成は堅緻で灰褐色を呈す。回転ナデを施し、外体部には自然釉が付着する。71はE出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。外底部はナデ、他は回転ナデを施す。72はF下層出土で、焼成は堅緻で暗青灰色を呈す。外底部はナデ、他は回転ナデを施す。73はE出土で、復元径は小さい。焼成は堅緻で、青灰色を呈す。外底部はナデ、他は回転ナデを施す。74はF下層出土で、焼成は若干甘く淡白灰褐色を呈す。内外底部は摩滅が激しいが、内外口縁部は回転ナデを施す。75はG斜面部分出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。内外底部はナデ、他は回転ナデを施す。76はF上層出土で、復元径は非常に大きい。焼成は堅緻で暗青灰色を呈す。外底部は回転ヘラケズリ後回転ナデ、他は回転ナデを施す。器高は低く、非常に浅い。77はF下層出土で、大型である。内外底部はナデ、他は回転ナデを施す。焼成はやや甘く外面は淡黄灰褐色、内面は暗茶灰褐色を呈す。78はE下層出土で、焼成は堅緻で体部外面は黒灰褐色、他は青灰色を呈す。内底部は不整方向のナデ、外底部は回転ヘラケズリ後に回転ナデ、他は回転ナデを施す。口縁部は高坏に類似するが、体部の立ち上がりがやや急で、脚部の剥落痕も認められないため皿とした。79はC下層出土で、焼成は堅緻で灰褐色を呈す。内外底部はナデ、他は回転ナデを施す。80はB上層出土で、焼成は堅緻で灰茶褐色を呈す。外底部はナデ、他は回転ナデを施す。底部からの立ち上がり部分は非常に強く屈曲する。若干焼け歪む。81はB下層出土で、焼成は堅緻で暗灰褐色を呈す。摩滅が激しい。底部からの立ち上がり部分はやや強く屈曲する。82はG下層出土で、焼成は堅緻で灰褐色を呈す。内外底部はナデ、他は回転ナデを施す。高台を有し、強く屈曲して体部が立ち上がる。また、高台の貼り付けは粗雑で、その境界部が明瞭な段として残る部分がある。外底部には調整時の爪によると思われる痕跡が残る。

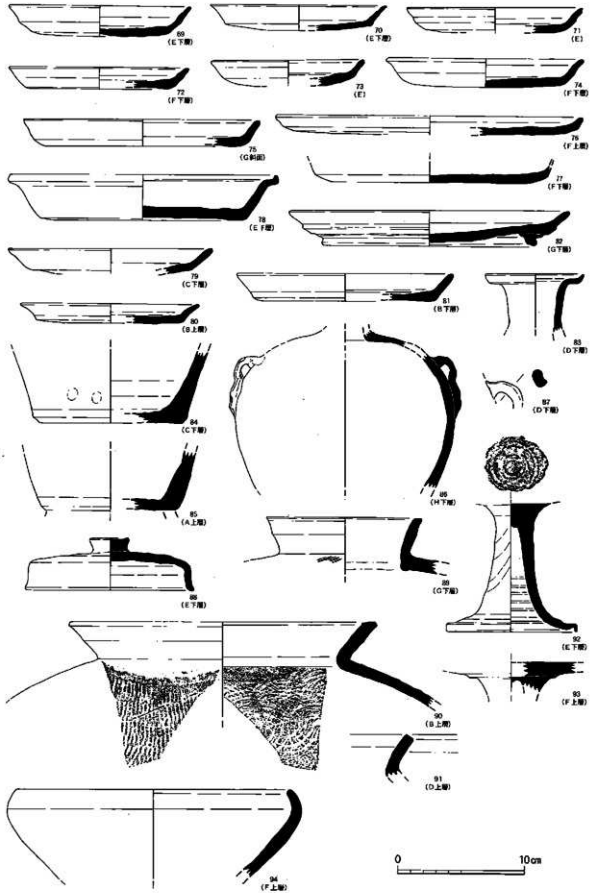
83はD下層出土で、焼成は堅緻で外面は黒灰褐色、内面は灰茶褐色を呈す。回転ナデを施す。84はC下層出土で、焼成は堅緻で茶灰褐色を呈す。内外底部はナデ、外体部は回転ヘラケズリ後ナデ、内体部は回転ナデを施す。85はA上層出土で、焼成は堅緻で内面は淡灰褐色、外面は灰褐色を呈す。ナデを施す。外底端部に高台が剥落した痕跡が残る。86はH下層出土で、焼成は堅緻で外面は灰茶褐色、内面は灰褐色を呈す。回転ナデを施し、把手を有す。87はD下層出土の把手の一部である。焼成は堅緻で、黒灰褐色を呈す。

88はE下層出土で、焼成は堅緻で暗灰褐色を呈す。外天井部は回転ヘラケズリ後回転ナデ、内天井部はナデ、体部は回転横ナデを施す。

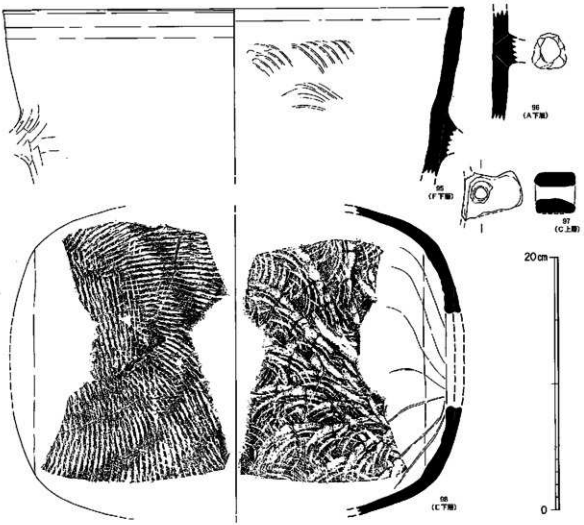
89はG下層出土で、焼成は堅緻で暗青灰色を呈す。外体部にわずかに平行タタキ痕があり、他は回転ナデを施す。口縁部外面に灰を被る。90はB上層出土で、焼成は堅緻で口縁部と外体部は灰茶褐色、内体部は淡青灰色を呈す。口縁部は回転ナデを施し、外体部に平行タタキ痕、内体部に同心円文当て具痕を残す。91はD上層出土で、焼成は堅緻で外面は黒灰褐色、内面は暗灰褐色を呈す。回転ナデを施す。

92はE下層出土で、焼成は堅緻で外面は暗青灰色、内面は灰茶褐色を呈す。回転ナデを施し、しぼり痕を有す。杯部との接合部から剥落している。93はF上層出土で、小さな突出部が廻り、類例は認められないが、形状から高坏脚部と杯部の接合部付近と判断した。焼成は堅緻で外面は自然釉が付着し黒灰褐色、内面は暗灰褐色を呈す。内面はナデ、外面は回転ナデを施す。

94はF上層出土で、焼成は若干甘く淡黄灰褐色を呈す。回転ナデを施す。



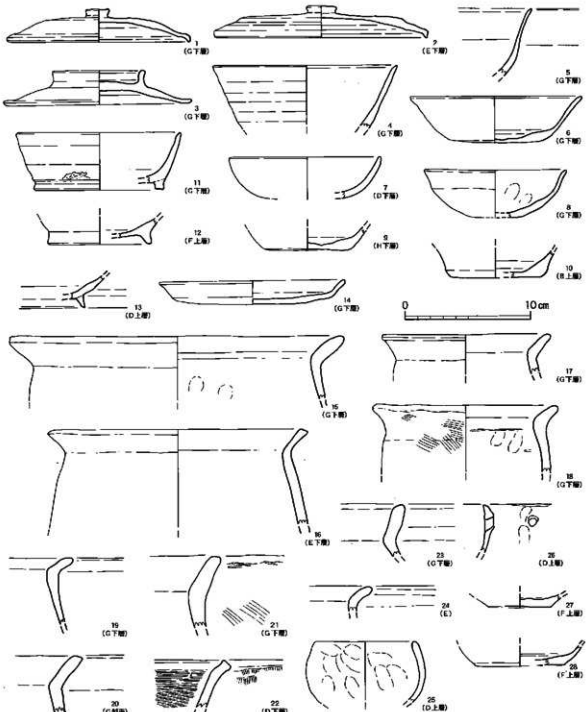
第75図　Ⅱ区包含層出土須恵器実測図3　(1/3)



第76図　Ⅱ区包含層出土須恵器実測図4 (1/3)

95はF下層出土で、焼成は堅緻で外面は暗青灰色、内面は青灰色を呈す。把手は大部分が欠損し、接合部付近しか遺存していない。外面は回転ナデを施し、把手の接合部分にはケズリが認められる。内面の口縁部より若干下位に、同心円文当て具痕が微かに残るが、後の回転ナデによりほとんど消失している。また、把手接合部の内面には不定方向のナデが見られる。96はA下層出土で、焼成は若干甘く淡灰褐色を呈す。器表は摩滅が激しく、把手は大部分が欠損し、接合部付近しか遺存していない。欠損部分から、把手を器壁に差し込んだ接合方法が見て取れる。97は把手のみで、C上層出土である。焼成は若干甘く、淡青灰色を呈す。器表は摩滅が激しい。方柱状の形態で、接合部付近に大きく穿孔される。

98はE下層出土で、焼成は堅緻である。外面は灰を被り黄茶褐色、内面は青灰色を呈す。外面は平行タタキ痕、内面は同心円文当て具痕が残る。側端の閉塞部は、その擬口縁にそって欠損している。また、屈曲させ側端面を形成する際に、当て具を連続して強く押しつけ絞った痕跡が認められる。



第77図　Ⅱ区包含層出土土師器およびその他土器実測図（1/3）

包含層出土土師器およびその他土器（図版53、第77図）

1～3は杯蓋、4～10は高台のない杯身、11～13は高台を有す杯身、14は皿、15～24は甕、25･26はイイダコ壺、27･28は混入品と思われる土師皿である。これらの大半は器表の摩滅が激しい。

1はG下層出土で、完形に近い。焼成は甘く橙黄褐色を呈し、器表は摩滅が著しく、外天井部

に微かに回転ヘラ切り痕が見られる。器形等は須恵器とほぼ同一で、焼成の失敗品とも考えられるが、著しく軟質で土師器としている。2はE下層出土で、焼成は甘く淡白黄褐色を呈す。外天井部に回転ヘラ切り痕が残るが、器表は摩滅が著しい。1と同様に器形等は須恵器とほぼ同一で、焼成の失敗品とも考えられるが、著しく軟質で土師器としている。3はG下層出土で、輪状摘みを有す杯蓋である。焼成は良好で橙褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。

4はG下層出土で、焼成は良好で淡橙茶褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。5はG下層出土で、焼成は良好で橙茶褐色を呈す。器表は摩滅がやや激しい。6はG下層出土で、焼成は良好で橙褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。7はD下層出土で、焼成は良好で暗橙茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。8はG下層出土で、橙褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。9はH下層出土で、焼成は良好で橙黄褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。須恵器の焼成失敗品の可能性もある。10はB上層出土で、焼成は良好で外面は暗褐色、内面は淡灰茶褐色を呈す。器表はやや摩滅が激しいが、外底部に回転ヘラ切り痕が残る。

11はG下層出土で、焼成は良好で淡黄茶褐色を呈す。回転ナデを施す。器形等は須恵器とほぼ同一で、焼成の失敗品とも考えられるが、著しく軟質で土師器としている。12はF上層出土で、焼成は良好で暗茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。13はD上層出土で、焼成は良好で淡黄茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。高台は非常に薄く、下端はやや尖り気味である。

14はG下層出土で、焼成は良好で橙褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。底部からの立ち上がりはやや強く屈曲する。

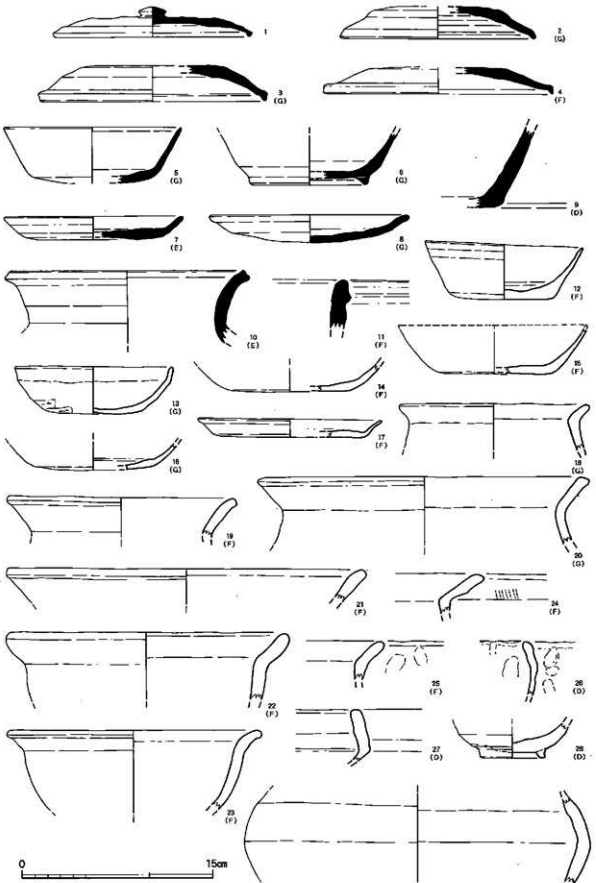
15はG下層出土で、焼成は良好で淡黄茶褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。16はE下層出土で、焼成は若干甘く淡黄茶褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。17はG下層出土で、焼成は良好で暗茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。18はG下層出土で、焼成は良好で外面は暗茶褐色、内面は黒茶褐色を呈す。器表はやや摩滅するが、体部外面にハケ、内面にナデが認められる。19はG下層出土で、焼成は良好で暗茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。20はG斜面部分出土で、焼成は良好で淡黄茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。21はG下層出土で、屈曲が小さく器壁は厚い。焼成は良好で橙茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。頸部の屈曲は非常に緩い。22はD下層出土で、焼成は良好で淡灰茶褐色を呈す。内面に横ハケが残り、外面は縦ハケ後ナデを施す。23はG下層出土で、焼成は良好で橙黄褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。頸部の屈曲は強い。24はE出土で、焼成は良好で暗茶褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。

25はD上層出土で、焼成は良好で淡白黄褐色を呈す。ナデを施すが、器表は摩滅がやや激しい。26はD上層出土で、焼成は良好で淡白黄褐色を呈す。器表は摩滅がやや激しい。穿孔部が残存する。

27はF上層出土で、茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。28はF上層出土で、二次的に比熱しており淡赤褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。

遺構面出土土器（図版53、第78図）

1～11は須恵器である。1～4は杯蓋、5・6は杯身、7・8は皿、9は長頸壺、10・11は甕である。12～26は土師器である。12～16は月見、17は皿、18～27は甕、26はイイダコ壺である。27～29は混入品で近世の遺物である。



第78図　Ⅱ区遺溝面出土土器実測図（1/3）

1は遺構面清掃時の出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。回転ナデを施す。内面の口縁部から中心への半ばまで灰を被る。2はG出土で、焼成は甘く淡灰白褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。3はG出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。回転ナデを施し、天井部は高く平坦である。4はF出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。外天井部はナデ、他は回転ナデを施す。

5はG出土で、焼成はやや甘く淡灰褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。6はG出土で、焼成は堅緻で淡灰褐色を呈す。外底部は未調整、他は回転ナデを施す。高台は、底部外端に貼り付けられる。

7はE出土で、焼成は堅緻で灰褐色を呈し、口縁部外面のみ一定の幅で暗青灰色を呈す。内外底部はナデ、体部は回転ナデを施す。8はG出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。内底部は不定方向のナデ、外底部は摩滅により不明で、体部は回転ナデを施す。やや丸底気味で、体部の立ち上がりも緩やかである。

9はD出土で、焼成は堅緻で灰褐色を呈す。内面はナデ、外面は回転ナデを施す。

10はE出土で、焼成は堅緻である。内外面ともに自然釉により緑灰褐色を呈し、回転ナデを施す。

11は口縁部のみの小片である。F出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。器表は摩滅が著しい。

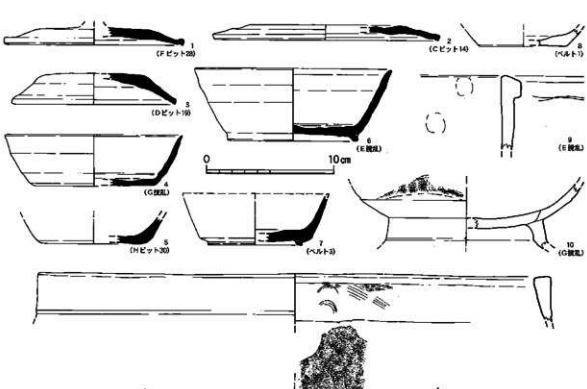
12はF出土で、完形に近い。焼成は良好で、橙褐色を呈す。回転ナデを施し、外底部には回転ヘラ切り痕が残る。13はG出土で、焼成は良好で橙褐色を呈す。器表は摩滅が激しいが、底部付近にケズリが認められる。14はF出土で、焼成は良好で橙茶褐色を呈す。器表は摩滅がやや激しい。15はF出土で、焼成は良好である。外底部は黒灰褐色、体部は暗褐色を呈す。口唇部がわずかに欠けている。16はG出土で、焼成は良好で橙黄褐色を呈す。器表は摩滅がやや激しい。

17はF出土で、焼成は良好で橙褐色を呈す。器表は摩滅がやや激しい。

18はG出土で、焼成は良好で橙茶褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。頸部内面は屈曲がやや強い。19はF出土で、焼成は良好で茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。口唇部はやや外へ摘み出している。20はG出土で、焼成は良好で暗茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。21はF出土で、焼成は良好で茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。22はF出土で、焼成は良好で暗茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。口縁部は内湾気味に立ち上がり、浅手の器形になると思われる。23はF出土で、焼成は良好で暗茶褐色を呈す。外面は摩滅がやや激しいが、内面はナデを施す。口唇部はやや外へ摘み出しており、浅手の器形となる。24はF出土で、焼成は良好で黄茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。25はF出土で、焼成は良好で暗茶褐色を呈す。器表は摩滅が激しい。

26はD出土で、焼成は良好で淡黄褐色を呈す。器表は摩滅がやや激しいが、指押さえ痕が残り凹凸が目立つ。

27はD出土で、ほうらくの小片である。焼成は良好で外面は黒褐色、内面は淡黄褐色を呈す。内外面ともにナデを施す。下位で屈曲するが、外面は特に強い稜をもつ。28はD出土で、上野、高取系の碗である。焼成は堅緻で、体部には濃灰釉が施される。外底部は回転ケズリを施し、高台をケズリ出す。29は遺構面清掃時の出土で、土師質の土器で詳細は不明である。焼成は良好で、外面は淡黄灰褐色、内面は明黄茶褐色である。器表はやや摩滅する。



第79図　Ⅱ区ピットおよびその他出土土器実測図（1～9は1/3、10は1/5）

ピットおよびその他出土の土器（図版54、第79図）

1～7は須恵器で、1～3は杯蓋、4～7は杯身である。8は土師器杯身の底部である。9は土師質の鉢の口縁部である。10は瓦質土器で、高台付の風炉である。11は土師質の大甕である。

1はFのピット28出土で、焼成は堅緻で青灰色を呈す。内外天井部はナデ、体部は回転ナデを施す。内面は口縁部から一定の幅で灰を被る。2はCのピット14出土で、焼成は堅緻で外面は灰褐色、内面は淡灰褐色を呈す。外天井部は木調整、他は回転ナデを施す。3はDのピット19出土で、焼成は非常に甘く、淡茶灰褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。

4はG撹乱出土で、焼成は堅緻で灰褐色を呈す。外底部はナデ、他は回転ナデを施す。5はHのピット30出土で、焼成はやや甘く淡灰褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。6はE撹乱出土で、焼成は若干甘く淡灰褐色を呈す。回転ナデを施す。外底部に微かな沈線が一条見られ、ヘラ記号の可能性もある。7はベルト3内出土で、焼成は堅緻で灰茶褐色を呈す。回転ナデを施し、高台は小さい。

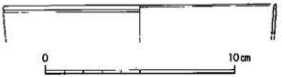
8はベルト1内出土で、焼成は良好で黄灰褐色を呈す。器表は摩滅が著しい。

9はE撹乱出土で、焼成は非常に良好で淡灰黄褐色を呈す。口縁外面下端は板状の工具の横ナデで整えており、他はナデを施す。

10はG撹乱出土で、焼成は非常に堅緻で黒褐色を呈す。回転ナデを施し、残存部上端に型押

しによる菊の文様を有す。

11はHのピット29出土で、底部と口縁部のみで胴部の大半を欠失する。復元口径は67.2cmと非常に大型である。焼成は非常に良好で、橙黄褐色を呈す。体部外面は縦ハケの後ナデ、内面は横ハケの他に弧を描く特徴的なハケ、口縁部は最後に回転ナデを施す。



第80図　Ⅱ区出土銅鋺実測図（1/2）

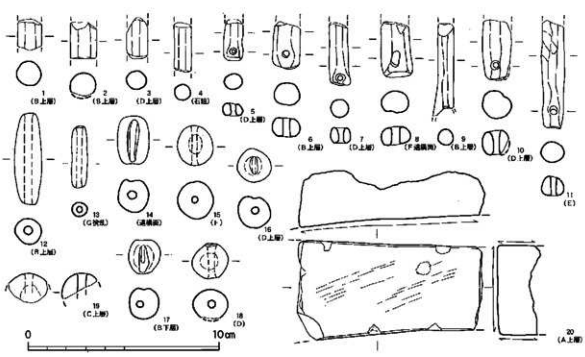
銅鋺（図版55、第80図）

第80図はD検出時出土で、口縁部の残存する銅鋺の小片である。残存高1.6cm、復元口径14.4cmで、器壁は1.5mm程度と薄い。口唇部は内面の方が若干丸く、口唇部外面直下に非常に細い沈線を廻らしている。器表は劣化が激しいが、内面は外面よりも遺存状態がやや良好である。

土錘および砥石（図版55、第81図）

Ⅱ区からは土錘19点と砥石が1点出土している。1～11は棒状土錘、12・13は管状土錘、14～19は球状土錘である。包含層出土のものについては、上層、下層として出土位置を表記している。

棒状土錘で完形品の出土は無い。1～4は両端が欠損し穿孔部は無く、5～11は片側の穿孔部のみ残存する。1はB上層出土で、残存長1.6cm、径1.3cm程度、重さ2.8gである。2はB上層出土で、残存長2.0cm、径1.4cm程度、重さ4gである。3はD上層出土で、残存長2.2cm、径1.1cm程度、重さ2.3gである。4は石組周溝部出土で、残存長2.6cm、径0.9cm程度、重さ2.7gである。5はD上層出土で、残存長2.2cm、径1.0cm程度、重さ2.1gである。6はB上



第81図　Ⅱ区出土土錘および砥石実測図（1/2）

層出土で、残存長2.5cm、径1.3cm程度、重さ4.3ｇである。７はＤ上層出土で、残存長3.3cm、径1.0cm程度、重さ4.0ｇである。８はＦ遺構面出土で、残存長2.9cm、幅1.6cm、厚さ1.1cm、重さ4.7ｇである。９はＢ上層出土で、残存長5.0cm、径0.9cm程度、4.7ｇである。10はＤ上層出土で、残存長3.1cm、径1.5cm程度、重さ6.6ｇである。11はＥ出土で、残存長5.7cm、径1.2cm、重さ8.3ｇである。

12・13はともにほぼ完形である。12はＢ上層出土で、全長4.8cm、径1.5cm、重さ9.7ｇである。13はＧ撹乱出土で、全長3.3cm、径0.8cm、重さ1.7ｇである。

14～18はほぼ完形で、19は大きく欠損する。14は遺構面出土で、やや細長く、溝を有す。全長2.5cm、径1.7cm、重さ7.8ｇである。15はＦ出土で、径2.1cm程度、重さ7.2ｇである。16はＤ上層出土で、溝を有す。径1.8cm程度、重さ5.0ｇである。17はＢ下層出土で、溝を有し、その片側は紐ズレにより摩滅する。径1.7cm、重さ5.0ｇである。18はＤ出土で、径1.9cm程度、重さ5.5ｇである。19はＣ上層出土で、残存長は1.6cmで、3.2ｇである。

20はⅡ区唯一の出土石製品である。Ａ上層出土で、砥面は三面残り、いずれも非常に平滑である。残存長9.8cm、最大幅5.1cm、最大厚2.8cm、重さ196.8ｇで砂岩製。

製塩土器（図版56、第82図）

Ⅱ区からは製塩土器が出土しており、胎土の質や器表の様子から他の土師器等との差異は明瞭である。しかし、そのほとんどが細片で、傾きや径といった器形の要素が判然としにくい。また摩滅も激しいため、布圧痕が残存するものがあるが、それ以外の個体について当初から無いのか、摩滅によるものかも判断し難い。したがって分類に耐え難く、ここでは中でも残存状態が比較的良好なものを列挙するに留めておきたい。包含層出土のものは、黒褐色包含層を上層、

第82図　Ⅱ区出土製塩土器実測図（1/3）

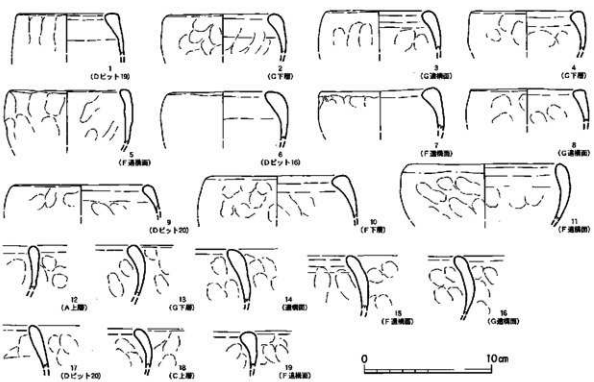
暗茶褐色包含層をド層として表記する。

ほとんどがＥド層に集中して出土し、1～7、9、11、12、14、15、17～19がそれに当たる。他に8はＧ下層、10はＦのピット28、13はＢ上層、16はＢ下層の出土である。器表の摩滅は激しいが、外面で指押さえ痕が窺われる。2、10、11、14～17は内面に布圧痕が認められる。1は最も器形の残存状況が良好な個体で、残存高は15.1cmで口径は9.6cmである。2は口縁部が残存し、口径は6.6cmに復元される。9は底部が残存し、10～12は口縁部が残存する。色調は大きく二種類に分かれ、8、10、13、14、16、17が暗茶褐色を呈し、他は淡黄白褐色である。

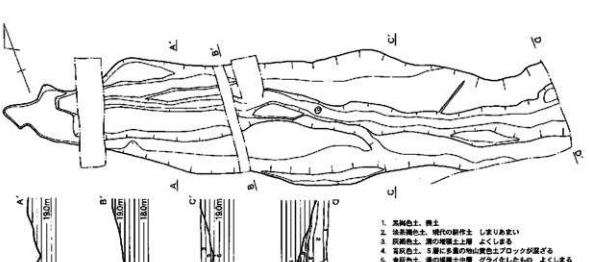
タコ壺状土製品（図版56、第83図）

Ⅱ区でもⅠ区と同様の特徴的な器形・胎土の土師質の土器が、ある程度まとまって出土する。口縁部内面は、やや内側に張出し、肥厚している。下半では器壁は極めて薄くなり、底部付近が残存する個体はない。器形は、胴部で口縁より若干径が大きくなり、下位では急に径が小さくなり、丸底か尖底になると想定される。胎土は非常に精良で、砂礫は極めて少ない。淡黄白褐色や淡黄茶褐色を呈し、大部分は器表の摩滅が激しいが、指押さえ痕が認められる。焼塩壺とも考えられるが、著しく精良な胎土ではその用途に不向きである。また、イイダコ壺の可能性もあるが、器壁の薄さや明確な孔が認められないため十分な判断はし難い。

包含層出土のものは、上層、下層として表記する。出土位置については、1はＤのピット19、2、4、13はＧ下層、3、8、16はＧ遺構面、5、7、11、15、19はＦ遺構面、6はＤのピット16、9、17はＤのピット20、10はＦ下層、12はＡ上層、14は遺構面である。色調は淡黄白褐色から淡黄茶褐色である。7は口縁部全体が遺存しており、1～6、8～11の口径等は復元による。



第83図　Ⅱ区出土タコ壺状土製品実測図（1/3）



第84図　Ⅲ区大溝実測図（1/160）

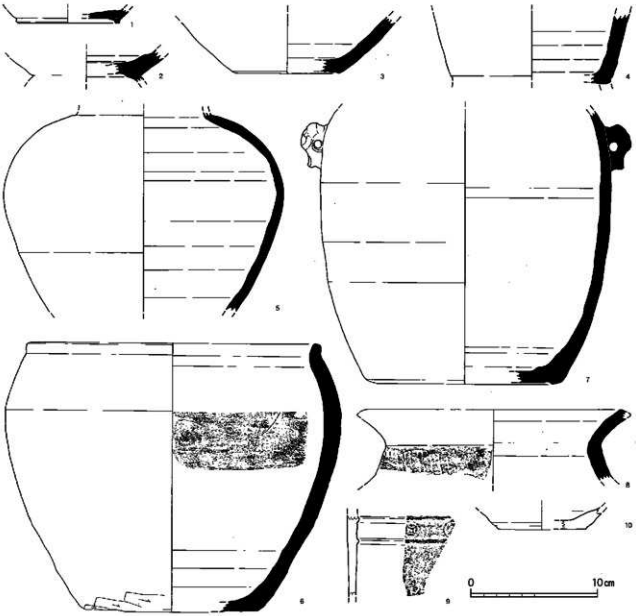
4）Ⅲ区の遺構と出土遺物

大溝（図版48・49、第84図）

Ⅲ区で唯一の遺構で、調査区の北西から南西方向へと向かって傾斜しており、第1次調査区へとつながっていると考えられる。上部をかなり削平されていると考えられ、途切れている北西側でもそのまま更に延びていたと想定される。検出面から底へはかなり緩やかな傾斜で落ちており、人為的に掘削したのではなく、自然流路的な性格の可能性もある。上層の灰褐色土では近世の遺物も含まれるが、下層での出土は8世紀代の遺物に限られるため、それが遺構の時期と考えられる。下層はグライ化して青灰色を呈し、最下層は粘性がやや強く淡褐色を呈す。

出土遺物（図版54、第85図）

1～8は須恵器である。1は高台を有する杯身底部で、上層灰褐色土の出土である。焼成は堅緻で淡灰褐色を呈す。2は長頸壺の底部付近で高台を有し、下層青灰褐色土の出土で焼成は堅緻で外面は淡灰褐色、内面は灰褐色を呈す。3は鉢底部で、下層暗青灰褐色土の出土である。焼成は堅緻で外面は灰褐色、内面は暗褐色を呈す。4は長頸壺の底部付近で、高台を有していたと考えられるが、欠失している。最下層淡褐色土の出土であり、焼成は堅緻で、外面は黒灰褐色、内面は暗灰褐色を呈す。5は長頸壺で胴部中位よりやや上部に把手を有し、最下層淡褐色土の出土である。焼成は堅緻で、外面は自然釉により緑灰色で、内面は灰褐色を呈す。6は短頸壺で、最下層淡褐色土の出土である。焼成は堅緻で、外面は黒灰褐色、内面は暗褐色を呈す。7は甕で最下層淡褐色上の出上であるが、Ⅱ区Ｆの包含層下層出土のものと接合している。焼成は堅緻で、内外面ともに青灰色を呈し、内面の最大径の屈曲部に微かに同心円文当具痕を残す。また、外面下端をケズリにより整えている。8は、甕の口頸部で、下層青灰色土の出土である。焼成は非常に堅緻で、外面は黒灰褐色、内面は暗青灰色を呈し、頸部外面には平行タタキ痕を残す。9は、



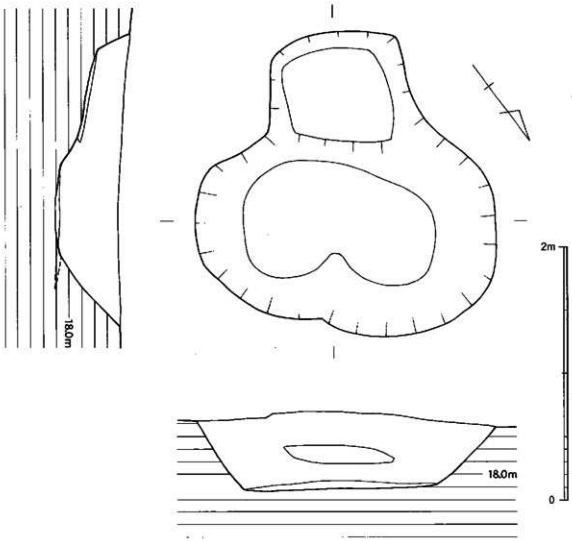
第85図　Ⅲ区大溝出土上器実測図（1/3）

瓦質土器の浅鉢口縁部付近と考えられ、上層灰褐色土の出土である。焼成は堅緻で黄白褐色を呈す。10は、土師皿底部で、上層灰褐色土の出土である。焼成は良好で暗茶褐色を呈し、内外面ともに摩滅する。

5）Ⅳ区の遺構と出土遺物

1号土坑（図版49、第23図）

1号土坑はⅣ区北西隅で検出し、平面形は不整形プランでテラス部を有す。大きさは両軸ともに235㎝で、検出面からの深さは65㎝程度である。覆土はやや砂質の暗茶褐色土が主体である。



第86図　Ⅳ区１号土坑実測図（1/30）

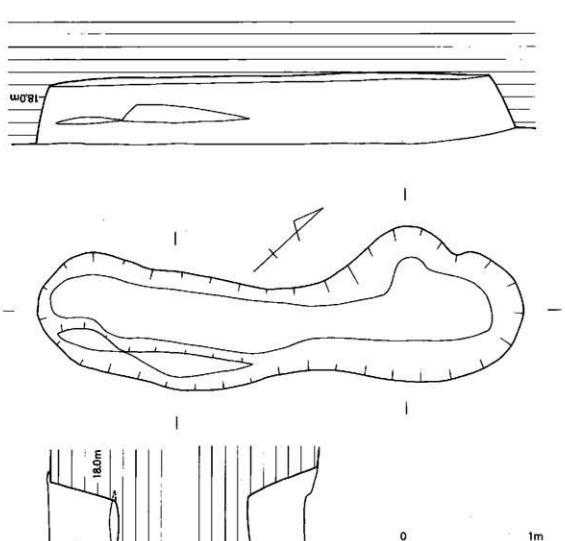
遺物は黒曜石製剥片や須恵器杯身も出土しているが、小片ながら陶器擂鉢が出土しており、遺構の時期は17世紀代と考えられる。

出土遺物（図版56、第88図2，3，5）

2は陶器擂鉢の小片で、暗茶褐色を呈す。3は須恵器杯身で高台を有す。焼成は堅緻であるが、摩滅が著しい。淡灰褐色を呈す。5は姫島産黒曜石製の剥片である。主要剥離面のみで調整剥離を行われておらず、微細剥離がわずかに認められる。また、一部に原礫面を残す。長さ6.3cm、幅3.3cm、厚さ0.4cm、重さ1.5ｇである。

2号土坑（図版49、第87図）

2号土坑はⅣ区北端隅で検出し、平面形は細長い不整形である。大きさは長軸で380cm、短軸で112cmであり、検出面からの深さは60cm程度である。覆土は灰褐色の粘質土が主体である。遺物は擂鉢が1点出土している。16世紀後半と考えられる。



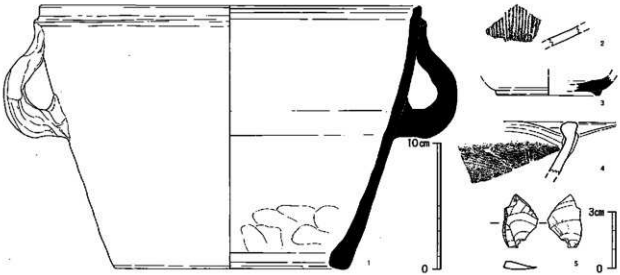
第87図　Ⅳ区２号土坑実測図（1/30）

出土遺物（図版56、第88図4）

4は土師質の擂鉢の口縁部小片である。焼成は良好で、黒灰褐色を呈す。内面には擂目以外にもわずかに横方向のハケ目が残存し、口縁部は内面に突出し、片口部がわずかに残存する。

その他の出土遺物（図版56、第86図1）

1は須恵器甕で、Ⅳ区南西隅の検出面が他より一段高くなる付近の検出時の出土である。焼成は堅緻で淡青灰色を呈し、調整は回転ナデを施す。底面はなく、下端部は肥厚している。口縁部までほとんど屈曲せず立ち上がり、上位になるにつれ若干器壁が薄くなる。外面の口縁直下



第88図　Ⅳ区出土遺物実測図（1～4は1/3、5は1/2）

に蓋受けとも考えられる突帯が一条廻るが、小さなもので、形状や貼付の状態から非常に粗雑な作りと言える。また、胴部上半に把手が貼り付けられるが、口縁付近では突帯の貼り付け後に、さらにその上から接合している。外面下位はやや摩滅が激しいが、他は回転ナデが認められる。

6）小結

第二次調査の内容として、奈良時代と近世の遺構や包含層とそれに関連する遺物を中心に報告を行った。各時代ともに遺構数は少なく、特に近世については、遺物も限られている。それらの遺構の時期として近世の初頭と思われる程度で、詳細に言及する材料に不足する。以下では、第二次調査における奈良時代の遺構、出土遺物や調査地点の特徴をまとめ、そこから類推される本遺跡の性格について触れておきたい。

須恵器、土師器の出土遺物は、大部分が8世紀後半に相当し、少量ながら前後の時期のものも出土している。ほとんどの遺物が集中するⅡ区の奈良時代の包含層は、主に上下2層に分かれる。Ⅱ区の溝と石組は切りあい、またその遺構面も異なる。また、該期のピットの遺構面も同様に下層の上下で異なるようであり、包含層の堆積に一定の時間差があることは間違いない。しかし、上層出土の残りのよい遺物が少ないこともあり、遺構や各層出土の遺物による時間差・時間幅の認識は、困難である。

出土遺物の中には、特徴的なものが含まれている。須恵器では横瓶、甑、高台付の皿など希な器種が見られる。海岸はさほど遠隔ではなく土錘も出土することから、一定の生業に従事していたであろう。胎土の精良なタコ壺状土製品としたものも、やはり生業関連の遺物ではないだろうか。製塩土器については、出土量はさほどまとまったものではなく、製塩活動にどれほど直接的に関わっているかは判然としない。ただ、一般生業との関わりのみではなく、第一次調査での熔着土器や鞴の羽口などを合わせると多様な生産活動との複合的な関わりが窺われる。

また、小片ながら銅鏃が出土しており、第一次調査出土の萬年通宝、転用硯、土馬、緑釉陶器等の特殊遺物とも併せると、遺跡の特殊性が一層認識される。一定の官衙的な要素を帯びていた可能性も否定できない。

しかし、建物をはじめとした遺構のまとまりは、隣接した周辺の試掘等でも全く検出されていない（第89図参照）。ここで注目されるのは、Ⅱ区G周辺で認識した基盤層の立ち上がる点とⅢ区で大溝の他に後世のものを含めて全く遺構が検出されていない点である。これらから、やはりⅡ区北側、Ⅲ区周辺の一帯は大きく削平を受けており、旧地形は現状よりはるかに高いと考えられる。そして、そこに遺構等が集中する奈良時代の遺跡の主体をなす部分が存在したと想定される。

上記の想定のとおりであれば、第二次調査Ⅱ区は丘陵上に広がる遺跡の中で、谷部に面した落ち際という、全体立地の中での縁辺部にあたる。そのような性格上、丘陵の高所からの包含層の流れ込みが著しく、遺構も非常に希薄であるのは当然である。ただ、数少ない遺構が、遺構面の差異から見られるように時期をずらしながらもGに集中している点に注目したい。また、それらの遺構は、石組、石だまりや谷部に流れ込む短く小さな溝であるなど、機能的な面からは奇妙な感を受ける。更に、G周辺では包含層中に焼土ブロックが散見され、斜面部分の遺物の出土も多いなど他の区域とは異なる特徴を有している。これらから、論の飛躍も承知で言及するならば、Ⅱ区G周辺は、水を湛える谷部に面して、祭祀的な行為を行う一画にあたる可能性も考えられる。

3．試掘・確認調査

東九州自動車道苅田インターチェンジ建設に係るその対象面積は、インターチェンジ本体で約46,500㎡、料金所付近で約12,100㎡と、合わせて約58,600㎡である。一方、今回の埋蔵文化財の発掘調査の面積は、第一次調査で約3,200㎡、第二次調査で約1,800㎡と、合わせて約5,000㎡であり、建設対象面積のわずか約8.5％である。これは、大部分の建設対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地内にありながら、試掘・確認調査によりそのほとんどで埋蔵文化財の存在が確認されなかったためである。これまでの試掘・確認調査は、平成12～15年度にわたって、バックホーによるトレンチ調査で行われているが、以下ではその概要についてまとめる。

平成12年度

日時　平成12年10月13日

試掘担当者　福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係　飛野博文

内容　県道須磨園南原曽根線以西のごく小範囲のみが対象で、文化財は確認されなかった。

平成13年度

日時　平成13年７月17日

試掘担当者　福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係　飛野博文

内容　県道須磨園南原曽根線以東は、第一次調査区の一部と第二次調査Ⅳ区となる範囲で文化財が確認され、県道以西では広範囲が対象となったが、文化財は確認されなかった。

平成14年度

日時　平成14年５月13・14・17日、７月29日、10月16～18・22・23日

試掘担当者　福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係　宮地聡一郎　坂元雄紀

内容　県道須磨園南原曽根線以東の大部分が対象となり、第二次調査Ⅱ・Ⅲ区となる部分で文化財が確認されたが、他の範囲では認められなかった。県道以西では北九州市との境界付近が対象であったが、文化財は確認されなかった。また、県道以西の山林部分も対象となったが、文化財は確認されなかった。

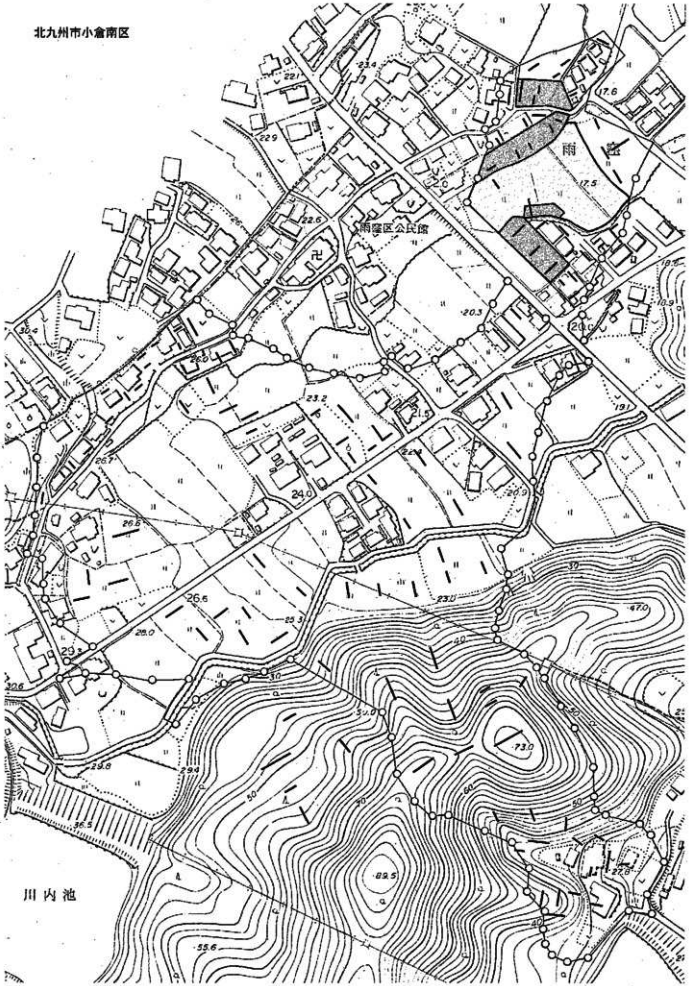
平成15年度

日時　平成15年５月16日、８月12・13日

試掘担当者　福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係　秦 憲二　小澤佳憲

内容　県道須磨園南原曽根線以西で山林部分の南側に隣接する谷部分が対象で、文化財は確認されなかった。また用地外ではあるが、用地の山林北面の西側に隣接した地点を関連工事のために対象とし、文化財は確認されなかった。

以上が試掘・確認調査の概要で、バックホーによるトレンチの位置を第89図に示している。（トレンチの集中する部分は一部省略。）



第89図　苅田インターチェンジ建設関係試掘・確認調査トレンチ位置図（1/2,500）

Ⅳ. おわりに

以上が東九州自動車道苅田インターチェンジ建設予定地内における埋蔵文化財発掘調査の内容である。調査面積に比して遺構の密度は低いものであったが、遺物の内容には注目すべき内容を含む。以下で若干の総括を行って、本報告を終わりとしたい。

1. 遺構と遺物

調査面積に比して遺構の数は少なく、遺跡の性格といった面では不明な部分が多い。前記したように後世の開墾によってかって存在したであろう遺構は消滅した可能性がある。しかし、出土した石器、各種土器や稀少な品々は調査地付近の状況を推測する手がかりを与えてくれる。

1) 旧石器～縄文時代の遺物

本遺跡で出土した石器群は、旧石器時代ナイフ形石器文化期、縄文時代草創期～早期、晩期の大きく3時期に分かれる。ただし、いずれも二次堆積の原位置遊離状態で出土したため、石器群の明確な分離は困難である。特に縄文時代後・晩期以降と考えられる姫島産黒耀石を使用する剥片石器群が多量に出土しているが、本報告ではスクレイパーなど定形石器の報告に留めた。

ナイフ形石器文化期では、第58図1の大型ナイフ形石器が堆積岩系石材を使用している。その他、6・7・11など珪質岩の使用が見られる。これらは、豊前地域の旧石器遺跡の在地産石材利用として一般的に認められる。代表例として、時期は遡るが大平村金居塚遺跡などがある。

西北九州産黒耀石を使用するのは2・3・5などである。特に3の槍先形尖頭器は、角錐状石器が扁平化する段階の資料である。西北九州産黒耀石使用を含めて本地域では重要な資料である。西北九州産黒耀石の多くは肉眼で見る限り針尾淀姫系と見られる。また、回収の問題が残るが、遺跡内では調整剥片類が少なく頻繁な石器製作は行われていない。この西北九州産黒耀石と在地産石材を使用する石器群は時期的にも大きくかけ離れていない。このほか、16・17のように小型石刃を剥離技術が認められる。幅広作業面や無調整打面形成などはＡＴ降灰前後ではなく、終末期の特徴として理解できる。以上のことから、本遺跡石器群はナイフ形石器文化期後半の中頃～終末にかけての石器群とみられる。

縄文時代ではサヌカイトを使用した槍先形尖頭器群が注意される。形態的に草創期～早期の所産と考えられる。特に20については、福岡市大原D遺跡群や元岡遺跡群など福岡平野などに事例が多く縄文早期の無文・条痕文段階に位置づけられる。北部九州地域の槍先形尖頭器の動向については、近年の調査研究成果により概ね縄文時代草創期以降に属する事例が増加しつつある（九州旧石器文化研究会編2003『九州旧石器』7号）。ただし、東九州地域においては、旧石器時代以来の系譜や終焉について不明な点が多い。18・19については、西北九州例と形態的にも分けて考える必要がある。この他、29の石斧や31・33・35などのサヌカイト製スクレイパーも概ねこの時期所産と見られる。ただし、33のように円礫の自然面を持つサヌカイトは、多久地域以外の可能性が高く注意を要する。後・晩期以降を特徴づけるのは片岩製の打製石斧や金山産サヌカイト製スクレイパーである。姫島産ハリ質安山岩の流入もこの時期と考えられる。遺跡内で弥生前期上器の出上が無いこと

から姫島産黒耀石製剥片石器群の多くは、この時期の所産と見られる。

2) 祭祀遺構

第一次調査区1Ⅰ区で検出した2基の土坑はその周辺の状況を考えあわせて今回の調査の中で最も重要な意味を持っていると考えている。1号土坑で検出した例置された鉢は体部上半を失っていた。しかし、周辺の堆積層中から出土した破片と接合してほぼ完形に復原できた。口縁部付近を打ち欠いて木株の脇に倒置したもので、その意味は推し測れないが意図的であることは確かである。2号土坑では埋土上層で焼土を検出し、内部にほぼ完形の5点の土器が置かれていて、これも祭祀行為の結果であろう。また、これらの土坑は流路跡に近接し、周辺の流路跡堆積層中には意図的に置かれたと思われる土器群（図版11）を含む多くの土器、一部が焼かれた木製遺物とともに土馬も出土し、焼土も検出されている。また、多くの松傘や桃の種も出土している。科学的分析では桃の痕跡を確認できないことから、これも祭祀行為の結果であろう。地山面に明らかな焼土坑といったものは見つかっていないが、流路跡に対して火を用い、土馬を使用した行為がなされ、多くの土器・桃（の種）が投棄された。流路跡とした河道跡の当時の状況は、法面に砂層が堆積し、その中に多くの遺物が含まれることから水量はともかく流水はあったのであろう。

さらに、流路跡中でも土器が集中するグリッドはこの1Ⅰ区、東に隣接する2O区で、置かれたような状態の完形の杯蓋や壺底部付近がまとまって出土した1Ⅰ区の北西に位置する1G区も加えるならば意図的な土器の投棄は先の土坑周辺に集中していると言ってよい。今回調査を行った中で最も人的行為が感じられる地点である。

一般に土馬は日乞い・雨乞いに使用されたと言われる。今回の調査でも、流水のほとり、火を用い、土馬を破却（？）するといった行為が推測され、雨乞い等の儀式が行われたものであろう。

3) 特殊な遺物

用途不明の土製品はともかく、包含層中とはいえ木簡・墨書土器、銅鋺と思われる破片や萬年通宝、緑釉陶器小壺が出土した。いずれも一般集落から出土することの希な遺物である。反面、土錘や蜻壺、昨今では古代遺跡では必ずといってよいほど出土する製塩土器などは漁業を主たる生業としていた海浜の人々が付近に生活していたことを思わせる。調査地から周防灘までは直線にして1㎞に満たない位置にあり、当然の現象であるといえる。また、窯土の付着した土器、あるいは土器の付着した窯土塊や大きく焼け膨れ、器表が弾け、焼け歪んで使用に耐えないのではないかと思われる粗悪な須恵器も出土している。調査地周辺には古墳時代後期からの須恵器窯跡群が広く作られていて、豊前北部の生産拠点となっている。奈良時代に限っても、山方里・洗子・御祖神社・トギバ（以上北九州市小倉南区）、殿川窯跡群（苅田町）などが知られている。本格的な発掘調査が行われておらず偶然の発見が多いことも一因であろうが、この地区の窯跡は小規模な例が多い。本来的に小規模な窯跡群が分散するのであれば、それらを統括する拠点が必要であろう。

古代豊前国には京都から大宰府へいたる山陽道・西海道上にある到津駅から分岐して西海道東路とも呼ぶべき、現国道10号線に相当する官道が縦断していた。雨葉遺跡は先にも記したように海まで1㎞に満たない位置にあり、この間に古代官道が敷設されていたことは間違いがない。『和名抄』に記された「刈田駅」をこの地付近に想定しているが、あるいは窯跡群を指揮・統括する国府直属の出先機関が存在した可能性も考えられよう。

2. 木簡・墨書土器

1）木簡（図版38）

1　□□□□

081型式。板目。上下両端および右端を欠失する。裏面は腐食している部分が多く、腐食は裏面右端にも及ぶが、表面左端は原状をとどめている。現存法量は、長さ52㎜、幅19㎜、厚さ7㎜である。現状で表面右寄りに3文字分とそれに続く4文字目の残画を確認できるが、墨が薄く、文字の判読は困難である。赤外線カメラによる観察でも判読には至らなかった。3文字目の旁は、ふるとりに似るが、6画目と7画目が見えず、確定は出来ない。この旁がふるとりであり、偏をしんにょうとすることが出来れば「進」の可能性があろう。

2）墨書土器（図版30、第51図）

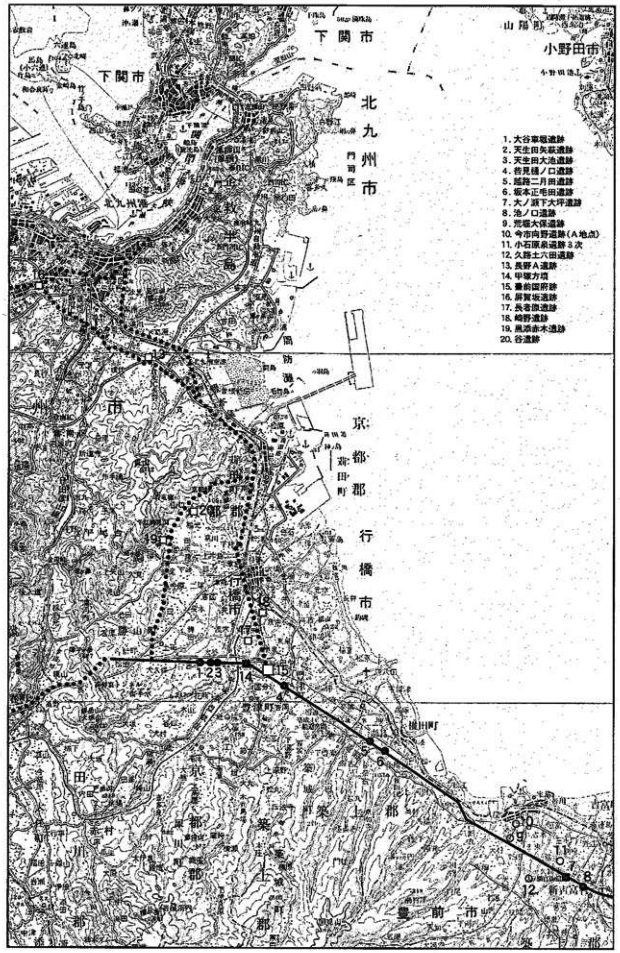
今回の調査では、4点の墨書土器が出土した。1は1J区下層から出土。須恵器坏の蓋の外側に現状で半円形の墨痕がある。蓋のつまみの周囲を円形に囲んだ墨書であろうか。2は2B区下層から出土。須恵器坏の蓋。外側に墨書がある。1を参考にすると、同様に蓋のつまみの周囲を囲むように円形に墨書したものか。3は1Ⅰ区拡張区地山上から出土。須恵器坏の高台かその外底。「乙□」の墨書がある。2文字目は現状で「一」に似た残画のみなので、判読できない。ところで、「乙」を含む墨書がある土器は全国で300点近くの出土が報告されているが、人名の一部をなすものが多く見られる。県内を見ると、大宰府史跡第70次調査観世音寺小子坊地区SD1830において、須恵器坏蓋の外天井部に「乙□□□」の墨書がある土器が出土しており（九州歴史資料館編『大宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報』）、さらに大宰府史跡第175次調査広丸地区官人居住区SD4345において、須恵器蓋の外天井部に「乙□」の墨書がある土器が出土している（九州歴史資料館編『大宰府史跡 平成8年度発掘調査概報』）。後者は人名と考えられているが、前者も残画から「乙万□」の可能性があり、これが「乙万呂」であれば、やはり人名となる。4は2H区下層から出土。須恵器坏の見込み部分に、現状で「小」に似た文字の一部と考えられる墨痕があるが、判読は出来ない。

（酒井 芳司）

3. 豊前北部（京築地域）の古代官道とその周辺

1）はじめに

ここでは京築地域の古代官道研究に関して簡単であるが説明し、近年検出された道路遺構について紹介したい。京築地域の古代官道研究は主に、70～80年代にかけて日野尚志、戸祭由美夫、木下良の3氏が中心となって歴史地理学の方面から古代官道の復元を行ってきた。日野は延喜式などの史料をもとに条里、地名などを考慮して古代官道および周辺条里を詳細に推定復元する。戸祭も延喜式などの史料、地名などから古代官道を推定するが、木下はそれらの研究を踏まえつつ空中写真、現地踏査をもとに、日野が京都平野南部の条里に沿って東西に走る現在道に注目した推定古代官道より二町南の3つの丘陵を横切る道路痕跡から古代官道を復元する。3氏とも古代官道の復元に関して多少の違いがあるが、『延喜式』などの史料、空中写真、地名などを利用して京築地域での



第90図　古代豊前国内官道推定線（1/200,000）

古代官道の復元を試みている。70～80年代に歴史地理学的な研究が進む一方で、考古学的な研究は90年代以降の発掘調査により大谷車堀遺跡、天生田矢萩遺跡、天生田大池遺跡などの以下に紹介する道路遺構が多数検出され、それにより考古学の方面からもやっと古代官道の研究が進められつつある。最近では、平成14年に豊津町歴史民俗資料館でこの地域の古代官道を取り上げた企画展が行われて、官道や奈良時代の豊前国に関してよくまとめられている。

2）京築地域の古代官道

京築地域では西海道到津駅から豊前国府を結ぶ官道、大宰府と豊前国府を結ぶ官道、豊前国府から宇佐八幡宮へと繋がる官道など豊前国府を中心に考えると3本の道路がある。大宰府と豊前国府を結ぶ官道では田川郡内では道路遺構をまだ検出していないが（※日野、木下などの詳細な研究があり、そちらを参照してもらいたい）、仲哀峠を越え京都郡内に入った官道は京都平野の条里を真東に進んでいく。豊前国府へ向かう途中の行橋市の大谷車堀遺跡、天生田矢萩遺跡、天生田大池遺跡などでその痕跡を検出している。天生田大池遺跡を過ぎた官道は今川を渡り、豊津町甲塚方墳で屈折し豊前国府へ到達する。豊前国府から南東方向に進み宇佐八幡宮へ向かう官道は旧仲津郡で皆見樋ノ口遺跡、旧築城郡で越路二月田遺跡、坂本正毛田遺跡、旧上毛郡で大ノ瀬大坪遺跡、池ノ口遺跡で検出する。旧築城郡内の松江付近で若干、屈折して上毛郡内に入り国道10号線豊前バイパスと重なる部分やその付近を通り、条里と平行しながら南東へ進み宇佐八幡宮へ到達する。

この二つの官道では発掘調査で道路遺構を検出するが、到津駅から南下し豊前国府へとつながる官道には到津駅と推定される北九州市屏賀坂遺跡や企救郡家やそれに付随する道路遺構を検出する同長野A遺跡のみで不明な部分が多く、現在の状況ではこの古代官道について日野による詳細な復元ルートがある。以上の3つのルートで現在の京築地域内で復原・確認された道路遺構を検出している。

3）古代官道の道路遺構

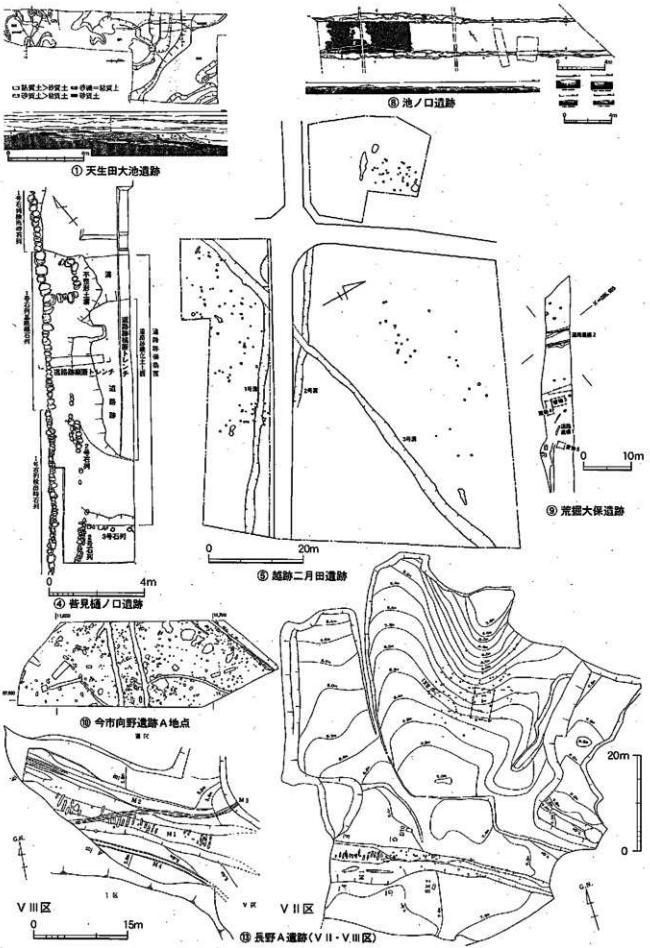
古代官道の道路遺構は以下に簡単に紹介するが、正式な報告書もでていないのもあり、道路遺構について誤解している場合もあるかもしれないがご容赦していただきたい。

①**大谷車堀遺跡**（行橋市）　長さ約15m、幅10.4mの高まりを検出し、道路の両側は排水のために溝状に低く削り落とされている。路面上部は削平されているが、推定で道幅7～8mを測る。

②**天生田矢萩遺跡**（行橋市）　北側で段落ちが、南側で幅1.5m前後の蛇行する溝が検出され、この溝と段落ちに挟まれる部分の幅約7～8mを長さ約27mに渡って確認する。

③**天生田大池遺跡**（行橋市）　調査区の南端部で検出した整地層で道路跡と考えられる道路状遺構ＳＦ１を検出する。整地された部分で長さ約5m、幅10.9mを南側の上端は土坑により破壊され正確な値は不明だが、上端幅6.25mで北側のテラス部分の落ちも含めると7.9mとなる。整地層の土層は粘質土、砂質土、砂礫などで構成されている。最も厚い西壁際で68cm、東側ではわずか数cmほどしか積み土が残っていない。出土遺物もなく時期の特定はされていない。

④**皆見樋ノ口遺跡**（京都郡豊津町）　調査区北東部で検出した道路跡は砂礫層からなる構築面とその上部に硬化面および側溝からなる。上面の硬化面で長さ約1.7m、幅約6.8mを下部の構築面で長さ約2.5m、幅約11.4mを測る。道路は盛土工法により造られる。時期については砂礫層や硬化土から出土した土器片からおおよそ８世紀中頃と考えられている。



第91図　豊前国府推定地周辺官道遺構

⑤**越路二月田遺跡**（築上郡椎田町）　７～８ｍの間隔を保ちながら並行する２本の溝を検出する。路面の形成にあたっては路盤の基礎として敷石がある。また、溝の出土遺物から８世紀代に掘り込まれたものとし、古代官道の推定線上位置することから道路遺構として考えられている。

⑥**坂本正毛田遺跡**（築上郡椎田町）　道路構築の際に掘った溝を検出する。

⑦**大ノ瀬下大坪遺跡**（築上郡新吉富村）　上毛郡衙跡と考えられる遺跡で政庁の北東部に接して、側溝の心々間で12ｍと別の時期で１８ｍ、長さ約170ｍの官道を検出する。

⑧**池ノ口遺跡**（築上郡新吉富村）　真っ直ぐ並行する２本の溝がＡ区北端を約60ｍに渡っている。東半分は削平されているがこの２本の溝の間は約20ｍに礫石混じりの硬化面がある道路で幅約6ｍを測る。礫石混じりの硬化面は、径1～2cmの小礫が硬化した十層中に埋め込まれ、道路幅全面に人為的に叩き締められる。この硬化面を盛土工法の下部構造とし、時期は出土遺物から８世紀前半には敷設され、１２世紀前半には廃絶したと考えられている。

その他、古代の道路遺構として以下を紹介したい。

⑨**荒堀大保遺跡**（豊前市）　路面幅5.2ｍ、側溝外側で6.7ｍの道路状遺構を検出する。推定官道90ｍ離れた位置にあり、ほぼ平行方向に延びる。奈良時代の集落跡を検出し、円面硯、緑釉陶器などが出土する。

⑩**今市向野遺跡Ａ地点**（豊前市）　道路状遺構は路面を後世の水田で削平するが、両側溝を持ち南北方向に26ｍ検出する。路面幅6～6.3ｍ、側溝は1.6ｍ前後で深さ60cmを測る。道路状遺構は谷間の川に沿った道の可能性が高く、側溝出土の須恵器から時期を７世紀後半と判断されている。この道路は、周辺の集落と海岸を繋ぐ道路の主要な一つとして機能していたと考えられている。

⑪**小石原泉遺跡３次調査（Ｇ区）**（豊前市）　路面幅5～6.5ｍを測り、道路が130ｍほど直線に続き、両端がそれぞれ緩やかに弧を描いて曲がる。そこから、直線に伸び、東側から延びる道路は自然流路により消滅する。また、ここでは波板状圧痕を枕木状に確認する。条里施行以前に遡る可能性が高い道路と指摘されている。

⑫**久路土六田遺跡**（豊前市）　南北方向に路面幅5ｍ（全幅7ｍ）、約50ｍの道路状遺構を確認する。

⑬**長野Ａ遺跡**（北九州市）　Ｖ区の土塁状遺構とⅦ・Ⅷ区の１号溝が一連の大規模な造成工事による道だと考えられている。

Ｖ区では調査区のほぼ中央部で東西方向の赤褐色粘質土の高まりを検出する。幅約22ｍの狭長な谷地を横断する形で、東西方向でほぼ水平な堆積を示し南北方向に土塁状を呈する。後世の削平のため北側半分を失っていたが現存の規模は中央部で土塁の上面幅3.4ｍ、底面幅21.2ｍ、高さ76cmを測る。当初の土塁は現存のものより高く、底面幅も狭かったと考えられる。これがⅦ・Ⅷ区は１号溝に繋がる。

Ⅶ区では調査区南半部を東西に横切るように検出する。東端のつづきは削平され不明だが長さ46ｍ、西端はＶ区の土塁状遺構に続き、さらにⅧ区の１号溝へと続く。幅は削平されている東端で3ｍ前後、深さ20～30cmだが、西端で最大幅9ｍ、深さ2.2ｍとなる。これはＶ区の土塁状遺構に接続するため幅や深さが大きくなったと考えられている。

Ⅷ区では長さ約35ｍで東端部は掘削せずになだらかな傾斜でＶ区の土塁状遺構へと続き、最大幅6.5ｍを測る。深さは西端部で深く8.5ｍを測り東端へいくにつれて浅くなる。後世の削平で幅や深

さが幾分浅くなり、また溝底には須恵器の大甕などを意識的に割って敷いたと考えられている。

この土墨状遺構と１号溝については、

1）溝底やＶ区の土墨状遺構上面の上層が、人為的に踏み締められたように硬い。

2）Ⅶ・Ⅷ区土層下の溝底の地山面上に幅約20cm、長さ1～1.7m、深さ約10cmの小溝が１号溝と直交する方向に多数検出され、階段の機能をもつこと。

3）Ⅷ区１号溝土層から多く出土した須恵器大甕が細かく割られて敷かれているのは、階段の機能を果たしていて小溝が埋まった後の、滑り止めのためであると考えられる。

などから土墨状遺構や１号溝ともに奈良時代末から平安時代初め頃に造られた道とし、またその性格は古代官道に深い関わりのある施設と考えている。なおこの道に関して、近江俊秀氏はこれを郡衙関連の公的な性格の道路とし、また②の１号溝に直交する小溝を波板状凹凸面として検出面の位置や形態から枕木の痕跡の可能性をあげている。

以上の道跡において古代官道の道路遺構、またそれに関連すると考えられる道路遺構を紹介した。今回紹介した道路遺構については正式に報告されていないものもあり不明な部分も多々あるが、6m以上のある路面幅、側溝をもつ、硬化面がある、盛土工法を採る、ほぼ直線上で道路遺構を検出するなど古代官道に関する重要な要素を含んでいる。今後、この地域を通る古代官道と、その他の道路遺構（古代官道と同様な要素をもつ）また官衙、寺院、山城などとの関係について研究していきたい。（坂本）

4）京築地域の古代の主要集落遺跡

福岡県東部の代表的な官衙遺跡は言うまでもなく豊津町豊前国府跡であり、また、近年発見されて国指定となった新吉富村大ノ瀬官衙遺跡である。そのほかにも築上郡では新吉富村フルトノ遺跡で評価とも推測される遺構が調査された。大平村伊柳遺跡では計画的に配置された掘立柱建物跡群や石帯、豊前市黒土地区の遺跡でも石帯や銅製帯鈎が出土したが、ここでは規則的に配置された官衙的遺構は未発見である。築上郡椎田町赤幡森ヶ坪遺跡でも緑釉陶器や石帯・銅鈴等の特殊品が見られたが、建物跡が小規模なこともあって役人層の居宅かと推測されている。それにほど近い椎田町越路貴船・六郎の両遺跡でも掘立柱建物跡や石帯・緑釉・越磁などが出土し、「築城駅」に関連する遺跡と考えられる。以下では、行橋市・京都郡内で古代の掘立柱建物跡などを発見した既報告の遺跡について概略を紹介する。

豊前国府跡（豊津町国作）　8世紀中葉～9世紀中葉の段階で硯や瓦、掘立柱建物跡が検存在することから官衙的性格が推測されるが、遺構の残存状況が悪く判然としない。9世紀後葉～10世紀後葉にかけては築地塀で囲まれ、3×17間の脇殿や八脚門と推定される遺構が確認されて本格的な国庁が成立したと考えられている。11世紀前葉～12世紀前葉にも3×14間、2×10間以上の長大な建物跡があることから国庁として機能していたようであるが、全体に後世の破壊が著しく遺存状態が良好ではないのが残念である。なお、西に近接する総社地区遺跡群でも多くの建物跡や溝が検出されていて、曹司を構成していたものであろう。

長者原遺跡（行橋市南泉）　豊前国府推定地の北西2kmに位置する。道路拡幅に伴う狭い範囲の調査であったが幅3m、深さ1.1mの規模をもって直角に曲がる1号溝、その外側を0.5～1mの距離をもって平行に走る幅5m、深さ1mの2号溝を検出したが、ともに時期を特定できる出土遺物はない。ただ、この溝が現在の地形および地籍図から推測して東西100m、南北150mを囲繞する可能

性があり、その場合は古代官衙、具体的には仲津郡衙である可能性がある。

崎野遺跡（行橋市崎野）　豊前国府推定地の北4km弱の位置にある。個別の時期比定は困難であるが7～9世紀に比定される9棟の掘立柱建物群が発掘され、邢窯産とされる白磁椀や見込に花弁を刻んだ緑釉椀などの稀少な遺物が出土している。建物配置に対称形を意識した様子がなく、在地有力層の居館跡かと推測されている。

谷遺跡（苅田町谷）　苅田町白川地区の最奥部、修験道で栄えた等覚寺の麓に位置する。散在する掘立柱建物跡群で構成され、これも遺構配置は官衙的とはいえない。ただ、柱穴から当地で唯一の唐三彩陶枕片、緑釉陶器などが出土していて、注目すべき遺跡である。

古代官道推定線は第90図に示したが、ここで紹介した遺跡のうち、官道に近く位置するのは国府跡を除けば谷遺跡のみである。しかし、長者原遺跡は国府推定地に近く、崎野遺跡は豊前国の要港草野津に卑近な位置にあって官道とは別個の存在理由を挙げることもできる。一方、苅田町黒添赤木遺跡も官道推定線近くに位置するが、ここでは竪穴式住居跡を主体とするものであった。掘立柱建物跡を主体とする古代遺跡には一般集落と異なる性格を付与できるのであろう。ただ、刈田・豊前国府間の駅路は未確認で、伝路にいたっては推定もされていない。未報告、未発見の遺跡が多いことも考え併せれば、今後の資料の蓄積がまたれる。（飛野）

参考文献

池辺元明　杉原敏之編「池ノ口遺跡」（『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財報告』第３集、1996）

近江俊秀「古代道路遺構の形態からみたその性格」（『古代交通研究』第７号、1997）

木下良「西海道の古代官道について」（『大宰府古文化論叢　上巻』古川弘文館、1983）

末永弥義編　『古代豊前国への道』豊津町歴史民俗資料館平成１３年度企画展図録、2002

櫛田昭仁・坂梨祐子編「今市向野遺跡Ａ・Ｂ地点」（『豊前市文化財調査報告書』第10集、1998）

戸祭由美夫「豊前国」（『古代日本の交通路Ⅳ』大明堂、1979）

日野尚志「豊前国京都・仲津・築城・上毛四郡における条里について」（『研究論文集』第22集、佐賀大学教育学部、1974）

日野尚志「豊前国京都・仲津・築城・上毛四郡における条里について」（『研究論文集』第25集（Ⅰ）、佐賀大学教育学部、1977）

日野尚志「豊前国の郡家について」（『研究論文集』第37集（Ⅰ）、佐賀大学教育学部、1989）

日野尚志「豊前企救郡の駅路について」（『研究論文集』第5輯、佐賀大学文化教育学部、2001）

福岡県教育委員会編『福岡県埋蔵文化財発掘調査年報－平成9年度－』、2000

福岡県教育委員会編『福岡県埋蔵文化財発掘調査年報－平成10年度－』、2001

福岡県教育委員会編『福岡県埋蔵文化財発掘調査年報－平成11年度　』、2001

丹羽博「6　荒堀大保遺跡」（『豊前市史　考古資料編』、1993）

山本健太郎編「惣城地域と椎田南地区の遺跡」『椎田町文化財調査報告書』第12集、2002）

吉村靖徳編「天生田大池遺跡」（『福岡県文化財調査報告書』第137集、1999）

末永弥義編「豊前国府」（『豊津町文化財調査報告書』第15集、1995）

小池史哲他編「寄原遺跡・長者原遺跡」（『福岡県文化財調査報告書』第146集、2000）

小川秀樹編「崎野遺跡」（『行橋市文化財調査報告書』第28集、2001）

長嶺正秀編「谷遺跡調査報告書」（『苅田町文化財調査報告書』第11集、1990）

小池史哲他編「越路六郎遺跡・越路貴船遺跡」（『福岡県文化財調査報告書』第161集、2001）

小田和利他編「赤畑森ヶ坪遺跡」（『椎田バイパス関係埋蔵文化財文化財調査報告書』8、1992）報告書第137集

V. 自然科学的調査

雨窪遺跡群で得た考古資料を理解するための一助として、流路跡周辺の景観を復原するために、プラントオパール、花粉分析および出土木製遺物の樹種鑑定を（株）古環境研究所へ依頼した。プラントオパール・花粉分析の試料は1CK西畦の南端付近で採取したものを用いた。樹種鑑定に供した試料については担当者の不手際から、1Ⅰ地区などで検出した株など重要な資料を提供できずに終わった部分がある。ただ、発掘時から出土量が豊富なことで気がかりとなっていた桃の種や松毬について、特に桃に関するデータが一切検出されなかったことから、これが自生したものでないことが確認されたと考えている。この遺跡近くに生活した当時の人々が好んで、かつ大量に桃を食したと考えることが非現実的であるならば、出土した桃の種もまたこの地で行われた祭祀の痕跡を示すものであろう。桃は邪気を払う力を持つ霊木、その実は生命力を持つ仙果、神霊の宿るものとされたと言われる（入江英弥「もも　桃」『日本民俗大辞典』吉川弘文館，2000）。

これも担当者の怠慢から限られた時間の中で分析をしていただいた（株）古環境研究所に謝意を表します。（飛野）

1. 雨窪遺跡における植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

2．試料

分析試料は、河川埋土層などから採取された計７点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2）試料約１gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5）沈底法による20μm以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10－5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4．分析結果

（1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科、その他

5．考察

1）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネが検出された。

イネは、8世紀とされる河川堆土層および中世とされる土層のすべての試料から検出された。密度は600～1,900個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。このことから、当時は河川の周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で河川内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来す

るものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

2）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

最下位の砂礫層では、イネ科ではクマザサ属型やミヤコザサ節型が検出されたが、いずれも少量である。樹木ではブナ科（シイ属）が比較的多く検出され、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科なども検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い。8世紀とされる河川理土層では、前述のようにイネが出現しており、部分的にヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Aなども検出された。中世とされる土層では、樹木が減少しており、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科は見られなくなっている。

以上のことから、砂礫層の堆積当時は、周辺にシイ属、クスノキ科、イスノキ属、アワブキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられ、その林床などにミヤコザサ節などのササ類が生育していたと推定される。8世紀とされる河川理土層の堆積当時は、前述のように周辺で水田稲作が行われていたと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地やススキ属などが生育する草原も見られたと推定される。その後、中世とされる土層の堆積当時には、それまで周辺に分布していた照葉樹林が大幅に減少したと推定される。

6．まとめ

8世紀とされる河川理土層の堆積当時は、周辺で水田稲作が行われていたと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地やススキ属などが生育する草原も見られたと推定される。また、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属、アワブキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。その後、中世とされる土層の堆積当時には、それまで周辺に分布していた照葉樹林が大幅に減少したと推定される。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究，38(2)，p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	土層断面 1	2	3	4	5	6	7
イネ科	Gramineae (Grasses)								
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)		8	6	6	13	19	15	
キビ族型	Paniceae type				6				
ヨシ属	*Phragmites* (reed)		8	6	6		13		
ススキ属型	*Miscanthus* type			12	19	26			
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		30	29	19	13	19		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)								
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*					6			
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		15	18		6	13		7
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*		45	18	25		25	75	22
未分類等	Others		23	6			6		
その他のイネ科	Others								
表皮毛起源	Husk hair origin		8						
棒状珪酸体	Rod-shaped			29	82	19	19	22	7
未分類等	Others		45	130	114	122	94	45	37
樹木起源	Arboreal								
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*		23	12	25	52	31	22	52
クスノキ科	Lauraceae				6		6		7
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*					13	13	7	15
アワブキ科	Sabiaceae				13	6	6	37	7
その他	Others		23	6	6	19	13	37	30
(海綿骨針)	Sponge		8						
植物珪酸体総数	Total		226	271	330	296	276	262	186

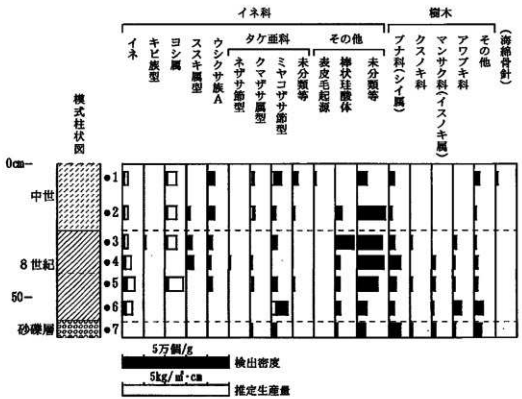
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²·cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	0.22	0.17	0.19	0.38	0.55	0.44	
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	0.47	0.37	0.40		0.79		
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.15	0.24	0.32			
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*				0.03			
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	0.11	0.13		0.05	0.09		0.06
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	0.14	0.05	0.08		0.08	0.22	0.07

タケ亜科の比率（%）

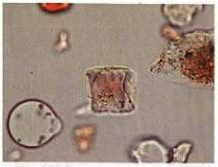
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*							
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*				39			
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	45	71		61	56		45
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	55	29	100		44	100	55

表2　植物珪酸体分析結果



第92図　植物珪酸体分析結果

イネ
試料1

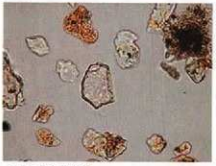


イネ（側面）
試料6

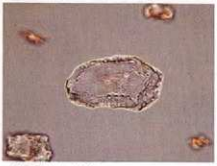
ヨシ属
試料1

ススキ属型
試料3

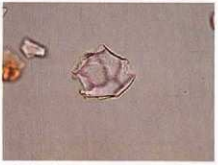
クマザサ属型
試料1



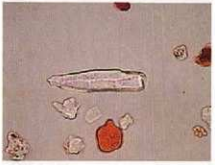
ミヤコザサ節型
試料1



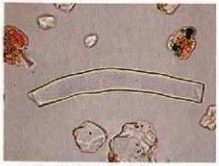
ブナ科（シイ属）
試料5



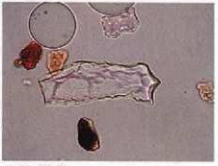
ブナ科（シイ属）
試料3



クスノキ科
試料7



マンサク科（イスノキ属）
試料5



アワブキ科
試料7

アワブキ科
試料6

50μm

第93図　植物珪酸体（プラントオパール）の顕微鏡写真

2. 雨窪遺跡における花粉分析

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2．試料

分析試料は、河川埋土層から採取された３点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3．方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎

2）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

4）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す

5）再び氷酢酸を加えて水洗処理

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

7）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4．結果

1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉29、樹木花粉と草本花粉を含むもの３、草本花粉18、シダ植物胞子２形態の計52である。分析結果を表１に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤマモモ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、キハダ属、モ

チノキ属、カエデ属、ブドウ属、グミ属、ミズキ属、ハイノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、ツツジ科、イスノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、フウロソウ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

2）花粉群集の特徴

花粉群集の組成変化から、下位よりⅠ帯とⅡ帯の花粉分帯を設定した。

（1）Ⅰ帯（試料3、5）

草本花粉より樹木花粉の占める割合が高い。樹木花粉では、シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属が多く、マツ属複維管束亜属、ヤマモモ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、コナラ属コナラ亜属が伴われる。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）やカヤツリグサ科が多く、ヨモギ属などが伴われる。

（2）Ⅱ帯（試料1）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が優占し、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属、ソバ属などが伴われる。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、ハンノキ属、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アガカシ属が出現する。

5．花粉分析から推定される植生と環境

8世紀とされる河川跡土層の堆積当時は、カヤツリグサ科、ヨモギ属、イネ科などが生育する人里の環境であったと考えられ、周辺では水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺地域にはシイ類（シイ属－マテバシイ属）やカシ類（コナラ属アカガシ亜属）を主とした照葉樹林、およびニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属）の松林などが分布していたと推定される。

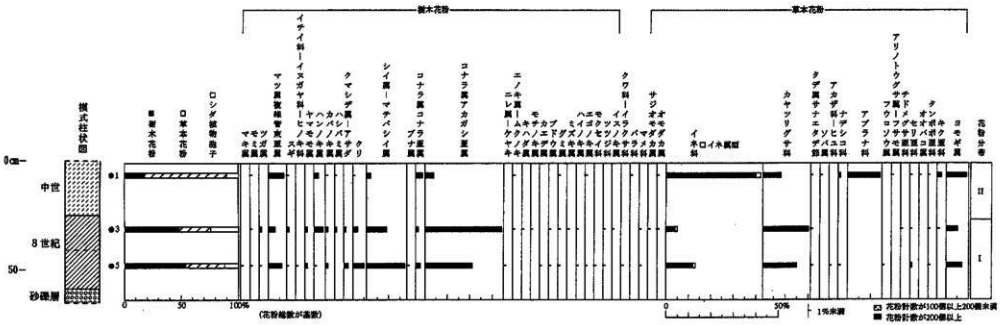
中世とされる土層の堆積当時は、周辺で水田稲作をはじめ、アブラナ科やソバ属を栽培する畑作が行われていたと推定される。また、周辺地域ではイネ科を主体とした草原が拡大したと考えられ、シイ類やカシ類の照葉樹林は大幅に減少したと推定される。

文献

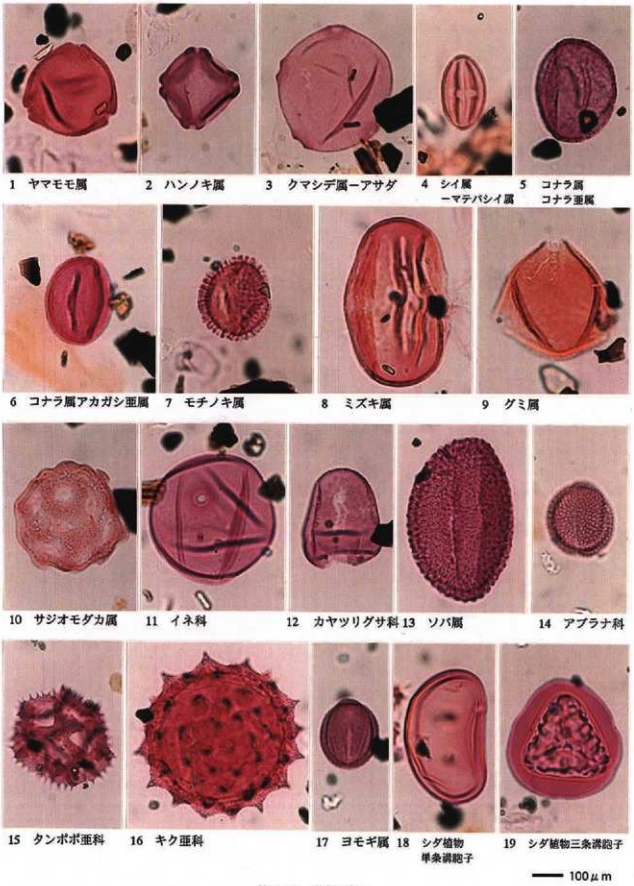
中村純（1973）花粉分析．古今書院．p.82-110.
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集．60p.
中村純（1980）日本産花粉の様徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集．91p.
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

分類群				
学名	和名	1	3	5
Arboreal pollen	樹木花粉			
Podocarpus	マキ属			1
Abies	モミ属	1	1	1
Tsuga	ツガ属		4	1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	31	11	27
Cryptomeria japonica	スギ	1	5	9
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科			1
Myrica	ヤマモモ属		4	6
Alnus	ハンノキ属	10	15	3
Betula	カバノキ属	1	4	6
Corylus	ハシバミ属	1	4	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ		4	9
Castanea crenata	クリ	1	9	21
Castanopsis-Pasania	シイ属ーマテバシイ属	9	34	77
Fagus	ブナ属			1
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	11	5	7
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	19	132	94
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ			1
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	1	1	
Phellodendron	キハダ属		1	
Ilex	モチノキ属		1	
Acer	カエデ属			1
Vitis	ブドウ属		1	3
Elaeagnus	グミ属	1	1	2
Cornus	ミズキ属		1	
Symplocos	ハイノキ属		2	2
Styrax	エゴノキ属	1		1
Oleaceae	モクセイ科			1
Ericaceae	ツツジ科		1	3
Distylium	イスノキ属		1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科			4
Rosaceae	バラ科	1		
Leguminosae	マメ科		1	3
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Alisma	サジオモダカ属		3	
Sagittaria	オモダカ属	1	1	
Gramineae	イネ科	174	34	56
Oryza type	イネ属型	10	4	4
Cyperaceae	カヤツリグサ科	34	78	69
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	2	1	1
Fagopyrum	ソバ属	3		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科			4
Caryophyllaceae	ナデシコ科	5		2
Cruciferae	アブラナ科	60		
Geranium	フウロソウ属			1
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属	1		
Hydrocetyloideae	チドメグサ亜科		1	
Apiodeae	セリ亜科	1	2	5
Plantago	オオバコ属	1		
Lactucoideae	タンポポ亜科	3	1	1
Asteroideae	キク亜科	10	2	
Artemisia	ヨモギ属	38	18	31
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	16	39	36
Trilate type spore	三条溝胞子	29	76	32
Arboreal pollen	樹木花粉	88	242	278
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	1	7
Nonarboreal pollen	草本花粉	343	145	174
Total pollen	花粉総数	432	388	459
Unknown pollen	未同定花粉	5	20	8
Fern spore	シダ植物胞子	45	115	68
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)

表3　花粉分析結果



第94図　花粉ダイアグラム


1 ヤマモモ属
2 ハンノキ属
3 クマシデ属ーアサダ
4 シイ属
ーマテバシイ属
5 コナラ属
コナラ亜属
6 コナラ属アカガシ亜属
7 モチノキ属
8 ミズキ属
9 グミ属
10 サジオモダカ属
11 イネ科
12 カヤツリグサ科
13 ソバ属
14 アブラナ科
15 タンポポ亜科
16 キク亜科
17 ヨモギ属
18 シダ植物
単条溝胞子
19 シダ植物三条溝胞子
100μm

第95図　花粉・胞子

3. 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、1-G区、1-H区下層、1-I区、1-I区下層、2-J区、2-L区、2-O区、2-O区トレンチ、2-V区から出土した木材38点である。試料の詳細を表4に示す。

3. 方法

カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表4に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

イヌガヤ Cephalotaxus harringtonia K. Koch　イヌガヤ科　　第96図－1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は非常に狭く、樹脂細胞が散在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、トウヒ型で１分野に１～２個存在する。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～10細胞高ぐらいである。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する常緑の低木または小高木で、高さ10～15m、径20～30cmである。材は、やや堅硬で木理は緻密であるが不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科　　第96図－２

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐

え、広く用いられる。

ヒノキ属　Chamaecyparis

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、１分野に２個程度存在するのが確認できたが、保存状態が悪く、分野壁孔の型は不明瞭であった。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキ属に同定される。ヒノキ属にはヒノキ、サワラがあり、どちらも常緑高木で、本州、四国、九州に分布する。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　　第96図－３

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、散在ないし火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径が急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　　第97図－４

横断面：中型から大型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

クスノキ　Cinnamomum camphora Presl　クスノキ科　　第97図－５

横断面：中型から大型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。なお、クスノキの特徴を示すが保存状態が悪く広範囲の観

察が困難なものは、クスノキ科 Lauraceaeとした。

クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

サクラ属 Prunus　バラ科

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

イスノキ Distylium racemosum Sieb. et Zucc.　マンサク科　第97図－6

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、ほとんどが1～2細胞幅であるが、まれに3細胞幅のものも存在する。

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

ヒサカキ属 Eurya　ツバキ科　第98図－7

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅で、多列部と比べて単列部が長い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

エゴノキ属　Styrax エゴノキ科　第98図－8

横断面：年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、おもに2～4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～３細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

ウツギ属　Deutzia　ユキノシタ科　　第98図－９

横断面：小型で多角形の道管が、ほぼ単独で均一に散在する散孔材である。放射組織の細胞が大きく接線方向への幅が道管の直径より大きいことが認められる。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は50本前後である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、２～５細胞幅の細長い紡錘形であり鞘細胞のあるものが多い。

以上の形質よりウツギ属に同定される。ウツギ属は日本各地の日当たりのよい山野に自生する落葉低木である。株立ち状になり高さ１～３ｍで、枝は分枝繁密、幹枝とも中空である。庭園樹、境界樹として栽培され、材は木釘などに用いる。

散孔材　diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が、単独ないし２～３個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、１～４細胞幅である。

以上の形質より散孔材に同定される。なお、本試料はヤブツバキに類似するが、保存状態が悪く細部の観察が困難なことから同定には至らなかった。

樹皮　bark

師部柔細胞、師部放射柔細胞が存在する。

５．所見

分析の結果、イスノキ12点、マツ属複維管束亜属９点、クスノキ４点、クリ２点、樹皮２点、およびコナラ属アカガシ亜属、イヌガヤ、ヒノキ属、クスノキ科、サクラ属、ヒサカキ属、エゴノキ属、ウツギ属、散孔材各１点が同定された。このうち、最も多いイスノキは西南日本の暖温帯照葉樹林を構成する主要高木の一つであり、その他の樹種も照葉樹林域に普通に生育するものである。

文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造．文永堂出版．p20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造．文永堂出版．p49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣．p296

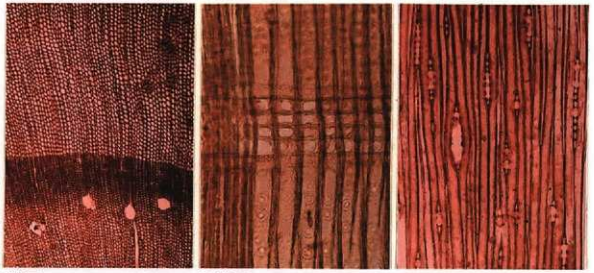
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡集成．植生史研究特別第1号、植生史研究会、p242

試料		結果	
遺構名	試料名	(学名／和名)	
1-G区	3	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
1-G区	8	Lauraceae	クスノキ科
1-H区下層		*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
1-I 区	木-19	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
1-I 区下層	1	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
1-I 区下層	2	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
1-I 区下層	3	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
1-I 区下層	4	bark	樹皮
1-I 区下層	5	*Eurya*	ヒサカキ属
1-I 区下層	6	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
1-I 区下層	7	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
1-I 区下層	8	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
1-I 区下層	9	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
1-I 区下層	株1	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
1-I 区下層		*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
1-I 区下層		*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
1-I 区下層		*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
1-I 区下層		*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
1-I 区下層		*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
1-I 区下層		*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
1-I 区下層		*Deutzia*	ウツギ属
1-I 区下層		bark	樹皮
2-J区	8	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
2-L区	株	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
2-O区	株	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
2-O区	株	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
2-O区トレンチ	1	*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch	イヌガヤ
2-O区トレンチ	2	diffuse-porous wood	散孔材
2-O区トレンチ	3	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
2-O区トレンチ	4	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
2-O区トレンチ	5	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
2-O区トレンチ	6	*Chamaecyparis*	ヒノキ属
2-O区トレンチ	7	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
2-O区トレンチ	8	*Styrax*	エゴノキ属
2-O区トレンチ	9	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
2-V区	木株	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
	株1	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
	株6	*Prunus*	サクラ属

表4　樹種同定結果

横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.1mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

1．2-O区トレンチ1　イヌガヤ



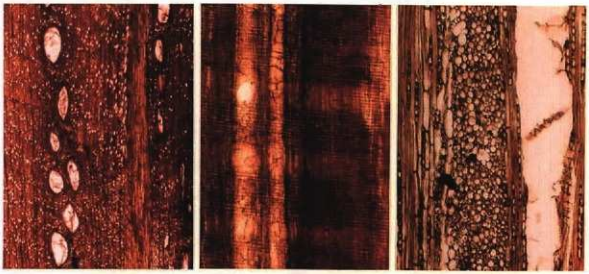
横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.1mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

2．1-I 区下層1　マツ属複維管束亜属

横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.5mm　接線断面 ―――― : 0.1mm

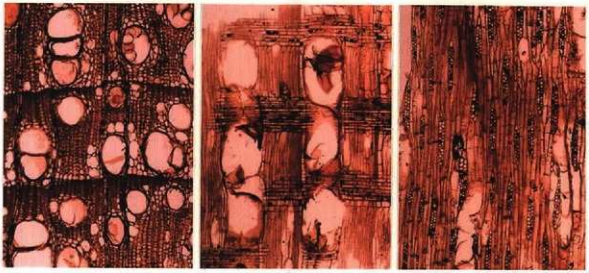
3．2-O区 株　クリ

第96図　樹種同定試料顕微鏡写真1



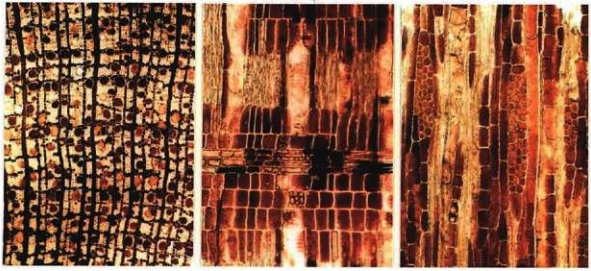
横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.5mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

4．1-I 区下層　コナラ属アカガシ亜属



横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.5mm　接線断面 ―――― : 0.5mm

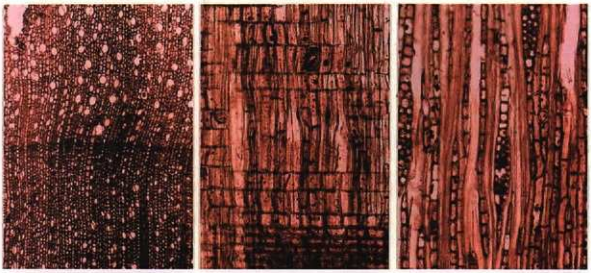
5．1-I 区下層 3　クスノキ



横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.2mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

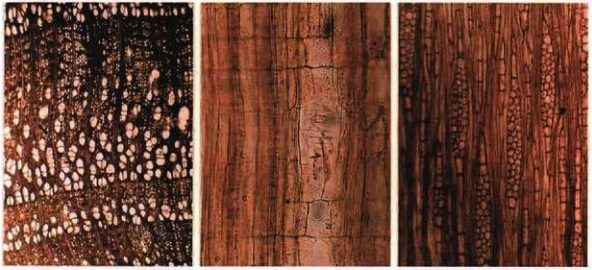
6．2-O区トレンチ 9　イスノキ

第97図　樹種同定試料顕微鏡写真2



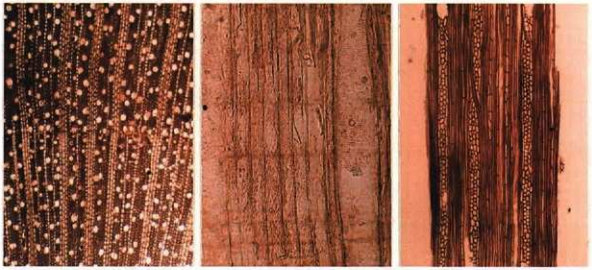
横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.2mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

7．1-I 区下層５　ヒサカキ属



横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.1mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

8．2-O区トレンチ８　エゴノキ属



横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.1mm　接線断面 ―――― : 0.5mm

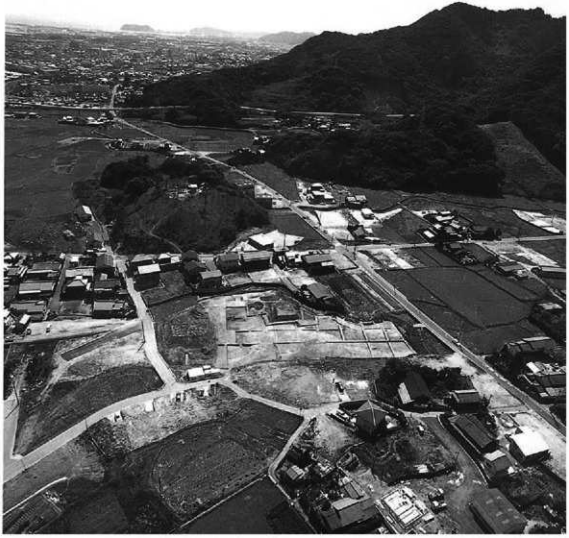
9．1-I 区下層　ウツギ属

第98図　樹種同定試料顕微鏡写真3

図　版

図版1

1:調査区全景
(南西上空から)



2:調査区全景
(北東上空から)

図版2

1;調査区全景
（東上空から）

2;調査区全景
（北西上空から）

図版 3

1:周窯遺跡群遠景
（上空から）

2:調査区全景
（上空から）

1;1号土坑検出状態
（西から）

2;1号土坑鉢
出土状態
（北から）

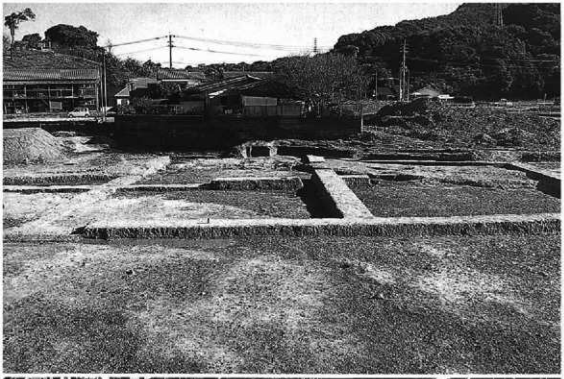
3;2号土坑検出状態
（北西から）

第一次調査
図版5

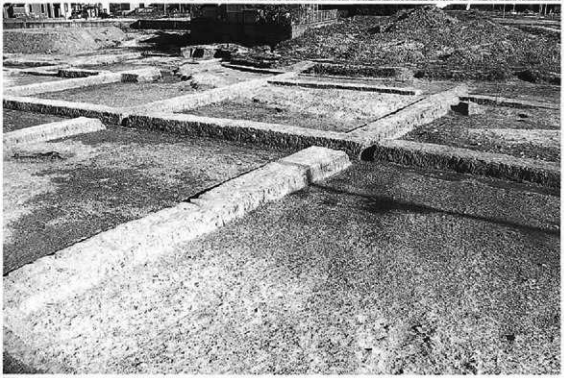
1:2号土坑完掘後
(北西から)

2:1A区完掘後
(北西から)

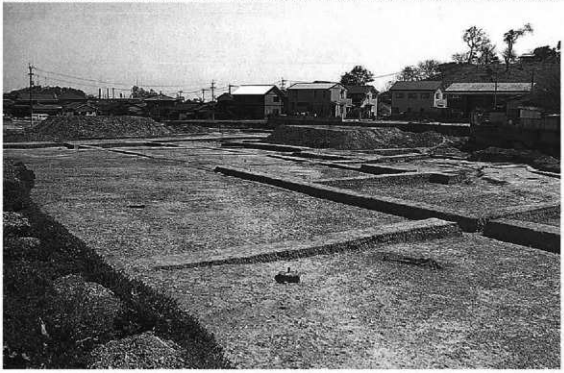
3:1A区南東部土層
(北東から)



1;1B・C区完掘後
(北東から)



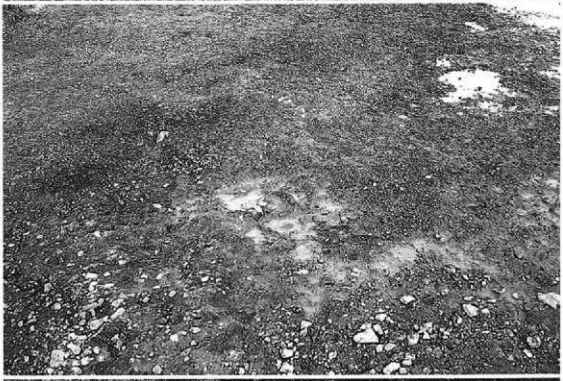
2;1C・B区完掘後
(西から)



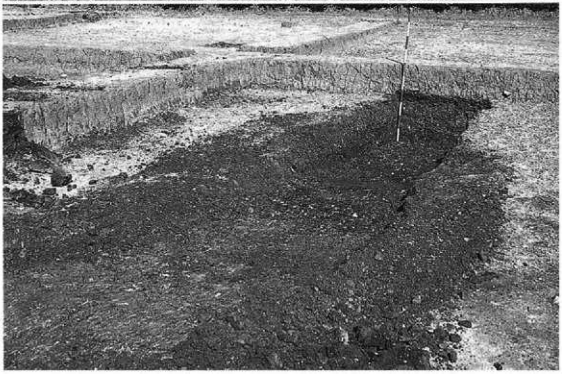
3;1D・C区完掘後
(北西から)

第一次調査
図版7

1;1D区株検出状態
（南東から）

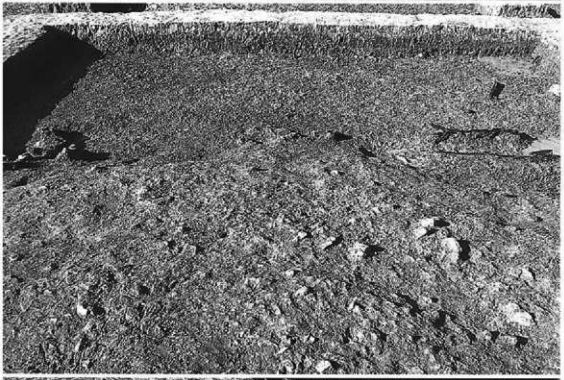


2;1E区完掘後
（南西から）



3;1F区礎床
断割り状態
（南東から）

1;1G区西畔
(4Tr.)土層
(南東から)



2;1G区完掘後
(南東から)

3;1G区遺物
出土状態
(北東から)

第一次調査
図版 9

1;1G区西端遺物
出土状態
(北東から)

2;1G区中央付近
遺物出土状態
(北東から)

3;1H区溝状遺構
検出状態
(南西から)

1;11区西畦
(ZTr.)土層
(南東から)

2;11区西端付近
遺物出土状態
(北から)

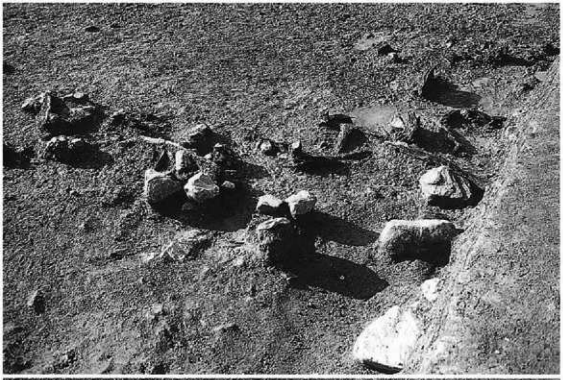
3;11区西端付近
遺物出土状態
(南東から)

第一次調査
図版11

1;II区西端付近
遺物出土状態
(西から)

2;II区中央付近
遺物出土状態
(東から)

3;II区東端付近
遺物出土状態
(南西から)



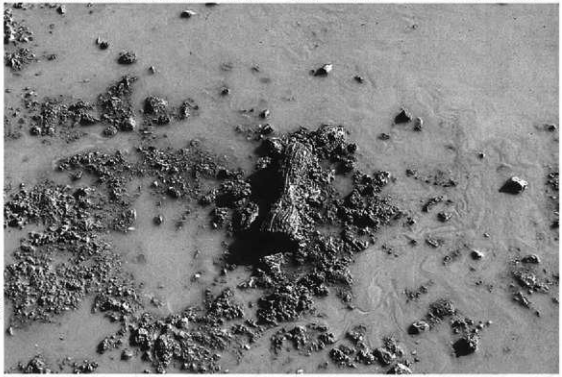
1;11区東端付近
遺物出土状態
（南東から）

2;11区東端付近
遺物出土状態
（南西から）

3;11区東端付近
土馬出土状態
（北西から）

第一次調査
図版13

1;1Ⅰ区東端付近
曲げ物出土状態
（北東から）



2;1Ⅰ区東端付近
箱の子出土状態
（北西から）

3;1J区全景
（南から）

第一次調査
図版14

1;1Ｊ区自然遺物
検出状態
（北東から）

2;2Ａ区東方
トレンチ西壁土層
（南東から）

3;2Ｂ区全景
（北西から）

第一次調査
図版15

1;2B区流路跡層
(北から)

2;2B区西畦土層
(北東から)

3;2B区南畦土層
(北西から)

1;2B・G区全景
（東から）

2;2H区遺物
出土状態
（北から）

3;2J区遺物
出土状態
（北西から）

第一次調査
図版17

1;2J区柱穴土器
出土状態
(東から)

2;2L・Q区木株
検出状態
(南東から)

3;2L・Q区木株
検出状態
(北東から)

第一次調査
図版18

1;2O区南半全景
（東から）

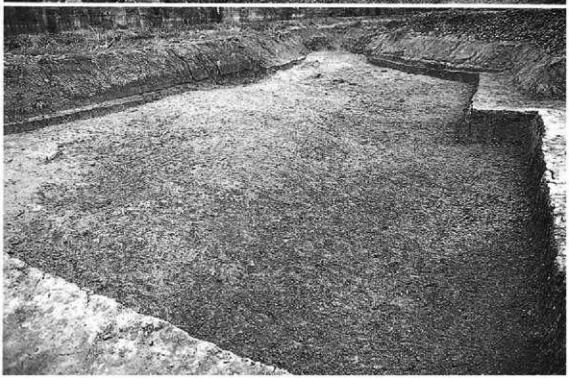
2;2O区南半遺物
出土状態
（北から）

3;2Q区不明
銅製品出土状態
（西から）

第一次調査
図版19

1;2V区自然遺物
出土状態
(北西から)

2;2W区全景
(南西から)



3;2W区全景
(北東から)

土1-3

土2-2

土1-7

土2-3

土2-4

土2-5

土1-19

1A-22

土1-21

土2-1

1A-26

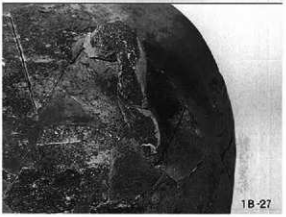
出土遺物1(土坑・1A区出土土器)

1B-3

1B-10

1B-23

1B-25

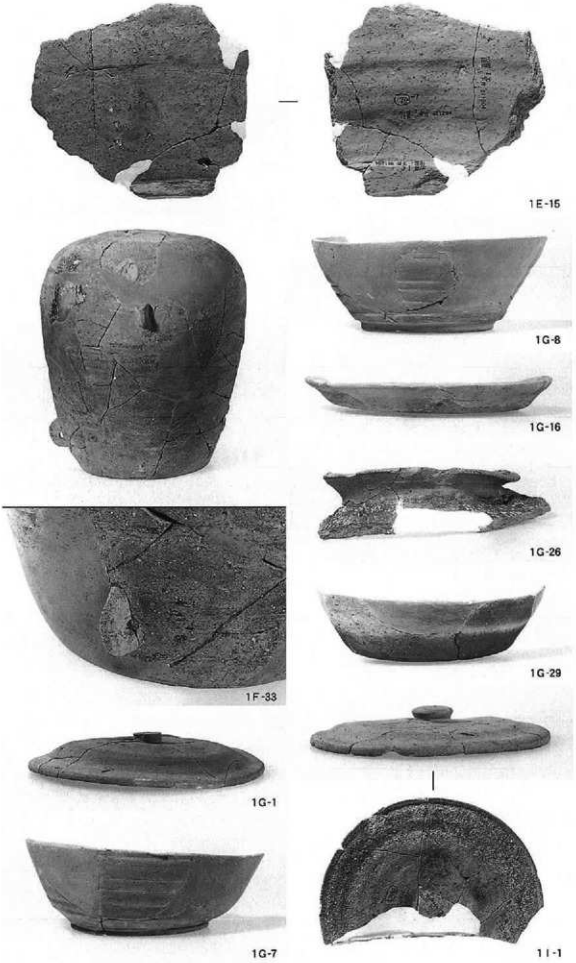

1B-27

1C-19

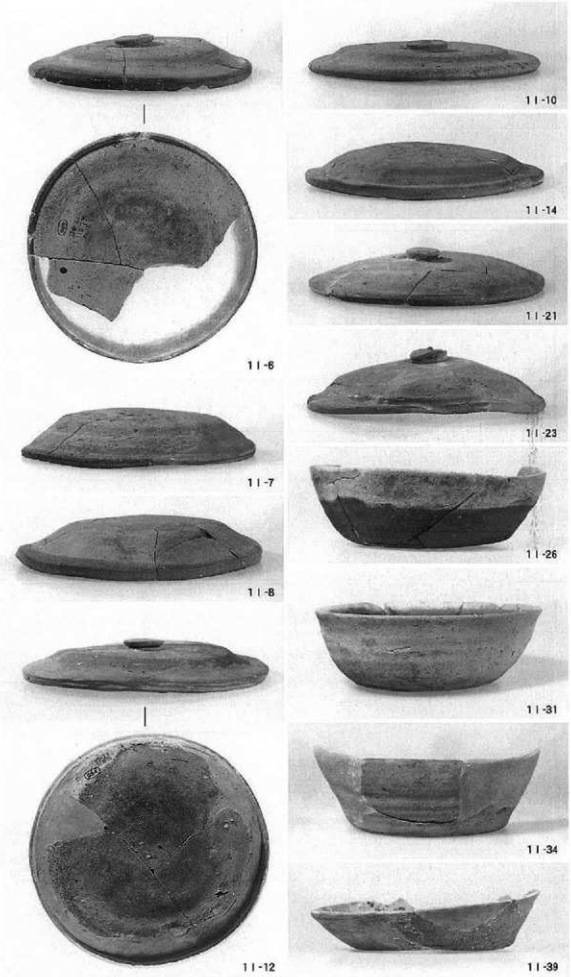
1D-2

1F-14

出土遺物2(1B～D・F区出土土器)



出土遺物3(1E～G・I区出土土器)



出土遺物4(11区出土土器)

11-41

11-64

11-43

11-66

11-67

11-54

11-69

11-55

11-70

11-59

11-72

出土遺物5(11区出土土器)

11-73

11-78

11-74

11-101

11-75

11-113

11-77

11-79

11-137

出土遺物6(11区出土土器)

11-114

11-145

11-146

11-150

11-151

11-153

11-154

11-165

11-159

11-164

出土遺物7(11区出土土器)

1I-188

1J-2

1I-189

1J-3

1I-190

1J-5

1I-191

1J-6

1I-193

3Tr-23

1I-194

4Tr-30

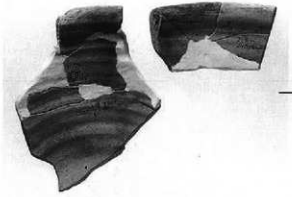
1J-1

2B-7

出土遺物8(1I・J区、トレンチ、2B区出土土器)

2B-25

2G-8


2H-5

2H-11

2O-6

2O-9

2O-1

2O-13

2O-2

2O-14

2O-4

2O-16

2O-5

出土遺物9(2B・G・H・O区出土土器)

2O-23

2O-63

2O-64

2O-25

2O-65

2O-26

2O-73

2O-29

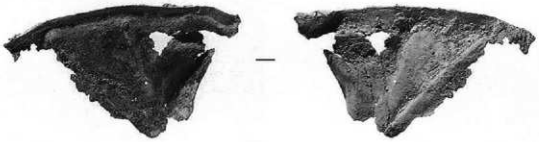
2O-75

2O-47

2Q-5

2O-90

出土遺物10(2O・Q区出土土器)



第50図-1

第50図

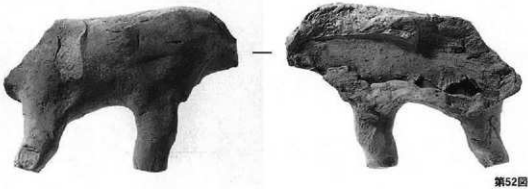
第50図-5

第51図

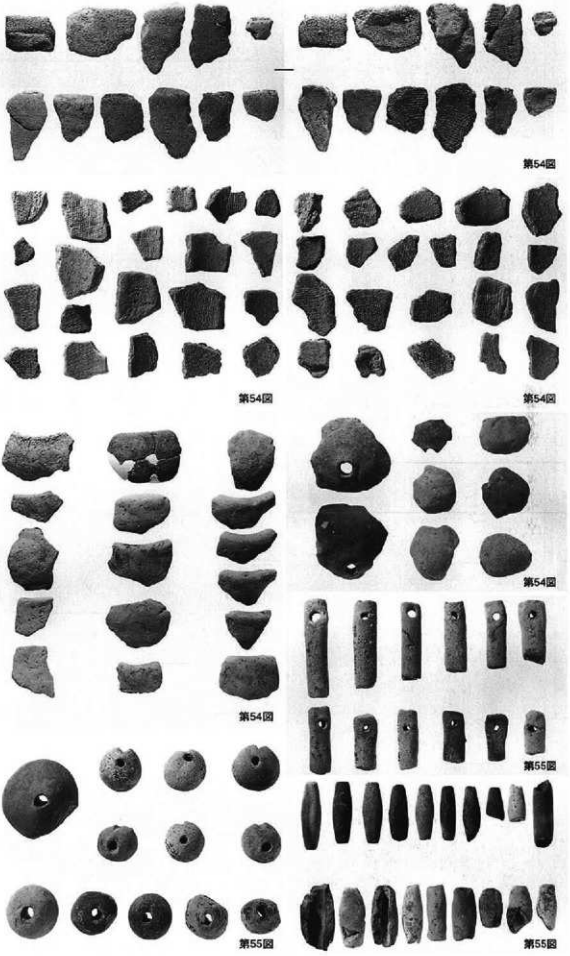
第52図-1

第52図-4

第52図



第52図-5



出土遺物12(製塩土器・飯蛸壺・土師)

第56図-1

第56図-2

第56図-2

第56図-5

第56図-4

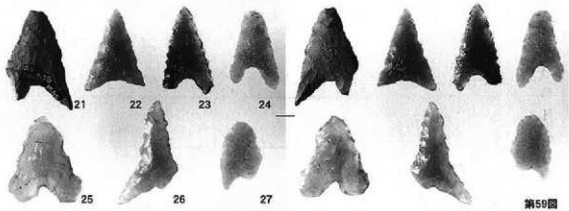
第58図-4

第58図

出土遺物13(焼着土器・石器)

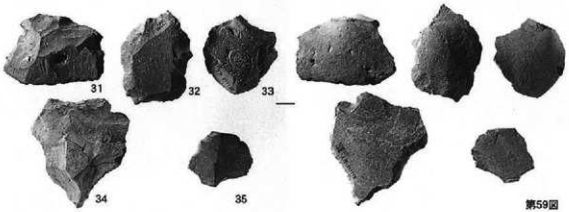
第58図

第58図

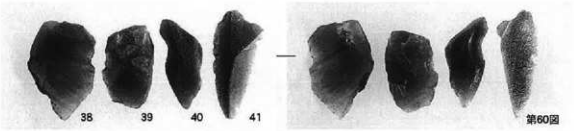


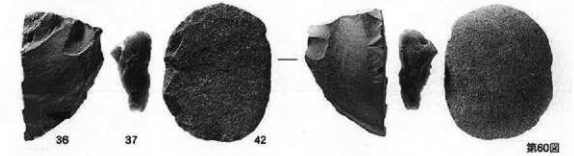
第59図

第59図

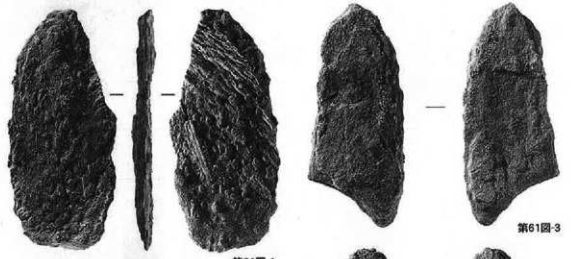


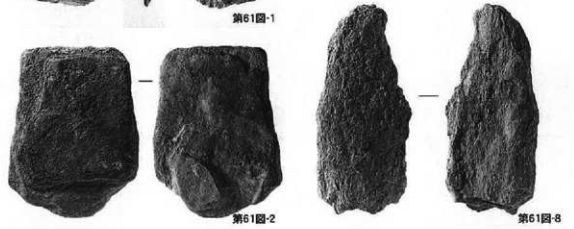
第59図


38
39
40
41
第60図

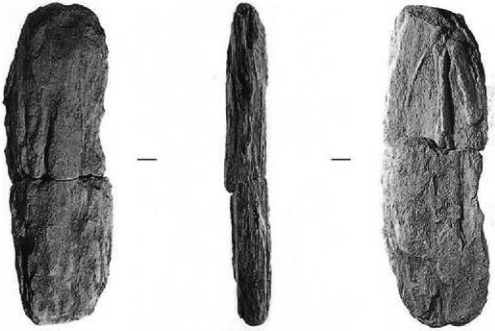

36
37
42
第60図

第60図-43

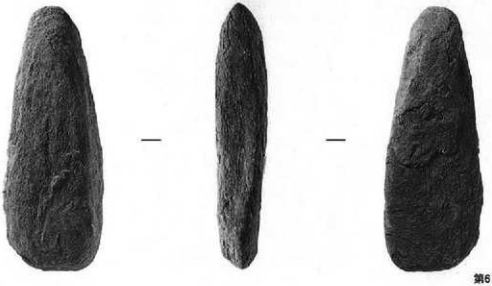

第61図-1
第61図-3


第61図-2
第61図-8

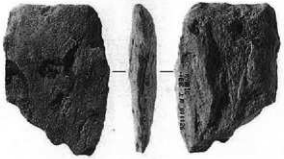
第61図-4



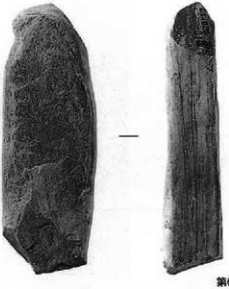
第61図-5



第61図-6

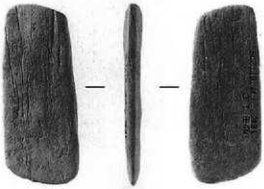


第61図-7



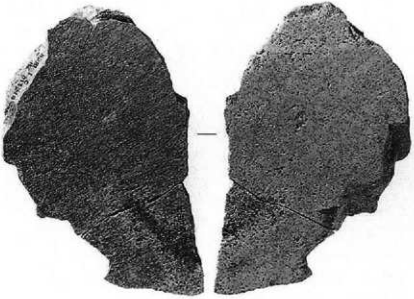
第62図-1

第61図-9



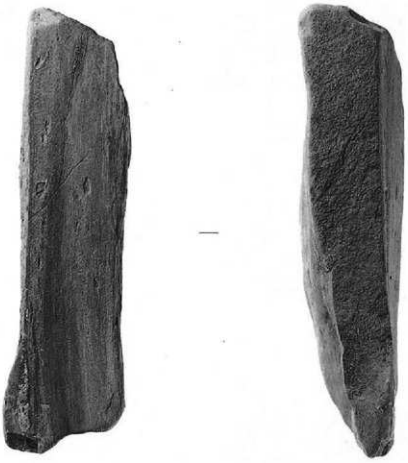
第61図-10

第62図-2

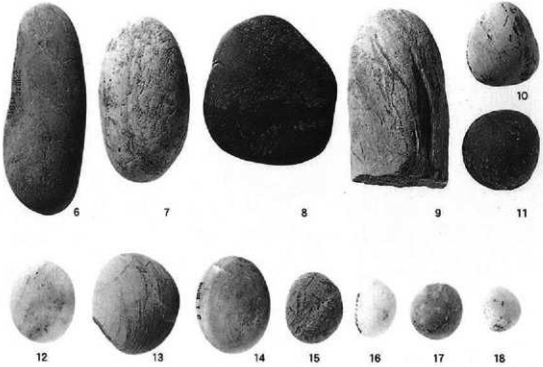


第62図-3

第62図-4

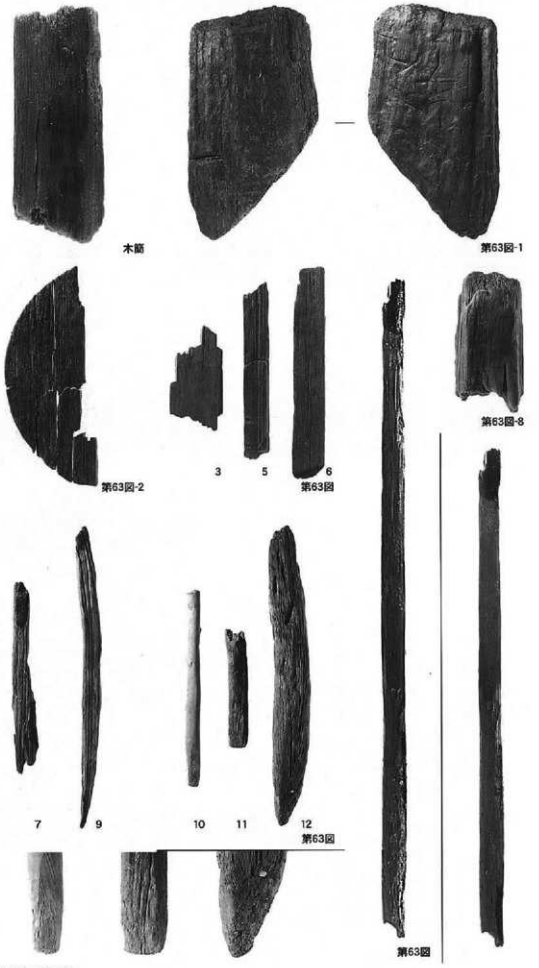


第62図-5



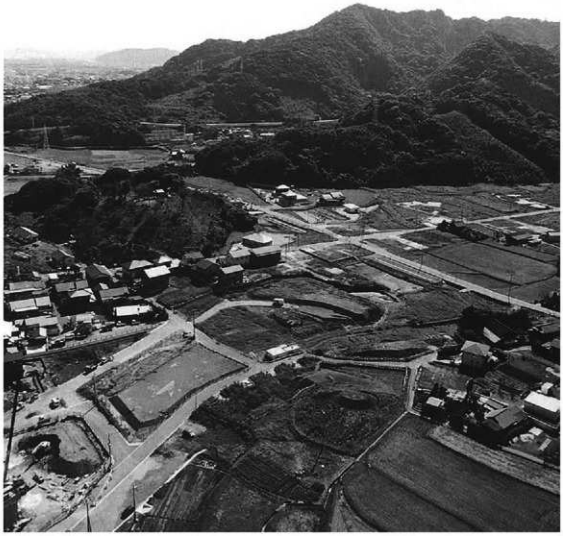
第62図

出土遺物18(石器・石製品)



出土遺物19(木製遺物)

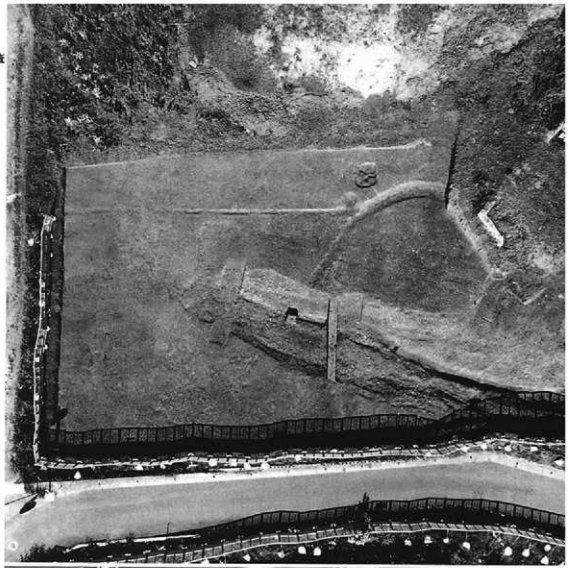
1:全景
(南上空から)



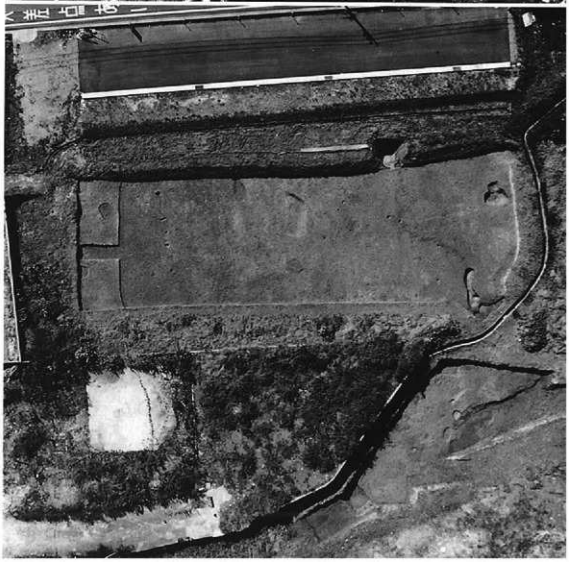
2:全景
(北上空から)

1. Ⅰ～Ⅳ区全景
（上空から）

2. Ⅱ全景
（上空から）



1:Ⅲ区全景
（上空から）



2:Ⅰ・Ⅳ区全景
（上空から）

1;Ⅱ区1号土杭
（北から）

2;Ⅱ区2号土杭
（北から）

3;Ⅱ区流路跡
（東から）

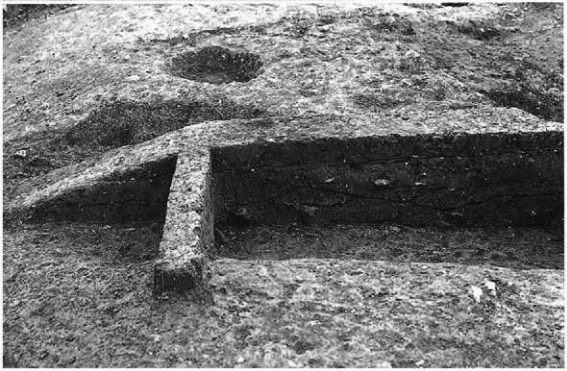
第二次調査
図版43

1. Ⅱ区流路跡
(北から)

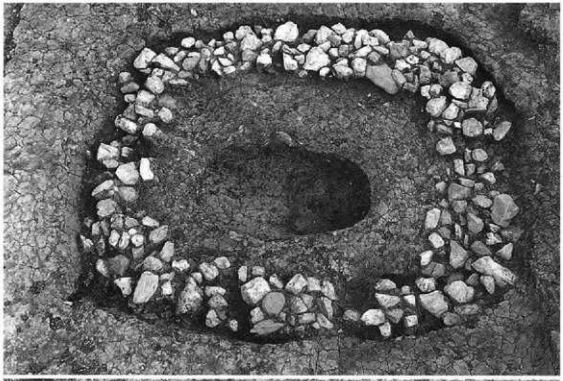
2. Ⅱ区不明竪穴
(南から)

1:Ⅱ区溝
（南から）

2:Ⅱ区溝東壁土層
（東から）

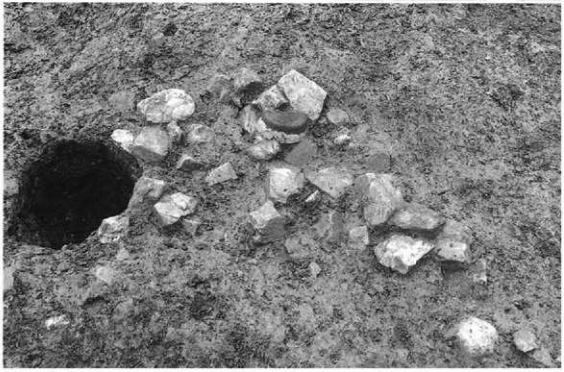


3:Ⅱ区溝南壁土層
（南から）

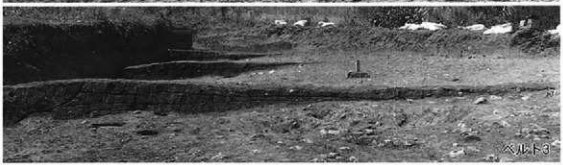


1;Ⅱ区石組
（北から）

2;Ⅱ区石組内
ピット北壁土層
（北から）



3;Ⅱ区石だまり
（北西から）



1:Ⅱ区ベルト1~7
東壁土層
(東から)

第二次調査
図版47

1;Ⅱ区E土器
出土状況
(南から)

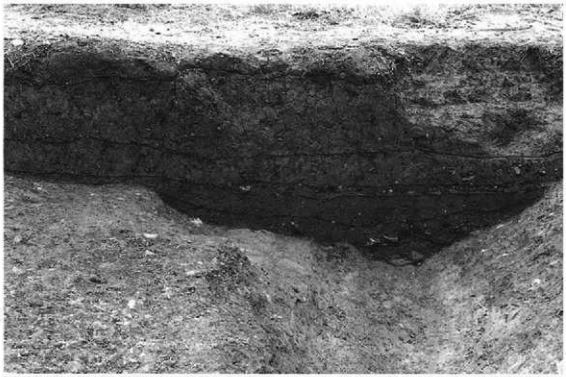
2;Ⅱ区E土器
出土状況
(東から)

3;Ⅱ区E土器
出土状況
(北西から)

1:Ⅱ区G土器
出土状況
(東から)

2:Ⅲ区大溝
(東から)

第二次調査
図版49



1;Ⅲ区東壁
大溝土層図
(西から)

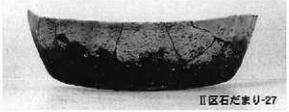
2;Ⅳ区1号土坑
(南から)

3;Ⅳ区2号土坑
(西から)

Ⅱ区溝-9

Ⅱ区溝-18

Ⅱ区溝-19


Ⅱ区石だまり-27

第73図-2

第73図-3

第73図-4

第73図-6

第73図-19

第73図-22

第73図-23

第73図-24

第73図-25

第73図-26

第73図-30

出土土器1(Ⅱ区溝、石だまり、包含層)

第74図-38

第74図-39

第74図-40

第74図-41

第74図-42

第74図-44

第74図-45

第74図-46

第74図-49

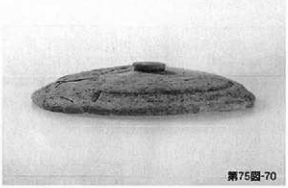
第74図-61

第74図-64

出土土器2(Ⅱ区包含層)

第75図-69

第75図-88



第75図-70

第75図-90

第75図-73

第75図-92

第75図-78

第75図-82

第76図-98

出土土器3(Ⅱ区包含層)

第77図-1

第77図-26

第77図-2

第78図-7

第77図-3

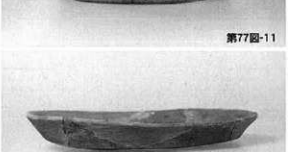
第78図-8

第77図-6

第78図-12

第77図-11

第78図-13


第77図-14

第78図-15

出土土器4(Ⅱ区包含層・遺構面)

E撹乱

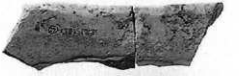
第82図-1

第83図-7

ピット29

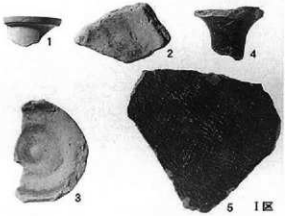
Ⅲ区大溝-5

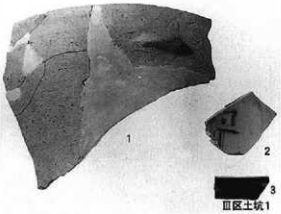
Ⅲ区大溝-6

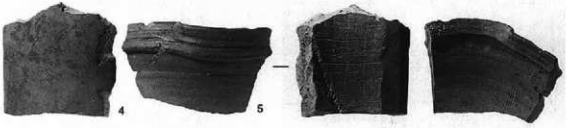


Ⅲ区大溝-7

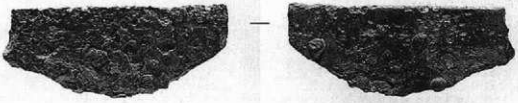
出土土器5(Ⅱ区撹乱、ピット、遺構面、包含層・Ⅲ区大溝)



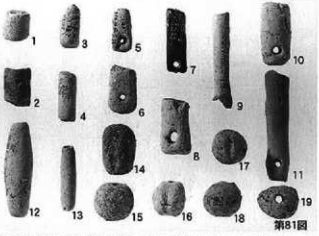




Ⅲ区土坑2



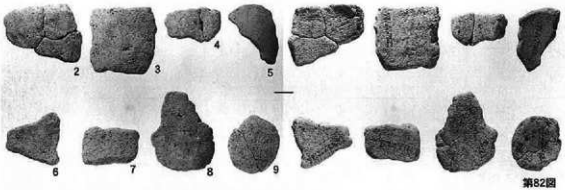
第80図



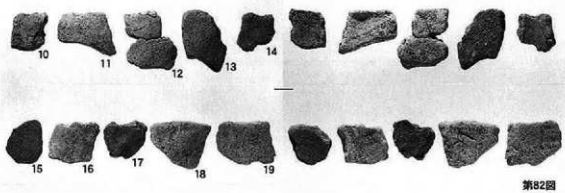
第81図

第81図-20

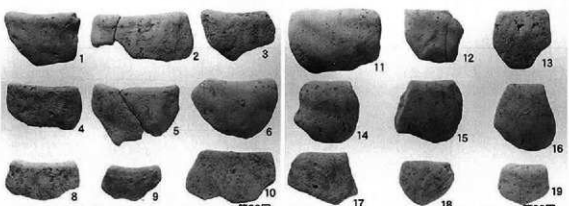
その他の遺物1(Ⅰ区出土遺物・Ⅱ区土坑出土遺物・Ⅱ区出土斜縁、土錘、砥石)



第82図



第82図



第83図　第83図

Ⅳ区

その他の遺物2(Ⅱ区出土製塩土器、タコ壺状土製品・Ⅳ区出土遺物)

報告書抄録

ふりがな	あまくぼいせきぐん
書名	雨窪遺跡群
副書名	
巻次	
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	1
編著者名	飛野博文　坂元雄紀　杉原敏之　酒井芳司　坂本真一
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8577　福岡県福岡市博多区東公園7-7　☎092-651-1111
発行年月日	西暦2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あまくぼいせきぐん 雨窪遺跡群	ふくおかけんふやこぐんみやこまち 福岡県京都郡苅田町 おおなぎあざ 大字雨窪	40621	C-303	33度 47分 50秒	130度 58分 14秒	第一次調査 2001.09.12 ～2002.03.29 第二次調査 2002.07.29 ～2002.11.08	約4,000㎡	東九州自動車道 月隈インターチェンジ建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雨窪遺跡群	包含層	旧石器～縄文		ナイフ形石器・後先形尖頭器等	
	包含層	弥生		土器	
	包含層	奈良～平安		緑釉陶器・須恵器・土師器・瓦器・ 飯蛸壺・土錘等	転用硯を含む
				銅年通宝・銅椀	
	祭祀遺跡	奈良	土坑・旧流路跡	土馬・須恵器・土師器・木製遺物	絵の子・鹿物・杭等
	集落	奈良～平安	石組・溝等	須恵器・土師器	

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
－1－

平成16年3月31日

発行：福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7－7

印刷：(有)プリンティング　コガ
〒831-0034
福岡県大川市大字一木736-5

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 15	登録番号 13